

東方死人録

nismon

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

気づいたら自殺していた。

矛盾だらけの彼、もとい彼女が『死』を求めつつ、謎だらけの第二の人（妖）生をのんびり歩む物語

本作品は東方Projectの二次創作です。独自解釈、独自設定、オリキャラの登場等が多々ございます。許容できる方にお読みいただければ幸いです。

目次

プロローグ 「死」	1
一章 薬師とか穢れとか	
一話 輪廻転生と云うかなんというか	5
二話 人恋しいんだけど、いやマジで	16
三話 生き返つたら人じゃなくなつて	
た。何を言っているかわからねえと思う	
が私もわから（ry	29
四話 可愛い子には旅をさせよと言う	
けれどそれよりも手元でひたすらに愛で	
たい。	42
五話 技術の発展は著しく、同じよう	
にまた少女の成長も著しい	61
六話 愛とか恋とかわかんないから萌	
えさえあればそれで良いと思わない？	
74	
七話 少し汚れてる位が丁度良いん	
じゃない？	88
八話 別れと呪いと嘘と	
幕間 可愛い子の写真はそれだけでも	107
はや家宝	
二章 神とか地獄とか	
一話 理不尽からの救いを求める先が	118

一番理不尽の塊って可笑しくない？

134

二話 目をさますとそこには知らない

天井が有ったというテンプレなアレ

155

三話 狂ったように踊りましょ！って

一体どんな感じなのかな

四話 魔法少女まじかる・ハカナ！…

ちよ、待って！今の無（ry

五話 魔法少女に私はなる！（黒歴史

は増やさないからなつ

六話 理不尽なまでの優しさを踏みつ

ぶす理不尽さだつてあるわけで

七話 理を外れし者とか格好いいけ

ど、現実的な話ただのルール違反な訳で

八話 戦いはいつか終わるもので、

れど再び始まつたり

九話 最後はハッピーエンドってね

幕間 アタイのご主人様

三章 旅とか魔界とか

一話 そうだ旅をしよう

二話 目が覚めたらお姉さんに優しく

介抱されていた！これ何てギャルゲ

331

343

225

209

191

172

291

313

265

247

- 三話 つり目は好戦的というテンプレ
 466
 十話 有名人つてばないの ———— 477
- が有るとか無いとか ———— 362
- 四話 ドキドキ!?二人っきりの特別授
 業!! ———— 383
- 五話 情報屋のおじさんはイケメンで
 ある ———— 403
- 六話 大事な人に対してほど肝心なこ
 とを忘れたりしなかつたり ———— 419
- 七話 右手が疼くツ、疼くぞツ!
 435
- 八話 そうだ旅をしよう ———— 449
- 九話 ファンタジーな世界であれど人
 間ってのはそう変わらないもので
- 十話 有名人つてばないの ———— 477
- 十一話 れつつ図書館 ———— 489
- 十二話 悪魔のような司書 ———— 499
- 十三話 二つの世界 ———— 512
- 十四話 ばじゃまばーてい ———— 532
- 十五話 出会いは突然に、第一印象つ
 ていうのはどうしようもないわけで
 543

プロローグ 「死」

後はこれを飲めば終わり。ゆっくりと愚鈍になった眼球を動かし手元に視線をやる。そこには白い粒が多量に握られていた。

感慨深い……なんて訳があるはずもなく。感慨を感じられるなら現在こうはなっていないだろう。

今度はゆっくりと空を見上げる。真っ黒に染まった夜空には星は見えず、微かな月明かりに照らされた雪がちらちらと降ってきている。そこそこ綺麗だなんて思う。

でも雪の元を辿るとそれは車の排気ガスだったり何だったりするわけで、消して綺麗な物じゃあない。見た目だけ。それはまるでこの世界……いや、俺の世界みたいだ。

今現在俺は木に寄っかかっている。ここは回りが森で覆われている。当然ながら人の気配はない。というか有ったら困る。

真っ暗な木々の間からはなにか怪しい気配を感じるような気がした。暗闇や謎に恐怖感を持つのは人間の本能だろうか？

もしかすると本当にお化けやら妖怪やらが居るのかもしれない、なんて思う。そして

ら俺も化けて出てやろうか。

ああ、俺の目は精気が無くてまるで妖怪みたいだ、なんて良く変な後輩に言われたなあ。

いやあ、とことん失礼なやつだと思う。

どれだけあいつを世話してやったと……ああ、俺が居なくなるとあいつ一人になっちゃうんじゃない？それは少し心残りかもしれない。

でも、俺はここで終わりだ。

そもそも今更どう顔を合わせたら良いか解らないし、彼女に会ったとして自分が終わっていることはもはや覆らない。彼女色々悩んでいるのだからこんなクソみたいな人間の事に巻き込またくはない。

それにきつと大丈夫だ。

きつと彼女は大丈夫。だって本当に綺麗だからきつと大丈夫に違いない。多分。

余り根拠の無いことを考えつつ、酔いが大分回りもう思考するのも面倒くさくなってきたので手にした錠剤を口へと投げ込む。

投げ込んで、嘔んで、飲み込んで、また口に投げ込む。大量に買い集めたそれを片っ端から飲み込んで、駄目押しに再び冷たいアルミ缶を煽って流し込む。

腹が膨れていく。当たり前だがこれはこんな食い方をするものじゃない。

そして最期の一錠を飲み込んだ。

はい、これで終了。

一息ついて全身を脱力する。年齢に似合わず火照った体。外気の突き刺すような寒さ。朦朧とし始めた意識、視界。それらが感じる全てだった。

雪が強くなっていく。そのうち吹雪いてしまうんじゃないだろうか。そんな中ここに来る物好きは居ない。安心して微睡みに身を任せられる。

ほんの少しだけ。

ほんの少しだけ、こうならない方法は無かったのか、なんて考える。

だが、無いからこうなってる訳である。

まあ、これでこういう悩み達からおさらばである。不安は全くない。あるとすれば恐らくこの後地獄に行くことくらいか。

いや、そもそも死後の世界が有る訳がないと思っっている達なので。この先はもう無い。

てか、有ったら困る。困る？何が？誰が？

……ああ、頭がついぞ回らなくなってきたみたいだ。瞼も重くなってきた。

既に冷え切った体はもう動かないが、辛うじて口は動く。

どうせなら死に際の一言を残しておこうか。

「素晴らしい世界、さようなら。んで二度と来るかバーカ」

辛うじて口を動かしてそう言い放った。いや、本当に言えたのかは解らないが少なくとも心の中でそう言った。

もし神がいるなら輪廻転生とか本当にやめて欲しい。例え記憶を失って別人、別物に生まれ変わったとしても俺が生きた、生まれてしまったという事実は変わらない。だから、ここで全てを終わりにして欲しいもんだ。

遂に重さに耐えられなくなった瞼が降りる。

意識はまどろみの底へと落ちていく、外界の感覚はもう無い。

ああこれで本当に終わりだ。

真正正銘、永遠の眠りである。

そのはずだった。

一章 薬師とか穢れとか

一話 輪廻転生と言うかなんというか

俺は死んだ。

あれ、なんで？

いや、死にたかった事は否定しない。

そして色々と人生が詰んでたのも事実だ。

……いや、やっぱり死ぬべくして死んだんじゃない。

いやいや、待てさつきまで確かにそう思っていたし、自分に厭世的なところがあるのも認めよう。

だけど……いや……まあ、死にたくなる位の理由は有ったし、もう人生が詰んでる面も……まあ、有ったし。

ああ、これだけ並べると考えるまでもなく死ぬべくして死んでるね？

そう結論が出てしまった。やはり死にたくて死んだらしい。どこまで来てもどうしようもないのが俺らしい。

しかし、である。

この際その細かいところはどうでも良い。取り敢えず「死んだ」という事実が大事だ。多分。

現にお分かりのように現在俺は思考している。この思考と言うのは人間であれば脳が活動していないとできないわけで。

そういえばどこかの大学の研究で意識は生物的なものに依存せず空気中に漂う粒子のようなものだなんて研究結果もあつたか。だとしたらもしかすると思考は脳に依存しない……？

いやいや、そうだとしても、そうだとしなくても、言いたいことは変わらない。

だって思考だけでなく俺は今視界を認識している。つまり物を、景色を姿を見ている。

そこは眠る前とは異なり、蒼々とした木々に囲まれていた。

さらに言えば足は地に着いている感覚があるし頬は風を感じている。青い香がほんのりした。空気が良い。木々の葉の擦れる音も聞こえる。

さて、長々と回りくどく書いてきたが要約するとこうだ。

俺は生きている。

まあ、死んだか否かなんて自分のにはもうどうでもよかつたりする。物事に程よく無頓着なのが俺の長所である。そう自分に言い聞かせている。まさか生に無頓着になるとは思わなかったが、とりあえず生き返ったなら生きていくほか無いわけだ。

当たりを少し見回す。どうも様子がおかしい。

もし誰かが死に際の自分を見つけたのなら真っ先に病院に運ばれるはず。つまり、それが無いと言うことは実際はちゃんと死ねた可能性が高いと言うこと。

病院に送られ、治療され回復し、それからこの森に来た。そんな記憶は欠片も存在しない。

じゃあこの現状をどう考えるか？

ああ、安直に考えよう。

もしかして転成したのでは？

転生って言ったらなんかワクワクしてこない？自分はしてきた。少なくとも生前は高校生だった。

ライトノベル物でありきたりな設定としては強い能力を手に入れて可愛い仲間達と

共に俺TUEEE!!しながら悠々と過ごしていくのが鉄板。

つまり、俺をこの先待つのはハーレム生活!!?

……だなんてテンションが上がったように思えるが、実際にはそんなに興奮してない。

ハーレムと聞くとすぐ頭によぎる事が有る。

ハーレムは現実でやると本当に大変なのだから。生前、知人が複数人から好意を向けられて胃を痛めていたのを見ている。そして彼はそのハーレム要員以外を好きになつたんだからもう悲惨。愛憎入り乱れる昼ドラ展開を避けられず大分バイオレンスになりやがってた。カッターナイフを持ち出すメンヘラ女子は実在するんだよ。そう、カッターナイフマジ向けられるとマジで怖いからな？

人に刃物を向けるのはいけない事なのでマジで止めましょう。

閑話休題。

前世の話より今世の話の方が問題だ。

「しかし、全く分らないなあ。ここどこだよ」

転生開口一番、愚痴を漏らす。

そう呟いた言葉は周りの森に吸い込まれていく。そういえば何か声が高い気がするけど気のせいか……?」

しかし、本当に人っ子一人居やしない。ハーレムどころの話ではないのである。周りを見渡しても森、森、森、たまに岩。

ここはどうやら森の中らしい。上は開けていて、空も見えるのでそんなに暗くはない。今は昼時だろうか？まだ日が高かった。

キャオオオ

と、その時上空を大きな鳥が飛んでいった。鷲なんかよりずっと大きい体躯。そして鋭い嘴《くちばし》。まだまともに生きていた幼少期、凶鑑や恐竜キ〇グで見かけたことのある姿だった。

プテラノドンである。

……はあああああああ!?

何が「……である」だよ！落ち着いてる場合じゃねえよ！意味がわかんないよ?!

あれえ、ああいう感じの生物って何千年か前に絶滅してなかったっけ？

ああ、そもそも違う世界の可能性があるのか……？ここは恐竜の世界……？

恐竜が人を食うのかどうかかわからないが、もしここがそういう世界だとするといきなりハードモードである。

生き返ってすぐ美味しく頂かれるのは頂けない。俺は男な訳だからそもそも食らう

方だるお？なんてくだらないツツコミを入れつつ。

取り敢えず見晴らしの良いここに突っ立ってるのはまずい気がした。木々に身を寄せ隠れよう。そして人を探そう。まずこの世界を知らなければならぬを

夜になる前に見つかるの良いなあ……

「誰も居ねえ!!」

虚しき叫びが草木に吸い込まれていく。ひたすら歩くこと二時間くらい。時計はないので正確な時間はわからない。今の場所も周りは森でわからない。というか何もわからない。覚醒してから今まででわかったことは二つだけ。

その1、人が全く居ない。

その2、体が子供。

一つ目は言わずもがな。未だに誰にも会っていない。というより恐竜がいる時代に人類って居なくないか……？

いや待て待て、流石に早計だ。うん、きつと居る。

二つ目は歩いてみて気がついた。まず背が低くなっている。普段もより目線が低い、気がする。でも、この体に最適化させられているのか余り違和感を感じない。

あとやっぱり声がやたら高い。成長期前なのであろうか。喉仏もない。

あとは髪が伸びている。色も白い。肩に掛かるくらいだ。鏡がないのでわからないがきつと見た目は中性的になってるのか？

そして、体力が以上に増えていた。前世の体力は平凡な物だったが今世は何か違った。

正確な所は解らないが数時間歩き続けても全く疲れていない。足も痛くないし、汗の一滴もかいていない。現状にはありがたいけど何か人間離れしていたを

取り敢えず以上が今までにわかったことである。

……何も解決してないよ。

ふと思いつく。これまた幼少期にやってた某ポケットなモンスターなゲーム。

あれのシナリオでひでんマシンがなくて大きな岩が動かせなかつた時の気分似ている。

ゲームは好きだったがそう上手くは無いし、RPGのフラグの管理も苦手だ。最後は大体攻略本に頼る。

しかし、こちらは現実。攻略本なんてありはしないわけで。

ちくしょう。全然異世界転生物じゃねえじゃんか。トントントンってヒロイン現れる物だろう？普通。

八方塞がりだけでも歩く以外にやることはないのでひたすら歩いていく。

「……………」

その時耳に微かな音が入ってきた。さつきまでは草木のすれる音や、たまに空を切る恐竜の音ではない。

今まで聞こえなかった明らかに違う音。そして聞き覚えの有るような音。

「水の音だ……………」

その音に引き寄せられるように足取りが早くなる。もしかしたら水辺に誰か居るかもしれない。そんな淡い期待を持ちながら。

結果としては結局人はいなかった。

ただここに来たのは無駄ではなかった。

「きれい……………」

森を抜けるとそこは清々しい程に開けていた。眼前に広がるのはありえないほど透き通った湖。日の光をキラキラ反射させていて少し眩しい。

そう大きい湖ではない。むしろ泉といった方が近いかもしれない。その透明さと周りを囲む木々のお陰か、とても神秘的に感じられた。少しの間その光景に見とれて呆けていた。

「……そうだ。水でも飲もう」

そういつて湖に歩を進める。これだけ綺麗ならそのまま飲んでも大丈夫だろう。それに長く歩いたので喉が渇いた。

湖畔に沿って歩き、水の近くまで行けるところを捜して下りていく。

ちやうど良いところを見つけたので水際まで降りていく。そこだけ若干草が踏まれていたような後が有った。もしかすると他にもこの湖へ来る人が居るのかも……？

「しかし綺麗だなあ……」

硝子のように透き通っている水は表面に空を映し出す。雲の凹凸まで解る。ぱつと見地面に鏡ができたのかと見間違うほどだ。

「さてお味の方はどうかなく？」

水際に座り込んだ俺は手を差し出し水を掬おうとする。

「つて、は……？」

そこで手が止まった。

何故かって？

その理由は湖面に映り込むものにあつた。

先程まるで鏡と評した湖面。そこをのぞき込むような形になつた今、当然自分の顔が写り込むはずだ。

実際写り込んでいる。顔らしき物が。

何故「らしきもの」と表現したのか疑問に思う人も居るかもしれない。

が、わかつてほしい。

だってそれはあまりにも「俺」の顔じゃあなかつたのだから。

そこに写っていたのは少女の顔だつた。

十代前半だろうか。顔つきと体系からしてランドセルを背負つても可笑しくない年頃の子供。

大きな目に柔らかかそうな唇。それらが整つたバランスで配置されている。髪は肩口で切りそろえられていて、その髪の色は湖面に写る雲達に負けなくらい透き通つた白。目は紫と桃色を混ぜたような少し怪しい色。こちらもまた透き通つている。

服装は真つ白なワンピース。先程までは何故気づかなかつたのか。

現実離れた目と髪の色も相まって妖精とか人形とか言われても全くもって疑わな

いような外見である。

めっちゃ可愛い。

だが、しかし……

中身は男子高校生だ。

「意味わかんないんだけどおおおおお!?」

俺……いや、私の叫びは湖面をほんの少しだけ揺らし、虚しく湖畔の森に響き渡っていったのだった。

二話 人恋しいんだけど、いやマジで

前回までのあらすじ！

白髪紫目の美少女になった！

……死にたい。生き返ったんだけどもね。

状況を整理しようか。

まず、私は自殺した。これは取り敢えずOK。

次に生き返った。これも謎だがOK。

そして少女になっていた。よしOK——

んなわけあるかああああ
!!!!

十数年積み上げてきた私の男としての矜持が儼く崩れ去る音が聞こえる。可愛い子は好きだけど自分が可愛い子になるなんて考えないじゃない、普通。

ああ、とつても死にたい気分だ。生き返ったんだからどうせなら生きるかあ、なんて思ってたけどもう無理だわあ……辛み。

「いや。マジで辛いわあ」

ガルウ

「だよね。わかってくれる？こんな可愛いのに自分だからか全く萌えられないし、しかも少女だって認識したからか、思考がどんどん女の子っぽくなっていくんだけど……これも体と同じように最適化されてるのかなあ……」

ウウツガルウ！

「そうだよねえ……つて、え？」

良いところで相槌を打つてくれるので話を止めなかったが、その相手はどうやら人じゃないようだ。

……というかものすごく敵意を向けられている気がするんだけど。

ガルウ

私は後へ振り返る。その声の主達ははそこにいた。

それはまるで狼のような生き物だった。しかし、凶鑑やテレビで見たそれより変な色であるし、何より禍々しい。そして明確な敵意……いや殺意をこちらに向けていた。

怖い。

怖い怖い怖い。

カッターナイフを持ったメンヘラ女子の数億倍は怖かった。

「……もしかしなくても、これ絶対絶命じゃない？」

冗談抜きで全身が恐怖に包まれる。その化け物たちは目を光らしてこちらを睨んでいる。

さっきの叫び声に反応して来たのだろうか。その目は確認できるだけで数十個。森の奥の方にも見える。まるでそれは群れで獲物を狩る様だった。

当然獲物はこの私だろう。

さっき確認したように私は今「女の子」だ。

いま有るのは柔い肌には細い手足。それだけ。

あ、これは死ぬ。

そう直感で悟る。背後は湖。逃げる場所はない。そして何も力のない私。対するのは異形の怪物たち。当然為す術なんて無い。

「ああなるほどこれは罰なのかもね」

勝手に死んだ罰？それとも後輩を悲しませた罰？それとも……と色々思い浮かぶ節は有る。

とにかくそれを与えるためにわざわざ神様が私にこんな夢を見せたのだろう。そうに違いない。

ああいや、毛ほども神のことなんて信じてないんだけどね。もはやそれも含めての罰なのかもしれない。

私の心が一種落ち着き（諦観とも言える）をとり戻したところでその狼もどきたちが一斉に飛びかかる。

わざわざ前世は痛くない方法を選んで死んだんだけどなあ。

今度こそさよならだ、世界。

最後までお前はクソツタレだった。

精々早めに意識が途切れることを祈って目閉じる。

へ死ぬな。諦めるな。君にその権利は無いよ。く

突如脳内にその言葉が響く。

それと同時に何か動いた。物体ではない、力そのものでも言うべき物が。そして、こちらに向かつていた化け物たちが木っ端微塵になった。

思わず目を見開く。感覚が研ぎ澄まされ、世界がスローになる。

舞い散る異形の肉片が血糊を撒き散らしながらゆつくりと地面に落ちていく。ぼとり、という鈍い音で現実が追いつく。

当たりにはらばるのは全て死骸。

蒼々とした足元の草は全て赤黒く塗りつぶされていた。

訳が解らなかった。今の一瞬で気づいたときには辺り一面は血の海。幸い湖までその血液は到達してないらしい。湖面は綺麗なままだ……なんて今はどうでもいいか。

そんな凄惨な光景に対し私は全く持つて無傷。更には言えば血一つも付いていない。どこまでも真っ白な少女のままだった。真っ赤な地面との対比がやけに強調して感じられた。

辺りには他に何も無い。何も無いのだ。

じゃあ誰がこの狼達を殺し尽くした？

「これ私がやったの？」

震えた小さい声は湖畔の森に吸い込まれて言った。

数時間は呆けて居ただろうか。空はとつくにオレンジ色で一部が暗く染まり始めていた。

それだけ時間を掛けてようやく私は衝撃から立ち直った。あんなに大胆に殺戮したのは当然始めだった。

何回目かわからないけど状況を整理しよう。

まず私が何をしたか。その疑問は瞬時に答えが出た。頭に急に次の言葉が浮かんできたのだ。

へ……の能力はあらゆる大きさと向きを操る程度の能だよ。文字通りあらゆる……

鈴のような声で脳内でそれは再生された。

一体誰の声だ……？

しかしなんだこれ。一方〇行かな？いや大きさ操れるから上位互換……というか数学で習ったベクトルは本来大きさも向きも合わせ持つものだろう。本家の方が突っ込

むところか……というか、なんでベクトルを操る能力としなかったのか。あらゆると言うのは本当に「あらゆる」物なのか。

気になることしかない。

そもそも何故こんな力を持っているのか謎だ。ただの人である私にはありあまり過ぎる力かもしれない。

恐らく転生のせいなのだろうと予想は付いた。ようはこの能力を使って生きていけて事だろう。神様が私に押し付けたのか？

何も解らないがどうしようもなかった。

ただ、確かな事は一つ有る。

「いつの間にかこんな暗く……」

悩めど関係無く日は暮れる。

木々に覆われた森の中。すぐに辺りは暗くなる。

「今夜はどうしようかなあ……」

そもそも体力有り余るこの身体は寝る必要が有るのか。そもそもどこが安全なのか。寝床を探すにも手探りだった。

頼むから早いところ誰かに会いたい。神様よ、チュートリアルをくれ。

誰にも会えなかった。

ずっと、ずっと……いやマジでずっと。

正直気が狂いそうだよ。いやそもそも自殺した時点で気が狂ってるか。

いや例えば私が狂ってたしても私をここに送り込んだ神様の方がもっと狂ってる。

そう思うのも仕方ないだろう。

私はこの世界に来てから数年間歩き続けた。

数時間ではない、数年間である。

随分いきなりだと思われるかもしれないがしよがない。事実だ。

なおその間の出来事は語るに値しないので細かいことは割愛する。

なにせ語ることが無い。強いて言うなら能力に慣れたことかな。

能力を駆使して木から紐を作りハンモックを作ってみたり、腹は減らないがそこらにいる獣を能力で介錯して調理したりした。

能力のおかげで血抜きが非常に楽な事がわかった。

食用以外にも異形のを山ほど始末した。

戦闘目的での使い方を試行錯誤するためだ。

この世界に来てからすぐの頃は何度か化け物恐竜に潰されそうになったり、巨大カメラキリッぽい奴に切り裂かれそうになったりした。

いくらいい能力を持っていても、使い方が解らなければ無残に殺されて終わる。鍛えざるを得なかった。

お陰でこの能力の事が使い方が大分わかるようになった。多分人間なら一秒掛からずに殺せてしまうだろう。物騒きわまりないね。

ああそうそう。時間感覚が麻痺してるが数年経ったのは確かだ。500日までは数えていた。

しかしそこで気付いた、何故か一向に少女の状態から容姿が変わらないのである。

まあ、だからなんと言うこともないが。

以上私の数年間である。

残念ながら人には未だに会えていない。

ねえ、本当に居るの？

今の所ひとの付けたと思われる痕跡も見つから無い。代わり映えのしない森にうんざりしていた。

最初の頃こそ見たことのない生物などは興味をそそられたが、それも一月もすれば見

飽きる。

どうしようもなく何もない日々を過ごしていた。それはもう生きているのか死んでいるのか怪しい位。

もしかしてこのまま永遠に森をさまよいつける……？

そんないやな予感に支配されていたある日、ようやく事態が動いた。

歩き続けたある日の夕方。

正面の森が段々と明るくなって行く。

最初はまたひらけたところに出るのかなと思ったが、今回は違う。

あれは……人間の作ったものだ！

木製のしよぼい堀。だがそれはちゃんと加工されたもので、決して自然から生まれる物ではなかった。

私は喜びに包まれた。

遠目から見えたその人工物に向かって全力で走り出す。足元に能力を使って普通の走り寄りも何倍も早く。

そしてついに森を抜けたのだ。

そこには村があった。周りは木の堀で囲まれていて、弓っぽいものをもった、おそらくは兵士が門らしきものを挟んで立っている。遠い昔歴史の教科書で見たような集落

の姿。

「人が居る!!」

嬉しきの余り思わず声が出る。その声で門番らしきものが怪訝そうな目でこちらを一瞥する。だけどそんなことより私は数年ぶりの人の姿に感動したのだった。

足取り軽やかに、それはもうスキップするくらいの感じで村の方に向かっていく。一体この村にはどんな人が居るのか。なにか美味しい食べ物はあるか。

可愛い子は居るのかなど、今まで止まっていた時間が動き出し、思考が一気に溢れ出しました。

まずはあの門番たちと話そう。失礼ない用にしないと、村に入れないかもしれない。

「…………お前」

しかし、門番の近くまできて足を止めた。止めざるを得なかった。その門番から発せられるオーラのせいである。暗くてお互いによく顔は見えていないがピリピリと伝わってくる。ああこのオーラ私知ってるわ。異形の物のそれとは全く比べ物にならないくらい小さいが、これはあれである。

明確な…………敵意。

「あの…………怪しいものじゃないです?」

何故か疑問形になってしまった。その言葉を最後に一瞬だけ沈黙が訪れる。

「……妖怪だ!! 妖怪が来たぞ!! 総員放て!!」

その門番がそう叫ぶと同時に至る所から矢が飛んできた。量がやばい。一体どこからそんなに飛んで来るんですかね……というか。

「なんでええ!!」

逃げる。それはもうなりふり構わず。当たる矢だけ能力で相殺しつつ全力で逃げる。全身串刺し出死にたくはなかった。

私的には友好的に人畜無害に過ごすつもり満々だったのにあちらさんにその気は無いらしい。踏んだり蹴ったりこんちくしょう。おーまいがー! この世界に送ったのが神様よ、これは一体どういうこつたい。

「ひどい目にあつた……」

また森に戻ってきました。めっちゃ精神的に疲れました。ええ。

しかし、どうしよう。なんとか敵意がないんだけどなあ……近づけないと何も伝えられないし……

そこで無駄に良い耳に草を踏みしめる音が聞こえてきた。

「あんた面白いね。あの人里に真正面から入ろうとするなんてとんだ阿呆だよ」

とききなり声を掛けられたその方を向くと人が立っていた。いや正確には人ではない。二十代くらいのお姉さんの風貌だが頭の上にあるイヌ科っぽい耳と腰のあたりに見える長い尻尾が人じゃない事を表している。

服装はこげ茶色のコートみたいなものを上に着ていて下は黒いパンツ。胸元の赤いリボンが少し可愛らしい。動きやすそうな服装がそのカラツとした口調に合っていた。

「あんたの名前はなんだい？」

「これが私の初めての”妖怪”との邂逅であった。」

三話 生き返ったら人じやなくなつてた。何を言っているかわからねえと思うが私もわから（ry

前回までのあらすじ。

ケモ耳姉貴に出会った。

ケモ耳の需要って高いと思うんだ。私はエロさより癒やしの方に比重を置いたケモ
ミミ少女が好きです。もふもふ。

「でケモ姉さん」

「だからアタシの名前は……いや、もう良いわ。それで」

現在会話中。数年ぶりの会話に興奮しきれないぜ！なんてことはなく。それよりも、
取り敢えず私は彼女に聞かなければならない？

「私って妖怪なの？」

三話 生き返ったら人じゃなくなってた。何を言っているかわからねえと思うが私
もわから (r y

どうやら彼女の話をもとめると私は妖怪の一種らしい。

曰く妖怪というのは人の恐れなどから生まれるもの。

曰く人の恐れがなければ存在できないらしい。

ということとで基本的に人を驚かしたり恐怖させたり殺したり食べたりして生きるの
だ。物騒だなおい。そういう理由もあつて人里の近くを根城にする者が多いとかなん
とか。

「いやでも私数年間に会ってなかったんだけど」

それが本当なら私はとくに野垂れ死んでいる。

「へえ、そりやお前さんが特別なんだろうさ。強い輩はその位自立していられるかもし
れないが、お前さんは見た感じしよぼいからね。ますます面白いね」

しよぼいって……否定しないけど。

どうやら私は普通の妖怪と違うようだ。しかし、だとしたらなんで人間にすぐに妖怪

だって言われてしまったのか。

「ああなるほど、妖力の存在も知らないわけだ」

妖力とは妖怪の力の源みたいなもので人の恐怖や人そのものを摂取すると回復するらしい。便宜上そう呼んでるだけで要は力である。人間も神も似たような力を持つらしい。

……人間にそんな力有るか？てか神居るの？この世界。流石ファンタジー。

「門番は大体妖怪退治屋だからな。力に敏感だ。お前さんの体から溢れる妖力に気づいたんだろうさ」

妖怪退治屋なんてのも居るらしい。まるで日本昔話だ。

ふむ、つまり無意識に害のあるオーラを振りまいてたと？それなら攻撃されても仕方ないのか？とりあえず無知って怖い！

さて、「妖力」は「力」である。そして「力」は「向き」と「大きさ」を持つわけだ。

「じゃあ……こうしたらどう？」

「ん？……おお？何したんだ？全く妖力が見えなくなっただぞ。器用なもんだ」

意識を集中するとたしかに体の中に力の流れを感じた。これが妖力なのだろう。何故解ると言っても感覚で解るのだから説明しようがない。

まあその様な流れがあるなら私にとって扱うのは容易い、という予想は当たりだつ

た。上手いこと妖力を抑えられたようだ。

「妖力をここまで器用に扱う奴は見たこと無いね。これなら人里にすんなり入れそうだな。容姿は目立つが……うん。やっぱりお前面白いな」

ケモ姉は嬉しそうにケラケラと笑う。まるで新しいおもちゃを手に入れたガキンチョみたいだ。

いや、この場合私がおもちやじゃん。

「そうであんた、うちに来なよ。どうせ行くところも無いんだろ？」

うーん。さつき始めて会った人に着いていつて良いものだろうか。迷つたがしかし行く宛もないし、さきの人里はいま警戒状態だろう（私のせいで）というわけで彼女に着いていくことにした。

彼女は妖怪の集落みたいな所に家を構えていた。家と言っても木でできた小屋みたいな感じだけだ。集落を見渡すと一つ目の昔話にいそうな奴から冒険系のラノベに出てきそうな蜥蜴人みたいなやつまでいた。これが全部人の恐れによって生まれたものなのだろう。私も人間だったら驚いて腰を抜かしそうだ。

そんな妖怪集落に住み始めて数年経った。妖怪になつてからと言うもの月日が流れるのが非常に早い。

「儂はかな！人里襲いに行こうぜ！今日は山を3つ超えた所に行つてみようと思うんだ！何でもその辺りの山菜が上手いって」

家に入つてきたケモ姉が喜々として私に声を掛ける。儂とは私の名前のことだ。以前ケモ姉が付けてくれた。昔の名前は当然男っぽいやつなわけで今のこの少女姿には全く似合わないのだ。

なんでも命名は、彼女と湖畔で遊んでたときだった。ぼーっと湖を眺めていた私を見て急に思い付いたように名前を付けられたのだ。

何でも理由は、

『中身はともかく見た目は儂いんだよな。華奢で白髪で色白だし。そうやって黙つて謎めいてるといつでも消えてしまいそうに見えるんだよお前……実際に話すと中身はただのダメな奴だけだ』

だそうだ。ダメなやつは余計だ。合つてるけど。

でも、割りかしこの名前は気に入った。

新しい名前も良いものだ。段々と前世との繋がりが薄く懐かしい物になつていく。

……今世はちゃんと生きれるかなあ。

……つと、話を戻そう。

私は今ケモ姉から人里襲撃のお誘いを受けている。

襲撃というのはマジで「襲撃」である。ひとを襲つて時には殺して略奪するわけだ。

基本ケモ姉の事は好きだがその野蛮な所は好かない。

「嫌だ」

「んだよ釣れねえなあ」

いつも通りお断りする。

この集落の妖怪たちは時々人里を襲撃している。そうすることで妖力を集めているのだ。

「いいの。私は使わなきや妖力減らないんだから。たまにおどかすだけで十分。」

「そりやそうだけど、なにより人を襲うのは楽しいじゃないか。なあ?」

生きるための食事だけじゃなくそれを楽しんでいるのだから手に負えない。襲われる人間のことを憐れむつもりは無いが、半分快樂目的で殺戮を繰り返すのには恐怖を通り越して呆れてしまう。

「しかし力か減らないっていうのは便利だよなあ。有る意味人間的な状態だな」

私の妖力が全く減らない理由はどうやら能力のせいしかかった。無意識に私の所謂生命力をたれ流さないようにしていたらしい。

なんて便利！『あらゆる大きさと向きを操る程度の能力』様々である。チート能力バ
ンザイ！

「ケモ姉も使わなきや当分大丈夫でしょ。人に恐怖を与える為に使いすぎなだけじゃない。本末転倒だよ」

妖怪には大まかだが格という物が有る。大昔に私を襲ってきた獣みたいな奴は下の下の妖怪だったらしい。獣と殆ど変わらない。ある程度格が上がると意識を持つようになる。そうするとそう簡単に存在が消えることはない。

「あ、でもどうせ行くならまた本を取ってきて欲しいかな」

「またかよ。よく飽きないねえ。私なんかから文字で読むのを諦めたよ」

「何行つてんの私にこの時代……じゃなかったこの地域の字を教えたのはケモ姉でしょ」

「それとこれとは別さ。わたしやそんな根詰めて読めないよ」

やれやれとポーズを取るケモ姉。

集落の妖怪達は襲撃ともに人里のものを略奪してくる。お陰でこの妖怪集落は意外ともものに困らない。その中には人が作った本もありそれを私は好んで読んでいた。こんな恐竜が闊歩する大昔っぽい世界なのに意外にも為になる本や面白い小説本もある。

「だってそれ以外にやる事が無いんだもの」

「だから一緒に行こうぜって言ってるじゃないか？」

「それは嫌」

「つけ、そんなんだと妖怪としてアイデンティティが無くなつちまうぞ」

妖怪としてのアイデンティティなど最初から有るのか怪しい。強いて言うなら引き籠もり妖怪。

元人間だからと言うのも理由の中には欠片ほどはあるが、それよりもなによりも争いは好まない。もし私が恐怖やら畏怖やらを人間から集めるならもつとスマートな手段を取る。

「まあいいや。行つてくるよ」

「いつてらつしやい」

ケモ姉が出ていく。

そういえばこういう自然な挨拶を出来るようになった。

……実はそれだけで前世よりも今世の方が良いんじゃないかと思う。

「ああ暇だ……」

そんなことをボヤク。読んでいた本が終わりを迎えたからだ。冒険譚だった。騎士が姫を救い出す的な典型的な奴。

厳密にはそれは騎士でも姫でも無いが、まあ巫女やら何やらも一緒の物と言えるだろう。

と、そんな事は今は良い。問題は今暇なことである。

あれから数日経ったがケモ姉たちはまだ帰ってこない。山の向こうって言ってたから当分帰ってこないかもしれない。妖怪たちはとても時間にルーズなのである。このままだと暇さで圧死してしまう。一度死んでるけどね。

「人里……行ってみるかあ……」

千本矢を放たれた事件以来あの人里には行っていない。攻撃を恐れた訳ではなく単純に家から出るのが面倒くさかっただけなのだ。

しかし、やることもない今。ちょうど良い機会なのかもしれない。

この人里には一度は行ってみたいのだ。何でもケモ姉曰くこの人里は他に比べても少し異様で人間が規律的に生活を営んでいるらしい。話を聞く限り縄文時代より昔とほ思えない様子だった。気になる。そもそも本に出来るクオリティの紙が生産されて居るのが文明の高さを感じさせる。

うん、行ってみようか。ケモ姉達は当分こっちには来ないだろうし。

よしよし、そうと決まったら吉日。私は無地の紙を取る。しかし恐竜の居る時代なのに紙があるなんて謎である。やっぱりこの世界は元いた世界とは違う世界なのだろう。そんなことを考えつつちよつと出かけてくる旨の置き手紙を拵える。その後私は家を出た。

妖怪集落は森のなかにあり人里までは少しだけ距離がある。なので人里に向かうには森の中を歩いて行かねばならない。普通の人間だったらそれは自殺に等しい行為だが私は妖怪。まったくもって無問題なのだ。

何もここ数年何もせず本の虫になつてたわけではない。ちゃんと家事をこなしたり、レシピ本もとに料理を作つたり(ケモ姉はすごく喜んでくれた)、後は妖術の研究をしたりしていた。妖術というのは妖力を元に色々な事象を起こすことである。戦闘は嫌いだがこういうものの研究は好きなので色々と技を編み出した。記憶のジャ○プ漫画やラノベを中心に分身したり?化したりはたまた火の玉を出してみたり。そんなわけで戦闘にこまることはまず無いと思つている。できるなら戦闘は避けたいけどねえ。

そんなことを思いつつ森を進んでいくと私の耳が物音を捉えた。少し気になつたの

でそちらの方に足を向ける。どうせ暇つぶしなのだから寄り道して行こう。



「きやっ……」

小さな悲鳴とともに木の根に躓く。背中に背負った矢筒がカランと音を立てる。そのまま私は地面に頭から突っ込んだ。

体を支える為に手を動かした為、抱えていた薬草が手から離れた。その薬草は最近里で流行っている疫病を治すのに必要なものだった。絶対に持つて帰らないといけないのに……

本来普通の人間が一人で里の外を出歩くことは無い。しかし、街の大人の半分が病に侵されている現在、薬草の採集に割ける人員が居なかった。そこで私は一人で森に乗り出すことに決めたのだった。

もちろん里の者からは止められたが、そもそも今までちよこちよこ抜け出しては薬草を採集していた。

今回は増して緊急事態であるし、どうせ今回も大丈夫だろうと踏んでいた。

そう、慢心していたのだ。

なんのことは無い。採集中に妖怪に見つかってしまった。それも知性のない野良妖怪。普段人里を襲つてくる者たちとは比べ物にならないくらい矮小な存在だが、現在それよりももつと私の方が弱者だった。弱肉強食は世の常。この先で待つのは「死」のただ一つだけだった。

赤青2色に分かれているお気に入りの服、それには転んだせいで泥が付いた。しかし、そんなことを気にする暇はない。

そうだ、得意の弓によつて撃退をしよう。実践は初めてだったが私は弓術は優秀なのだから。そう思い急いで立ち上がる。長めの真つ白な髪がふわりと揺れる。

しかしもう遅かった。周りは既に異形のもので囲われていた。数はもはや数え切れない。カサカサとした音が鼓膜を揺らす。私を絶対に逃すまいと囲っているのか。

いくら弓術に秀でていてもこいつらを一度に倒すことは出来ない。逃げ場もない。万事休すだった。

「あ、ああ……」

恐怖で足が崩れ落ちる。どうすることもできない。不甲斐ない自分を呪う。もう祈るしか無かった。

せめて私が居なくなつた後病で苦しむ里の人達を助けて欲しい……と。動かなくなつたのを見はからつてか、一齐に異形の物達が襲いかかった。それは単なる捕食のため。本能に基づく行動だった。一切のよそ見は無い。

しかし、次の瞬間少女の目の前が桃色の炎に包まれた。その炎は異形の者達から発していた。

「なにこれ蜘蛛？くつき。燃えて有害なガスとか出ないよね？」

上空からゆつくりと少女が降りてきた。私と同一年くらいの少女。桃色と紫の間の目に透き通るような白の髪。色こそ私と同じだがその宙に浮かぶ少女は何処となく浮き世離れた謎めきを感じさせる。

「こんにちは、お嬢さん。無事かな？」

彼女は物語の英雄のようなセリフと共に声をかけてきた。見た目は英雄というよりもまるで妖精みたいだった。

四話 可愛い子には旅をさせよと言うけれどそれよりも手元でひたすらに愛でたい。

〈前回までのあらすじ〉

襲われてる美少女を助けたぜ。

大きな黒い目。透き通る白い髪。整っていて、でも幼い顔。そしてすらっとした手足。一目で悟ったよ。

えーなにこの子超可愛い。

四話 可愛い子には旅をさせよと言うけれどそれよりも手元でひたすらに愛でたい。

つついっ助けてしまったけど、彼女が可愛い女の子でよかった。状況が読み込めて居

ないようでその可愛らしい顔を惚けさせている。

妖怪に対して過激なおじさんとかじゃなくってよかったよかった。

「こんにちはお嬢さん。無事かな？」

うーん、我ながらめつちや格好いい登場の仕方だったんじゃないか。でも、今は少女姿だからいまいち締まらないけど。いやあ生前の姿だったらもう完璧に惚れさせてたね。ええ嘘です。そんなこと無いです。

「あ……ありがとう」

そうお礼を言ってくれる可愛い彼女。青と赤のツートンな服のセンスはよくわからないがやつぱり可愛い。しかし残念なことにその目には疑いの色が見られたのだった。彼女の弓を握る手に力が籠もるのがわかる。

いくら幼女とはいえそう簡単には警戒を緩めてはくれないか。

「なんで……助けてくれたの？」

確かにいきなり現れた奴に疑いをかけるのは当たり前だ。それにしてもさつきまで凄く怖がつていたのに回復の早いこと。この子は思ったより大物かもしれない。

「貴女……妖怪よね？」

そう言われる。まあさつき妖術使ったから言い逃れはできない。

彼女は恐らく私を追い返した近くの人里に住んでいるのだろう。妖怪を敵視するの

は仕方がないというもの。うーむ、私としては人間とは仲良くしたいのだけれど、上手いこと警戒を解いてもらうにはどうしたら良いだろうか……いや、細かく悩んでも仕方ないか。私にその辺を上手く出来る話術は無い。よし。

「君が可愛いかったから助けた」

「……はい？」

というわけで正直にいこう。直情径行。

正直な好意をぶつけなければきつと解つてくれるはず！前世の格好でそれをやったら逮捕されるが、見た目は同い年ほどの幼女。イケるイケる。

「怯える美少女を見捨てるなんて紳士にあるまじき行為だもん。それに正直凄く萌えた。いやあ久々だね。大昔のケモ姉以来だよ。君は逸材だ」

ケモ姉以外とまともに交流は無いですが気にしない。

そしてさっきまでの格好良さも台無しだが気にしない。紳士とかいつて今はもう男ですらないし。

「是非これをお近づきになりたいと思っております」

「何を言ってるの……」

彼女の目の色が呆れに変わっている。どうやら敵意は無いということをおわかってくれたようだ。やはり真摯な気持ちは伝わるね。

「よくわからないけど、とりあえず貴女が変人なことはわかったわ。ひとまず助けてくれてありがとう。でももう大丈夫よ。私はもう人里に帰るし、妖怪は近づくと退治されるわよ」

そう言つて。地面に落ちた葉草を拾う彼女。さつきまであんなに怯えて居たのに妖怪の私を心配して頂けるのはありがたい。だが……

「また襲われたらどうするの?」

「……さつきは油断しただけよ。これでも弓矢が得意なの。数が少なければ遅れは取らないわ」

会敵した時に都合よく数が少ない保証はないけどね。と私が言うと彼女は口を噤んでしまう。

彼女を送り届けるのは確定として……そうだな、ついでに頼み事をしてしまおう。

「送り届けて上げるから、さつき助けた分も含めてちよつとお礼をして欲しいんだよね」

「……何よ?」

訝しげに此方を見る彼女。そう警戒しなくて良いよ。

さて、人里は確かに妖怪にとって危険である。しかし今回の私の目的は……

「人里の中に連れてって欲しいんだ。」

「……はあ?」

せつかくなので彼女に仲介してもらおう。何だコイツ馬鹿なのか？という顔で彼女はこちらを見てくる。

「いくら貴女が強くても里には妖怪退治のプロも居るわ。始末されるわよ」

「大丈夫、大丈夫。きつと私が妖怪だってバレないし」

妖術を使わず力を隠していればそうバレることはない。それにもしバレても能力なり妖力なりを使ってさっさと里から離脱してしまえば良い。

「私は儂。という訳で以後よろしくね」

「いや、だから……」

「貴女の名前は？」

「……はあ、わかったわ。八意永琳よ」

溜め息と共に呆れた様子の子の見た目が私と同じくらいその少女はそう名乗った。

「貴女、変な妖怪ね」

「よく言われるよ」

そう言つて二人で森を歩きながら会話する。

「しかし、永琳も無謀なことするね。薬草採集するために独りで森に来るとか。自殺行為じゃない？」

「もう言わないでちよーだい。今は反省してるわ」

永琳は森で薬草を採集するのが目的だった。薬を作るのが得意らしい。若いのに大した物なこと。

「あなただつてそんなに変わらないでしょ」

「いやいや、多分永琳の三倍くらいは生きてるよ」

永琳が十歳位だとすると、高校生だった前世と今生を合わせれば大体それくらいだろう。

「……本当妖怪って理不尽ね」

呆れて溜め息をつく永琳。いやいやこれでも若い方なんだよ？

「まあいいわ。それよりそろそろ人里に着くわよ。……本当に大丈夫なのよね？」

永琳が心配しているのは街を見回っている妖怪退治屋のことだった。曰わく妖怪が人里に入ってきたなら速攻で抹殺するらしい。

「大丈夫大丈夫。気づかれなくて。というか永琳も良いの？一応仮にも妖怪な私を里内に入れて」

今更ながら大丈夫なのかな？

「貴女が他の妖怪みたいに野蛮な事をするようには見えないし、もし私の事を騙してたとしても断つて貴女に殺されるより、里の人に退治してもらう方が良いわ」

いや、断つても殺さないよ？流石に冗談で言ってるんだと思いたい。

「本当に何とかなったわね……」

「でしょ？」

私達は里の中を歩いていた。里というより街だなあとその景観を見て思った。

永琳を連れて人里に入ったのだが、入る前に門を通る必要があった。ほんの少しだけ不安だったが問題なく上手いこと行つてよかった。

以下回想。

「永琳様、無事でしたか。全く勝手に外に出て行かれた時は肝が冷える思いでしたよ。貴女は貴重な薬師なんですから……」

「小言は良いわ。早く入れて頂戴。薬を作らないといけないのよ」

「それはありがたいですが、言うだけ無駄でも小言の一つでも言わせてくださいよ。そ

れで其方の方は？どうやら見たこと無い御方ですが……」

門番の言葉から想像するに永琳はこの里の貴重な人材であるらしい。薬師という人種がそう多そうな感じもしないのでそういう事なのだろう。

その兵士は私に目を向ける。少し訝しげなのは見知らぬ顔であるのに加え私の容姿が珍しいからだろうか……あれ、でも永琳も白髪じゃない？冷静に考えたらそれもなかなか変かもしれない。やはり今生はファンタジー世界なのか。

さて、門番に対して私のことをなんとか誤魔化さなければならぬ。それは永琳の仕事だった。

「私の友人よ。箱入り娘で今まで余り外に出てきて無かったのよ。でも弓の腕は確かだから護衛に付いてきてもらったわ」

「はあ、そうでしたか」

私は今永琳から借りた矢筒を背負い手に弓を持っている。ワンピース姿にその装備はあからさまに不自然だがもう致し方ない。

色々無理がありそうな設定だがこれ以上特に思いつかなかった。

上から下まで舐め回すように少し腑に落ちなさそうな顔をしていたが、最終的に兵士は納得せざるを得なかった。永琳の話によればこの門番は手練で妖怪の気配にも敏感だと言うがそもそも永琳は人間だし私は能力で妖力を完全に隠しきっている。

それではどうぞ、という言葉とともに門番は私達を門に通したのだった。
以上回想。

「逆にこの里の警備が不安になるわ」

「私が特別なだけだから大丈夫」

そう私は例外だ。私は現在溢れる妖力を限りなくゼロに近づけている。こんなことする妖怪なんてまず居ない。メリツトないし。つまり今の私は妖怪である証拠が一つもないのだ。見る人が見てもただの白髪桃紫目の少女。そりや刃物で切り裂かれたり火であぶられたりすれば話は別だけどそんなことを人里の中でやる酔狂な奴は居ないと思う。

「永琳様って呼ばれてたけど……もしかして永琳ってお偉いさん？」

「そんなこと無いわ」

少しうんざりとした感じに否定される。

本人的にはそう扱われるのはあまり良くないらしい。

「薬を作ったり治療したりしていたら少し敬われるようになっただけ。あんまり居心地は良くないんだけど」

十代そこらなのに大人達に敬われるのは少し齒痒いのだろう。

「薬ってどこで作るの？」

「私の家よ」

「永琳の家って？」

「向こうよ。すぐ着くわ」

そう言つて彼女は向こうの方を指差した。ついでに私は改めて辺りを見回す。

町並み自体は生前に博物館で見たジオラマみたいだった。確か記憶の中のそれは奈良時代の集落とかだった気がするが文化レベルは近いのかも。

うーん、数年前までこの人里は縄文とか弥生とかそんな感じだった気がするんだけど。里を覆う柵が木から漆喰と瓦のしっかりしたものになつてゐるし。この世界の人類は発展が早いのかもかもしれない。

そんな趣あるしっかりした町並みなのだが、余りにその往来は少なかった。

というか皆無である。

「随分閑散してない？これが普通？」

「今は皆病に伏してゐるのよ」

人通りが無くなるレベルで皆病氣してゐるのかな……？だとしたらそれってかなりの人数なのでは。

「それにしても、つて感じだね」

「だから急いで薬草を取りに行つたのよ」

流行病の治療薬を作るために永琳は里の外に出たとは聞いていたが、これは思った以上にやばい状況だった。道理で幼くても聡明な彼女が無理をするはずだ。

うーん、一人で全員分作るのかな？

「早く薬を作らないと……あなたはその後どうするの？」

さてどうしようか。元々暇だから人里に来てみただけだし。この分だと街を回っても現代のシャッター街よろしくろくに店は空いてないだろう。

「永琳のことを手伝うよ」

「……本当に変な妖怪ね。貴女」

まあ、元人間だしねえ。

「はえ〜」

思わず変な声が出てしまう。私達二人は永琳宅に着いた。割かし綺麗に整頓されているが、土壁に取り付けられた木の棚には所狭しと大きめの瓶が並んでいた。中身は薬草だったりよくわからないトカゲみたいのだったり。

「これ全部永琳が？」

「そうよ」

恐らく全部薬を作るのに使うのだろう。にしても一人でこの量を集めるのはかなり果てしない苦労の様に思える。永琳ちゃん半端ないです。

取り敢えず薬の作成の準備に取り掛かる。永琳の指示に従ってアレやコレやをボウルみたいなものの中に入れ混ぜていく。作業をしながら会話を投げかける。

「いつから薬を作り始めたの？」

「物心着いたときからかしらね。昔居た家に薬草の本があつてそれを見て色々やったものだけ」

筋金入りの薬師らしい。永琳マジパネエ。

「今までもこんな感じで皆のために薬を作つてたの？」

「ええ……まあ皆のためと言うより、私の好奇心を満たすためだけでもね」

ふむふむ。つまりこういうことだね。

「べ、別に皆のためなんかじゃないんだからねっ！つて事ね。」

「いや、何よそれ？」

「で、できたあ……」

ようやくと薬の作成が終わった。正確には数えてないけど、4桁を余裕で超える数だったよ。どつと疲れに襲われる。なかなか辛かった。

「ご苦労様。おかげで思ったより早く終わったわね」

「そりゃよかった……」

対して永琳は涼しい顔をしている。手際の良い彼女は私の二倍の数をこなしている筈なのにそんなのはおくびも感じさせない。他の人のために平気でこんなことができるんだから凄い。薬草の採集の時もそうだったけど私には無理だね。

「それじゃあ薬を配りに行きましょう」

「ええ……休憩は？」

「少しでも早く飲んでもらったほうが早く治るわ」

それは仰るとおりですが、貴女も疲れてるでしょう？え、そんな事言ってる場合じゃない？

いや永琳ちゃん凄過ぎでしょ。

それから永琳とともに里中を薬を配って回った。なかなかこの里は栄えているら

しく予想よりかなり広がった。端から端まで歩くのは非常に骨が折れた。

それでもちよつとした収穫はあったのでまあ良しとしよう。

「あら永琳ちゃんに……お友達？お人形みたいな子だね。薬ありがとうね。これでようやく旦那が畑仕事ができるようになるわ」

「本当にありがとうございます……これでおつかさんが楽になります……」

などなど。薬を渡した皆はもれなく各々の感謝の言葉をくれた。それに対してはもちろん私も悪くない気持ちだった。

でもそれよりもその言葉を嬉しそうに、そして少し気恥ずかしそうに受け取る永琳を見る方が楽しかったのだった。

用事を終え永琳宅に帰ってきた私達。日はもうほとんど暮れて空には薄つすらと星が見え始めていた。

「いやあいい仕事をしたよ。うん」

そう行つて床の上に大の字で寝転がる私。少しヒンヤリしつつ温かみのある木の床が心地よい。

妖怪ぼいで作業で手が痛くもならないし、歩き回ろうが息の一つも切れはしない。でも気持ち的に心地よい疲労感に包まれていた。

「……貴女いつまでここに居すわる気？」

そんな私を呆れたように見下ろしながら永琳が言う。

いつまで、か。うーん。あんまり考えてなかつたけどどうしようかなあ。

里に賑わいが戻るには疫病が落ち着かないと仕方がない。永琳が薬を作ったとはいえ、そんなに早く薬は効きはしない。人里を堪能する、という私のざつくりした目的を達成するには時間がかかりそうだった。

……よし。

「私が飽きるまで！」

「……はあそんなことを言うと思つたわ」

ため息と共に頭を抱える永琳。どうせ今妖怪の集落に戻つてもケモ姉も居ないんじゃない暇を持て余すだけだし。それなら永琳と居た方が良いというもの。

「つてことで永琳、これからよろしくね」

体を起こして永琳の方に手を差し出す。それを見た永琳は観念したのか呆れたよう

に再度息を吐く。

「……仕方ないわね。ただし仕事は手伝ってちょうだい。よろしく、儂」

そう言つて永琳は私の手を握り返してくれたのだった。

時は移ろい夕食時。

「……ちよつと永琳」

「どうかしたの?」

私達二人は向かい合つて食卓についている。向かい合う私たちは似た髪色のせいもあつて少しだけ姉妹の様に見えた。当然私が姉だ。永琳に「儂お姉ちゃん」つて呼ばれるのを想像して脳内で心中ニヤケが止まらなくなつた。

いやそれは良いんだ。問題はない。それよりも食卓に乗っている料理に問題があつた。

「これ……何?」

「何つて夕食よ。いらなの?ちゃんと栄養のバランスも考えてあるのよ。……ああ妖

怪は別に食べなくても大丈夫だったわね」

種類にも寄るが、確かに妖怪は基本食べなくても良い。人間やその恐怖が食事と言える。

いやいや今はそう言うことじゃなくて……

出されたそれはそもそもそれは料理と呼べるような物じゃなかった。まずご飯。これは一応炊いてある。何も乗っていないただの玄米のようだがそれはまだいい。

その隣に無造作に並べられている草と肉片が解せない。野菜と肉ではない。草と肉片だ。そこには調理の「ち」の字も無い。

「……どうやって食べるのこれ？」

「これを使って頂戴」

そう言つて永琳に細長い瓶を渡された。まるで前世のときに見た試験管みたいなやつ。

「なにこれ」

「それは青椒肉絲チンジャオロースの味になる薬よ。他の味が良いかしら？ 妖怪に合う味があるかわから

ないけど……」

ふむふむなるほど。ええ、なるほどなるほど。わかりましたよ。ええ。はい……

「料理をなめんなああああああ!!」

「きゃっ」

そこで私は勢い良く立ち上がった。それにびっくりした永琳が小さく悲鳴を上げる。人間である永琳を驚かしたから少し妖力を得たとか、こういうときだけ年相応の少女なのが可愛いとか、そんなことは今はどうでもいい！

「台所借りるね！」

「ち、ちよつとどうしたのよ儂!？」

恐らく彼女の今まではこれでよかったのだろう。

だがしかしっ!!人間として食事をないがしろにするのは許せないっ!!私は妖怪だけでも!!

「美味しい……」

味噌汁をのんだ永琳がそう呟く。

「でしょ?人間ちゃんとした料理を食べないと性根が曲がっちゃうよ」

「妖怪に言われるのは何か解せないわ……」

本日のメニューは和洋折衷な肉料理になった。幸いたくさんの材料が永琳家には保

管されていたのでなんとか無事完成した。

「意外。こういうことは細かいのね」

「まあ昔からの趣味みたいなものだよ」

生前は半分一人暮らしみたいだったので良く自炊したものである。

「大体あんなので済ませてる永琳の気がしれないよ」

「しようがないじゃない。薬は作れても料理は作れないのよ」

少し不満げにそう言う永琳。にしても限度つてもものがあるんじゃないだろうか……

普段は大人びていてたまに何処と無く抜けていると思っていたが、訂正。結構大事な部分が抜けているようだ。永琳ちゃん実は人間じゃないんじゃないか……

「失礼ね。それにしてもこんなに料理出来るなんて、本当に妖怪っぽくないわね」

「確かに永琳のがよっぽど妖怪みたいかもしれないね」

「余計なお世話よ」

そんな感じでゆるりとした食卓の時を過ごしたのだった。

五話 技術の発展は著しく、同じようにまた少女の成長も著しい

〈前回までのあらすじ〉

永琳と姉妹になった。

「なっていないわよ」

「試しに夢お姉ちゃんって呼んでみて」

「? 夢お姉ちゃん?」

「グハツ……!」

「意味がわからないわ」

五話 技術の発展は著しく、同じようにまた少女の成長も著しいのである

私が入りに住み着いてから三年ちよつと。

この里には曆があるので正確な年月がわかるので助かる。私の知っている曆、つまり現代の太陽曆とは違うものだが少し学べばどんなものかすぐに分かった。

現在季節は恐らく夏。つまりめっちゃ暑い。マジで暑い。私はその暑さにとろけるように床に寝そべっていた。この前里の技術屋で扇風機みたいなのができたらしいけれどわざわざ買に行くほどのものでもないしなあ。

「ただいま。暑いならあの便利そうな能力を使えばいいじゃない。熱の向きをかえるとか」

「永琳おかえり。能力使うと疲れるから却下」

永琳が一仕事終えて帰ってきた。永琳は現在十代後半に差し掛かった位。大分伸びたその綺麗な髪を腰の下位で綾紐みたいなものでくくっている。まだ少しの幼さはあるもの、すっかり少女から女性へと変化している。

私と同じくらいの背丈だったのに今はもう少し見上げないと目が合わない。少しお姉ちゃん悲しい……

ちなみにだが、現在私たちのいる家はその小屋の時から何回も建て替えていた。

最初のあばら屋と比べ大分近代的で、昔観た中国の歴史映画で見かけた物に近いかな

と思う。

赤い装飾が至るところに施され、窓にはラーメンの丼のアレのみたいな意匠が拵えてある。

そして驚くべきは電気とガスが通っているのである。

……流石に進歩が速すぎる。全てがそうではないとは言え、ものの数年で近代に追い付いてしまった。流石ファンタジー世界。

まあ色々と変わっても実験用の壁を埋め尽くす瓶達はそのままだ。

「早くクーラーとかできないかなあ」

「クーラー?」

「部屋を冷やす機械、そういうのがあるのです」

「はあ、貴女がよくわからない発言にはもう慣れたわ」

述べたとおり最近の人里の技術力の発展は目を見瞠るものがあった。前の世界だと何十年何百年かかる所を数年で走り抜けている。このままクーラーとかヒーターとかささつと作ちやつて欲しい。ああ冬は炬燵も欲しいなあ。

「で、今日は何してきたの?」

「里長の息子が風邪をひいたらしいのよ。その治療よ」

色々と環境は変わったとはいえ、永琳がやることはほとんど変わっていないのだっ

た。いくら技術が発展しても病人は居る。寧ろ増えすらするもので。

そんなこんなで相も変わらなず彼女は里中から絶大な信頼を得ていたのだった。

「あら貴女も結構人気なのよ？」

私も永琳と一緒に薬師の仕事をこなしている。そのせいも有って必然的に里の皆に顔を知られてしまっているのだ。人気かどうかは別の話だけれど。

「いつまで経つても見た目が変わらないから『あの子は神様の使いだ』なんて言う人も居たわね」

「妖怪の次は神様かあ……」

神、この人里には宗教は無いので特定の神は存在せず漠然とした物でしかない。だがしかしファンタジー世界。下手すると神は実在するのもかもしれない。

というか里の人々にそう思われてるせいなのかわからないが、最近体内の流れに新しい力を感じる。妖力とは正反対な眩い光の力。もしかしたら妖怪と同じように神様も人の想像から生まれるものなのかもしれない。

そうするとこれはやはり神の力なのか。

つまり私は神だ。

やべえめつちや厨二臭い！

「神様といえば、その里長の息子の名前ってなんだったっけ」

「月夜見ツクヨミよ。なんで神様と関係があるのよ?」

「んーいやこつちの話」

ふと思ひ出して確認してみたが、私なんかより何十倍も神様っぽい名前である。もしかしたら本当に神様になるのかもしれない。いや、流石に人間からは無いか。……無いか?ありそうだ。

「そうそう聞いてちょうだい。その子に不老不死の薬は無いのかって聞かれたのよ。まだ若いのに死にたくないだの何だのって言ってる」

「あーそういうお年頃なんだよ。うんうん」

わかる。私もガキの頃は不老不死とか無敵付加とか色々妄想したものだよ。完璧な黒歴史だけでもね、ぐはは。

「それで終われば良かったんだけど、親バカ里長が本気にしちゃってね。お陰でこれから賢者を集めて会議なのよ」

嫌そうに言う永琳。賢者とはこの里の有識者のことを指す言葉。いつの間にか自他共にそう呼ぶようになっていた。彼らは時々集まって人里の重要な取り決めを話し合う。もちろんその一人は永琳である。

実は何故か私も誘われたのだけれど、当然辞退した。そもそも私は人じゃない。今更何をと言われるかもしれないが人のコミュニティの中心に異物である妖怪私が居るのは

良くないと思うのだ。

まあそもそも賢者になるほど博識でもないしね。

「あなたも一緒にくる?」

「遠慮しとくよ」

不死の薬に興味は無い。だって妖怪は年をほとんど取らないのだから。しかし永琳が居ないとなると暇だなあ。本はこの前丁度読み終わってるし、新しいのを読む気分でもないし。うーん。

「ちよつと妖怪の集落に行ってみようかなあ」

本に関連してケモ姉のことを思い出したのだった。本の虫だと私を揶揄った彼女。

あれから数年、結局一度もあつちには帰っていなかった。人里の居心地が良すぎたのかねえ。丁度良い機会だし行ってみようか。暑いけど。

と、永琳の方を見ると彼女は少しだけ目を見開いて驚いていた。

「……帰ってくるの?」

永琳がほんの少しだけ不安を顔に滲ませながら聞いてくる。本人としては隠しているつもりなのかもしれないが私には丸わかりだった。

お?これはアレですか。アレじゃないですか!私は能力を使い永琳の方へ飛んでいき彼女の頭を抱きしめる。

「もうそんな寂しそうな顔しなくなつて帰ってくるつてば！お姉ちゃんは妹の側にいる物なんだよ！」

「……そう。つて私は貴女の妹なんかじゃないわ」

永琳は少し恥ずかしくなつたのか腕の間から見える耳は赤く染まっていた。成長しても永琳はやっぱ可愛い！これはもはや宇宙の真理である。

「ああでも何日か泊まるかもしれないからちゃんと一人でも食事しなよ？」

「わかつてるわよ。散々あなたに教えられたもの。もう料理くらいできるわ」

そう頼もしげに言ってくれた。

彼女も成長したもんだ。

そんなこんなで里を後にして三年ぶりに妖怪の集落に向かうことにした。まずは門へと向かう。

大通りを通つていく。現在の里は「里」というより「都」と呼んだ方がしっくりくようになっていた。

永琳の家もそうだったが、全体的に昔の中国王朝をイメージすると良いかもしれな

い。ここは中国寄りの文化なのかなあと思ったりしたが日本産ほい本や漫画までも生まれているので実によくわからない。異世界だから仕方がないね。

しかし書籍がある世界に生まれてこれでよかった。ご都合主義万歳！そんなことを考えながら歩いていったのだが……

「何か少し寂れた？」

妖怪の集落に到着した。

久々に見るその集落は少しばかり荒んでいるように感じられた。以前は何とというか妖怪特有の怪しくも騒がしい雰囲気をもつと濃かった気がする。

「まあ取り敢えずケモ姉の所へ行こうか」

その後あばら屋極まるケモ姉宅に着いたが、肝心なケモ姉が居なかった。一瞬居なくなったのかと不安になったが生活感がめちやくちや残っている（主に食べ散らかした皿）ので恐らくは出掛けているのだろう。やることもなく仕方がないので寝て待つことにする。

ガラリと音がする。ガタガタな木製の扉の立て付けの悪さが原因だ。あれから何年もこの家はそのままなのだからガタが来ているのだろう。それで私は微睡みから目を覚ます。寝ぼけ眼で玄関の方を見るとケモ姉が立っていた。なんとなく呆けている様子だがどうしたのだろう？

「おはよ、ケモ姉」

「……」

声をかけても返事が帰ってこない。まるで屍の……ていうのは冗談で。一体どうしたのだろうか？

「夢……」

私の名を呟くケモ姉。それきり時が止まってしまったように動かなくなる。え？私なんかしちやった？沈黙に包まれる。

「夢ああああああ!!」

そんな空気を破り去ってケモ姉が叫びながら私に飛びついてきた。思いつきり抱き

しめられる。

ちよつ痛い痛い！ぐおお、マジで！洒落になんない！

「何処へ行つてたんだよお!!すぐ帰つてくると思つたのに何年経つても帰つてこないし！もしかして消えちやつたのかとおもつたよ!!うう！儂あ！」

涙止まらぬ様子で私を強く抱きしめてそんな事を叫ぶケモ姉。耳元で叫ぶので鼓膜がガンガンするし、鼻水と涙が服に付くので少しばっちい。法外な力で抱きしめられた体はキシキシと悲鳴を上げる。

めちやくちや痛い、痛いっす。能力を使ってケモ姉を吹き飛ばそうか……だが結局それはしなかつた。

なぜならばそんなに私のことを思つてくれてたことに驚いたし、悪いことをしちやつたなとも思つた。

それに何より少し嬉しかった。

「はああ!!あの人里に住んでたあ!!……まったく、相変わらずあんたは面白いねえ」

ようやくと落ち着いたケモ姉とここ数年のことについて語り合う。私が人里に住み

着ていることにたいそう驚いたのだった。

「そんなに驚くこと？」

「そりゃ驚くさ。知らないのか？最近のあいつら妙に力を付けてきたもんで迂闊に襲撃できないんだよ。あ、私以外のやつにあんまり人里に居た事言わないほうが良いぞ。多分目を付けられるから」

「そういえば住み着いて数年間妖怪の襲撃が無かったなあ。恐らく技術の発展とともに妖怪に対抗する手だてが出来てきているのかもしれない。薬草採集以外で外に出なかったからその辺の防衛関係は何も知らなかった。」

「お陰で何人か退治されちゃったよ」

「はえーそんなに力をつけてるんだ。だから何だか閑散としてたんだね」

なるほどそういうことがあったのか。そのせいで……

「……ああいやそれはちよつと違ってな。まあ原因の一つではあるんだが」

ん？集落が寂れていたのはどうやら別に理由が有るらしい。

「最近周りの妖怪とか獣達が互いに争い始めてるんだよ。文字通り命をかけて。何だか数が増えたせいで他の縄張りに手を出し合ってるっぽいんだ。ここの集落の奴もそれに巻き込まれてる。私はもう群れの頭を張ってないから関係ないけどね」

やれやれとケモ姉。生存競争という奴だろうか。獣の群れの長が妖怪ということも

少なくないのである。ケモ姉も昔はそうだった。そうすると文字通り生死を争う過激な戦いも起こりうる。なかなかどうしてこの世界はサバイバルだねえ。

「だから心配したんだぞ」

まったくと言い、腕を組んでふんつと鼻を上げるケモ姉。彼女は少しがさつで竹を割ったような性格。だけでも私を拾って家に入れてくれたことからわかるように根っこは凄く優しいのである。

「ふふつ、ありがと。悪かったね」

「わ、悪く思うんなら夕飯作ってくれ！それでチャラにしてやる！」

つい私が笑ってしまったので顔をまっかにしたケモ姉がそう言う。永琳も可愛いけど負けず劣らずケモ姉も可愛いんだよなあ。

「そういえば私が居ない間の食事ってどうしてたの？」

「昔お前に教わった鳥の卵の中身を飯にぶっかける奴だけ食ってた。あれ、旨いよなあ」

「それだけ？ずつと?？」

「ああ、ずつと食ってた」

……どうして私と親しい人は生活力が欠けがちなのだろう。

いや二人ともちゃんと食べるようになったから進歩しているんだ。永琳は料理もでき
きるし。

六話 愛とか恋とかわかんないから萌えさえあればそれで良いと思わない？

〈前回までのあらすじ〉

まわりの女の子達が可愛すぎて嫁にしたい。

嫁にしたいとは言ったものの半分冗談。

残念なことに(？)この体になってから人に惚れるという気持ちは全く解らなくなってしまう。

いや、前世で恋人なんかいた事は無かったから恋というものに対しては大分懐疑的であるけれど、もっと本能的に、言うなれば性欲という物の存在が怪しい。

長いこと人里に住んでる間は永琳の裸体を見る機会が何度か有れども、純粋な綺麗さに感動こそすれ、性的に興奮はしない。

それなら男子ならどうだろう？と当然思ったがそれも無く。

永琳の顧客のおばあちゃんとの付き合いもあり、興味本位で勧められたイケメンとお

見合い擬きの事とかしてみたけれどやっぱり無理だった。まあそもそも付き合う気は無かった訳だけでも。

もうそろそろ人間歴より妖怪歴の方が長くなりそうだけど性別が謎だ。どっちつかずで中途半端。まあ一応今は体は少女だから女ということにしておこうかな。

さて、そんな事は置いておいて現在は私は里長の家に来ております。里長と言うだけあつてかなり荘厳な建物だ。まるで宮城みたいな感じ。これまたことなく中国風だ。

そんな威厳の塊みたいな建物の一室、恐らく応接間だろうに私は来ていた。ここに来るのは初めてではないが一つだけ何時もと違うことがある。永琳がいない。そう普段は賢者である永琳の付き人的な感じではか来たことがないのだ。

「ええと何用ですか月夜見さん？」

一応お偉いさんの息子なので敬語で話す。

今回私を、私だけをここに呼んだのは現里長の息子。恐らくは次期里長になるであろう月夜見だった。年齢は永琳よりも若い。まだ中学生位だろうか？この前永琳言っていた感じに中二病真つ盛りなのかもしれない。

名前は神様つぽいっけど態度が横柄な坊々ボンボンつてというのが私の認識。

「うむ、今日はお前に話があつて呼んだのだ」

話があるのはわかつてるんだつて。

横柄な感じなのはお坊ちゃんだからしょうがないか。

「話とは?」

「そうだな、私とお前にとつて大事な話だ」

いまいち要領を得ない。

もったいぶるのはどうしてだろうか。

「で、その話とは?」

「うむ……」

そこで彼は口を閉じて目をつむる。訪れる沈黙。

……うええ、そこで止まりますか。

仕方がないので黙って次の言葉を待つ。訪れる緊迫したようなしないような沈黙。

私が今日の夕飯のレシピを5個くらい考えついたところで、それはようやくと解き放たれたのだった。それは月夜見の衝撃的な言葉によって。

「お主、余の伴侶になれ」

「ふえ?」

莊嚴な応接間に似合わない、私のマヌケな声が響く。

六話 愛とか恋とかわかんないから、萌えさえあればそれで良いと思わない？

月夜見に告白された。

今度は私が黙る番だった。ちよつと衝撃を受け過ぎて何も言う言葉が出てこない。なにせ男子に明確な好意を向けられたのはこれが初めてだったから。

と言うのは半分冗談で……性別関係なく前世でもこんなにも直接の言葉を聞いたことは無かった。思ったより真っ直ぐなのかなこいつ。自分の心に正直だ。

てつきりひねくれものだと思ってた。雰囲気だけで偏見を持つてはいけないね。

「私妖怪なんだけど……？」

「構わぬ。お主はそこらの異形の者とは違う。それに種の壁など些細な問題」

とは言うものどうやっても種族の壁は超えられない。妖怪と人間は本来生き方もその寿命も決して相容れないものなのだから。しかしなんでそんなに頑ななのか……

「私見た目は貴方より年下なんだけど」

「それくらい年なら嫁いでいても何らおかしくはあるまい」

「私、女の子の方が好きなんだけど」

「それでも余は問題ないぞ。お前好みの女中を迎え入れてもかまわぬ」

「さも全肯定のようだが、私が伴侶になることは揺るがない。」

「こいつ全く聞く耳を持たねえ！頑固な上に逆らえない目上の奴ほど面倒くさいものは居ない。前世のバイト生活を思い出す。」

「まあ、私にとって目上かどうかは微妙なところであるし、ここは素直に断ろう。」

「申し訳ないけどその誘いには乗れない」

「……何故だ。不自由な生活を約束しよう」

「不満げにそういう月夜見。」

「そういうんじゃないよ」

「……理由を聞かせてはくれぬか？」

「色々あるけれど、やっぱり種族の壁は超えちゃいけないと思う。神の使いだんだ言われても私は人外さ。人間とじゃ寿命の長さも違うしきつと碌なことに成らないよ」

「一番どうにも成らなそうなことを理由として突きつける。種族はそう簡単に変わらない。変わるはずがないのである。妖怪は人の恐れから生まれるもので決して人そのものにはなり得ない。逆もしかり。」

「……なるほど。よくわかった」

おおわかつてくれたみたいだ。良かった良かった。これで問題なく……

「つまり寿命を延ばし、かつ人の身でお主と同じ時を歩めるようになってこそ、ようやく並び立つに相応しいということじゃな？」

……なに言ってるのこのガキ？

「ふむわかった。そもそも余は不老不死に興味があつたしな。いや実に丁度いい」

「いや、ちよつ」

「皆まで言うな。絶対にお主の時に追いついてみせる。それまで待て」

「いやだから……」

「今日の話はそれだけじゃ。楽しみに待っておれ」

聞く耳もたずにそう言い放ち、大袈裟に椅子から立ち上がった月夜見は応接間から出ていってしまった。自分に正直とかそういうレベルじゃない。

自分しか見えてねえじゃんあれ！

なんだかどつと疲れてしまった。帰りに茶屋にでもよつてお団子食べよう……

「なんでも月夜見に求婚されたそうじゃない。よかったわね」

「まったく良くないよ……人の気も知らないで。いや、知ってて言ってるよね？」

現在夕飯時。いつも通り永琳と向かい合ってご飯を食べている。メニューは鍋。寒い季節にぴったりの料理である。ちなみに最近は週の半分位は妖怪集落で過ごすようにしている。ケモ姉にも会いたいしね。

「あのガキ、永琳にベツタリなんだから何か言つてやつてよ」

月夜見は彼女をまるで師か姉か何かのように慕っている。博識であり、自分を病魔から救ったことのある永琳をかなり気に入っていたのだ。というか永琳にあの熱情を向けた方が良いんじゃない？まあ恐らく永琳が釘をさせば少しくらいマシな状況になる……かもしれない。

「弟分の恋路を邪魔するなんて姉のすることじゃないと思わない？お姉ちゃん」

久々にお姉ちゃんと呼べられたけど、にやけが隠せていない永琳。全然萌えない。この妹め、自分には関係ないからって好き勝手言いやがってっ……！

「それに私が言い聞かせてもあんまり変わらないと思うわよ？あの子無駄に頑固だし。相変わらず不死の研究を続けてるのよ。止めればと言つても全く聞かなくて」

それは確かにそう思うけれど

……ああ私のこのやるせなさはどこにぶつければ良いのか。

「結婚しちゃえば良いじゃない。」

「絶対それは無い！」

元男とか妖怪だとかを抜きにしてもあんな自己中野郎と生涯を共に過ごしますなんて、もはや生き地獄だよ。顔もタイプじゃないし。

「そうかしらね？ 確かに自己中心的なところはあるけれど、その代わり一途じゃない。ずっと前から気になってみたいよ、貴女のこと。私にしつこく聞いてきたわ」

いらぬ情報ありがとうございます。何か段々寒気がしてきました。将来ストーリーとかになつたりしないよね？

愛は尊い物だと思うが、不純だつたり行き過ぎたりするとならぬ事にならないのは前世の経験で良く知っている。

「変なこと言つてないよね？」

「さあ？でも当分待てて言われたんでしょ？なら気にしなくて良いじゃない」

誤魔化された気がするが？？

「いやいや、ただ先延ばされてるだけだし。気が気じゃないよ」

「こんなことになるなんて思っても見なかった。大体私のどこが良いというのか……」

「はあ……止めようこの話、私の気分が重くなるだけじゃん」

「そうかしら、私は楽しいわ」

クソツ、最初に出会った時はあんなに可愛さの塊だったのに！そんな子に育てた覚えは無いっ！

「貴女に育てられてないんだから当然よ。でもまあ仕方がないから話を変えてあげるわ」

そこでようやくと話題が切り替わる。

「最近やけに里の外が物騒らしいんだけど何か知らないかしら？今日の賢者の会議で議題になったのよ」

話題は里の外のことに。どうやら人里の上層部も気づいたらしい。

「ああそれならケモ姉に聞いたよ。何か縄張り争いとか食料難とかで獣が争ってるんだってさ。妖怪も混じってる」

「へえそうなの。でもそれだけにしては激しすぎないかしら？報告だと種によっては絶滅したものもあるらしいけど。今までこんなに殺伐としたことは無かったわよね」

そう最近のそれらの争いは今までからすると異常な程過激なのだ。原因はわからな
い。食料が枯渇してきたのか、それとも天変地異の前触れとかだろうか。と冗談半分で
考えてみる。

「そういう時期なんじゃない？」

「随分適當ね」

「適して当たると書くんだからきつとこれが正解だつて」

「はあ、まあ良いわ。何かわかつたら教えて頂戴」

そんな感じで夕食の時間は過ぎていった。

「あ、永琳弓の練習行くの？」

「ええ、そうよ」

弓矢一式を持って出掛けようとする永琳。実は永琳は弓の名手としても名高い。ハイスペックすぎて羨ましい。

「また着いていつて良い？」

「構わないわ」

私もたまに永琳に同行する。前世では弓矢なんか全く興味は無かったがやってみると意外に面白い。

「1000発ど真ん中命中う！」

遂に千発連続でど真ん中に命中したぜ！いえい！ここの皆中かいちゆうって言うんだっけ？いやあ才能に溢れて困っちゃうなあ。

「途中から諦めて能力使ってたわよね」

「半分位は自力だから良いの！能力も私の一部だし」

ずるじゃないよ？ちよつと逸れそうになった矢の「向き」をほんの少しだけ変えただけだよ。うん。そもそも妖怪の身体能力のお陰が的から大きく外れることはまずないのだ。誤差誤差。

「そんなずるみたいな能力使わなくても当たるわよ」

「いやいや、それは永琳だけだって」

私と同じように永琳は1000発命中させていた。いや、多分本気出せばもう十倍くらい打てるんじゃないかな？

人間……人間？

「やつぱり永琳実は人間じゃない説を推していきたい」

「失礼ね。私は普通の人よ」

永琳が普通だったら前世の私とか一体どうなるのだろうか。ナメクジとかになりそうだ。

「あ、そういうえば例の弓は完成しそうなもの？」

「それが良い素材が見つからないのよ」

永琳は今新しい弓を探している。さつきまでやっていたのはほんの60m位の距離の的当てだが、永琳が本気を出すと何十倍も距離と威力を出せるらしい。人間の力である靈力をうまく利用するのかなんとか。

しかし、そんな法外な力に普通の弓が耐えられるわけもなく数撃で弓が木っ端みじんになってしまいうらしい。……ていうかさ。

「永琳って薬師とか医者じゃなかったっけ？なんでそんな殺人アーチャー目指してるのさ。英霊戦争にでも出るの？」

「英霊戦争……？別段ただ弓を撃つのが好きなだけよ。それに妖怪に対抗できる力をつけたいのよ」

「そりやまた何でそんなことを？街は兵士が守ってるし、採集は私が居るから大丈夫じゃない？」

「……まあ、良いじゃない。さあもう日が暮れそうだし帰りましょう」

そう言っつて話を打ち切る永琳。あからさまに何か隠してる。だけどあまり聞かないで欲しいっばいなあ……

時は移ってこちら妖怪の集落、ケモ姉宅。季節は移り変わって冬。寒さが身にしみる。そんな中私は俗にいう人間をダメにする家具こと炬燵にてぬくぬくとしていた。

「炬燵はやつぱりいいなあ。この世界にもできてよかったあ」

「よくわからんがこの炬燵って奴の良さについては同意だあ。人里の技術侮れん……」

ふにやりと力が抜けきつたケモ姉の声。人間だけじゃなく妖怪もダメにするようだ。天板の上には蜜柑ぽい柑橘の果物が置いてある。蜜柑より二回り位大きいけど美味しいので問題なし。私はそれを一つ手に取り、能力で皮が『張り付いている』という向きを逆に変える。そうするとあら不思議。こんなにもキレイに剥けます！

「凄く能力の無駄使いだなそれ。どうせならあたしの分も剥いてくれよう」

「能力使うと結構疲れるんだよ？無駄なんて言う人には使つてあげません」

疲れるなら使うなよ、とケモ姉からのお小言。いやあでも皮むくのつて意外にめんどくさいんじゃないん？もしやもしやとミカンもどきを口にいれる。うむ、甘酸っぱい。

「そういえば、最近里の人間がやけに突つかかかってくるんだが。僕は何か知らないか？」
「んん、特に聞いてないけど」

ケモ姉がいうに最近人里の部隊が付近を哨戒しているらしい。なんだか最近ずつと物騒だなあ。伝記物とかだと、こういう風に世が乱れ始めると最終的に災厄に見舞われ

るっていうのが定石だけど。

「妖怪たちも不満が募ってるからな。その内大きな戦いとか起こるかもなあ」

なんとも呑気な雰囲気で剣呑なフラグを建てるケモ姉。なんでもありのこの世界。あんまり洒落にならないなあ。

「こんな風に皆のんきにくつろげばいいのに」

「お前はいつもくつろぎ過ぎだ。私みたいにもっとしつかりと人間に恐怖をだなあ……ふああ……」

ケモ姉……そんなに耳を垂らしながら猫撫声で言われても説得力が無いって。

七話 少し汚れてる位が丁度良いんじゃない？

「穢れ？」

「そう、月夜見が言うにはそれが寿命というものの根源らしいわ」

最近賢者の間で噂になっているらしい話。

寿命の根源を技術やら幻想の力を保った彼らは突き止めたらしい。

「それ本当？」

「ええ、理論上はね」

永琳の言うことをまとめると生き物同士の争い、出産、月経、また人間の恐怖から生まれた妖怪等々……生死に関わること全てが『穢れ』に区分されるらしい。

「いやいや、そんなのどうやっても無くならないでしょ、それこそ人が生きている限りは
さ」

「でも逆に言えば人間以外の穢れなら無くせるってことじゃないかしら」

「……それはどういうこと？、永琳」

「あくまでも可能性よ。私もまだよくは知らないの。又聞きしただけで。多分だけど、

あなたを警戒して情報規制されてるんじゃないかしら」

人以外のすべてを否定して寿命を手に入れる。なんと冒険的なことだろうか。

妖怪そのものが穢れであるということは私も『穢れ』の1つであるということになる。それならば月夜見は一体何を考えているのか。

「とりあえず私がわかるのはそれくらいよ。後はあなたが誰に伝えようと私の知るところではないわ」

「……ありがとう永琳」

少し自惚れかも知れないけど、その方法だと月夜見は私と同じ時を歩めない。第一「生きる」ことを否定するのは人としてどうかと思うけれど。

……いやお前が言うなって話だけどね。

七話 少し汚れてる位が丁度良いんじゃない？

案の定というかなんというか。あれから月夜見の主導による『穢れ』の駆逐が始まった。いや正確にはもう既に始まっていたの方が正しいのか。ケモ姉との話題にでた人里の見回り組も恐らく布石の一つだったのだろう。その後里の有力な術者を集め締め縄を要とした『穢れ』を遮る結果が里の周りに張られた。

周囲の穢れと分断された人里の人の時間は確かに伸びたのだった。しかしそれだけでは永遠の時を得ることは至らなかつた。当然それでは満足などしない月夜見は『穢れ』の影響を減らすため生存競争を行なう妖怪や獣の掃討を開始した。

「全く無駄なことだと思うわ。だって生きることの根源から否定するなんて出来ないもの。そもそも彼がやろうとしていることそのものがより長く『生きる』為のことなのだから、結局はいたちごっこよ」

というのは永琳談。私はケモ姉ら仲のいい数名の妖怪に警告する以外は特に何もしなかつた。とういうのも永琳と同意見でその程度で月夜見の言う『穢れ』がどうにかなると思わなかつたから。

事実、月夜見の『穢れ』の駆逐計画はそれから数年後に頓挫した。

「それで月夜見。話つてなに？」

現在私は月夜見の、里長の家に来ていた。すでに逝っていた。事故だか何だかで早めに亡くなったためまだ若い彼がその役を代わっていた。

つまり現在、月夜見が名実共にこの里のトップということになる。

「話というのは『穢れ』についての事だ」

いつしかとは違って直ぐに応答する月夜見。あれから時が経って月夜見の見た目は高校生、前世の私と同じ位の年になっている。

「何を今更。『穢れ』の掃討には失敗したんでしょ？」

結局穢れの駆逐は叶わなかった。それは元より自明のものだったけれど。いつまで経っても終決しない戦いに他の賢者や里の民から不満が高まった結果だ。

「そう。余は失敗した。『穢れ』と距離を置くことで多少なり寿命が伸びたにせよ、結局の所悠久の時を手に入れることは叶わなかった」

目を瞑ったまま向かいの椅子に座った月夜見は言う。やはりいまいち要領を得ない話し方だ。イライラする。

……いや、そう感じるのはきつと私自身にも問題があるような気もした。私は多分こ

いつが嫌いだ。

「それは知ってるよ。結局何の話なのさ?」

痺れを切らした私は月夜見に問い掛ける。

「お主……いや儂^{はかな}」

私の名前をわざわざ呼び直した月夜見。空気がピリリと張りつめる。

恐らくここが分岐点になる。『向き』が決まる。決まってしまう。

能力のせいとか、はたまたただの勘か。どちらにせよそんな気がしてならなかった。

しかし、何が有ろうと私の進む「向き」はどうに決まっている。

「余と共に月へ行かんか」

「……月?」

予想外の言葉に少しだけ面を食らう。何を突拍子の無いことをと言いつ返したくもなつたが、これまでの事を考え、そして思いとどまる。彼は自分にとって無駄なことは決してしない。そういう人間だ。

「そう月。月は神聖なる場所。限りなく『穢れ』が少ない……そこへ移住する事で我らも悠久の時を手にすることが出来るのだ」

月に『穢れ』。まるでどこかの昔話みたいな話だ。学校の授業で扱われていた気がする。あの話に出てくる傲慢な使い達は余り好きじゃ無かつたなあ。選民主義というか

なんといか、ね。

「私は妖怪なんだけど。妖怪は『穢れ』そのものじゃなかったっけ。そんなの連れ込んだらそれこそ問題じゃないの?」

答えは決まっているがそれを伝えるのは疑問を解消してからでも遅くはないだろう。

「主の周りだけ隔離すれば問題ない。そのくらい余だけでも造作ない」

「……それはつまり私はその結界から出れないってこと?」

「そういうことになるな。だが心配はいらぬお前が欲しいもの必要とするものはなんでもやろう」

何のことも無いように、そう言い放った月夜見。

……ははっ。思わず乾いた笑いが出そうになる。

なんともまあ典型的だろうか。結局のところこの男は自分のことしか考えていないのだ。わかつてはいたけれど。

「余は月のような神聖な地こそお主にふさわしいと思っている」

本人にとってはこれ以上無い口説き文句なのかもしれない。しかし私にとってはどうしようもなく薄っぺらいものに感ぜられた。

「私が行かないよ」

そう言い放った。

「何故……何故そんな愚かな選択をする」

「何故も是非もないよ今回でより一層確認した。まず第一に私は月夜見、貴方の事が好きじゃない。嫌いじゃないけど好きじゃないよ」

せめてもの手向けか何かはわからないが。すべての理由を彼に伝えよう。

「次に……いやこれは一つ目の理由とかぶるかな。私は何処まで行っても今は妖怪なんだ。だから仲間達を無碍にする貴方を、そして貴方のやってきたこれまでやってきた事を心良く思わない」

「……お主は奴らとは違う。何故そのようなことを」

「そう思ってるのは貴方だけ。少なくとも私はそうは思わない」

思い浮かぶケモ姉や妖怪の集落の連中。確かに色々と、たまには残虐だったりどうしようもない奴も居るけど、私はそれを無造作に切り捨てる事は出来ない。

「そして最後に……」

そう言つて私は妖術、？化の術を使つて自らの身体の外見を変える。だいぶん前に身に着けたが余り使う機会が無かった。今がその時だ。

私は『俺』に変身した。

「これが私……いや俺の本当の姿の一つだ」

俺は何十年ぶりの口調で目を見開いている月夜見に語りかける。結局の所俺は前世

のしがらみをまだ完璧には断ち切れていないのだ。無頓着な俺にしては珍しい。

「余を……騙っていたのか」

驚愕したままゆっくりと離す月夜見。瞳がせわしなく揺れている。どんな感情なのかはわからない。

「いや私も『俺』もどっちも本物さ。だからそもそもお前の想いは受け取れない。どっちつかずの私は結局異性としての思いを受け取れはしない」

以上が私が月夜見の思いを拒むすべての理由だ。

「……もう良い。よくわかった」

そう言って私に向かい合っていた月夜見は立ち上がり、私に背を向け奥へと繋がる扉へ向かう。

「月への出立は一年後だ。それまでは人里に居ても構わぬ」

「そう言い残し月夜見は部屋から出ていった。私も？ 化の術を解き里長宅をあとにする。」

……過去最高に疲れた。帰りにお団子でも買っていこうかな。

「愚か者め……余は許さんぞ」

自室にてそのような呟きとともに、頬を釣り上げ冷笑する賢者が居た事は誰も知らない。

「ひうきへのいひゆうってふおんとにふえきるの？」

お団子を飲み込む前に喋り出してしまったので破裂音がちゃんと発音出来ていないがまあ気にしない。

「……月夜見から聞いたのね。ええできるわ」

永琳は私が何を言ったかわかったようでそう返答した。余談だが現在の永琳はすっかりもう大人になっている。そのスタイルはそんじよそこの男子なら鼻の下をのばして目がハートになるぐらいには魅力的だ。私は全く成長してないんだけどね！どっちがお姉ちゃんかわからないよ！

しかしどうやら本当に月へ行けるらしい。いや、本当だとは思っていたけど結構な人

数がこの里には居る訳で。技術的に可能なのかという単純な疑問。

「まず機体をカーボンで作ってフェムトファイバーでカバーするのよ。それで発射のGに耐えられる機体が完成するはずよ。で肝心な推進力は術師達の霊力と今あるエンジン十基を組み合わせれば大気圏を抜けられるはずよ。その後は……」

「ああもう良いや。取り敢えずよくわからないことがわかったよ」

永琳の知識の波に当てられて頭がぐわんぐわんしてきたよ。最近永琳が最早医者じゃなくて知恵の神の領域に達している気がするのだけけれど。

「やっぱり永琳は人間じゃなくて神だった……?」

「失礼ね。私は人間よ。神様はどちらかと言えば貴女の方でしょ。」

いやでも私は元人だし元々人外なわけだし。それに私は神様なんて柄じゃないよなあとも思う。

「それでどうする? 永琳は」

「……」

口を閉ざす永琳。

「いや、ごめん。わかってて言った」

彼女がどんなに人間離れしているようにも、私と中が良くても彼女はこの里の人、それも賢者なのである。つまりこの里の民を統括するに近い地位にある訳で。それを投げ

出すことなんてできるはずがないのは私がよく知っている。

「…………ごめんなさいね」

「いやいやなんで永琳が謝るのさ。まだ当分先のことだしまだ気にしなくて良いじゃん」

「はあ月への移住とな。人里の上の考えることはわからないねえ」

ケモ姉に例のことを話した。妖怪側にするにはあまり良くない話だ。何故なら妖怪は人が居ないと存在できない…………つまり周辺の妖怪にとって人里の月移住は死活問題だった。ようは食料が完全になくなってしまっただけだから。

「まあでも、それが本当ならきつと妖怪達は黙っちゃいなよ」

「だよねえ」

恐らくだが人里の地球離脱に関して周囲の妖怪たちからは猛反発が起こるだろう。その結果、恐らくは武力衝突にまで発展する。その規模は生半可なものじゃないはず。

「私もそうなら出ないわけにはいかないからねえ。儂はどうするんだい？」

「私は…………見物かなあ」

人里の連中に顔を知られているから妖怪側につくのも忍びないし、同様に人里側につ

いて妖怪たちに対するのも嫌だからだ。……はあどうしてこんなことになっちゃったかなあ。

「流石は神様。文字通り高みの見物ってことかい？」

「だから私は神様じゃないって」

笑いながら茶化してくるケモ姉。呑気なものだ。

「……もし戦うことになっても死んだりしないでよ？」

「ん？心配してくれてるのか？大丈夫だって。私がそう簡単に死ぬ玉に見えるかい？それに向こうには永琳もいるんだ、わたしや戦いに本気出しやしないよ」

まあ確かにケモ姉なら大丈夫だろうけれど。

でも私の事を心配してくれたこともあるわけだし、精々心配してやろうと思った。

一年が過ぎた。

あれから色々有った。人里では月移住へ反対する勢力が暴動を起こしたり、また同じく月移住に反対する妖怪達が攻め入って人妖の全面戦争になった時もあった。結果として粘った人間側が勝ったのだった。全く終わりの見えない戦いに煮えを切らし、団結

のゆるい妖怪側はバラけていったのだ。討伐されたものもいるし違う新天地を求めたものも居た。

なんにせよ現時点で、月への移住を阻むものは居なくなつた。

そして今日はその出立日だつた。

「……じゃあね。儂」

私は永琳と向かい合つていた。

「そんな泣きそうな顔しないでよ。別段今生の別れつて訳じゃないんだからさ」

「別に泣きそうなんかじゃないわ」

「とは言つたものの実際は再会するのは難しい。それは永琳も分かつてる。事実上は今生の別れと言つても過言ではないだろう。」

「あ、そうだ、あれを渡さない」と

そう言つた私は右手を宙に差し出し、人差し指を撫でるように動かす。そうすると何も無いはずの所に空洞ができる。能力を使い空間の『大きさ』を広げた。ここ数年で身につけた能力の応用だ。そして私はそこから弓と矢筒を取り出した。

「それは？」

「私からの餞だよ」

一見普通の弓ではある。

「何年かかけて私の能力を掛け続けたんだ。だからちよつとやそつとじゃ壊れないよ。あ、私の力で所謂『穢れ』は出ないようにしてあるから。壊さなきやそう問題にならないはずだよ」

この弓は永琳の為に職人に頼んで作ってもらった作つたのだった。いつだか既存の弓に不満を唱えていた彼女にはこれくらいぶつ飛んだ弓でもきつと難なく使いこなすだろう。

「……ありがとう」

弓と矢を受取つた永琳はそれを優しい手つきで撫でる。

「確かに貴女の力を感じるわ。」

そういつた永琳の目は少し光つて見えた。

「ちよつと永琳泣かないでよ」

「つん…泣いてなんか無いわよ」

ふんつと顔を背ける永琳。……ああこの美人な顔も当分見れないと思うと残念だなあ。

「そういえばさ、結局なんでそんな強い弓が欲しかったの？」

ちよつと私も泣ききそうになつたので話を変え、前にははぐらかされてしまった理由を聞いてみる。

「ああそれは……貴女に守ってもらってばかりじゃ何か悔しいじゃない。」

「ええそんな理由？」

「そんな理由よ。きつと姉離れしたかったのよ」

お姉ちゃん的にはいつでも守ってあげたいんだけどなあ。

「じゃあ妖怪なんて存在しない月じゃいらなかったかな……まあでも逆に丁度良いか」

「そうね丁度良いわ。」

私が姉で居続けるのももう叶わなそうだし丁度良かったということにしよう。

「大事に使ってよ？」

「月だと余り使うことはなさそうだけどね。いざ使ったときに壊れないことを祈るわ」

「私の能力を舐めないでね？きつとケモ姉が全力で引つ掻いても傷一つ付かないよ」

「それは楽しみね」

こんな会話がずっと続けばいいのになあ。

「……そろそろ行くわ」

「うん、行つてらっしゃい」

それはやっぱり叶わない訳で。それで会話を終わりにして永琳は私に背を向けて歩いて行く。

その背中が見えなくなるまで私はじつと見つめていた。

前世で家族が居なかったと言える私にとって永琳は初めての家族と言えるかもしれない。

かなり離れているのに耳が痛くなる。空気を揺らす激しい騒音と共に月行きの宇宙船は地上を飛び立った。

「ほえ、良くあんなのを作ったもんだ。どうやって動いてるんだい？」

「人の科学力と霊力の結晶だっさ」

「人間ってのはなかなかどうして大したもんだねえ」

それを妖怪の集落にてケモ姉と一緒にに見ていた。空へ勢い良く飛び立って行く技術の結晶は圧巻だった。もう既に視認できない距離まで飛んでいるから恐らくだけど、前世の現代よりもよっぽど技術的には進んでいるんだらうなあ。

「ケモ姉はこれからどうする？」

「通り感心し終わった私たちはこれからについて話し合うことにした。」

「んん……やっぱり。人間を探すところからだよなあ。焦る程じゃないがやっぱり食料

は必要だ。現に他の連中はそうしてるし」

「じゃあ取り敢えずはのんびり旅をする感じかあ」

何度も言うように人が居ないと妖怪は存在できない。というわけで目下の目標は人探し。

「そうと決まったらさっさと行くか。善は急げ……ん？」

ケモ姉の言葉が途中で止まる。そしてその視線は空を凝視していた。

「どうしたの？」

「ありや……一体なんだ？」

そう言って指を指すケモ姉。私もその方に目を向ける。

「ん？……黒い点？」

私達が見上げた空は少し異様だった。小さくて目を凝らさないとよく見えないが空には無数の黒い点があった。

「良く見えないなあ。空にあるってことは多分月に行った連中が落としてったのか？」

「うーんロケットの燃料の残骸とかかな？」

それはあんまり良くないなあ。環境汚染の恐ろしさは前世の社会科の授業で良く習った。

……でも永琳はそんなこと言ってなかったしなあ。

「まあなんにせよ、早めにここを離れたほうが良さそうだな。さっさと準備しちまおう。」

「うん……」

あんまり考えても仕方がないということで私たちは家に向かって歩き出す。しかし私は何か引つかかって仕方なかった。

永琳が私達にそういう注意をせずに飛び立つだろうか。

立ち止まった私はもう一回振り返り空を凝視する。今度は能力を使って自分の視界の『大きさ』を弄る。おお初めてやったけどなんとか成功。しかし慣れない能力の使い方は疲れる。早めに確認してしまおう。ということで私はその黒い点の一つに焦点を合わせる。

それはまるで膨らんだエビフライの形だった。

ん？なんだろうなあ。何か見たことがある気がする。鉄の塊っぽいけど……

そこで記憶の海にそれに該当するものを見つけた。

見つけてしまった。

「ケモ姉!!!今すぐここから離れよう!!!」

「どうした?急に慌てて」

「あれは爆弾だ!!それも洒落にならないくらい強力な」

「なんだって？永琳はそんな事言ってたのか」

「言ってなかった……から多分別の人の独断だと思う」

あの人里の長の顔わきが頭によぎる。

「とにかく早く……」

そこまで言ったところで今度は別の異変が起きる。

地面が光った……感じられるのは人の霊力。大規模な術式が発動されたらしい。そ

れは私達の動きを縛るものだった。

「な、んだこれは。動けねえ……」

ケモ姉の力で動かないのならこれは相当な物だ。

この一体の妖怪……いや、あらゆる生物、幻想か全て動きを縛られているのだ。

あの空から降る「最悪」から誰一人逃がさないために。

「どうして」

どうしてこんな事を。

そう最後まで言い終わる前に私の視界は光に満たされた。

八話 別れと呪いと嘘と

私の視界は光に満たされた。

その瞬間から全身を襲う熱。目が溶け、皮膚が焼ける生々しい感覚。とつさに能力を体に張り巡らせる。その身に受けるエネルギーの向きを変え、何とか直撃を回避しようとする。能力の使いすぎと全身の負傷で頭ががんがんする。熱線から解放された肌がジクジクと妖力によって回復する感覚が伝わってくる。相変わらず視界は真っ白で何も見えない。

その直後爆風が襲ってきた。その衝撃の向きを変え何とか直撃しないようにする。それが精一杯で体をその場で維持できない。激しい勢いで飛ばされていくのを感じた。しかしまだ終わらない。眼球が回復し視界が戻っても光に満たされたままなのは変わらない。熱線と爆風の勢いはますますばかりで止まる様子はない。能力の使いすぎで限界が近づいてきた。

不味い……死ぬ。

そこで私の意識は手放された。

一体どれだけ経つたのだろうか。

目を覚ました私を迎えたのは、どんよりとした……いやそれよりもっとどす黒くなった雲に覆われた空だった。いつの間にか仰向け倒れていたらしい。体を起き上がらせようと力を入れると全身に痛みが走る。歯を食いしばり耐え何とか立ち上がる。この力のおかげで外傷はそんなには酷くない。しかし、能力の疲労と、逸らしきれなかった分のダメージで満身創痍だ。

私はゆっくりと周りを見渡す。

そこには何もなかった。文字通り何も。ケモ姉との荒ら屋も、人里の有った場所も。目に入る範囲すべてが焦土と化していた。

頭痛が激しい。息も荒くなる。能力を解くことは出来ない。目には見えないが、この大地には人に害のある物質が漂っているだろうから。

月へと旅だった人間達は置き土産を置いていったのだ。

それも一つじゃない無数に。前世での記憶が確かなら、アレは一つで都市を壊滅に追

い込める物。そんな物が大量に落とされたら当然ひとたまりも無い。それは正しいよ
うで辺りには文字通り何も無かった。

私は限界にある能力をさらに使って周囲の様子を探る。何か、誰か、生き物があるか
もしれない。それに……

そんな逃避にもいた希望的観測。頭がかち割れそうに痛い。しかし索敵はやめない。
……いた。

私はよろよろとその方向へ歩き出した。

「…………ケモ姉」

荒野にぼつりと見えた人影はケモ姉だった。

「ああ…………夢か。人間共がこんな力を持つてるなんて…………しかしやっぱり無事だった
か。良かった…………」

そう力なく言うケモ姉。息は途切れ途切れだ。そして左の手足がなく至る所に焼け
ただれた跡があった。千切れた肢体からは血と妖気が流れている。

「無事で…………良かった」

私の声。そんな訳がない。それは頭のどこかでわかっていて、それでいてそれは私の中では間違っていた。

「夢……」

それでも彼女は気丈に返してくれた。私は唇を噛み締めた。

「ケモ姉今……助けるから」

私はケモ姉の横に膝をついて彼女の胸元のリボンの辺りに右手をかざす。そして能力を使い、まず彼女の傷口を止血する。

「くっ……」

「夢……」

悲鳴をあげる体に思わず苦悶の声が漏れる。いやそんなことはどうだって良い。なんだったら自分の体の保護の分を回しても構わない。

「もういいよ……夢」

そういつて右手をゆっくりと動かす。その動きにはいつもの俊敏さもはや感じられなかった。

「なに言ってるのさケモ姉……これから旅をするんじゃないの？そんな手足じゃ歩けないよ」

「夢……」

「そうだ、人里を見つけたらさ、また近くに家を建てようよ。今度はあんなボロ家じゃなくもつとちやんとした奴」

「もう……良いから……」

「どうせなら湖とか近くには有ると良いよね。前に話したっけ？昔見た湖が凄く綺麗だったんだ……」

「……儂ッ！」

強い力で右手を握られ私の能力が途切れる。それと共にケモ姉の傷口から再度血が流れ出した。その血の量と対比するように私の手を掴んだケモ姉の手から力がみえる抜けていく。

「もう良いんだ」

それからケモ姉の足先からちりちりと赤色の火の粉が舞っていく。…いやその光の粒はケモ姉そのものだった。

「何……言ってるのさ」

「……私はもう十二分に生きたさ。それこそ一度は死体になったり、あるいは死にたくなったりもする位な」

そう傷だらけの顔で満足そうに言うケモ姉。

「ねえ……やめてよ」

「本当に色々あった。だけどお前と過ごした最後の十数年が一番面白くて楽しかったよ」

「止めてよ！」

話している間にもともと欠損していた彼女の下半身は半分以上崩れている。きっと彼女の時間はもう殆ど無い。

「そうだ夢……」

彼女は残っている手で胸元のリボンを解き、震えるその手で私の手をリボンごと包んだ。

「これ、持ってきてくれ。お前は私のことを『ケモ姉』って呼ぶのに全然姉らしいこと出来なかったからな。最後に姉ちゃんからのプレゼントだ」

そして彼女手から力が抜ける。もう上半身までその体は崩れてきている。その目にはもう光が有るのかすら怪しい。

「姉ちゃんっていうなら一緒に生きてよ……」

「……悪い」

駄目だ。こんなんじゃ……

「いつもがさつで飄々としてるのに何でこんな時だけ姉ぶるの！」

「ごもつともだ」

「こんなこんな……」

「私の事を『僕』なんて名付けといて、先に行くなんてありえないよ……」

「……ああ」

「……こんな……」

「私はまだ妹らしいことなんて出来てないんだよ……」

「こんな別れなんて認められないよ。」

「ごめん、僕。お前が寂しがりなのは知ってるのに」

「そんなことを言わせたくない。謝るのは私の方なのに。」

「もう彼女の胸元より下は既に無く。今度は全身が光を帯びてきている。」

「でもな……お前がなんと思おうと私の自慢の妹は一人だけさ」

「目が熱くなってくる。息が苦しい。言葉が出ない。」

「泣くなよ……顔だけは良いんだからさ。まったく台無しだよ？」

「だってえ……だって！」

「彼女を包む光が徐々に強くなる。」

「時間も無い、か。……僕、きつとこれから色々有るだろうけどさ。たまに見せる陰りのあるお前の顔を見てると、不安になるんだ……」

「だから、そうやって私の頭に消えかけた手を載せた。」

「生きろ。夢」

その言葉で事が切れたようにケモ姉の体が光に包まれそして次の瞬間霧散した。

「う、ああ……」

嗚咽にまみれまともに息ができないけれど、私はその赤い光を胸元に集めて抱きかかえた。出来るだけ多く。しかしそこに彼女の温もりは無い。

「ケモ姉っ！ケモ姉えっ!!」

私の叫びと共にその光は焦土に消えていった。

私は一人で仰向きになっていた。見上げるそらは一面が黒だった。変色した雲は物凄く近く見えて、すぐにでもあの恐ろしい雨が降ってきそうだった。

「……死のう」

私はゆっくりと立ち上がった。あれからどれ位時間が経ったかわからない。その位

覚束ない意識を巡らした思考、その末に出した答え。

きつと私が永琳に会わなければ月夜見と知り合うことも無かった。

きつと私が居なければ月夜見は不死の研究に本気にならなかつたかもしれない。

きつと私が月夜見を振らなければこんな事にならなかつたかもしれない。

きつと月夜見に前世の姿を見せなければ、

きつと人里に行かなければ、生まれ変わってからここにたどり着かなければ、

きつと……きつと……

私が居なければ良い。

自ら命を断つた癖にもう一度普通に生きようだなんて虫が良すぎたんだ。

このどうしようもない空虚感から逃げるは罰だ。生きてはいけないのに生き続けた罰。きつとそれだけじゃ償いきれない。

だからその罪を償うためにはやっぱりもう死ぬしか無いだろう。

「ごめん、ケモ姉。約束守れないや」

そう呟いた私は胸元に手を当て能力を発動する。

「やっぱりこの世界はクソツタレだったよ」

その能力で私の体内の血液の向きを『逆』にした。

私の体は内側から割け、溢れた血は白ワンピースを赤く塗らした。

〈君にその権利は無いよ。〉

はずだった。

「……………え？」

次の瞬間私は仰向けになっていた。いや仰向けに戻っていた。

「くそっ！」

私はもう一度能力を使う。

「なんでだよー！」

また戻る。

もう一度っ。もう一度っ!!

「なんで……………」

何度やっても私は死ねなかった。

「お願いだから、死なせてよお……………」

力なく座り込んだ。それを見計らったように空からぽつぽつと黒い雨が降ってきた。

でもその黒い雨が私を犯すことは無く。

この真っ黒な世界で、
私は何処までも白いままだった。

幕間 可愛い子の写真はそれだけでもはや家宝

「永琳、こつち向いて〜」

出会った頃に比べたらかなり伸びた白銀の髪。

いやあ凄く似合っている。ていうか可愛い子は大体どんな髪型でも似合う法則って有ると思うんだ。

そんなT H E美少女な後ろ姿に向かって私は声をかけた。

「?何かしら……」

パシャツ

永琳がこつちをふり向いた瞬間にシャッターを切った。子気味の良い音がする。

いやあまさに見返り美人って感じだね。むふふ、現像するのが楽しみだ。

「また何か変なもの買ったのね」

「変とは失礼なっ! 今回ののはちゃんとしてるんだよ」

いやね? 確かに私は偶に、あくまで偶に変なものを手に入れてくる。

例えば一振りですべてを吹き飛ばす扇子、弾がまるで弾幕を張るかの如く発射される

銃、e t c . . .

いや、それはそれで面白いのだけでも。しかし今回は一味違うぜ！

「カメラ？」

「そうそう。これで写真を撮れるの。あ、写真っていうのは……うん、見てもらった方が早いね」

そういつた私は能力を使って私の中の空間を弄くり収納スペースを開く。

「……毎度思うけれどその能力本当に便利よね。その空間は一体どこなのよ」

「どこかの空間の大きさを弄ってるだけだよ。ま、私もよくわかんないんだけどね。我ながらかなりチートだと思ってるよ」

最近発見した使い方。あまり詳しいことは言えない（わからない）けど、近頃は形の無いものにまで能力が使えるようになってきた。最早なんでもありである。その分結構燃費が悪いのが玉に瑕だけどね。

「これが写真だよ」

私は以前現像した写真をその空間から取り出した。

「へえ……そのレンズで像を作って、それを紙に焼き付けるのかしら？なかなか面白いわね」

「でしよっ？」

永琳も興味を持ったようだ。……というかそれよりも、写真を見ただけで仕組みを悟

る辺りマジ永琳。

「あら、この湖綺麗ね」

私から受け取った写真の束をペラペラと見ていた永琳はそう言って束から一枚取り出した。その永琳が取り出したのはいつだかの湖。まるで硝子かのように透き通る水に映り込む光と緑。この前そう言えば撮りに行ったんだっけ。

「こんな所近くに有ったかしら？」

「ああうん。そこ結構遠いよ。それこそ歩くと数年掛かるくらい」

「数年……？」

実際直線距離はそこまででは無い。ただし妖怪的感覚の話。

そこでこの世界に生まれて以来、実際に森の中を数年間さ迷い、やっとの思いでこの人里を見つけたのだ。

なのでこの時間はなかなかどうして正確な時間である。

「どうやって行ってきたのよ」

「そりゃ能力で……あ、そうだ！」

良いこと思いついた！と私は手のひらにグーの手を打ちつけた。きつと傍目から見たら私の頭に眩い電球が見えるはず。

「……あなたのそういう思いつきは大抵ろくなことが無いんだけど」

「まあまあそう言わずにさ」

ニンマリ顔の私に対し呆れ顔の永琳。だけでも結局は付き合ってくれるのだから何だかんだ優しいよね！

つてことで今回は永琳に犠牲になってもらうよ！

「せっかくだし今から行こうよ！」

「散々な目にあつたわ……」

いつも通りのクールビューティーではあるけれど、疲れを隠し切れていない永琳。

「いやいやあんなに楽しんでたじゃん。キャーッて可愛い叫び声出しちゃつてさ。集団でジェットコースターに乗るJK顔負けだよ」

「JKつて何よ。というか違うわ。言いたくないけどあれは悲鳴よ」

実際永琳はJKになるかならないかくらいの年齢なわけだし顔負けというのは少し違うのかな？

というわけで人里から出た私は永琳を抱えてここまで飛んできた。因みに今出来る私の安全な全速力（ただし人外による）を出してみた。

「大体この距離を数十分で飛ぶのが有り得ないのよ。振動は無くても風景だけで気持ち悪くなったわ」

遠い目で語る永琳。普段クールな顔が少し青くなっている。有る意味クールさ倍增？あんまり青くなるとツートンの服とのバランスが崩れちゃうね。

「下らないこと考えてないかしら？撃つわよ」

「いやー気のせいだよ。うん」

永琳の矢は人外だったとしても洒落にならないから向けるのは勘弁して欲しい。いやマジで。

「そんな事よりどう？この湖」

少し露骨だけでも話をそらす。そもそもそんなことよりこちらの方が本題なのだ。

「…………ええ。凄く綺麗だわ。写真で見たよりもずっとね」

そう言って軽く微笑みながら湖を眺める永琳。天気もいいのでいい感じに光が入っている。湖畔に吹くそよ風に、心地良さそうに目を細める

…………そう！こういうのだよ！こういうのを待っていた！

私はパシヤリとシャッターを切る。

「いやあやっぱり美少女は絵になるねえ」

不思議そうな顔でこちらを見る永琳。

「私より湖を取った方が良いんじゃないかしら？」

「チツチツチツ、わかってないなあ」

勿論湖も綺麗だけれど、それに美少女を掛け合わせたなら……

「そう、可能性は無等大なのだよ。まさにビッグバン」

「意味がわからないわ」

まあまあそう言わずにさ。

「休憩したら撮影会だよ！」

「はい次これ着て！」

「一体何着あるのよ……しかもこの服何か変じゃないかしら？異様に裾が短かいし、ピンク色だし……」

「まあ細かいことは良いじゃん！付き合ってくれたら後でお茶おごるよ!!」

「……はあ。まあ良いわ」

ため息つきながらも着てくれる永琳やっぱ優しいね！

「いやあ豊作、豊作う〜!」

めちやめちやホクホク顔である。今日一日で十分すぎる美少女成分を摂取したよ。

「私は疲れたわ」

付き合ってくれた永琳には感謝感激雨あられである。

「そんなもの撮って一体どうするのかしら?」

「私のコレクションに加えるの。ちなみに永琳は第二弾」

カメラマン僂プロデュース、美少女コレクションである。

「第二弾ってことは一弾があるのね。」

「そうそう最初の犠せ、ごほん……モデルはケモ姉だよ」

「彼女に同情するわ」

いやいや、最初こそめんどくさいって嫌がってたけど割りと最後の方ノリノリだったし。永琳も沢山写真を撮られて楽しくなってきたり……

「しないわ」

「ええ即答ですかい」

「カメラが珍しかったから付き合っただけよ」

せつかくの永琳モデルデビュー計画が頓挫してしまった。彼女の写真集を売り出せばそれこそきつと、飛ぶように売れると……

「撃つわよ」

「いやいや冗談だって」

「はあ、でも本当に里に変な写真を流すのは止めてよね。嫌よ」

私のプロデュースによる永琳のモデルデビューの野望は残念ながら数秒で打ち壊された。

まあ流石に嫌な事はしないし、里の人々も永琳の変な写真を見せられても戸惑うだろう。

「そろそろ帰りましょう。まだ昼食も取ってないし。お腹が空いたわ」

時刻は昼時。私の思いつきで文字通り湖まですっ飛んできたので何も食べてないわけ。お腹も空いてきた。

「あ、そうだ。せっかくだし昼飯ついでに寄りたいたところがもう一つ出来たよ」

良いことを思いついた。せっかく出かけたのだしついでならもう一枚写真を取りたい。

「またちよつと一つ飛びしない?」

永琳は物凄く嫌そうな顔をしていたけど気にしない。

「ふああ、今日はまた一段といい天気だねえ」

ようやくと起きた私は伸びをしながら軒先へと顔を出す。ほとんど雲は無く、きつとこんな空を見たなら、あの色々と謎な妖怪少女は「写真日和だねっ!」とか言いそうだし、そういえばこの前やたらめつたら写真を撮られたときもこんな天気だった。

「おっ?」

噂をすれば件の少女がこっちへ来るようだ。珍しく気配を隠していないらしい。

「ん?」

思わず眉をしかめる。なぜならその気配の移動が法外に速いからだ。これだと数百倍位……

「けえーもえーねーええええー!!」

そんな中不自然に大きい声私の耳に入ってきた。もう大分聞き慣れたその声の姿は未だ見えない。積もる疑問の中また声が聞こえた。

「そこどい」

彼女が言い終わる前に途切れる。そして衝撃とともに視界が白くなる。

「つたく。いきなり突っ込んでくる馬鹿がいるかってんだ」

「いやあごめんごめん。永琳の気配隠すのに手間取って、つい止まるがの遅れちゃって
キ」

現在ケモ姉宅で昼食中。普段からボロボロな小屋だけでも先の衝撃でより一層ボロ
さが増している。ドアとか締め切れてない。

どうでも良いけど私の頭には二つほど大きなたんこぶが出来ている。別段消せるけ
ど意識して消していない。反省という意味で。

その2つは今小さな食卓を囲んでいる他の二人による物。

「付き合わされる私の身になって欲しいわ」

「ははっ永琳も災難だねえ」

そんな軽口を叩き合う二人。思ったより仲が良さそうで良かったなあ。なんてのん
きなことを考えているとケモ姉が少し苛立った様子で小言を漏らす。

「しかし僕。前に言わなかったか？あんまり永琳をここに連れてくるなって」

実はこれより以前にも何回か永琳をここに連れてきたことがある。ここは妖怪の集
落。いわば周りには皆人間の敵と言って過言では無い。確かにケモ姉が言う通り永琳に
とって良いところでは無い。もし頻繁に人間が出入りするようになれば、当然ながらそ
れをよく思わない連中も居るわけで。

「うくん、次から気をつけるよ」

「前もそんなことを言ってた気がするんだが……」

とは言うもののここに来ても結局話をするのはケモ姉くらいだし。あんまり問題無い気もする。

「余り良くはないとおもうけれど別にわたしは大丈夫よ?」

「いや永琳が良くてもだなあ……。……うむ。」

永琳の言う『大丈夫』というのはか『別段襲われても大丈夫』ってことだろう。永琳のスペックならそれこそ大妖怪レベルでも太刀打ちできるんじゃないだろうか?

大妖怪というのは明確な基準は無いが要するにくっそ強い妖怪の事を指す時に使われる語である。

というかそんなのと渡り合えるかもって言う時点で永琳が人間なのか怪しいんですがそれは……。今更そんなことを考えても仕方が無いね。

「まあほら永琳。ケモ姉は優しいからねえ。心配なんだよ。うんうん」

「なっ!?……べ、別にそんなんじゃない……」

照れるケモ姉。ピクツと動くその頭上の耳が、心を如実に現しているのでおもしろい。

あああ!ケモ耳は正義だツツ!

「…………ふふっ」

「なんだよ永琳……」

突然笑い出す永琳にムスツとした面持ちなケモ姉。

「いえ、まるで姉妹みたいだと思って」

それを言われて思わず目を丸くする。それはケモ姉も同じだったみたいで私達二人は一瞬だけ顔を見合わせる。

そして……

「ぷっ……ぷはははははー！」

そして二人して笑った。

「なんで笑うのよ……」

今度は永琳が不満げになる。いや確かに二人で一斉に笑ってしまったのは悪いなあと思ってる。

けれども、決して馬鹿にしてるわけじゃあない。

「はあ……私達が姉妹だったら。そうだなあ？」

そう。

「うん、そうだねえ。」

ただ……

「ケモ姉が長女で」

「夢が次女で」

ただ単に……。

「それで……」

嬉しかったから。

「永琳が末っ子だよ!!」

永琳はすこしだけ目を見開いた。

そして今度は目を瞑って柔らかく微笑んだ。

「この面子の中で私が末っ子なのは納得いかないわ。長女でも良い位よ」

「なにを〜!」

「意地張らずにお姉ちゃんって呼んでくれても良いんだよ?」

今日はそんな感じでいつも通り賑やかな昼食だった。

そう、ただ単に……

こんな「家族」の他愛ない会話がやけに暖かく、すこしだけむず痒く、そして嬉しく感じられただけなのだから。

私達は再びあの湖に来ていた。今度はケモ姉もいる。

「よっし！撮るよ〜」

三脚に立てたカメラ、そのタイマーをセットして私は二人に駆け寄った。

「自動でシャッターも切れるのね。ぜんまいかしら……。？」

「考察は良いから早くはいはい並んだ並んだ」

「ポーズはチーズって奴で良いのかい？」

「？チーズって何かしら？」

「こうやって二本……。あ、もう時間だよっ！」

パシヤリ



「せ……じゃなかった。儂さん、これって何の写真です？」

緑色の美しい髪をなびかせる彼女は私に問いてきた。こちらに来てそんなに経っていないのにその巫女服で飛び回り弾幕ごっこを仕掛けまくる彼女は単に抜けているのか大物なのか。

「うん？……ああその写真はね」

彼女が聞いてきたのはとある写真。

紆余曲折、折折あって、最近ようやくと定住するようになった私の家。そんなこの家の窓辺の一番目につく所に飾ってある写真。

そう、とても大事な私の宝物。

「私達三姉妹の写真だよ」

種も見ただ目もぜんぜん違う。

けれどやっぱりそこに映っていたのは私の本当の「家族」だった。

二章 神とか地獄とか

一話 理不尽からの救いを求める先が一番理不尽の塊って可笑しくない？

ただひたすらに空を漂っていた。きつと傍から見たら私の目には何の表情も無いだろう。目だけじゃなく中身も空であると言われてもなんら可笑しくないなあなんて思う。それでも雨は降り、風は吹くし時は流れる。でもそれら全てがどうでも良くて、それについて思うことすら何も無い。詰まることただの無。生きる意味も全て。今の私には何も無い。

一話 理不尽からの救いを求める先が一番理不尽の塊って可笑しくない？

まあ生物的というか妖怪的にいうならまだ私は死んでいない。というより死ねない意外、かもわからないが、アレ以来自殺を図った事はない。だって無理だから。

私が自分の意志で死のうとするとその意志と逆の事象へと『向き』が変わる。

謂わば不死の呪いみたいなもの。それが私が私である存在の根底に掛けられていたゲームとかだったら不死属性を喜ぶ人は居るかもしれない。

しかし、私はもう死にたかったのだ。

もともと逃げるために絶った命はず。それなのに無様に生き返って、やっと見つけたと思った家族は居なくなつて結局私だけが残る。

そして、逃げ場のない迷路に立たされるといふのはやはり罰なのだろうか。

あの後何年？ 何千年？ とにかく時が経って各地は異常気象と大規模な地殻変動に見舞われた。きつとこれが前世でいう白亜紀の終わり、恐竜が絶滅した時期のことなのだろう。

恐竜は死に絶え、元々少ない人間も死んでいったようだ。あの人里以外にも人の集まった場所はちらほら世界中に有ったようだがその半分は壊滅した。

だが、全滅はしなかったようだ。その残った人の集落の大半が共通していることがあった。

それはどの集落にも神がいた、ということ。

神というのは前世の時とは違い実体を持つている神のことである。その神が集落の人々の信仰を受けて異常気象等から守ったのだろう。なるほど、もし前世をなぞるとするなら、これからは神代という訳である。探せばもしかすると天照大御神に会えるかもしれない。どうでもいいが。

どこまで厭世的でいようと完全に思考を止めることはできない。五感、六感の情報からそんな考察ともいえない事をしながら、空を漂い続けていた。

ああ、死にたい。

現在漂っているのは前世でいうヨーロッパの辺りだろうか。ヨーロッパは一番神の存在が多かった場所だ。当然それだけにひとがたくさん居るしその分文明は発達している。しかし月へ行つたあの人里よりも発展している場所はなかった。今やあれから何百、いや数えるのをやめて久しいので、きっと何千年も経っているのに。

あの人里が如何に異常だったかわかる。

(ん?)

私の居る空に向かって飛んでいる存在を感じた。下の方に目を向けるといつの間にか人里の近くに來たみたいだ。そちらの方から気配を感じる。かなり大きな気配。当然ただの人間が空を飛べるわけも無いので恐らくは……

あつという間にそれは私と同じ高度まで飛んできた。かなり高い位置に居たし、何より能力を使っていたのに、迷わずこちらへ向かってきたのは少し驚いた。

「……………どうもっ。」

「……………」

声を掛けてみてもやってきた彼女は未だ無口を続ける。容姿は目映いほどの紅い髪に同様の色の輝く瞳。髪の長さは肩に掛かるくらい。服装はなんだろう……昔っぽい感じ。前世で博物館で見たどこかの民族衣装みたいだ。ただしそれと違って至る所に金色に輝くいくらかの装飾品がある。きつとそれはこの人物の高貴さを表しているのだろう。そして極めつけは頭の上に載せられた赤色の球体。めり込んでるようにも見える。普通の人はそんなものを頭に乗せない。……普通の人ならね。

「……………あなたのその目」

その赤い相貌で私を睨むようにじつと見て、ようやくその口を開いた。そして私の方に手の平を向ける。

「その目すごいムカつくわっ!」

そう叫び力の弾丸を私に向けて放ってきた。色は同じ紅。一気に眼前まで迫る。殺人的なまで威力のそれを私は能力で霧散させた。

「へえ、あなた思ったよりや……」

「あのさあ」

少しだけ驚いた様子の彼女はしかし毅然とした態度のまま話し始めた。

ので、その話を遮ったら今度は不満げな顔をした。不満を持つべきなのはこの場では私の方だろう。避けなきや普通の人なら死んでたぞ。まあ、私は死ねないわけであるが。

「神様でしょ? あなた」

「ええ? そうよ」

予想通り人間じゃあ無かった。というか溢れ出るその神の力が私の能力越しの肌にもひしひし伝わってくる。

「ならいきなり攻撃って凄く理不尽じゃあない?」

「そうね。でも無性にあなたの様子に腹がたつたのよ。そのまるで全てを諦めたような目にね」

ふむ。どうやら私の態度が気に入らなかつたらしい。しかしそれだけで致死性の攻

撃をしてくるのはどうなのだろうか。仮にも神様でしょ？

「人間相手にはそんなことをしないわ。こんな所を飛んでるってことはあなたもそういう者でしょ？あなたが何かはわからないけれども。上手いこと隠してるのね」

「まあ、そうだけでも。でもなんでまた私の所に来たのさ？」

「目の良い神官があなたを見つけたの。それで気になったから見に来たのよ。わたしの国の上を無断です飛ぶ不敬な輩の顔をね」

「どうやらこんな上空まで、そして私の能力を突破して確認できるような神官が居るらしい。」

人間なのか？もしそうならやはり人間は侮れないね、本当に。

「で、どう？私としては何も危害を加えるつもりは無いんだけど」

「そうみたいね。その死んだ目をみればよく解るわ。でもね」

彼女は両手を広げる。その背後からまるで後光が指すかのように紅の光の玉が浮かび上がる。

「その態度ムカつくから叩き直して上げるわよん！」

その圧倒的なまでの力の塊が私に向かって襲い掛かってきた。

ああ、戦闘開始だよ。

……私悪くなく無い？



ほんの暇つぶし程度に空まで飛んできた。

神であり国主である私はそれなりに仕事があったわけだが、すつぽかして息抜きをしたかった。

そのついでに上空を飛んでいる不振な輩をさっくり処理してしまおうと思った。

別に殺そうと思っていたわけではない。どうせ弱小の神が神界から降りてきて迷子になっているとかだろうと思っていたからだ。

ここは私の土地だと威嚇して追っ払うなり、もし本当に迷子なら案内程度はしてやろう位の気持ちだった。

しかし、実際はどうだ?

「あー、神様なのにそんな程度?」

そのムカつく目で私に語りかけてくる真つ白な少女。

先程からいくら攻撃しても一向に当たらない。まるで玉が避けるかのように軌道を

取っている。きつとそういう類の力を持っているんだろう。

「期待はずれだなあ。神様って言うんだからてつきりもつと凄いのかと思っただけ」

凄くムカつく。攻撃も当たらないのもそうだし、恐らくは一妖怪の分際で私を愚弄していることも。

そして何よりその全てを諦めたような目が気に食わない。

「そこまで言うなら見せてあげるわ」

このままじゃ女神の名が廃るわ。

とりあえずこいつをぶん殴って説教をかましてやりたい気分だった。

上に飛び上がり相手より高く位置を取りそして頭上に手を突き出す。そうそう見せることのない全力を込め、その圧倒的な量の神力によってそれを形作る。そうしてできるのは巨大な三角錐の塊。

「トリニタリアンラプソディ！」

そしてそれを投げつける。込めた力のせいで風が荒れ狂う。一直線に相手の元へと向かってゆくそれ。

恐らく直撃すれば無事では済まない。そして先程みたいに避けようとその後力分裂して襲う仕組みになっている。この攻撃は避けることは出来ない。魔法の神を舐めるなよ。

さあどうだ？これで少しはその腐った目に違った感情を呼び起こしてみろ！

そして私のその力を目の当たりにした彼女は私の予想通りようやっとその顔に感情を見せた。

彼女は笑った。笑って喜んでいた。

そしてその直撃を受けた。

「なっ！」

さっきまでの曲芸じみた力でアレだけ避けていたのに、それを一切使わずに私の一撃を甘んじて受けたのだ。

何故？アレをまともに食らったらただじゃ済まない。それだけの力を込めた。

それを彼女だつてわかっているはずなのに……

そのまま遥か下にある地面へと私の放った三角錐の塊は突き刺さって行った。腑に落ちない感情を胸に私はその後を追っていった。

地面へと降り立つ。そこは先程の衝撃で恐らくは元草原だった場所がその面影を残していなかった。

(街から離れた場所じゃなかったらまずかつたわね)

つい夢中になっていた。もしもつと街の近くでやってたら被害は出なくとも、神官にグチグチ叱られる。それは非常に面倒くさいのだ。

出会った頃とは打って変わって面倒くさい大人になってしまったものだ……と街で待つ神官に思いを馳せながら、辺りを探索する。

砂埃が舞い、今ひとつ様子が確認できない。一体彼女はどうなったのか。それが非常に気になった。どうしてあの妖怪少女は笑ったのかも。

徐々に晴れていく煙の中その様子がはつきりとしていく。

「―」

今日だけで何度驚かせられるのだろう。私の全力を直接受けた彼女はその体をその血で赤く染めていた。一瞬前までは。

その少女は今、全てを巻き戻していた。

圧倒的な力の流れを感じる。それによつて彼女に刺さっていた三角錐も無残にも破壊される。

そうしている間にも彼女の体は薄い紫色の光に包まれ見る見るとにも戻っていく。回復の術式では無い。あれはそんなものじゃない。明確に元へと戻っているのだから。あれだけの術を施すのにどれだけの思いが込められているのか推し量るに足りない。しかしその思いの籠もった術式で生き返った少女の顔は……そう、酷かった。

「……ああ、やっぱ駄目だったかあ」

その白い服まですっかり元に戻った彼女はほんやりと空を見上げてそう呟いた。不気味だったが……ぼやいた彼女の顔を見て私は胸を締め付けられた。

彼女の事は何も知らないが、その表情には見覚えがあった。

彼女はこちらを見て私にこういった。

「他に何か無い？私を殺せそうな技」

それは壊れてしまい、そんな人がする顔だった。それはどこまでも儂い物で酷く人間的だった。



一つこの戦いが勃発した時に思いついたことがあった。それは神の力なら私は死ぬるんじゃないか、ということ。

自殺が無理なのは当然以前確認したことだけど、他人に殺される事は確認していなかった。ならもしかしたら有るかもしれない。ましてや神のその理不尽なまでの力

ならば尚更逝けるのじゃないか。

結果は駄目だった。やっぱり私の死への道は直前で『向き』を捻じ曲げられたのだ。
「……ああ、やっぱ駄目だったかあ。他にない？何か私を殺せそうな技」

正直結構期待していた。だって神様だよ？それで無理ならもう無理じゃんって話。

「あなた……一体何なのよ？」

その神様が私に問いかけてきた。

「私はただの妖怪だよ」

「ただの妖魔風情がそんなことできるはずないわ」

そう言われても私には解らないのだから仕方ない。理由が解るなら既に死んでいる。

「で、あるの？ 私を殺せる？」

「あら、当たり前じゃない。私は魔法を司る女神よ。他に幾らだってあなたを殺す力は有るし、殺せる自信も有るわ」

「おお、それなら……」

「でも、私は貴女を殺さないわ」

「はっ」

殺せるというなら殺してくれよ、いや本当に。

「多分、正確には解らないけれど。貴女は生きないといけないわ。誰かがそう強く願っ

ている。だってそんな大仰な術が掛かってるんだもの」

「私は今死にたいんだけど? 女神様は願いを聞き届けてくれないと」

「貴女の願いよりその術を掛けた人の願いを尊重するわ」

どうして、ねえ。どうして殺してくれないの? 私はこんなにも死にたい、この女神はそれが出来る。ああ、どうして。

なんだか妙にムカついてきた。この女神は私を殺せると豪語するくせに殺さないと言うのだ。

いきなり私に攻撃を仕掛けた挙句、結局私を殺してくれなかったのだ。いや、後者は言いがかりかもしれないけど、それでもいきなり殴られたようなもんな訳で……

そこで私は気づく。久しぶりに私の心に感情が宿ったのだ。

「……あら、やっとまともな感情が顔に宿ったわね」

「お陰様でね」

その感情は怒り。道端で突然殴られたら当然の感情だが久しく忘れていた。

「ねえ、あのさ。やっぱり私のこと殺してくれないの?」

「ええ」

「そっか。じゃあさ」

そんなことよりも私は今無性に。

「一発殴っていい？」

こいつを殴りたい。



「ふっ、やれるものならやってみなさい！」

そんな顔もちゃんとできるんじゃない。それを見た私はなぜか無性に嬉しくなつた。少しばかりこつそり手助けしたものの、まだこの子は壊れてはいない。

感情を思い出した彼女はようやく私のことをちゃんと認識したようだ。女神を前にして無視なんて不敬過ぎるわよ。

「妖怪風情が私に勝てるならね！」

「妖怪……ねえ」

そういつた白い少女は目を閉じそして力を開放した。

「これは神の……あら、そんな不安定な形なりでよく神になれたものね」

「煽ってくれるね。やっぱり一発殴りたいや。なりたくてなつたんじやない」

そう彼女がまもっている力は神力。それは本来妖怪が持つはずのない力。

「…………ふふ、はははっ!」

「なに? 急に笑って。私今凄い気が立ってるから今すぐにでもぶん殴りたいんだけど」

正体不明の力、神力。彼女の事は気になる。それにあの絶望を貼り付けた様な顔は女神として庇護欲をそそのめるものでもある。

でもそれとは別に抑えられない感情も有る。

いつたい何時ぶりだろうかこんなにも……

「いいわ! 受けて立とうじゃない! 殴れるものならやつてみなさい!」

「そっちが先に手を出して来といて何が受けて立つんだか。ああ、でも一発殴らせてもらっ」

「死なない程度しか取り柄がないのにできるのかしらん?」

「やるんだよ。こんなにプチンと来たの久しぶりだよ」

私も久し振りよ。こんなに楽しいのは。

最近ご無沙汰だった内なる闘争心に火がつく感触がした。

「貴女は私に喧嘩を売った、それだけの理由で貴女を地に沈める!」

「沈めてくれると助かるよ。生き埋めは嫌だからしっかり殺してね。」

てか先に喧嘩を売ったのはそっちでしょ。良いから黙って殴られる。そして私を殺せ」

最近は事務仕事ばかりで鈍っている。

だから、少しくらい羽を伸ばしても良いわよね。そう宮殿で待つ神官たちに心中で言い訳をした。



場所は再び空中。紅の女神がその膨大な力で弾幕を張る。私はそれを能力ですべて払い最大限に加速したまま突っ込んでいく。それで一気に彼女に近づき腕を振りかぶる。

しかしその腕は空を切る。そして直後に再び襲いかかる弾幕。それを能力で避け、飛んできた方向に先程の真似をして作った弾幕を放つ。初めてやったけど意外にうまくいった。しかし彼女は前に突き出し紅の半透明な壁のようなものを張り弾幕を防ぐ。

「移動速すぎない？ 神って皆こんな理不尽なの？」

彼女は普通に私の拳を避けたのだ。その身体能力はもはや可笑しい。

「神だからそんなもんよん。それより私と互角にやりあう存在、しかも妖魔なんて初めて見たわ」

「全然互角じゃないけどね。とうかまるで妖怪じゃなかったら居るみたいだね」

「そうね。西方の神々なんかと大昔にやりあったことが有って、ね！」

先程見たあの三角錐を投げてきた。私はそれを避ける。直後それは背後で弾け光のたまになって私を襲う。

「くっ！神のくせにこんな卑怯なことしても良いのかな！」

その弾丸の向きを操りすべて彼女の方に返す。幾つか直撃してしまっただので痛い。自分の攻撃を返された彼女は何ということはないように再び盾を張って防いだ。

「神は何処までも傲慢で有るべきなのよ。そうしないと人々に信仰されないわ」

「私は謙虚だから神には成れないね」

「すでに半分神様みたいなもんじゃないかしら？」

「だからなりたくてなったんじゃないって」

わたしは手のひらに力を集め1つの炎弾を作り投げつけた。それを紅の女神はその光の盾で防ごうとするが

パリンツ

「なっ!」

それは盾を破りその向こう側の彼女に激突した。狙いはボデイ。ナイスヒット。

「ふう、やっと当たったね」

顎まで垂れる汗を手の甲で拭う。

能力で盾に弾かれるという『向き』無効化するように炎弾に仕組んだのだ。しかしこんな能力の使い方だときつと長く持たないなあ。

「こうでもしないと当たらないって……理不尽な」

「うふふ、攻撃を貰ったの一体何年ぶりかしら?」

ようやくと直撃を当てられたが、しかし私の苦勞を嘲笑うかのように彼女はピンピンしている。多少服が傷付いていてもそれ以外余り効いた様子はない。

「一体殴れるのはいつになるやら」

「その時が来ると良いわね」

あれから一体どれ位経ったのだろうか。正確な時間はわからないけれど随分と長い

時間戦っていた気がする。

「やるわね。久しぶりに楽しいわ!」

「ゲホツ……私は、全然楽しく無いよ。大体戦いは好きじゃないんだ。家でのんびり過ごしてたほうが性に合うの」

「それだけの力を持つていながら何を言うのかしらん?」

何だ。この女神バトルジャンキーかよ。

「悠久の時を生きる神は偶にやんちゃしたくなるのよ」

そんな子供みたいな可愛いもんじゃないよね。

「でも残念ね次で終わりだわ」

「そうだね」

なんとか継続して来たこの戦いも私の息が切れてきたしもう長くは続かない。次の一手で何が何でも終わりになるといいうのは直感的にわかっている。

「私を楽しませて頂戴!」

そう言って振り上げた右手。その先にあの破壊の三角錐を無数に創り出す。アレはさきほど見た技。しかし力の総量はさつきと比べ物にならない。というか攻撃用の技がある時点で女神として可笑しい気がするんだけど。

「トリニタリアン、ラプソディツ!!」

その莫大な力の弾幕を私に浴びせる。対する私も炎弾の弾幕で応戦する。紅と薄紫が空中でぶつかり合う。

「くっ……！」

やっぱり押され気味だった。それも仕方がない。なにせ地力の時点でかなり差があるのだから。

しかし今はそれでいい。

「この戦い私の勝ちみたいね！」

その様子を見た女神は勝ち誇るように笑う。そうだろうきつとこの戦いは私の負けだ。

けれど私の目的は勝つことじゃあない。

「そうだね……でも」

私の眼前に力の壁が迫ってくる。しかしそれはもう関係ない。

「勝負は私の勝ちみたいだよ」

何故なら私はもうそこに居ないから。

「なっ……！」

私は既に紅い女神の眼前に居た。

驚きでその紅の双眸が見開かれる。そして動きの止まる女神。

「歯食いしばれこのクソ女神！」

スキだらけのその顔面に振りかぶった私の左拳で殴りつけた。精一杯力を込め尚且つ能力を最大限使ったその拳は女神を高速で地面に叩きつけた。沈み込む地面に舞う砂に石。地形を湾曲させたその中で女神は動きを止めていた。きっと全然死んでないだろうけど効いているようだ。

「うっ……」

一仕事終えた私にも限界が来たみたいだ。酷い目眩と頭痛。大体あんな能力を酷使して余力なんて有るはずない訳で。全身に力が入らなくなる。

さあつと感情の波も引いていく。やりきった余韻と共にふと思う。私あんなに怒りやすかったっけ？

でもとりあえず、一発殴れたので満足かな……

地に落ちていく途中で私は気を失った。

二話 目をさますとそこには知らない天井が有つたとい
うテンプレなアレ

目をさますとそこには知らない天井が有つた。

つてこの表現、結構色々な小説で見たけれど一体始まりは何なんだろうね。しかし上手いものだと思う。この一行で割りかし色々なことがわかる。

先程まで寝ていたこと。天井が眼前にあるということ。現在横になっていること。そして知らない天井ということ。だから知らぬ場所にいることを示唆している。

……とまあ色々言つたものの私は前世では理系男子だったので、文章表現には乏しい。だから果たしてこの考察が合っているのか分からない。

「というか本当にここ何処……？」

ようやくと意識がはつきりしてきた。上半身だけ起き上がり周囲を見渡す。周りには細かく文様の意匠が凝らされた壁に天井。素材は石。私が今寝ているベッドと反対側には窓がある。まるで古代の遺跡みたい。いや、きっとそれそのものなんだろう。どう

やらその中の部屋の一つに居るみたいだ。

「起き上がられましたか。お体の調子はいかがでしょう？」

声のする方に目を向けると編みカゴを持った女性が部屋の入口から入ってきた。格好は文様の意匠の凝らされた上下のつながった服に白いエプロン。袖は膨らんでいてまるで中世の映画に出てくる王城の侍女みたい。

……というよりやっぱり本物の侍女なのだろう。

「あーうん。もう大丈夫だよ」

「そうですか。それでしたら申し訳ありませんがこちらへ。王が王間にてお待ちです」

そういつて促される。いまいち状況がわからないが、私は彼女に連れられるまま部屋を出た。

「ほえ……」

思わず間拔けな声ができる。そこは部屋と同様石で出来た廊下だった。まるでファンタジー小説に出てくる王宮みたいな感じ。見回すとやっぱり複雑な文様が至る所に描かれていて、その整った様がとても芸術的に感ぜられた。圧巻だ。窓があまり見当たらないので一体どこから光を入れているのかわからないが術か何かを使っているのか、廊下は明るい。

しかし明るいはずなのに先の方はよく見えない。つまりそれだけ長く広い。これだ

けの建物を有するというのは疑いようもなくかなりの権力者ないしそれに準ずるものだけだろう。

そこそこ距離を歩いた後私たちは壮嚴な、恐らくは金属の扉の前に来た。その扉の前には二人の騎士が左右対称に構えていた。とここで今まで前を歩いていた次女は私の方を振り返る。

「この先で王がお待ちです」

そう言つてその侍女は一礼した後横側へと掃けていった。それと共に騎士が扉に手を掛ける。そしてその扉からがチャリと音がしてゆつくりと開いていく。そ空氣がガラリと変わったのを感じる。

徐々に中の様子が解つてきた。そこは円上の広間だった。その真ん中に周りよりも数段高い台座があり、そこまでは紅い絨毯がひかれている。そのレッドカーペットの両端には鋼の鎧を着た騎士が左右対称に並んでいた。天井にはやつぱり色々な意匠が施されており、また一部吹き抜けになっていて、そこから入る光が台座を照らしていた。その台座の中心には大仰な椅子があり、そこに彼女は座っていた。

「やつと起きたのね」

ピリピリと醸し出される圧迫感。まるで空氣自体が重くなつたかのように息苦しくなる気がする。

「そういえば自己紹介がまだだったわね。」

ただ、その右頬にはガーゼらしきものがある。なんとも間抜けさを感じざるを得ないが雰囲気はそれすらも威厳に感じさせる。……嘘、ちよつと盛った。何せアレは私がつけた傷なのだから。笑いを堪える。

「私はこの国の王でありこの地を治める神」

そんなに大きな声と言わなくてもないのにやけに響く声。

「ヘカーティア・ラピスラズリよ」

紅い女神はそう名乗った。

二話 目をさますとそこには知らない天井が有ったというテンプレなアレ

数時間後……

「あはははっ！ 夢ちゅあーん！」

「ぎゃー！ やめろー！ この駄女神ッ！」

私は酔っ払いに絡まれていた。

……どうしてこうなった。

私が気絶した後、ヘカーティアはすぐに起きたらしい。流石と言ったところか。結構全力で殴ったのになあ……あの後2日も寝ていた私とは大違いだ。というわけで起きた後、地面に転がってる私を見つけたヘカーティアは、私を担いで自分の宮殿まで連れてきたということらしい。

いや、なんで。

「あのさ、私が言うのも可笑しいんだけどさ。放っておこうとかトドめ刺そうとか思わなかったの？」

あれだけ死闘を繰り広げた相手を普通自分の家へ上げ、尚且つ看病までするだろうか

?

「そんなこと思わないわよ。元々ちよつと暇つぶしに出ただけだったし」

とのこと。あの死闘は彼女にとつて暇つぶし以外の何物でも無かつたらしい。

えええ……確か私一回殺された気がするんですけど。

「あれは貴女がわざと受けたんじゃない。それに結局死ななかつたし。」

まあ確かにそうだけど……ねえ？ そんなサクサクころろしてしまつて良いのか。相手が妖怪だからそんなもんなのか？

「まあ楽しかつたから良いでしょ？」

全然良くないんだけど。しかし神は傲慢。そんなことをお構いなしだ。

「さてと……皆の者下がれ」

打つて変わつて声に威厳を含ませ声を放つ。それで脇に控えていた騎士や侍女たちが下がっていく。

「……この様な異形の者と貴女様を二人きりにするわけにはいきません。」

ん？ 一人だけ残つたみたい。それはヘカーティアと似たような服を着た青年だった。当然いくらか彼女の物より豪華さは落ちるが、地位的に結構高そうな感じ。そして何より目立つのはその目の色だった。それは何処までも見渡せるような透明さを持つていてかつ虹色だった。

「私が問題無いと言っているのよ。それに口答えするのかしら？」

目を細め鋭い視線をその青年に送るヘカーティア。それに青年は少しだけ肩をふるわせた。

「……出過ぎた真似をしました。失礼致します」

そう言い残しその青年もこの間から出て行く。そして扉が閉まる。その扉の閉まる音がやけに重くてまるでここに閉じ込められたように感ぜられた。

「さてと……邪魔者は居なくなつたわ」

「……何をするの？」

彼女はそう言い王座から立ち上がった。そして懐から何かを取り出す。思わず少し警戒してしまう。が――

「飲みましょ？」

彼女が取り出したのは大きい酒瓶だった。

「女神の癖に悪酔いするなっ！」

と言うわけで先ほどの続きに戻る。さっきの威厳はどこへ行ったのか。

「んもう。アレはアレで結構無理してるのよ？でも周りの皆が格好が付かないからちゃんとしてくれてくれて煩いのよ」

彼女には彼女なりの不満があるらしい。

「……飲み過ぎじゃない？」

でもその気持ちはわからなくも無かった。私たちの周りには空になった酒瓶がいくつも転がっていた。しかし私はほとんど飲んでいないのだ。つまりこの殆どがこの女神のものということ。

「まだまだこんなの序の口よ。僕ももっと飲みなさいよ」

「いや私は……」

見た目は少女でも言っていることは酒を強要するオヤジ上司と変わらない。

「はい、どーん！」

「う、う、ぼっ」

酒瓶を口に突っ込まれた。

その細い腕から想像できないが、しかしそこは神。純粋な腕力で私が叶うわけもなく、為す術ないまま大量の酒が体内に流れていく。

……いやいやいや死ぬ！死ぬないけど死ぬから！

「ん！ んん！ げほっ、ちよ、ギブ、ギブッ!!」

「あら？ まだ半分残ってるわよん？」

「誰が 一気飲みするって言ったよ！ここは地獄か！」

「地獄が何処かは知らないけど、こんなにお酒を飲めるところならきつと良い所ね♪」

などとのめはずれなことを言う女神様。フフフと聞こえるその笑い声と無邪気な顔がとつても恐ろしや。女神じゃ無くて魔女なんじゃない？

「失礼ね私は女神よ。確かに魔法は得意だけれど。それより最後にあんな不意打ちを食らわせる貴女のほうがよくぼど魔女よ」

それでもしないと殴れなかったのだから仕方がない。

「最後までやって移動したのかしら？ あんな魔術見たこと無いのだけれど。」

「ああ能力でこう、ね」

私は空間を開いてみせる。

「なにそれすごく便利じゃない！」

「まあね、ただ疲れるんだよ」

ただ開くだけだったりものを出し入れするだけならそれほどでもない。けれど私そのもの通すくらいに大きくするとゴツソリ体力が持つて行かれるのだ。大きさという

のは物理的な大ききさじゃ無くもつと概念的な物。

「なんて能力なのかしら？」

『あらゆる大ききさと向きを操る程度の能力』らしいよ」

「らしいって、なんだか他人事ね？」

自分でも能力の有効範囲が分からない位には得体の知れない能力。無理をすれば概念も弄れるような私にはかなり過ぎた代物。

「能力はその人の捉え方次第で割と色々変わったりするからもつと色々出来るかもしれないわよ」

「へえ。そうなんだ？」

意外と適当なのね。つまり私が操れる『向き』が徐々に増えているのは私の中の能力の捕らえ方が少しずつ拡大しているせいなのかもしれない。まあ変わると言っても限度があるのだろうけど。例えば私が相変わらず死ねないようにね。

「でもなんでそんな力持つてるのかしら？」

「私も知らないよ」

生まれ変わったときから持っていたので何故かは私には分からない。謎だ。

「妖怪には勿体無いくらいの力ね。どう？ せっかくなら神にはならない？」

「だからなりたくないって言うてるでしょ」

神というのは信仰を集めることで成るもの。既にいくらかの信仰を集めたことのある私は、なろうと思えば神様になれるらしい。

……神ってそんなに適当でいいの？ 仮にも私は正反対に位置する異形の者、妖怪なのに。

「そんなもんよ。……そうだ、儂が力を見せてくれたのだし、せつかくだし私も見せようかしらっ？」

「あれ？へカーティアも何か能力を持つてるの？」

と言うか能力無しであれだけ馬鹿みたいに強いのに……能力要る？この世界の神様力の配分間違ってる？あ、神様目の前にいたわ……

「あんまり全員同時に出ることは無いのだけでもね」

そう言つて立ち上がったへカーティアは両手を広げる。その両の手のひらに何かが集まつていく。それは黄色と青の球体。そして少しだけ光に包まれた後……

そこには三人のへカーティアが立っていた。

「分身の術？」

軽い分身くらいなら私にもできる。昔妖術を研究していたときに私も身につけたから。しかしこれはそうじゃない。

「違うわよ。私の能力は『三つの体を持つ程度の能力』よ」

「三人で出るのは久しぶりね」

ということらしい。ヘカーティアボイスがステレオで聞かされるのでとっても落ち着かない。

つまりこの髪色だけ違う三人は全員ヘカーティアそのものということだ。

ん？それはつまり……

「…ちなみに力は？三分の一づつ？」

ヘカーティアは不敵に笑う。

「残念、そのまま三倍よ」

ですよねえ。能力の名前にそうだと思った。と言うか……

「やっぱり私の完敗じゃんかあ。」

あの三倍の強さで戦われたらもう、一発殴ってやるぜ！とかそういう次元じゃない。瞬殺である。つまり精一杯の私に対して彼女はこれだけの余裕を持って対決していたわけだ。

「ふふ、でも一瞬でも私を倒したんだから大したものよ」

褒められても嬉しくないなあ。

「さて気を取り直して飲みましょ。……そうね。」

そこで何か思いついた様子のヘカーティア。

「よつと」

「へ？」

と気づいたら私の後ろに回られていた。そしていつの間にか私は彼女の膝の上に座っていた。

否、拘束されていた。

「ずっと気になってたのよね。うふふ、やつぱり髪サラサラね〜♪すすん。」

「ひゃっ！嗅がないでよっ！うわっ臭い!？」

彼女より体の小さい私は抱えられる。そして後頭部に息のかかる感触がした。酒臭い。

てかなんかスキんシップが激しいんだけど！なんだかイケナイことしてる気分になつてくる。

「肌も真っ白ですべすべじゃない。羨ましいわね〜」

「いやヘカーティアも……というか黄色のヘカーティアまだ酔ってないよね？」

「足もさらさら」

「いや、そつちのも……ちよ！触るなあ！」

三対一。敵うわけも無く。私はこのあと盛大に彼女三人に弄ばれることになる。ああ、確かにこんな様子を周り人々に見せられない。人払いしたのは正解だ。

「このエロ女神いいい！」

というか王であり神である者がこんな奴でいいのか……

あの後激しく交わり有った後（ただ私がヘカーティアに良いようにされただけ）更に気の遠くなるほど酒を飲んだ私達。ようやくと満足したヘカーティアは私を解放したのだった。

「頭がふわんふわんするよ……」

何とか先の寢床に戻ってきた私。廊下で何回躓きそうになったことやら。

当然前世では当然ながら酒を飲んだことは（ほぼ）無い。今生でもあの二人に少し付き合う程度でしか飲んだ事は無かった。こんなに飲んだのは初めてだ。

「……二人と言えば、永琳元気かなあ」

ごろんと真つ白なシーツのベットに横になった私は窓から遙か遠くに見える月を見つめる。もうあれから人の身にとっては悠久とも言える時間が経っている。けれど月

夜見の計画が成功しているなら彼女たちは今もあの月の何処かで生きているのだろう。しかしあの最後のアレが月夜見の計画だとしたら永琳は向こうで衝突しないだろうか。心配である。

ああ、ヘカーティアに振り回されたせいで大分心の中が落ち着いた気がする。こうして過去を見返せる位にはね。妖怪は精神的な生き物、だなんて永琳は言っていたっけ。もしかしたらこれを見越してヘカーティアは私を飲み誘ったのかなあ……

なんて考えたけどあの酔っ払いは全然そんな事は考えてないね。

「これからどうしようかなあ……」

だんだんと迫る眠気の中ぼんやりと考える。

私は今何もない。やらなきゃいけないことも無ければ、生きる意味も無い。でもやっぱり死ねないわけで。

「やっぱりこの呪いかなあ……」

精々この呪いを解くために色々調べるぐらいだろう。死ぬために自ら動くというのは随分おかしな話だけど、元々私はそうやって死んだはず。当面の目標をこれに定めよう。

(自分へカーティアに振り回されそうだけどね……)

どうにも彼女に気に入られてしまったらしい。それに私も彼女のことにはなんだか

やっぱり憎めない。まだ出会って数日しかたつてないのに妙な信頼とか何というか繋がりがあつた。

(まあ今は寝よう)

考えても仕方が無い、か。とりあえず寝よう。頭はぼうつとしてて体は火照つてい
る。お世辞にも体調が良いとは言えないけど久々に穏やかな気持ちで寝れそうだった。

きつと次起きるときは人生初の二日酔いに苦しむだろうなあ、なんて思いながら微睡
みへと落ちていった。

殺気を感じた。

ガキンという、金属が私の能力を纏つた首とぶつかる硬い音が響く。

「何ッ!?!」

そして誰かが驚愕する声。私はゆっくりと目を開ける。その音の元は私の首元に振

り下ろされた剣、そしてその持ち主のものであった。私をまたいでベットのの上に立っているのは先程ヘカーティアに一言申した青年。

「ヘカーティアの指示じゃ……無いよね。」

当然だ。よくよく考えれば彼女は徹頭徹尾私に殺意を向けたことはない。私は能力で剣を止めつつその相手に語りかける。

「主に内緒で客人を暗殺なんてしても良いの？」

「……お前は客人などでは無い。私には見える、隠しているその膨大な力がな！」

殺気を隠そうとしないその青年。私はその目を見つめる。その両の目は虹色に光っていた。そこに映る私の薄紫が薄れるくらい。

場違いながらそれを綺麗だなと思った。

およそ人間の目とは思えないくらいに。

三話 狂ったように踊りましょ!って一体どんな感じなのかな

「で、どうするの? 私としては戦いたくないんだけど」

私を見下ろす虹色の目の青年に話しかける。そのどこまでも綺麗な目。しかしそこから向けられるのはただただ純粹な殺気だけだった。

「ふん、抜かせ。お前みたいな輩を見逃しておく訳にいかない」

「交渉決裂、かな?」

私は能力で刀を弾き飛ばした。それにつられ青年は宙を飛ぶ。しかしやはりただの人間と言う訳じゃないだろう。かなり勢いが有ったにも関わらず、危うげ無く床に着地する。

「怪しげな力を使う。やはりお前は主の近くには置いておけない」

その虹の目は狂ったように怒りに燃えている。

「別にヘカーティアにどうこうしようとはしてないんだけどなあ……」

第一あの女神様に敵うわけもない。むしろ彼女には少しは感謝している。しかしこの青年にはそれは伝わらないように。

「信じられん。どうやら主様は気づいておられないようだが、そのお前のその根底にある莫大な力は彼女に害を成すに足り得る」

そんなこと言われても全く心当たりが……

ん？ 私の根底にある力って……もしかしてあの呪いのこと？

「ちよつと聞きたいんだけど、君のその目って何が見えるの？」

その虹色に輝く目。その能力が気になった。

「これは、この目は私にとつての呪いであり希望だ。詳細をお前などに教えるわけないだろう。」

呪いに希望ってなんだそりや。

そう言つて再び剣を構える青年。その切っ先は私を捉えて離さない。普通に聞いても駄目、か。

「……じゃあゲームをしよう」

「げいむ？　なんだそれは」

「一種の賭事だよ」

ただ単に聞き出そうとしても素直には教えてくれないだろう。でももしかしたらそ

の力で私のこの呪いを解くヒントが得られるかもしれないのだ。それを逃すのは惜しい。

「お互いトドメを差すのは無し。制限時間はどちらかが気を失うまでって感じの決闘で。君が勝ったら私はこの国から出て行く。私が勝ったら君のその力を貸して欲しいんだ」

私からの提案。正直殺し合いは勘弁願いたい。本当はこんな決闘もしたくはないのだが……

「そんな制限はいらん。私はお前を始末する。」

やっぱりダメみたい。こう好戦的なのはここのお国柄なのかな？

「個人的にはこのままへカーティアの所に飛び込んで『襲われた! たすけてっ!』って言うっても良いんだけどね。そしたら君もタダじゃ済まないんじゃない?」

大分不思議でたまらないのは、何故今彼が私を襲ってきたのかと言うこと。何せ私はへカーティアと明確に対立しているわけでもない。それなのに実行したと言うことは余程周りが見えてないかあるいは——

「その心配はいらん」

そうあるいは私をここで確実に仕留める自信が有ると言うこと。

青年は狂気の垣間見える笑みを浮かべる。

「その前にお前を始末するからな」
「どうやら後者だったようで。」

三話 狂ったように踊りましょ！つて一体どんな感じなのかな

「死ねっ！」

随分と直接的な言葉と共に私に振り下ろされる剣。さつきとは違いその剣を避ける。もし彼の自信が本物なら何かしら私に攻撃当てる算段が有るはずだから。直後に剣の突き刺さったベツトから羽毛が吹き出す。勿体ないなあ。私は窓から外へ飛び出した。何にせよあそこでドンパチやるわけにもいかない。

「待て！」

待てといわれて待つ奴が…つてあるえ？

「人間っていつから空飛べるようになったっけ？」

「何を言っている」

その目は確かに虹色で人外のようだけど、体は多少なり鍛えてる人間程度。のよう
に見えてたのだけれど。どうやら霊力によつて体を浮かしているらしい。永琳達は飛
んでいなかった、というか飛ぼうとすらしていなかったが人間やれば出来るということ
なのだろうか。

「どうにも力の使い方について良くわかつてるね」

「当たり前だ。私はヘカーティア様の盾であり剣。故にお主を見逃しはしない!」

その熱意には感服するけど、どうにも行き過ぎな感じがするなあ。まるで何かに取り
憑かれたみたいだった。

「覚悟しろっ!」

加速した青年が私に向かって斬りつける。私はそれを避ける。

「遅いっ!」

空を切った剣がすぐに向きを変えて私に向かってきた。キラリと月明かりを反射す
るその太刀筋は洗練されているのがわかった。なかなかやり手みたいだ。

避けきれない。

私はその斬撃を能力で反射しようとした。

ザシユツ

「痛っ！」

斬撃が能力の範囲を通過してきた。なんとか体を捻り深く傷を負わないようにする。そして急いで青年から距離を取る。左の二の腕から血が出てくる。

そこから垂れた赤が私の白いワンピースを濡らした。

「ふっ、他愛もない」

やはり彼には攻撃を与える算段が有ったようだ。恐らくあの目だろう。

「私の能力の弱い所が見える……みたいな感じかな？」

今の一撃で体に張り巡らせて居た能力の壁が破られた。

「ほう……今の一撃で看破したのか」

前世でそんな能力を持ったキャラを見た気がするのですね。でもこれは厄介だ。思わず笑いがこみ上げてくる。

「全く痛いなあ」

痛い。痛い……なんで痛い？ それは目の前の奴が私を斬ったから。

「ふふっ……」

「……何が可笑しい」

あ、何かヤバイ。

私の中のスイッチが押された気がする。やる気スイッチとかそんなんじゃないかもっ

とヤバイ奴。何かにとんどん精神が蝕まれる感覚がする。それに逆らおうにももう遅い。既に私の大部分は染まりきっている。

「女の子を虐めるなんて酷いなあ……」

自覚していても止まらない。

「殺しちゃおうよ?」

口が鋭い三日月状に変わる。私は今、狂っていた。

激しくぶつかり合う影二つ。

「キャハハッ」

「死ね!」

狂ったように笑う私と狂ったように怒る青年の影。どこか籬の外れた私達の戦いは止まる様子はなく、ただひたすらに加速していった。

私が炎弾を撃てば青年はそれを切り裂き、青年が剣を振りかぶれば私はその剣を避け

る。

段々と増えていく傷互いの傷。青年の少し豪華な服は所々焼き切れそこから見える肌は赤くなっている。対する私も白いはずの服は所々赤に染まり、所々服が切れて肌が見えている。私は傷がすでに癒えてるのは単純に妖怪だから。

「それっ!」

炎弾で弾幕を張る。そこに殆ど逃げ道はない。

「甘いッ!」

そんなもの端から無いとばかりにそこへ突っ込んでいく青年。弾幕を切り裂き私に向かつて刺突する。

それを能力で無理やり避け、その後に背後に回り首裏に踵を落とす。しかし一体どうやって察知したのか、体を捻りそれを左手で青年は受け止める。そして逆の手で私の肩口に向かつて剣も振り下ろす。再度能力を使い避け、青年の近くから離脱する。

(不味いなあ……)

「戦いに身も心も熱狂する中、裏の残された少しの思考回路で私はそう思う。」

このままだと近い内にこの戦いは終わる。そろそろ私は限界だった。このままだと

……

「そろそろ終わりにしようよ」

このままだと彼を殺してしまふ。今の私には明確な殺意があるから。彼は確かに強い。だが人間だ。人外の私には彼を殺す手段は有るんだ。

炎弾を手のひらに浮かばせ、そしてそれを圧縮する。

莫大なエネルギーが集まったそれを中心に暴風が発生する。

「良いだろう。次でお前を始末する!」

対する青年も剣に力を纏わせる。恐らく必殺技か何かなんだろう。駄目だもう時間がない。

「行くよ」

私達は私互いに飛び出した。私は腕を突き出し圧縮した力を彼の方に向ける。そして彼はそれを切ろうと剣を構える。

後、数十メートル。いや後数メートルで激突する。ぶつかったのなら互いに無事では済まない。

「だめだっ……!」

「止まりなさい」

しかし私達が激突することは無かった。それぞれの攻撃を紅色の盾に阻まれる。爆発音と破砕音が響く。

「全く二人共元気なんだから」

その間で少しだけ不機嫌そうに女神が呟いた。

そこで最後の一撃を不発に終わらせた青年が力なく地へと向かって落ちていった。戦いに割り込んだ女神が彼を空中で掬い地面に着陸する。

「本当、無理するわね……」

自分よりガタイの大きい青年をその腕に抱く女神。そして彼に向ける目線はとても優しくかった。

「ちよつと邪魔しないでよ。ああでも次はヘカーティアつてことかな？」

私も彼女たちに付いていき地面に降りる。そして満面の笑みで語りかける。ヘカーティアだとかなり苦労しそうだなあ……

「貴女も落ち着きなさい」

私に向かって手の平を向ける彼女。そこには紅く光る魔法陣。私に何か魔術を掛けたようだ。

すると、すうつと狂気が引いていく。ようやく私の精神が理性の元に戻ってきたのだ。

「……つはあ。あああ……うん、ありがとうヘカーティア。助かったよ」

私は大きく息を吐きへなりと地面に倒れ込む。うん、もう大丈夫っぽい。

「お礼を言うのはむしろこっちの方よ。なんだかんだ手加減してくれてたでしょ。……

さてと、おいたが過ぎるわね」

ヘカーティアは中に向けて手を出した。その先に有るのは月。そして再び魔法を展開する。

バチツという音が月の方から聞こえた。

「痛いっ!」

そしてそこから一人の少女が落ちてきた。そしてそのまま地面に落ちる。月に隠れていたのか……なんじゃそりや。

「いてて、途中まで良かったのに……あの白い奴やけに抵抗するんだから……」

そんなことを呟く少女。格好はなんだろう……前世で見たピエロのコスプレ的な感じ? 色使いがアメリカン。いや三色だからフランスか? この世界にアメリカもフランスも無いはずなんだけどなあ。左手には松明を持っている。そこに灯された火の光はなんだか良からぬ雰囲気があるような気がしたので能力で遮断をする。

……あれ? ヘカーティア何処に行った?

気づいたら彼女は移動していた。瞬間移動と言って差し支えない。今はあの変な三色少女の前に居る。

私からは後ろ姿しか見えないが、何か……うん。オーラがヤバイ。

「覚悟は出来てるわね? 妖精さん?」

あつへカちゃんキレてるなう。

数刻後……

「ううっ……はび、ひっく……もうじません」

「解ればよろしい……本当は始末したいのだけどね」

「ひっ……」

満面の笑みで立つてるへカーティアとそれに対してガチ泣きで怯えてる妖精が居た。何をしたのかは私からは明言致しません。

「ま、まあそれくらいでいいんじゃない？」

「あら？ 惚つたら優しいのね」

いやあ……ねえ。そりゃさつきまでの拷問まがいのお仕置きを見てたらこうなるつて。そこで気を失つてる青年共々彼女には散々やられたけど、それでも思わず同情が芽生えてしまうくらい凄惨なものだった。

うん、へカーティアは絶対怒らせないようにしよう。

「それにしても随分としつかりした妖精だね」

一応妖精という種族がこの世界にはいる。しかしその多くは大した知能も力も無いので殆ど居ても居なくても変わらないような空気な感じでは有るのだが。

「後先考えずイタズラするところは他と変わらないけれどね」

今ここで跪いている妖精は少し違った。木っ端妖精に比べたら随分としつかりして居る。名前はクラウンピースというらしい。ピエロっぽいなあ。どうにもさつきまでの戦いはこいつのせいでは起きたらしくかった。

「なんか不満気な男が居たから、面白そうだなって思って。それでちよつと狂わしてみようかなって。そしたらあなたのところに行ったから楽しくなっちゃって」

「それで私も狂わせた、と」

なんともはた迷惑な話。要は彼女がふざけて掛けた能力のせいで私たちは死闘を繰り広げていたわけである。

『人を狂わす程度の能力』ねえ。まったく、妖精が持ったら面倒な能力じゃない。」

彼女はこの能力で私とその青年を狂わせたのだ。

「そっか道理で話を聴いてくれなかった訳だねえ」

青年は怒りに狂っていた。主への忠誠と私への疑心をクラウンピースが増長させたのだ。

「でも、夢まで掛かるとは思わなかったわね。貴女のせこい能力使えば掛からないでしょう」

「せこいって……その子に一瞬だけ能力破られちゃってね。そのときに狂っちゃったんだと思う」

「ああリユンが……」

青年の名はリユンというらしい。

私は基本能力を常時切らないのだけれどあの時は完全に止まっていた。恐らく力の核か何か、『目』みたいなものが見えるのだろう。そこにクラウンピースの能力が入ってきた。

「それでコイツどうするの？妖精は死なないから……永遠に封印でもする？」

そう言うって恐らくは封印の魔法陣を手のひらに浮かべる。

「ひい！それだけは勘弁を……！」

うーんなんだかなあ……やっぱ私には出来ないなあ……

「他に何か無いかな？」

「貴女甘いのねー。しかし、そうね……」

魔法を霧散させ顎に手を当てて唸るヘカーティア。それを切迫した様子で見つめるクラウンピース。

「そうだわ!」

数秒後にピカーンと何か思いついたようだ。

「貴女、私の部下になりなさい」

という訳で神殿に戻ってきた。私はヘカーティアに連れられ、王宮神殿の中にある、街を一望できるテラスの様などころに来ていた。月は煌々と光っていて照らされる街並みはひたすらに静かだった。テラスの手すりっぽいところに寄っかかりながら話すヘカーティア。

「……夢。ありがとうね」

「ん?何が」

リユン君は眠ったまま、クラウンピースは泣きつかれて戻ってきてすぐに寝てしまった。彼女の寝顔はさつきまでと一転してただただ可愛いのでヘカーティアと二人で思わず苦笑してしまった。

その後、

「リユンの事よ。かなり手加減してくれたでしょ」

「ああそのこと……そりゃそうだよ。私は殺しはしたく無いから」

「狂気の中でも何とか力を制御しようと試みた。まあ結局最後は不味かつただけども。」

「まるで妖怪の言う事じゃないわね。本当に妖怪なのかしら？」

「よくいわれるよ」

「まあ根っこはただのチンケな人間だものね。その根は腐ってるけれど。」

「それにヘカーティアが止めてくれなかったら手遅れだったよ。だからむしろお礼を言うのはこっちの方だよ」

「……そう」

「きつと止めてくれなかったら私は彼を殺していたから。そう考えるとすごく……すごく怖い。」

「貴女はやっぱり優しいのね」

「そんなんじゃないよ。でも女神様にそう言われると嬉しいね」

「私なんかよりヘカーティアの方が何倍も優しい。優しいなんて言われる程のものはない。結果的にそうであれ私の場合元は自分の為だから。」

「夢」

「……………なに?」

私の名を呼んだヘカーティア。その目はやけに真剣だ。だけど一部戸惑いが見えた。

「何で貴女はそんなに死にたがっているの?」

「……………バレてた?」

ああやっぱりヘカーティアは優しい。痛いくらいに優しい。こそこの優しさに私は甘えてしまいたい。

「バレてたも何も、最初私を利用しようとしたじゃない」

「ああ、そういうえばそうだったね」

ヘカーティアの力で遠回しに自殺しようとしたんだっけ。でもそんな事したのに私を気にかけてくれるなんて……………

「理由を聞いても良いかしら?」

ヘカーティアはやっぱり優しすぎるよ。

「少し前に大きな地殻変動あったでしょ」

「少し前?…もしかしてあの時のこと?あれってもう数えられないくらい前の事じゃない」

「そうなの?空を漂ってたからあんまりわかんないや」

私は訥々とヘカーティアに過去の話をした。詳細はぼかしているけど一度死んだこと、呪いのこと、そして月へと飛び立った彼ら彼女らのこと。

「……それって別に僕は悪くないじゃない」

「そう見えるかもしれないけど、やっぱり私が悪いんだ」

人との距離を見誤った、そして私が私自身を見誤ったせいで起きたこと。ゆえに責任を感じずには居られない。いや責任を感じることをすら傲慢かもしれない。

「それを罪だと思うのなら、余計生きなきゃ駄目じゃないかしら」

「……そもそもこの生を受けたのがおかしいんだよ。だから私は必ずこの呪いを解く方法を見つけないといけない」

そして死ぬんだ。

「変なところで頑なのね」

「はははっ、何も言い返せないや」

あーあ…結構色々話してしまった。きつと困らせてしまう。

「……女神としては貴女の道を正してあげたいけど……きつと聞かないわよね」

はあ、とため息を吐くヘカーティア。そして私の方に顔を向ける。

「酒を酌み交わした友人としては貴女に生きて欲しいと思うわ」

「……ありがとう。ヘカーティア」

そんな……そんな優しい顔をしないで欲しい。きっと堪えられなくなってしまふ。

「ふああ……私はもう寝るわ」

「うん、おやすみ」

何のことは無かったようにヘカーティアは歩きだす。

私はその後も少しの間、静かな街を眺めていた。

四話 魔法少女まじかる・ハカナ！…ちよ、待って！今の無（ry

「はふっはふっ……んく。んんん！うまい！」

「ちよっとはゆっくり食べなさいよ」

私の目の前には料理の皿。さっきまでそれは沢山有ったのだが、半分くらいはもう既に私の腹の中。皿は空になって横に積みあがっている。妖怪の体、我ながら恐るべし。ブラックホールの如く入る。なんなら能力で圧縮も出来る。そこまでしたら食事の意味とは、というより感じもする。

もちろん妖怪にとつてこの食事は余り必要ではない。妖怪の食料は人の恐怖であり、場合によつては人そのものだったりする。

でも元人間な私的に食は必要不可欠。ここ云年何も食べてなかった訳だから、より美味しく感じるね。

「ごくん……文字通り超久しぶりに食べたからね。そりやがつつきたくもなるよ」

この国は色々材料が集まるらしく、ちゃんと肉も野菜も魚介類もある。前世感覚で言うなら未だ紀元前云年前とかのはずだけれど、意外にしっかりとした食料がある。

それは月に行ったあの人里の時も然りだけど。やっぱり前世とは違う世界なのだろうか。

ともあれ私達は街の通りにあつた食堂で食事をしていた。お昼時なので割りと混んでる。

「美味しいご飯食べると久しぶりに私も作りたくなるねえ」

「あら? 貴女料理できたの?」

「多少ね」

もう何年も作ってないから腕が鈍ってないか怪しいけど。私はケバブっぽいのを頬張る。うむ、旨い。ケバブって何が材料だっけ? 肉とキャベツとパン? 今度作ってみようかな。

「ハカーティアは……出来なそうだね」

ハカーティアは神様でありこの国の王様。見た目は私よりいくらか年上だけど、少女の域を出ては居ない。女子高生くらい?

妖怪は見た目に精神年齢が引きづられるとかなんとか永琳辺りからが聞いた気がする。神様もそうなのだろうか。

ちなみに今日のヘカーティアは青の彼女だ。気分で入れ替わるらしい。随分適當だなあ……

「なつ！失礼ね。少しくらい出来るわよ……多分」

目が泳いでる女神様。なんともわかりやすい。

先ほども話した通り私はヘカーティアと共に街に降りてきていた。城下町……というのは少しおかしいか。ここにあるのは宮殿だし。というわけで女神様直々にその元の街を案内して貰ってる訳である。

街並みはなんだろう……よくある異世界冒険物の街を想像して欲しい。残念ながら冒険者ギルドは無いようだけれど。

「しかし良くそのメガネ一つでバレないねえ」

ヘカーティアは一応この国の王であり女神なわけで、そんな人が街をそのまま出歩いて居たら大騒ぎになる。ということに変装しなければならぬのだけ……

ヘカーティアは現在メガネをかけているだけでそれ以外は全くそのままだ。何の変哲もない赤い縁のメガネ。曰く、それが変装らしい。

「ちゃんと魔法をかけてあるから普通の人間には分からないわ。むしろメガネはおまけよ。気分出るじゃない？」

「意味有る？」

「魔法を使う上で気分は大切よ」

余り今まで表立って無かったけれど、女神ヘカーティアはこの地母神というだけじゃなく、魔術も司っているらしい。なので魔法はお手のものなのだ。

ちなみにだけど、私との戦いで殆ど魔術は使ってなかった。使ったのは光の盾くらい。他はすべてただの自力らしい。曰く「本気で攻撃魔法使うと世界が歪んじゃうから使えないのよん」らしい。

女神じゃなくて破壊神じゃないのとか、なんでそんな魔法有るんだよとか色々突っ込みたい所は有るけれど。

……うーん、何ていうか。

「理不尽だなあ」

「何よいきなり陰気な声出して」

「いやあなんでもないよ。それより早く食べちゃお。追加で頼んで良い?」

「まだ食べるのね……」

神は理不尽なんて言うのは前世からもはや気にしても仕方がないよね。それより今は(飯)飯(飯)。

たらふく食べた私達（主に私）は再度街にくり出していた。

「ねえヘカーティアあれって何？」

人が行き交う商店通り。そこを通つているとき私は気になるものを見つけた。それは目玉の見た目をしたアクセサリーか何か。色々種類があるが、そのどれもめっちゃリアルな目玉が付いていた。

「それは魔除けの御守りよ。『ナザール・ボンジュウ』って言うの」

「へえ、……こんなこと言っちゃアレだけど、不気味じゃない？」

陳列されたそれらはなかなかに壮観。何かめっちゃ見つめられている気がする。

「この目は邪視から災いをはねのけるの。魔術師達が魔除けの魔法を掛けてるからちゃんと効果あるのよ？」

へえ、本物の魔道具なんだ。そう聴いてみると不思議だ。前世だと女子高生がヤバイって言ってそうな見た目なのに、なにやら特別な力を帯びているように感じられる……気がする。

「そうね……すみません。1つもらえるかしら？」

「はいよ……おや？随分と可愛いらしい嬢ちゃん達だね」

ヘカーティアがその売店の店主に声をかける。快活そうな髭のおっちゃんだ。

「おじさん気前が良いからねえ。おまけしよう！ 銀貨二枚だ」

「気前のいい人は好きよ。これで良いかしら?」

懐から貨幣を出し渡すヘカーティア。

「毎度あり!どれでも好きなの取って行って構わないよ」

「儂。貴女が選んでちょうだい」

「へ? 私?」

突然私に振られた。うーん何が良いとか特になさそうだしなあ……

よし私と同じ色、白のやつにしよう。ペンダント型のそれを手に取る。

「じゃあこれで」

「そう。それじゃあ少し貸してもらえるかしら?」

私はヘカーティアにそれを渡す。受け取ったヘカーティアはそれを握り目をつむる。

瞬間彼女の手を中心に紺色の魔法陣が浮かび上がる。やがてそれが消え彼女は目を開ける。

「はい、これで良いわ」

そう言つて私に目玉お守りを渡してくるヘカーティア。

「何したの?」

「ちよつと私の力を込めただけよ。女神様直々のお守りなんて貴重よ。大事にしなさい」

「……うん、ありがとう」

彼女からのプレゼント。素直に嬉しい。私はそれを首に掛ける。

「似合ってる?」

口元に右手を当てた彼女は、私の間に一呼吸置いて答える。

「…やっぱり目玉つて不気味ね。」

「ちよつへカーティアがくれたんでしょ!」

どうやら微妙らしい。うーん仕方がないので服の中に隠れるように付けよう。

「さてと……これからどうするの? 大体この通りは回ったけど」

「そうねえ、もう特に紹介するところは……あ、あつたわ」

これからどうするか話し合う私達。何か思い当たる場所があるようだ。

「どい?」

「私の可愛い弟子達の——」「へカーティア様!」

へカーティアの言葉が突然の叫び声に遮られた。それに釣られ周囲を行き交う人々が立ち止まる。その視線がすべてこちらに集まっていく。声の主は見た目私と同じかそれより小さい少女だった。黒いローブを羽織っている。その手には片方は網カゴ、もう片方はその小さい体に不釣り合いな錫杖を持っていた。

「今あの子へカーティア様って……」

「ヘカーティア様だつて!?!」

「どこにいらつしやるの?」

「おいよく見るとあの眼鏡の子ヘカーティア様に似てないか?」

「おい今宮殿から連絡があったぞ! ヘカーティア様がこつそり居なくなつたそうだ!

街に居るらしい!」

「じゃあもしかして…」

徐々に集まつて来る人々。ざわめき出す群衆。

「不味いわね」

少し焦つた様子のヘカーティア。

「……騒がしいので来てみれば、ここにいらつしやいましたか」

今度は上空から声が聞こえる。

「げっ、リユン」

空に浮かぶリユン青年を見て、苦虫を噛み潰したような顔をするヘカーティア。

「仕事溜まっています。今日中に処理していただかないと」

「別に私がやらなくても良いと思わないかしら? ほら王様つて家臣に些事はぶん投げる

べきだと思ふのよ」

「いえいえやはりご本人様にやって頂かないと信用に関わります故」

「どうやらヘカーティアは仕事をほっぽり出して居たらしい。おいそれで良いのか女神様。」

「儂。あと貴女も。」

「うわっヘカーティア様?!」

私の左手を取るヘカーティア。右手にはいつの間にかれた先の少女を抱えていた。

「逃げるわよ!」

「うわっ!ちよ速いつ!」

「なっ! またお逃げになられるか! お待ち下さいヘカーティア様!」

ヘカーティアの速すぎる速度に浮かび上がる私の体。人の合間を縫うように通り過ぎっていく。

「やっぱりそうだ!」「ヘカーティア様だったんだ!」「きゃあヘカーティア様!」

混乱に陥る群衆を尻目に私たちは脱兎の如く逃げ出したのだった。

「ふう、危なかったわね」

かくして、なんとかリユン青年から逃げおせたヘカーティア。一仕事終えて随分

スツキリした顔つきだ。

「一体誰のせいだと……うぷっ」

あ……酔った。油断していた。いっただかの永琳もこんな感じだったのか……いや、あの時はちゃんと抱えて飛んであげたし。手だけ掴まれて、風になびかされたのとは違う、と信じたい。

というわけで、どうやらこの女神様は仕事をさぼって街の散策に繰り出したらしい。

「朝一番で『街を案内するから一緒に来なさい!』って声かけられた時から怪しいと思っただよ。この駄女神め」

初対面の戦闘と言い、この前の酒盛りといい本当にコイツが女神なのか怪しい。

「失礼しちゃうわね。私だっただまには休暇取りたくなるのよ」

「リユン君『またお逃げなられるか!』って言ってなかったけ?」

「…そんなことよりもここが私が貴女に紹介しなかった場所よ!」

「いや仕事」

「場所よ!」

笑顔が怖いヘカちゃん。有無を言わせないその圧力。まるで邪神の様だった。

「わかったって……で一体ここは何なのさ?」

周りを見渡すと黒いローブに木の杖とか錫杖を持った女性が沢山居た。

「ヘカーティア様!」「見回りは今日では無いはずでは?」「いやあのお付きが居ないからきつとまたサボリ……」

驚いて私達を見る彼らには皆同じ力が感じられた。それは本来人間の持つ力と少しばかり異なった力。そう、ヘカーティアが行使する魔法の力――

「紹介するわ。私達の弟子達よ」

ドヤアと宣言するヘカーティア。

「あのそろそろ離して頂けると」

脇に抱えられた少女が申し訳なさそうに呟いた。

……いまいち締まらないのはきつと彼女らしさなのだろう。多分。

私が連れられてきたのは端的に言うところ魔法使い育成所だった。魔法を司る女神ヘカーティアの元で魔法の技術を磨き、この国のためにそれを行使する魔法使いの集まり。どうにも女の子が多いのは性別的に魔術を使いやすいとかなんとか。

「ヘカーティア様のご友人なんですわね!」

先の抱えられていた少女が私に挨拶してくる。

「夢だよ。よろしくね。こんなに小さいのに」巫女^カだなんて凄いな

『巫女』というのとは一番優秀な魔法使いにつけられる称号らしい。まあ上が女神だから巫女という名前でもおかしくないと思う。

「はい! 授かったこの錫杖に恥じぬように頑張りたいと思います!」

おお: 眩しい。目が眩しい: その透き通った目で見つめられると不浄な私は浄化されそうだよ。

「うん頑張つて。応援してるよ、えつと: : : : そういえば名前聞いてなかったね」

「私ですか? 私はメディアと申します!」

「: : : : : ん?」

何か聞き捨てならない名前が聴こえたんだけど。

「?メディアですよ?」

「: : : : : そつか。将来男には気をつけなよ? うん」

「? : : : : : どういうことですか?」

この世界の彼女が一体どういった道を進むのかわからないけれど。前世にあった某聖杯を争う系のゲームの同名の人みたいにならないで欲しい。アレはアレで幸せになつていたけれど。

「自己紹介は終わったかしら? せっかくだしここを案内するわ。付いてきて頂戴」

「私も一緒にいきます！」

二人に連れられここを回っていくことになりました。

「いやあ凄いね、色々と。」

実に様々な場所があった。魔力を高める瞑想の間とか、実技を行なう訓練の間とか、水銀とかヒ素とか漂う魔術の研究室とか……最後の所はなかなかデンジャラスだったね、うん。

「私にも魔法って使えるかな？」

「魔法は技術の側面も大きいから根気さえ有れば使えるわよ」

確かに薬品とか使うところとかは前世の科学者達を彷彿させる。呪いの調査が一段落付いたらやってみようかなあ。

「楽しんで頂けたようで何よりです！」

メディアが嬉しそうに笑う。うん結構楽しかった。

「そろそろ帰ろうか。」

大分日も暮れてきた。

「ヘカーティアは仕事も残ってるしね。」

「せっかく忘れてたのに思い出させないで頂戴。」

嫌そうな顔をしているが、しかし自業自得である。

「ああ、そうそうヘカーティア様。最後に一つお尋ねしたい事があります。」

「ん?何かしら?」

「少々お待ちを」

そう言つてメディアは何処かに行き、すぐに戻つてきた。

「この杖つて何かご存知ですか?」

そう言つて持つてきたのは先に紺色の玉が浮いて付いて居るよく有りげな杖。

「ああ、懐かしいわね。昔変な人間に頼まれて作ったのよね。」

「何の杖なの?」

「これはね……そうだ。僕、貴女が使つてみなさい。多分念じれば使えるわ。」

「私が?」

そう言つて杖を受け取つた。念じるつて何を……

「うわっ!」

瞬間力が私の中に流れ込んできた。それとともに私の体が光りだす!

キュピーン！という効果音とともに服装が変わっていく！

ちよつとエツチなアングル！そして徐々に見えてくる衣装！

これは……！これは……！！

「魔法少女まじかる・ハカナさーんじよつ！」

そして最後に決めポーズ！

∴

∴

「ちよつ待つて、今の無しで」

なんだか軽く引き気味なメディアと笑いを堪えるヘカーティアが視界に入る。

「つぷ……はははっ！ なにそれ痛！、痛過ぎるわよん！」

「やめろ！忘れる！ というか、なんでこんな物あるのさ!？」

私は現在フリルの着いたひらひらのミニスカートなドレス。腰には薄紫色の大きなリボン。手にはなぜか白い手袋。手に持った杖も合いまってまあなんといいかよくある魔法少女になっていた。

……いやこの世界魔法少女なんて概念ないよね!？」

「一体これはなんなんでしょう……?」

「確か『魔法少女の杖』って名前だったはずだわ。その人間は『時代は魔法少女だぜ!』って言うってたわね」

「いやなんでこんな物作ってんのさへカーティア……」

色々謎だよ。私以外にも転生者が居たのか……? いや真相は分からない。

「まあいいじゃない。それ貴女に上げるわ。良く似合ってるもの……つぶつぶ。」

「いや笑ってるよね!? すごく恥ずかしいんだけど!」

そりゃ魔法少女系のアニメは好きだったけれど、あくまで見るのが好きなのであつて私自身になりたいわけじゃあ無いのだよ……ともあれかくして魔法少女杖をゲットしたのであつた。

「へカーティア様お待ちしておりました。」

「なんで裏口にいるのよ!?!」

神殿へと戻ってきた私達を、神官たちは裏口で待ち構えていた。へカーティア様(笑)は彼らに連行されて仕事に戻っていった。何回も言うけど自業自得である。

「あれ? リュン君は行かないの?」

「ええ……夢様にお話が御座います故。」

ここに残ったのは私とリユン青年だけだった。どうやら私に話が有るらしい。

「話つて？」

「……先日は申し訳ありませんでした。」

「へ？」

リユン君は私の前で膝を着き頭を垂れたのだった。

「うわー！ちよちよそんな頭下げなくて良いって。元はといえばクラウンピースのせいだったわけだし」

ちなみにクラウンピースは宮殿の雑用をやらされているらしい。ざまあ見やがれ！

「いえ、元はといえば私が未熟だった故の過ち。詫ても詫きれません」

真面目だなあ。神官たちが真面目だから、あのちよいと適当なヘカーティアとバランスが取れてるのかもしれない。

「本来ならば罰を受けるべきですが、ヘカーティア様からは有り難いことに許しを得ています。しかしそれでは私の気が収まりません。ですので何か仰つて下さればこの身でできる限りのことをする所存です」

なるほどなるほど。それはこちらとしても有り難い。

「それじゃあ……あの時言った約束覚えてる？」

「あの時……とは？」

『ゲーム』の話だよ。まあ色々と微妙な所だけど一応は私の勝ちってことで。だから君のその力を貸して欲しい。君のその目で見たいんだ」

——私のこの呪いを。

五話 魔法少女に私はなる！（黒歴史は増やささないから
なっ

「私と同じ力…?」

「ええ貴女の根底にかかっているその膨大な力。それは貴女の持つものと酷く近似しています」

能力を行使すると虹色に輝くその目。思わず魅了されそうな程美しく輝いている。曰く表現すれば『あらゆるものを見通せる程度の能力』を持つという。その目を持って私の根底にあるという莫大な力。誰かに何のためか掛けられた不死の呪いそう私が思っているそれを見て貰った。

のだが……

「私がこれを掛けたってこと……?」

「見た限りではそうなります」

そんなはずはない。

私にそんな事をした記憶はない。私の記憶が無いだけ……？ いや、そもそもこんな事私に出来るはずがないのだ。

事象を無理やりねじ曲げて死を無かったことにする呪い。偶に『時』さえも巻き戻す。そんなものを私が自分に掛けるはずが無い。もちろん気持ち的なことも有るがそもそも圧倒的に力不足だ。生まれ変わる前なんてもっと無理だ。ただの高校生にそんな事は出来ない。

「……お役に立てなくて申し訳ない。これ以上貴女に伝えられることは無いようです」
その金髪の髪を私に向けて謝るリユン君。礼儀正しい今の態度が本来の彼なのである。

「いや、良いよ……うん。ありがとうね」

せっかく調べてもらったのにまた増えた疑問。この呪いは私の力の形と酷く似ているのだという。

としたら呪いの根源は私が今妖怪である理由に関係するのかもしれない。それくらいしか考えられない。

生まれ変わるときに私の力を使って私を生まれ変わらせた……だとしたら、私は一体何の為に転生させられた？

私は一体……何なんだ。

「ありゃ？友人様どうしたの？こんなところで黄昏て。」

空からひらりと降りてくる青と赤の妖精。心地の良い日差しに反射するその透き通った羽は綺麗だ。風景に美を感じる様に、自然を元にする妖精の特徴なのかもしれない。

「……ああ、なんだクラウンピースか」

「なんだとはご挨拶だね」

場所は何時だかヘカーティアと話したテラス。そこに私は寝そべっていた。せつかく見つけたと思つた手掛かりのはずが、むしろ謎が増えてしまったので今後をどうするか考えていた……わけでもなくないのだが。

取り敢えずなんとなく寝転んでぼうつとしていたのだった。軽く微睡みに落ちていたのは内緒だ。

「何か悩んでるならアタイに言ってみなよ。このクラウンピース様がどどんと解決して

あげる！」

えっへんと腰に手を当て胸を張って言うクラウンピース。ない胸は張っても無い…それは私も同じだしどうでも良かった。しかし一体どこからその自信が出てくるのか…

「じゃあ……私ってなんだと思う？」

言ってみなと言われたので言ってみる。

「?!妖怪なんですよ？ どうしてそんなこと聞くのさ。頭でも打った？」

キョトンとした顔で尋ねてくる妖精さん。

「いやあ別にそういうわけじゃないけどさ。なんで私妖怪になったのかなーって」

「……それって元は妖怪じゃなかったこと!? 何だったの？ 獣？ 人間!？」

あ、言ってしまった。急に興味を示すクラウンピース。好奇心を刺激したらしい。

いやまあ特に隠してたいわけじゃないからいいんだけどね。ねえねえ！と聞いてくるキラキラさせたその目が眩しい。

「まあそれは置いておいて……どうして妖怪になったのかわからないんだ。そもそも何の妖怪かすら謎だしね」

ケモ姉だったら犬科。他にも集落にいた妖怪は鳥や何か爬虫類等モチーフ……っといったら少し変だけど。その元となる物がすぐ解る者が多かった。私は……なんだろう。白髪幼女の容姿は一体何がモチーフなのだろうか。綿菓子？ 雲？ はたまた

ティツシュ?

ケモ姉は「アンタはどこか儂いから名前を持って」と私に「儂」という名をくれたが、儂いモチーフとはなんだろう。あまりに漠然としていて検討もつかない。

「ええアタイそっちの方が気になるんだけどなあ……まあでも、妖怪なんて理由が有つてなるモノじゃ無いんじゃないの? いつの間になつてゐるみたいないな?」

まるで草みたい、と割とひどいことを言うクラウンピース。普通はそうなんだろうけど、まあ私が例外なのは自明か。

「でもそつかあ……まあ友人様の気持ち、わからなくもないよ。」
「?」クラウンピースも何か有るの?」

へえ意外だ。天真爛漫さが目立つこの悪戯妖精にそんなものがあるなんて。

むしろ彼女が悩むことに驚きだよ。

「失礼なっ! あたいだつて悩みの一つや二つくらあるから! そこらの妖精と一緒にしないでよ!」

いやあごめんごめんつて。うんうんクラウンピースはすごいすごい。

「全然思つてないでしょそれ……まあいいや。あたいも自分がどうやって生まれたか良く覚えてないんだよ」

「ん? それって普通じゃない? さつきあなたが言ったようにさ。妖精も自然に発生

するんでしょ?」

「じゃああたいつて何の妖精だと思う?」

何の妖精……合衆国の妖精……?

なんてありえないわけで。言われてみれば彼女も私と同じく根源が不明なのかもしれない。

「それに生まれたときの事は覚えてないんだ」

それはそんなもんじゃないだろうか。普通は自分が生まれたてのときのことなんて覚えてないはずである。

「うーんそうなんだけど……なんというかね。覚えてないっていうのは違って、覚えてるんだけどよくわからないみたいなの……あれこれだと覚えてるじゃん、うーん……」

「何となく覚えてるってこと?」

「うー、まーそんなかんじ。何か凄く暗くて黒かったって印象は残ってるんだけどね。余り意識がはつきりしなかったから」

乳児の頃が時折フラッシュバックするのなあれだろうか。しかし、暗くて黒いつて一体なんだろうか。なんか凄くやばそうなんだけど。

「うん、多分あんまり良い所じゃないね。よく思い出せないけど。そこにあんまり……戻りたくはないかな」

少し悲しげに笑うクラウンピース。自分の生まれ故郷がそんな所だったら余りいい気分じゃないだろう。

「ごめんね。変なこと聴いて」

「いやいいんだ。そもそも気づいたときにはこの辺に漂ってたからね。あんまり気にならないよ。何より人にイタズラするのが楽しいし！ あたいにはぴったりの力も有るし！」

その力は是非使用を控えて欲しいが、まあ妖精らしいお言葉である。そうだね、あんまり気にしても仕方がないことだ。……普通ならね。

生憎と私は普通じゃないのだ。何故ならどれもこれも自分の命を断つためにやっているわけだから。でもまあ彼女を見て気にしすぎても意味が無いか、とも思えた。

「……クラウンピースと話してたらなんか元気だよ。悩んでも仕方がないね。うん、見習つてもつと脳天気にかう！」

「なんかあたい貶されてる気がするんだけど？」

そんなことないよ？ 元気なのは良いことだよ、うん。

さて手掛かりが無くなったのでまた一から調査開始である。

「ヘカーティアー何か無い？」

ここは王座の間。…というのは私が勝手に呼んでいるだけだ。要は以前彼女と酒を交わした玉座のある間である。一応は神聖であるそこに居る女神様に私は問いかけた。今日の彼女は赤い。

「特に無いわねえ。それにあつても教えないし……というか貴女、暇なら手伝つて頂戴よ。もう3日は書類達と戯れてるわ」

「いや一日ずつ三人で交代してるじゃん」

「意識は共有してるからウンザリが三倍なのよん」

ヘカーティアは女神であり王様なのである。つまり他国とのやり取りなり通商の話なり処理しなければならぬ仕事がそれなりに有る訳で。結構馬鹿にならない量だ。

うん……前世的観点で言うると未だ紀元遥か前なはずなのだけれど、思いの外人間の活動が活発らしい。神様がこんなにも近くに居るから当然と言えば当然なのだけれど。やはりこの世界は前世と違った歴史を歩んでいるのかもしれない。

「いやほら私忙しいからさ。応援してるよ」

「……布団敷いてその上で菓子食いながら本を斜め読みしている奴のどこが忙しいのかしらん？」

誰だよそんなニートみたいなことしてる奴。あ、私だったね。

「いやあ手掛かり無いと特にする事が無いからねえ。時間だけ有り余って仕方ないよ」

妖怪や神様はよっほどの事が無い限り悠久の時を持つ。それは個人的にありがた迷惑な話だけでも。

「……はあ。なら魔法を学んでみたらどうかしら？」

魔法ねえ確かに封印とか呪いとか解く術とか有りそうだし。それにうーんでもなあ……

「だってヘカーティアの魔法で解けないんでしょ？ この呪い。だったら私が頑張ってもなあ」

「違うわ。解けないんじゃないわ。解かないだけよ。それだけ時間を捻じ曲げるくらい膨大な力の封印を破壊するなんてそれこそ、この星が半分になるわ。それに貴女と私は仲良く木っ端微塵よ」

「いや個人的にはそれでも……ああでも流石に地球が半分なくなるのは駄目だね、うん」
とのことである。一体私は核弾頭か何かなのか。いやアレだけの核でも地球は吹き

飛ばなかったのだからもつと危険だねこれ。本当何で生きてるのだろうか？早く死んでしまえ。

どうでも良いけどヘカーティアは木っ端微塵になっても何とかかなりそうではある。

「貴女一体私を何だと……まあ、そう諦めるのは早いわ。私だって魔術をすべて把握してるわけじゃないのよ」

「へ？ そうなの？」

それは意外だった。魔を司るっていうからもうなんか、むしろ私自体が魔術だぜ！みたいな感じだと思ってた。

「一体どんな感じよそれ。でも少し悔しいけどね。いわゆる魔の力はまだ私にもわからないことが多いのよ。そもそも魔力の根源が何処か分からないし。そもそも私が魔術の神なのは人間たちが魔術というものを作ったからよ」

ふむふむ、ヘカーティアにも分からないことか……たしかに可能性が有るかもしれない。

いやでもヘカーティアが無理なら私も無理じゃね？でもまああくまで可能性の一つとして考えておこう。

「そう言えばこの前クラウンピースと話したんだけどさ。ヘカーティアって自分の出自って覚えてる？」

「出自？いきなりね」

そうやって私と駄弁りつつも彼女の手は動いている。意外と仕事の出来る女である。

「そうね、私は元々地上よりずっと上の方、あ、上っていうのは位置的な物じゃなくてね。もつと世界の格的なものよ。そこで生まれたのよ。あんまり覚えてないんだけどね」

へえ、ずっと上の世界。何か神々しそう。

「そうね神々しいも何も、親族達の本拠そのものだからね。私以外の神もそこで生まれたのよ。貴女みたいに変質して神格を持つ人もまれに居るけどね」

「いや私は神様じゃないんだけど……どんなところなの？」

「神聖な場所よ。穢れなんて全くない何処までもキレイな場所よ。」

「で、なんでまた地上に？」

「暇だったからよ。何も無いわけじゃないけど、やっぱり多くは無いの。それに地上で神を求める声が段々大きくなってきたからね。神達の間で地上に降りるのが流行った時期があつて、じゃあちよつと行ってみようかって感じね。それで来てみたらいつの間にか祭り上げられて今に至るわ」

まあなんと軽いノリなこと。暇つぶしで降臨なさっていたとは…

「神なんてそんなもんよ。特にこの辺にいる連中はね」

「そんなもんなのかな……？」

毎度思うけど神様って一体。

「……………ん？」

話しながらも書類の山に目を通していたヘカーティア。前屈みになっても落ちないその頭の球体は一体何なのかとか突っ込みたいところでは有るが、それより彼女が珍しく眉を歪める原因が気になった。

「どうかしたの？」

「ちよつと気になる報告があつてね……………」

難しげな顔で書類の1つを見つめるヘカーティア。一体何があつたのだろうか。

「巨大な物体の目撃証言なんだけどね。やたらに多いのよ。同じようなのが三件」

巨大な物体ねえ……………なんだろうね？真つ先に思いついたのは飛行機だけど。そんなものこの世界に（月は除く）無いだろうし。

「見間違えがよくあるから余り気にしなくていいとは思うのよね。この前なんか霧に映った光の輪を退治して欲しいなんて言われたわよん」

蜃気楼って奴かな？あれブロッケン現象だっけ。どっちかよく知らないけど、どちらにしる退治できる物じゃあ無いね。

「ただ……………」

「ただ？」

「どうやら何か引つかかるところがあるらしい。」

「——いや、思い過ぎしだわ。第一もう片付いた事だし」

「そう？　よくわからないけど。まあヘカーティアが良いなら良いけどね」

「そういつたヘカーティアはすぐに次の仕事に取りかかる。その顔に先ほどまでの感情はない。さして気にすることも無かつたのだろう。」

「んあ——全ツ然わかんない！」

私はびつしりと文字が敷き詰まった本に私は音を上げた。最近読んでいるその本。私は本を読むのが割りと好きだ。でもそれは主に物語の本であつて、専門的な情報の乗った教本とかは範疇外なのだ。

「何だ属性つて！もつとデバイスとかC A Oとか使つてちやちやつとやろうよ！」

「外部機器万歳！いや有つても出来るとは言つてないけどね！」

「よくわからないですけど、何か魔法の行使に使う媒体が欲しいのなら、前の『魔法少女

の杖』とか使えば良いんじゃないでしょうか？」

「おいこら魔法巫女！ 私の黒歴史に塩を塗るなあ！」

痛む！痛いッ！

メディアがさも当然のように言ってくる。駄目だ。アレはもう二度と使わないのだ……！これ以上黒歴史を量産してはならぬ……！

「しかしまあよくこんなに覚えられるねえ」

「それが魔法の勉強ですから。」

なんでも魔法には属性と言うかなんというかさういうのが有るとか。それでその属性に適した触媒を使うことで魔法の補助とする、らしい。高位の魔導師になるとそれが無くてもそれなりに魔法は行使できるのだそうだ。本にズラ〜って羅列された触媒（それ）を覚えることで効率の良い魔法や新しい魔法が使えるようになるのかなんとか……

「いや無理でしょ、量多すぎだって……」

「まだそれは初級の本ですよ？せっかく基本ができるのですから頑張りましょうよ」

「基本の魔法って言っても、魔力の流れを感じられるだけじゃなか」

というわけで私はメディアに魔法を教えてもらっていた。彼女の教え方は悪くないので魔法にからきしな私でも色々分かった。

魔法は魔力を行使して事象を起こすもの。昔少し研究してた妖術に近いものらしい。

その源は妖力ではなく魔力なのだが。ちなみに魔力も妖力も霊力その本質はさして変わらない物のように感じられる。

さてそんな魔術なのだが当然ながら誰でも使える訳では無い。

この世界には二通りの魔法使いがいる。

一つは先天的に魔力を持ちその行使に長けている者。これは家系的なものも関係してくるらしい。そもそもが魔法を司るヘカーティアなんかもこの分類に入るのだろう。

もう一つは後天的に魔法を学び魔力を扱えるようになる者。ようは魔法の鍛錬を続けその末に魔法を行使できるようになる事だ。

当然ながら私を持っている力は妖力と神力なので魔力は扱える範疇外なのだ。

「後天タイプの人が最初から魔力の流れを感じられるって言うのは凄いアドバンテージなんですよ?」

まず魔力を感じることから始める。出来なかつたらその時点で諦めるしか無いらしい。感じられるようになったら知識を学び、実践していく内に魔法を行使出来るようになる。

つまり最初の段階を突破した私は少なくとも魔法を使えるようにはなるらしい。

「いや本来そうなんだろうけど。これきつと『能力』のお陰だからねえ」

私の持つ「あらゆる大きさと向きを操る程度の能力」のお陰だろう。「流れ」には当然

「向き」と「大きさ」がある訳で。それなら感知するのは容易い物である。

「でも全然魔法使えないじゃん、意味ないじゃん……」

感知は出来ても行使は出来ない。目の前に見えるのに自由に動かせないというのは少しもどかしい。なんなら『魔法を使う程度の能力』とかのが良かったよ。…いやでもそうすると何かもう魔法少女っぽいな。黒歴史は（ry

「そのための勉強ですよ。儂さんから頼まれたんですからね。やるからにはしつかりやりますよ！授業の間は私の事は先生と呼んでくださいねっ！」

えへんと指を立てて得意げに言うメディアさん。きつとこうやって教えるのが好きなのだろう。随分楽しそうなこと。

この後私は頭がパンクしそうな位激しいメディアの講義を受けたのだった。前世でもこんなに勉強した事無かったよ。

終始笑顔を決やさず、苦しむ私の事を見ていた彼女はなかなか鬼かもしれない……

六話 理不尽なまでの優しさを踏みつぶす理不尽さだつてあるわけで

「何というかき、距離が近いよね」

ふと思つた事を呟いた。

「何のこと？」

へカーティアが不思議そうに聞いてくる。

私達は王宮の神官達を連れ街道を歩いていて、相変わらず賑やかなその町並み。いつ見ても人で溢れているのは、ここがいわゆる首都的なものである由縁なのだろうか。しかしいつもと違い今回は、群衆は皆整列していた。私達は王宮に住む従者を連れて街の巡回へと出ていたのだった。ちゃんとした行事と言うこともありへカーティアはいつも以上に豪華な格好をしている。

彼女の性的にもつとラフな格好がいいと愚痴っていた。

私達の行向く先には群衆に囲まれた道。正直そんな花道みたいな道を彼女の隣で歩くのは居心地が悪い。だけれど私は一応客人等言うことになっているらしいので顔を

出さないわけにはいかなかった。

周りを眺めつつ話を続ける。

「神様と人の距離のこと」

「何よいきなり。そう？普通じゃないかしら？」

彼女、ヘカーティアは王であり女神である。結構特殊な立場だななんて最初は思っていたのだけれど、この世界、この時代ではわりと良くあることらしい。「天上の世界は暇だからそういう神は多いのよ」とのこと。

「私が昔……前に居た所は神様なんてそれこそ絶対に視認できない位には距離があったからさ」

「へえ、そうなの」

群衆の中から一人の小さい子どもが親に抱えられて私達に向かって大きく手を降ってきた。ヘカーティアは微笑みながら手を振り返した。

こんな直接的な触れ合いは愚か、そもそも神を信仰するという事自体が怪しい世界だった。

「でもそれは……少し悲しいわね」

「神様的にはやっぱりそう思う？」

皆彼女を一目見るために首を伸ばしたり背伸びをしたりしている。見渡す限りの

人々は彼女を求めてやってきている。

「神様……とは一概には言えないわね。人を嫌う神も沢山居るから。でも、もし世界がそうなったら私は少し悲しいわ」

「……そっか」

皆彼女を敬愛するように、彼女もまた彼らのことが好きなのだろう。

「なんだか女神みたいだね」

「みたいじゃないわ。私はこの土地の女神。まあ神が必要ない世界というのもそれはそれで面白そうでは有るけどね」

前にいた現代では幻想上の物として片付けられてしまうもの。それが普通に存在する世界。悪くないななんて思う。

「貴女は余り人と関わろうとしないわよね。メディアくらいじゃない。話すの」

「ああうん。まあちよつとね」

「余り言う気は無いけれど、別段気にしなくても良いんじゃないかしら？ どうせ彼女らは貴女より短命よ」

「それはまあ。でもそれだけじゃないんだけど。……いやそもそもそれはそれで憚れるけどね？」

何のことも無いようにそうへカーティアは言うが、確実に先に行ってしまう者たちと進

行を深めるといいうのも、普通辛いんじゃないか。

「だからこそよ」

「はあ」

そこは神様視点ということだろうか。

「ん。まあ考えとくよ」

「はあ。全く変なところで頑固なんだから」

私の暗に意味した考えません宣言は見透かされているようだ。

余り人とは関わりたくない。その理由は色々有れど、解決する物じゃない。解決してはいけないし、その実答えもわかっているのだから。

六話 理不尽なまでの優しさを踏みつぶす理不尽さだってあるわけで

「魔法陣……展開」

手を伸ばした先には机の上に置かれた何の変哲のない石ころ。その置かれている地面に薄紫色の魔法陣が光る。

集中して魔力の流れを感じる。そしてその流れを事象を起こすために操る。

「浮遊」

私の呟いた言葉と共に魔法陣は輝きを増し、そしてゆっくりと石が浮かび上がった。

……

「……うおっしやあ！浮いたあ！」

浮いた！浮いた！！小石が浮いた！

某アルプスのなんたらク○ラが立った。ぽいセリフが思い浮かぶ。いやでも感動物だよ。マジで。

「やりましたね！夢さん！」

メディアも喜んでくれているようだ。あれから数ヶ月。魔法の修練をし続けた私はついに小石を魔法で『浮遊』させることに成功したのだ！これで私も立派な魔法使いだぜっ！

……はいそこ、しよぼいとか言わないツ！

「結構時間かかったねえ」

「最初はこんなもんですよ」

ゆつくりと石を降ろし魔法を解く。体が魔力の流れを感じる。まだまだ少ないけれど確実に操れる魔力量は増えている。何事も積み重ねが大事である。

「……因みにメディアはこれやるのどれ位かかった？」

「え？あ、ははは。一週間位ですかね……？」

はい。世の中には才を持つ物と持たざる者が居るのです。

伊達に年少で巫女を務めているわけじゃない。その類い希なる才能と知識を求める好奇心と惜しまない努力の結晶なのだろう。

……いや私は普通だから。彼女がおかしいだけだから！

「しかしいつになるやら……」

この呪いを穏便に解除できる新しい魔法。それを作るのが一応の目標ではある。本当にいつになるやら。

私には腐るほどの時間が有る訳だからいつかは辿り着けるのかもしれない。けれどそれに甘んじてはいけない。魔法の研究をは続けつつ一応他にも方法は探っておこうとは思う。そしてさっさと死ぬのだ。

「じゃあ次の基礎魔法やりましょうか！」

「え、ちよつと位休憩しても……」

「魔法は一日にして成らずです！ 継続が大事なんですよ！ じゃあ次の魔法のためにこの本の内容を全部覚えて下さいね！」

ドンっていうおおよそ本とは思えないような重量感のある音。そして僅かに木の机が軋む音。思わず目眩がする。

オーマイガツそうかここが地獄か！ あれ！ もしかしたら私ここで死ねるかもしれない!?

「あら、お帰り。メディアにまたこつてりやられたのね」

「なんでわかるのさ……」

「オーラが黒いからよん」

傍目から解るくらい疲れているらしい。妖怪のこの体的には全然問題ないのだけれど、やっぱり精神的な疲労はどうしようもない。勉強というのは前世でも今世でも一様

に疲れるものだ。前世で真面目に勉強していた訳でもないけどね。

メデアに言つて量を減らしてもらおうか……

いや、止めておこう。自分から頼んだので断るのは失礼か。ああ日本人の悪いところだね。よく言えば慎ましきつて奴。

何度も言うように私は日本人、というか人ですら無いのだけれど。

「ありや友人様が珍しく妖怪っぽい？」

どこから出てきたかクラウンピースがそんなことを言う。ぽいも何も私は妖怪だよ。

「いやあ友人様は街の外にたむろつてる奴らと全然違うからさ。ついつい妖怪だつて事忘れちゃうんだよね。襲つてこないし、人間襲わないし」

まあ……確かに妖怪らしくは無いのかもしれない。根っこはやつぱり人間なのだろうか。余り気にして無いつもりだけど。実はつもりなだけなのかも。

「それが夢の良いところよ」

むっ……何さ褒めても何も出ないよ。でも、ありが——

「いや、面白い所かしらね？」

いや撤回。その寧猛な笑みは何ですかね？

「それにかといつて弱いわけでもないわ」

そんな好戦的な顔されても困る。戦いたくないからね。

「あら残念ね。でもそうね確かに今闘うのは勿体ないわね。もう少し魔法を使えるようになったら、ね？」

「ね？じやないよ……」

女神がそんな好戦的で良いんですかね…いやもう今更過ぎてこれが普通な気がしてきました。これが慣れか。恐ろしい。

「本当にご主人は能力かけるまでも無く狂ってる」

「あらか言ったかしら？」

「い、いやあ何も言っていないですよん!？」

クラウンピースの呟きを聴き逃さないご主人様。地獄耳だ。しかし彼女の意見に同意……あ、いや嘘です。睨まないでっ。

「まあ良いわ。そうそう儂。貴女この後暇かしら？」

「？この後つてもう日が暮れ始めてるけど……」

魔法の授業を集中して受けていた私は、外に出た時その暗さに驚いたのだった。本来なら外に出る時間では無いはずだけれど。

「ちよつと付き合っってほしいのよ」

と彼女は言うのだった。

「でこんな所まで来て何するのさ?」

私達は町からかなり離れたところまで来ていた。周りには木や草がまばらに生えているだけでそれ以外には何も無い。実に殺風景だ。

「掃除よ」

ヘカーティアはそう言い放った。しかし先に述べたように掃除するような物は何も無い――

「あら? 本気で言ってるの? 貴女ならわかってるでしょ」

「……はあ、いやそうだけどさ」

思わず溜め息をつく。そりやそうだ。解らないわけが無い。だつてさつきから気になつて仕方がない。さつきから向けられる突き刺さんばかりの無数の敵意。

姿は見えないけれど視線というか刺線? を感じる。なるほど、そしてこのまま死戦に突入すると。

「何馬鹿な事言ってるのよ」

「いや、だってねえ。洒落の一つも言わないとやってられないよ。前から言ってるように私は戦いが嫌いなんだって」

戦いは嫌いだ。だってこれはゲームじゃないのだ。文字通り生死をかけた争いになってしまう。この前も危なかったのだから。そもそも現代の日本に生まれ育った私は命のやり取りなんて遠い世界の話だった。故に相手が自分と同じように知性を持っているとどうしても躊躇が抜けない。

「貴女がどうしようもなく優しく、相手を傷つけないのは解ってるわ。」

「……だからそんなじゃないよ」

そもそも私は死ねない。だから真剣勝負みたいなものに申し訳なさを感じるのもある。その時点で色々と甘いだけだ。

「というかヘカーティアだけで十分じゃないの。三人でパパッとやっちゃえば良いのに」

そもそも話、私がここにいる必要が余り無い気がするのだ。彼女が勝てないなんて事が万一有るはずがない。

「そうだと良いのだけだね。」

「え、ちよつと止めてよ。らしくないよ?」

珍しい。彼女が弱音をほのめかすなんて。意外と余裕が無いのか?と言うかへ

カーティアが無理なら私にも無理なんだけど。

「あら？ 貴女には私を一度欺いたその希な力があるじゃない。」

「いやあれは偶然だって」

もう一度彼女に通用するとは思わないし、同様に他の人に通用するとも限らない。

「さてと……そうこうしている内に見えてきたわよ。」

遠い向こうを彼女が指差す。辺りは大分暗くなつていてうつすらと丸くなりかけな月が見えている。人間だったならそんな中、遠くなど見えたもんじゃ無いけれど、そこは妖怪特有の視力で。

「……うわぁ」

思わず声が出てしまう。いや今すぐにも帰りたい。そう思うのは仕方ないだろう。

視界に入ってきたのは無数の巨大な影。これだけ距離があるのにあれだけでかいという事は、近づいたらそれこそ見上げても見切れないくらい巨大なんじゃないだろうか。

「あれ……何？」

『ギガンテス』。その昔、西方の女神の血から生まれた神の血統を引き継ぐ種族よ。巨人族とも言われるわね」

巨人族。なるほど見た目そのままである。前世の漫画とかにもよく出てたよね。塀

を壊して人の生活圏に侵入してきたり、1000年間決闘し続けたり。その全てにおいて共通しているのは皆圧倒的なまでの怪力を有しているということ。その理不尽さは神にも等しい。

「うん、もう帰りたいたいんだけど」

「あら？　貴女にそれが出来るかしらん？」

巨人一人ならどうにかなるかもしれないなんて思った。もうその時点で色々私も可笑しいななんて思うけど。しかし現状はそれすらも超えていく。

「いやだってさ……あの数は一体どういうことさ？　3桁位軽く行きそうだけど」

その数がやっぱり可笑しい。対する私達は二人、ヘカーティアが増えても四人な訳だ。圧倒的な兵力さ。巨人族一人一人の戦闘力も馬鹿にならない。

「そうね、報告より断然物騒だわ。でも私達以外にアレを止められる者は残念ながらこの国には居ないわ」

私らを抜いた最高戦力はメディアかりユン君だろう。ひしひしと感じる力から、残念ながら彼らがあの化け物に敵うとは思えない。

「そうだけど……戦わない選択肢は無いの？」

そもそもなんで戦わなきゃいけないのさ。いくら戦闘狂（バトルジャンキー）だからって余りに無駄な戦い過ぎやしないだろうか。

「気付かないのかしらん？あいつらはまっすぐこつちに向かっていることを。そして私達の背中には一体何があるのかを」

「なるほど。それじゃ確かに引けないわけだ。」

巨人族の向かう先、そして私達の背中には人々の住む王都がある。つまり彼らはそれを狙つて歩みを進めているわけである。

「なんでそんなのと敵対してるの。ヘカーティア一体何したのさ？」

「心外ね。今回ばかりは私も被害者よ。本来関係の無いはずの西方のクソ野郎に『最近物騒だから死なないように気をつけてね』って随分とノリの軽い手紙を貰っただけで、他に何も知らないのよ」

苛立ちを隠さずにそう言う彼女。クソ野郎の所に力が入っている辺りその人と過去に何かあったのだろう。

「さてと始めましょうか。知性の欠片もない奴らだけど、もし貴女が無理だったら止めは私が刺すわ」

「流石にこの国が掛かつてるんなら私だつて頑張るよ。多分」

あまり関わっていないとはいえない何人か知り合いは居るし、何よりあの街がこんな怪物どもに壊されるのは納得がいかない。巨人族を始末することにしよう。どうせ死ぬつもりなんだからこれくらいしても罰は増えないだろう。

「……夢はやっぱり優しいのね」

「だからそんなんじゃないって」

向こうから私達に向けて無数の岩が飛んできた。まるで小石かのように投げられたそれはしかしどれも巨大だ。私は能力でそれを破壊する。ヘカーティアが魔法を使ってそれを消滅させる。

「向こう方はやる気満々みたいね」

そう言いながら彼女は他の二人を呼び出した。三色のヘカーティアが出揃う。

「ふっ女神としての力を思う存分見せてやるわ」

「……なんか楽しんでない？」

好戦的なのは今回は良いか。……いや、良いことか？

「とりあえず売られた喧嘩を買いに行きましょう」

「はいよ」

私達はそこから飛び立った。

「うわあ……やっぱ近くで見るとすごいね」

奇観を呈すというのはこの事。

巨人族はやはりとういうか、かなり奇怪な格好だった。上半身は人間ほいのだがやたらに毛が多く、下半身に至っては蛇か竜か、とにかく鱗が見て取れた。今は足を止めているが、きつとそれをどしどし鳴らしながら進んでいくのだろう。

私達は巨人族と対峙していた。今はお互いに物音一つ立てない。やけに明るい月明かりの中そよそよと吹く風の音だけが聞こえる。

「……来るわよ」

ヘカーティアがそう呟いた。

ガオオオオオオ！直後に響き渡るのはおよそひと人の物とは思えない重量感のある叫び声。それを期に彼らは動き出す。

かくして戦いは始まった。

頭上から巨大な岩が降ってくる。とうか最早小山と言っても過言ではない。私は

その山に向かって飛び上がり触れる。そして『固まる』に関する向きを変え爆散させた。今度は下を見ると無数の巨人がその口から光線のような物をこちらに向けてきた。それを手で受け止め反射してその巨人へと返す。自らの血からに打たれた巨人は木っ端みじんに砕け散る。血が吹き飛ぶ。

「うえ……」

自分に降りかかってくる血にとてつもない嫌悪感を感じる。吐き気もするが止まるわけにもいかない。着地した所を無数の巨人に囲まれる。一人の巨人がその拳を私に向けて振り下ろしてきた。それを何とかよけ再び上空へ。そして一人の巨人の頭に触れ能力で破壊。

能力性質故直接攻撃のほうが効率が良いのだけれど、個人的には敵と相対する恐怖感もあり遠距離からどうにかしたいのだけれど……

再び地面に着地した所に駆け寄ってくる巨人。そちらへ向けて妖力の込めた特大の炎弾を打ちこむ。煙に包まれる。

しかしそれはすぐに晴れ中から巨人がこちらに手を伸ばしてくる。先程の炎弾が効いた様子はあまりない。その巨大な手で体ごと掴まれるが、その手を能力で破壊。そして痛みに呻くその頭を蹴り飛ばす。蹴られたそれは凄まじい速さで体と分離し、側に居た巨人の胸元を貫いた。

……我ながら バーサーカー 狂戦士している気がする。こんな私のキャラでは無い。

それもしょうがない。妖術の類が全くと云っていいほど聞かないのだ。神力を込めても無駄、いやむしろ扱いに慣れてない分余計に効かない。

故に物理的に攻撃をするしか無いのだ。巨人族はその強大な怪力と鋼鉄のような体を持つている。碌な戦闘経験を積んでいない私が、今まともに戦えるのは一重にそれをもっともしない能力のお陰だった。

しかしキリがない。これだけ始末しているのに一向に向こうの攻撃の手は止まない。このままだとジリ貧だし何より気分が悪い。

(いやこれは人じゃない)

そう自分に言い聞かせても何処か引つかかるところが有る。それにこの巨人たちとメディアたちを天秤に掛けたら簡単に答えは決まっている。

そうだ利己的なのは自分の長所^{短所}じゃないか。

「ま、そんなこと考えてる場合じゃない、つか!」

巨人の蹴りを受け止めその体を爆散させる。

(ヘカーティアは大丈夫かな?)

戦いが始まってすぐに彼女とは別れたのだった。ちらりと彼女の一人の方を向くと魔法を放ちまくっている彼女の姿が見えた。まあ一応は大丈夫そうだ。……いや、どうに

も私以上に手こずっている気がする。

「貴様がヘカーティアか」

そこで地が響くような声があった。巨人族達が動きを止める。そして一際大きな巨人が赤いヘカーティアに向かって行っている。どうやら周りの巨人は攻撃をしないようなので私は彼女の隣まで飛んでいった。他二人のヘカーティアも集まる。

「ん？お前は……神では無いな。そして人で有るはずがない。なぜ妖魔風情がこんな所に。まあ良い」

その巨人族はあからさまに他と違かった。

「ギガースの癖に喋れるだけの知能が有るのね」

「当然だ。私はかの根源の女神に選ばれし者、クリュティオス」

クリュティオスと名乗ったそいつの言葉を聴いたヘカーティアが顔をしかめる。

「原初神の下僕がどうしてこつちを襲うのか分からないのだけれど」

「オリンポス神族に与するものは我らギガントスの殲滅対象であるからだ」

オリンポス神族。聞いたことが有るような無いような。古代の神話だっただろうか。

「…やっぱりか、あの男その内殺すわ」

それに心当たりがヘカーティアは有るらしい。

「どういうことヘカーティア？」

「私たちは巻き込まれてるのよ。違う場所の神様の全く持つて下らない喧嘩にね」

なんともはた迷惑な話。それで国ごと潰されそうになるなんて、やっぱり神様は理不尽なようで。

「無関係な訳があるはずないだろう。お前があのお男のお気に入りの一人なことぐらい知っている」

「あんなクソ野郎のこと思い出させないで頂戴」

いつの間にか一人になっていたヘカーティアの周りに力が集まりだす。空気が変わる。

「儂。後ろに下がってて」

「……わかったよ」

言われた通り私は彼女たちから距離をとる。見たことのない力の量。これがヘカーティアの本気か。恐らくだけれど三人に別れたまま一人になっているのだろう。その証拠かどうかわからないが彼女の髪は薄いブラウンに染まっていた。

きつとこの彼女の攻撃を直に受けたら私は本当に死ぬるかもしれない——なんてちよつと場違いなことを考える。

「これはこれは物騒な女神だこと」

「うるさいわよん。神になり損なつた身の癖に私に牙を向こうなんて思い上がり甚だし

いわ」

彼女が手の平に浮かべた魔法陣をクリュティオスに向ける。

「無様に死に晒しなさい」

その手を握る。そして巨人の姿の輪郭が潰れた。

次の瞬間眩い光と共にそれが爆発した。

「うわっ……！」

圧縮系の魔法だろうか。爆風が吹き荒れ周りの巨人共が吹き飛ばされる。私は能力で反射するけれど、ひしひしと圧倒的な熱量を感じる。能力を持ってしても気を抜くと防ぎきれない程。

これがヘカーティアの力か。いや……これでも全力じゃないのかもしれない。徐々に衝撃と爆風が落ち着いてきて様子が明らかになってくる。最早そこにどんな地形があつたのかわからない。

地面はドロドロに溶けマグマのようになっている。これだけの攻撃を食らって無事であるわけが――

「甘い」

そこに巨人は居なかった。何故なら既にヘカーティアに肉薄していたから。

「なっ……！」

「巨人に有るまじき速度にヘカーティアの顔に衝撃が走る。彼女にとつてもありえなかったのだろう。あの魔法の威力は今までに見た彼女のどの魔法や技より強力だった。だがしかし。」

目の前の巨人は無傷だった。

「実に甘い」

その巨大な拳が彼女を捉える。あまりに早すぎて目で追うのがやっとだ。そして次の瞬間私の後方の地面が弾ける。一步も動けなかった。動く隙がないほど一瞬の事だった。

後ろを振り向くとはるか遠くのそこには人影が有った。……ヘカーティアだ。あの怪力でそこまで吹き飛ばされたんだ。私には飛ばされた彼女が目視できなかった。

「あの憎き男が一目置いていると聞いていたが……期待はずれだ」

私の目の前にいるこの化物はいとも容易く神を地に墮ろした。

七話 理を外れし者とか格好いいけど、現実的な話ただのルール違反な訳で

「ぐっ……い」

破裂音と差異の無い打撃を受け私の体は吹っ飛ぶ。

巨大な拳に惜しみ無く乗せられた怪力。その殺傷力の塊を全身に受ける。当然ながら能力で反射をする。しかし、私の処理できる範疇の力じゃない。

私の能力にはいくら制限を持つ。当たり前だが無敵じゃないのだ。余りに巨大なエネルギーは反射しきれない

とはいえそれでも多少なり威力を減らしたはずなのだけど、そんなのは関係ないとかかりに軽い肢体は吹き飛ばされた。

そのまま地面に背中から打ち付けられるのを、歯を食いしばって耐える。衝撃により、中から這い上がってきた赤黒い液体が口から漏れる。息は当然ながら整わないけれど、それを待っている時間はない。急いで立ち上がるうとする。

「遅いな」

しかし、私の前には既に巨大な姿があった。月明かりに照らされ、私をすっぽり覆う

位大きな影を地面に落とすそれは、その体に見合った巨大な拳を再び私に振り下ろす。

「かはっ」

再び打ち付けられた。今度は地面が抉れる。体の中身がぐちゃぐちゃになる感覚。死んだ。

「そこを退きなさい！」

何処かから巨人よりも巨大な岩が降ってくる。それは私の近くの巨人に向かっている。ヘカーティアが魔法で投げたのだろう。その大岩をもともせず拳で砕く巨人。しかし、それでほんの一瞬だけれど十分な時間は稼げた。

復活した私は能力を使い最高速で巨人の側から離脱する。

「妖魔の癖にその能力。お前を作った奴は随分と酔狂だな」

「いっつつ……私が作られたのか自然に湧いたのかはわかんないけどね」

着地した私はペツと血を地面に向けて吐く。鉄の味が心地悪い。

「それにお互い様なんじゃないかな？ 化け物は大人しく神様に浄化されるべきだよ」

「貴女とアレは違うわ。そんなこと言わないで頂戴」

私の隣にヘカーティアが降りてくる。豪華な服は所々千切れ、そこからみえる肌には至る所に傷跡がある。普段の神々しさは幾らか鳴りを潜めている。

「無理させてごめんなさいね」

苦い顔をして、けれど目は敵に向けつつ彼女はそう言う。

「そつちこそ。一人動けないんでしょ？」

幸か不幸か私は死なないからどうにでもなる。けれど今この状況では、あの巨人によつてヘカーティアがやられかねない。彼女にもしもの事があるとは思えないが、条件が悪過ぎる。戦況は芳しくない。

「一体何の為に彼女を襲うのさ？」

「言つただろう。その女はあの男の仲間だからだ」

私の問いかけにそう答える巨人。あの男つて一体誰なんだろうか。そのせいでこんな事になつてるのは大分腹立たしい。

「心外ね。仲間になつた記憶なんて無いわよん」

「目をかけられて居るのは事実だろう」

「如何わしい目線の間違いじゃないのかしら」

「なるほど仲間というより妾そばめか。流石の絶倫男なだけある」

「ぶつ殺すわよ」

……話題のあの男の全貌が何となくわかつてきた気がする。

とりあえずヘカーティアはその男と別に懇意にしているわけじゃなさそうだ。しかし敵は聞く耳を持っていない。

「その男とヘカーティアの関係はともかく。そもそも何でその男と対立してるのさ？
貴方の神様……原初神で言ったつけ」

「フン、良からう。話が神の崇高なる理想を聞きたいというのなら、冥土の土産に聞かせてやる」

毛むくじやらでその表情は醜いままだが、恐らく得意げにそう言う巨人。実際そんなに聞きたくないです、ええ。

「我が神は元々は全宇宙を支配……いや、全宇宙そのもので有ったと言つても過言ではない」

なんだその厨二の塊みたいな奴は。

「主神の座を子孫に譲つた後も主は常に弱き者の味方であり続けた。ある時は理不尽に幽閉された魔物を救い出し、ある時は子をタルタロスへと閉じ込める愚かな神を断罪し……ああ残念だ。その慈悲の全てをここで語り尽くすことは出来ない」

ふうむ。もしかして結構良い神様……？

「何が慈悲よ。閉じ込められてるのつてあの怪物達のことでしょ？ 息子と交わつて変な怪物産んだり、それを認めないからつてキレてそいつを去勢したり、昔から無茶苦茶やつてるだけじゃないの」

そんなことはなかった。本当に無茶苦茶である。なんというかぶつ飛び過ぎじゃない

い？

近親相姦上等つていつの神話だよ。……いや本当に神話なのか。

挙げ句生まれれてくるのは怪物とか訳が分からないよ。どんな属性だよ。誰得だよ。

「黙れ！ あの男の妾ことき何が解るといふのか」

この巨人は何とも不自然にその神を崇めている気がするなあ。

「大方お前もあのキチガイ女神に作られたんでしょね」

なるほど。道理で盲目的なわけだ。作られたのなら主を疑うはずもない。さつき言っていた怪物の一端がコイツなのかあ。私の中で件の原初神様のヤバさ加減が上昇した。

「その通りだとも。我らは自然の理から外れし者。主は我らをそのように創つたのだ。神とは主に自然を司る。故に我にその力は通用しない」

「本当無茶苦茶ね。とてもじゃ無いけどこの世界にそんな奴は受け入れられないわ」

「何とでも言え。遺言になるやもしれんから気を付けるのだな。それに安心しろ」

そして巨人はそのわかりにくい表情を醜く歪ませた。多分嗤っているのだろう。

「……何がよっ？」

「嘆きの絶えない世界を慈しみ我が主は決心なされた。世界を再び己がものとすることを。その為にお前らを始末するのだ。お前が世界の心配をする必要はない」

へカーティアを狙う理由はわかった。……いや全然意味がわからないけど。

七話 理を外れし者とか格好いいけど、現実的な話ただのルール違反な訳で

クリュティオス。現在の私達の敵。巨人。

へカーティアの国を、そして彼女自身を滅ぼすためここまでやってきた巨人達の首領である。根源の女神とか言うのに命令されているらしい。

聞くからにいろいろな意味でヤバそうな女神。それがなんでこの国を滅ぼそうとするのかというと、どうやら世界を再び支配するためらしい。意味がわからない。

あの国のおよそ人畜無害な人々を一掃するような世界に一体何が残るといえるのか。本当にわからない。

とりあえず意味不明なままこんな連中を押しつけてくる奴は、きつと碌な神じゃ無い。それだけはわかる。

ともあれ、当然ながらこいつらを街に向かわせるわけにはいかない。いかないのだが

「ヘカーティア！」

「っ！これくらい大丈夫よ！」

援護に徹して、宙を飛ぶ彼女の周りに、群がっていく無数の巨人。彼女にあれだけ近づかれると少し不味い。なにせ彼女の力はこいつらには殆ど効かない。それで戦えるヘカーティアも大概だが、油断したら押し負ける。

「よそ見している暇は無いぞ」

「うわっ！ そんなのわかってるってば！」

私と対峙しているクリュティオスがその馬鹿力を拳に込めて振り下ろす。何度も言うようにあの力は規格外なのだ。紙一重で避けたそれは地面に突き刺さり勢いよく砂煙が立つ。一瞬だけお互いの視界が妨げられる。

「脳筋は良くないと思うんだよね。頭使おう。スマートに」

「たわけが。貴様らは我が神聖なる力によつて葬られるのだ！」

クリュティオスは拳を振り砂煙を払い、そして再び拳を落とす。岩より達の悪い力の籠もったそれは、私をいとも簡単に押しつぶす。

「むっ？」

「残念無念また来週ってことで」

私の分身を押しつぶしたクリュティオスは動きを止める。さつき砂煙が舞ったときに妖術で作った分身だ。数少ない私の使える妖術の一つである。

「術か。の指向性を変える力といい実に小賢しい」

「褒めてくれて嬉しいね。それっ!」

その間にヘカーティアの元に飛ぶ。彼女の周りの巨人を能力によって飛ばし破壊し殲滅する。

酷使した能力のせいでどつと疲れが来るが、それは奥歯を噛み締めて耐える。

「大丈夫って言ったのに。でも助かったわ」

「良いよ。やっぱりもつと下がってたほうが良いんじゃない? 力が効かないのはちよつと無理があるよ。なんなら都に戻った方が」

「距離はとるけど、戻るのは断るわよん。貴女だけに任せるわけには行かない。これは私に売られた喧嘩わけだし。それに援護が有ったほうがまだ可能性が有るでしょ?」

彼女の力、つまり神の力がこの巨人たちには効かない。最初の初撃、本来なら巨人どころか街一つ壊滅させられるあの魔法でさえも、女神であるヘカーティアが行使したという一点で、無効化されたのだ。加えて先のクリュティオスによる一撃で、彼女の一人はもう動けない状態らしい。

彼女は神ゆえ、常人のそれとは比べ物にならない力を持つ。しかしそれは怪力に特化した巨人に対し、物理で優位に立てる程じゃない。一撃でヘカーティア一人を沈められる力を持つ相手に、攻撃手段を持たないままここに居るのは危険だ。

「でもやっぱり、戻って助けを呼んだ方が良いんじゃないかな」

「それは駄目よ。その辺の無能な巨人にすらやられてしまうわ。人間をこんな戦いに巻き込むべきじゃない」

巨人の力は強大だ。それこそ人間なんか赤子の手を捻るように壊してしまうだろう。

「他にはいないの？知り合いの神様とか」

「居るには居るけど、話を聞く限りきつと同じ様に襲撃を受けると思うわ」

つまりこれ以上の戦力は期待できない。助けが期待できないなら、ジリ貧だ。唯一の希望はその神々が援護に来てくれるか否か。この様子じゃ余り期待できないか。

何せこいつらに神が勝つのは現時点で不可能に近いからだ。恐らくは同じような奴が他の神のことも襲撃しているに違いない。

私でさえ中途半端な神格のせいでもない術が聞かないのだ。だから私達二人の唯一と言っても良い攻撃手段は私のこの能力だけ。直接触れて体内の力の向きを逆にする等、殆ど近接の物理攻撃だ。

しかし残念ながら私はそこまで強くはない。巨人の体に触れるのは簡単だが、内部を

破壊し尽くす程に能力を行使するには長く触れる必要が有る。が、私にそれだけの力がない。すぐに吹き飛ばされる。

それにそもそもこの眼の前のクリュティオスは破壊しきれるかもわからない。

「はっ！」

「む？」

ピカリと夜空が光る。ヘカーティアが魔法で複数の落雷を落としたのだ。周りの無知な巨人共が呻き声を上げながら動きを止める。しかし、クリュティオスそれを軽く避けていた。巨人の癖にその身軽さは何なのか。

「そりゃー！」

私はその避けた先に瞬時に肉薄し、能力で力を集めた拳を撃つ。私の小さい無い拳が音を立てて空気を裂く。

「ぬるい。実にぬるいな」

その拳は五倍以上大ききの違うその手の平で軽々と受け止められる。

私は能力をありつたけ行使してその腕の圧力を外向きへ変え破壊した。爆散した巨人の腕からの赤黒い返り血が、先の蘇生で綺麗になった私の体に付く。

そんな私を巨人はもう片方の手で掴み取ろうとする。

「はっ！」

それを見計らいヘカーティアが魔力の弾を放つ。それは側頭部にヒットした。その隙きを見て私は離脱する。

「効かないと言っているだろう」

ヘカーティアの隣にもどり、そして先程私が破壊した敵のその腕を見る。私はヘカーティアの隣にもどり、そして先程私が破壊した敵のその腕を見る。

「厄介極まり無いわね……攻撃が効かないだけじゃなくその回復力」

そう、もう既にクリュティオスの腕は元に戻っている。唯一通じる私の能力でさえ、その活動を止めるには至らない。あのクリュティオスにそんなものは直接通用しない。自然の法則を無視し、神の支配下から外れた存在。理不尽の塊だ。

（今回ばかりは不死で良かったよ）

そう思わずには居られない。私が捕まるか倒れない限り時間は稼げる。だが、時間を稼ぐだけでは周りを歩く巨人がそのまま都まで到達してしまう。

まず必要なのは理不尽なほど強い敵の殲滅。何か打破する方法を考えなければなら
ない。

あれから数刻が経った。

「うう……っは」

「夢ッ！」

私は地面にめり込んでいる。ヤバイ。力、入らない……

「いい加減飽きたぞ。前戯もこれくらいが限界か」

頭を掴まれ持ち上げられる。せめてもの抵抗にその掴んだ手を能力で爆散させた。

「小賢しい」

その弾けた手はグチュグチュと再生しはじめる。こうもすぐに回復されてはどうしようもない。

結局、解決策は未だ見当がつかなかった。しかし能力を使えば疲れる。当然のことだ。

つまり時間切れということ。

クリュティオスは逆の手で再び私の頭を掴み、まるで紙屑を投げるように私を投げ飛ばす。くそ、立ち上がれない。

「かはっ」

「夢！」

地面に打ち付けられる。肺から空気が抜ける。痛みで動けない。

「お前は後だ。そろそろ終わりにしよう。我が神の敵よ。わざわざこちらまで出向いてくれたのだから、精々民の目の届かぬここで仕留めてやろう」

「くそつ、ヘカーティア逃げてっ！」

ヘカーティアはまだ少し離れた空を飛んでいる。すぐに離ればこいつに捕まることもない。逃げ延びて誰か助けを。

そこまで私が考えたところで巨人はその異形の口を開いた。そしてそこに光が集まりだす。その向く先は空を飛ぶヘカーティア。

前世に有ったゲームにあんな技が有った。反動で動けなくなる代わりに凄まじい破壊力を誇る。特殊技に分類されるそれは言わば、遠距離攻撃である。

もし同じようなものだとして、力を無効化される今の彼女にそれを防御する術は無い。そして光線であれば避けるのは困難だ。

ガツという鼓膜を裂くが如き爆音と、目が眩む閃光と共に発射される。それは遠く空に浮かぶヘカーティアに向かって一直線に飛んでいく。

動けない私は、同時に能力で血流を逆にし一度リセット。蘇生を開始する。死ねば全開まで行かなくとも動けるようになる筈だからだ。

言い表せないような痛みと、体が巻き戻る不自然な感覚が身を貫く。……だが、駄目だ！間に合わないっ！

蘇生を終え急いで視線を巡らせるも、光線に対し魔法陣の盾を展開するヘカーティア。しかし駄目だ。あれでは受け止められない。

彼女が神で有る故に奴には勝てない。

「我が王に仇なす物よ、恥を知れ」

張りのある青年の声が空気を震す。そう感じられるくらいに力強い声だった。

「はっ!」

その青年は見慣れた魔力の魔方陣と共に、いつの間にかヘカーティアの前に現れた。彼は剣を構え、そしてかけ声と共に巨人の放った光線を切り裂く。

「何イイ!」

驚愕で巨人は汚い声を上げる。

こんな事を言ったら少し間抜けかもしれないが、まるで豆腐を切るかのようなようだった。そう言えるくらい、違和感なく、美しく、破壊力の塊は切り落とされた。

「お前の攻撃位見切るのは容易い。この汚らしい怪物め」

「クソが、人間風情が我を貶すか。奇妙な力を持つだけで他は非力だろう」

彼は人間。今ここに置いて最弱な種族であると言えるかもしれない。しかし輝くそ

の目と纏う雰囲気はそんなことを感じないぐらい力強い。

「大丈夫ですか？ヘカーティア様」

「ええ、大丈夫よ」

次にヘカーティアと青年リユンの近くに魔法陣と共に現れたのは、黒いローブの魔法使いの少女。

「メディア……貴女も来たのね」

「ええ、リユン様に頼まれました」

二人は決して強くない。いや当然普通の人間と比べたら遥かに強いのだろうけど、神や神に作られた巨人に比べたら遥かに弱い。きつと彼らもわかっている。わかっている。わかっていてここに来ている。

「戻って、はくれないわよね」

「当然ですよ。私達は貴女の国の民です。それに国を守るのは貴女の巫女としての義務です」

笑いながら、それでもはつきりと意志を持ってそうメディアは言う。

「そんな事を言われちゃ私も頑張らなきゃね」

ヘカーティアは諦めたように、しかし嬉しそうに苦笑した。

神と人間。種族は違えどそこには確かな信仰と信頼があった。私の前世にもそんな

物があれば良かったな——なんて話は今はどうでもいい。

「それっ!」

「ぬう?」

クリュティオスに炎弾を投げつけそこから離脱し、彼女らの方へ飛んでいく。

「夢さん! 無事ですか?」

「無事……と言つて良いのかわからないけど。一応大丈夫だよ」

数回死んでるけどね。死ねてないけど。

「けどこれからどうしようか」

いくら戦力が増えたとは言え現状は余り変わらない。

「私の目で見える限り、巨人共の力は奴の元に集まっています。奴を潰せばとりあえずこの侵攻は止まるはずですよ」

その虹色の目にはどうやら奴らの力の流れが見えているらしい。彼のよく見える目には何でもお見通しだ。

「そう、やっぱりあれを始末しないとダメなようね……リユン、何か奴について見えないかしら?」

「残念ながら。酷く歪な存在では有るようですがそれ以外には何も」

ジリ貧なのは変わりが無い。奴に攻撃が通じる何かが……何かが足りない。

「そういえばピースはいるのかしらん？」

「ああ彼女でしたら……」

メデイアが少し苦笑した。ピースというのはクラウンピースの事だ。

「アタイの力をとくと見やがれ！」

クリュティオスの背後の方から場違いに元気な声が聴こえた。

いつしかの様に月を隠れ蓑に出てきた彼女は、その手に持った松明を振るう。その透明な羽に月光がうつすら反射する。

「ご主人の仇！」

「私死んでないんだけど？」

ヘカーティアの突っ込みも関係なく、振るわれた松明から炎弾が発射された。

「それで背後を取ったつもりか。甘い妖魔ごときが！」

クリュティオスはその炎弾をまるでホコリを払うように撃ち落とそうとした。

しかし、出来なかった。

「ぐあああああ！」

醜い悲鳴が響く。それは奴が初めて上げた悲鳴だった。差し出したその毛むくじやらかな手は溶け、そして再生……しない。

その様子を驚いた様子で眺めながら、クラウンピースは私たちの側まで飛んできた。

「……アタイってもしかして強い？」

あった。自体を打開する鍵が。パズルの”ピース”が見つかった……！

八話 戦いはいつか終わるもので、けれど再び始まった
り

「きゃははははー！」

無邪気な笑いが響く。どこか籬の外れたようなその声。可愛らしいはずが何か空恐ろしく感ぜられる。

……まさか自分に能力掛けてるんじゃないよね？

そんな不安にさせる彼女、三色の妖精クラウンピースが松明を振り炎弾を放つ。妖精にしては強い程度でしかないその力は、この巨人にとっては深手に成り得る。

「調子に乗るなよ」

その相手は怒気を込めそう言い放つ。ただでさえ醜いその顔がより醜悪になる。

片腕の無い、と言ったら少し違うか。その腕は半ばで途切れ、切り口は溶けるようにシューシュー音をたてている。ぶつちやけ気持ち悪い。

バランスが崩れて動きにくいだろうに、けれどその巨人はクラウンピースの攻撃を機

敏に避ける。そして残っている片方の手を、地面に突っ込んだ。

「妖精風情が我に傷を付けるなど断じて有つてはならない！ 女神の前にまずはお前を始末する！」

その巨大な手でメリメリと地面を抉る。抉り取ったそれを、その剛腕をもってクラウンピースに投げつける。まるで、と言うか文字通り壁のようにそれは彼女に迫る。

「あ、ちょよそれ不味っ……」

「油断しすぎよ、ピース」

どこからともなく現れたヘカーティアが魔法陣を展開。

「ご主人！ アタイは信じてたぜ！」

「まったく調子が良いんだから」

次の瞬間にはその地の塊は消えていた。流星は魔法の神様。

「おのれ！」

苛立ちを隠さない巨人クリュティオス。今度は先程の破壊光線を放とうと、その口内に光を溜め始める。

「やせません！」

宙に浮くメディアの背後に無数の魔法陣が展開される。準備を終えた彼女は錫杖を振る。そこから空間を埋め尽くす程の魔力弾が放たれた。

「ツチ、クソが！」

光線を中断し、腕を振りそれらを叩き落とす。地面はえぐれ、砂塵で視界が塞がれる。「次は私の番かなつと！」

そこに飛び込んだ私は、能力を掛けに掛けまくった拳でそのデカイ腹に一発打ち込む。

「ぐうー！」

少しだけうめき声を上げた。けど、あんまり手応えはないなあ……。やはり人間であるメディアア、そして妖精であるクラウンピースの攻撃とは通りが違う。

と、心の中でボヤきつつ、即座に側から離れる。肉弾戦じゃあちらに分がありすぎる。いくら命が有っても足りない。

まあ、私は幾らでも有るんだけど。

「ちよこまかと動きおって！目障りだっ！」

そういつて今度は破壊光線を私に向けてきた。さっきの溜めが残っていたのかタイムラグなしで放たれたそれは一直線に私に向かってきた。離脱途中の私は宙に浮いている。

あ、不味…

「はあっ！」

すんでのところで眼前に魔法陣が出現。メディアアの転送魔術だ。それによつて現れたリユン君が再び光線を切り落とした。お見事。

「助かったよ。良く切れるねあんなの」

「今だけです。巫女殿の魔法の強化でようやくと対抗出来る状態ですから」

それでも十分凄いと思うんだけど。二人共本当に人間？ 前世の私だったらきつと為す術無く塵になつてるね。

「ならば良いからさ。他の娘達を重点的に援護してよ」

「……貴女は自分を蔑ろにし過ぎる」

「そんなんじゃないよ。適材適所さ」

そう受け流す私を、リユン君はそのどこまでも見通す金色の目で数巡見つめる。しかし、折れたのだろうか。少し長い瞬きの後彼は返答する。

「……わかりました。くれぐれも無理を成さぬよう」

素晴らしい残しリユン君は何処かへ飛んでいった。君が気に病む必要は無いんだって。

八話 戦いはいつか終わるもので、けれど再び始まつたり

「ヘカーティアは現在後方の支援に徹していた。どうやってもあの化物に私の力は効かないらしい。何より狙われているのが私のこの国であり、私自身なのに何も出来ないのが少し悔しい。」

「ヘカーティア様少し宜しいですか」

リユンが話しかけてきた。

「何か分かった？」

「はっ、あの巨人についてですが——」

彼には類稀な力がある。その七色に輝く目はあらゆるものを見通す。その力故に私の元に来るまで色々苦勞したのだけど、現在は私に尽すためその力を行使してくれる。

その信用の置ける目はかの巨人をどう見たのかそれを聞いた。

「それ確かなの？」

「はい」

「それなら僕が何とか出来るはずよ」

彼の分析の元、結論が出る。これなら奴を滅めすることが出来る。

そう、この下らない戦いによろやつと終始符を打てる。

「しかし、なんとも哀れなものね」

私はクリユティオスを含む巨人共へと目を向ける。無数に存在するそれらは盲目的にあのキチガイ女神を信じているのだから。それは無様で滑稽で、そして哀れだうた。

「伝えてくるわ。貴方は援護を続けて頂戴。無理しちや駄目よ?」

「御意」

彼が再び飛び出したのを見送り、私も転送魔法を展開する。宙に浮く私の足元が赤く光る。向かう先は最近出来た友人の元。

(今回は頼りつきりね)

なんだかんだ色々振り回しても、文句を言いつつついてくる彼女。自分では無頓着と言いつつながら、その実かなり周りを気にかけている。何とも不器用なのだろうか。まあ、確かに無頓着な所もあるのだけど。

そういえば私も同じような理由で不器用と言われた事がある。そう言った奴は……おっと止めよう、イラツときたわ。

ともあれ、もしかすると彼女と私は、何処か似ている所があるのかもしれない。なんだか放っておけないのはそんな理由なのかもしれない。

「この戦いが終わったなら何かお礼をしないとイケないわね」

何が良いかしら。やっぱりお酒かしら? いやお酒ね。沢山の酒と宴会にしましょう。もう一回あれも見たいしね。きつと喜ぶはず。

「夢」

「何？」

丁度攻撃の小休止にヘカーティアが声を掛けてきた。合間を見計らったのかな？

「あんまり長いこと話できないよ？」

何故かクラウンピースの攻撃が奴の急所なのはわかったけれど、ようやく戦況は五分と言ったところ。

流石に警戒してか、一向にクラウンピースの攻撃が当たらないのだ。足止めをしようにも彼女しか有効打が無いので難しい。精々彼女への攻撃を妨げる位しか出来ない。クラウンピースに致命打が当たるのが最悪のシナリオだ。

ともかくようやくと均衡を保っているわけだから長い間私が戦闘から抜けるのは好ましくない。

「大丈夫よ。そんなに時間は取らないし、何よりこれで終わるはず」

彼女には何かが解つたらしい。ようやくとこの戦いに終わりが見えた。

私はリユン君の分析結果と彼女の考えとその方法を聞かされた。

「それ全部本当？」

「ええ」

私は左手を口元にかけていき思考する。

聞かされたその話は何とも言えない内容だった。奴の力の本当の仕組み、そしてそれへの対抗策……

そういう理屈なら私がかんとか出来る、はず。多分。不安要素は有るが。

しかし、それはまあ何とも救いのない——まあ、今は気にしてもしょうがないか。とりあえず不安要素を彼女に伝える。

「それだとクラウンピースに負担が掛かるよ」

「そうなの？」

「そりゃあ容器そのまままで水の量を増やすような物だからね」

「そう……」

「まあ、きつとやってくれると思うよ」

彼女ならヘカーティアの為ならそれくらいやってのけそうな感じがするのだ。なんだかんだヘカーティアに懐いてるし。

その作戦を遂行することに決め、私はクラウンピースの元へと向かった。

宙にふわりと浮く三色の妖精に声をかける。

「クラウンピース」

それに答えるように身体ごとぐるりと此方を向くクラウンピース。おいこら、無防備すぎるだろ。

「ん？友人様どうかした？」

「あ。そんな余所見しちゃ……」

「死ねえ!!」

「ぎやつ！その大きさは反則！」

いや、声を掛けた私も悪いんだけどさ。もうちよつとこう緊張感を持つて欲しい。

その隙を奴が見逃すはずもなく。クリュティオスの叫びと共に投げられた岩がクラウンピースに向かって飛んでくる。

「いい加減投げ石は飽きたって」

私は半ばうんざりしながら呟く。とは言うもの、もともとこの辺は荒野で他に投げるもの等は無いから仕方ないと言えば仕方ないのだが。いや、そもそも投げるなつて話よ。

能力で加速し彼女の前に回り込み手を突き出す。私ももつと魔法とかがちゃんと使えればもつとスマートな感じに処理できるんだけどなあ……。

私の手に触れた瞬間、その岩は木っ端微塵に砕ける。

「さっすが友人様！」

「おだてても何も出ないってば」

調子に乗りやすいのが彼女の長所だ。一緒にいて楽しい。たまに短所でもあるけれど。

「少し話があるんだ」

「？」

何はともあれこの戦いを終わりにしよう。

「という訳なんだ。それで、クラウンピースはやる？」

彼女に伝えるべき事を伝え、後は判断を委ねる。どうしても彼女の力が必要……妖精でありながら、この場から逃げ出さず、戦う彼女にしか出来ない事だから。

「アタイは——」

ここで断られると、まあこちらとしては辛いんだけど。危険を伴うから断られても仕方が無い。でも……彼女なら恐らく。

「アタイはやるよ。だってそれでこの国と……ご主人が助かるんでしょ？ だったらやらない訳ないよ。それにもし駄目でも『一回休み』なるだけだからね」

彼女はそう言った。

……よかつたねヘカーティア。クラウンピースは貴女の事を結構大切に思ってるみたいだよ。

「妖精らしくないね。もつと自由気ままなもんだと思つてたよ」

「へへっ、アタイは普通の妖精とは違うんだぜ！」

何はともあれ話は着いた。後は実行するだけ。暗くなつてすぐに始まったはずなのに、もうほんのり空が明るくなり始めている。戦いの時間の長い短いはよくわからないけど、個人的には既に凄く長く感じた。

「にしても友人様は随分ぶっ飛んだ事を考えるね」

「そう？ 割とありきたりな展開じゃないかな。上手く行くかは私達次第つてね」
きつと上手いく。上手いかせてやるさ。

「それに大丈夫なの？ 一緒に居たら友人様も無事はすまないと思うけど」

「その辺も大丈夫。もしダメでも私も『一回休み』になるだけだし」

「友人様のは何か違うような……」

腑に落ちない顔をしてるクラウンピース。気にしない気にしない。

ともあれ先の見えなかつたこの戦い。もうすぐ終わる。



「お待ちせつ」

「……」

クラウンピースと儂が戦線に戻つてきた。どうやら話は付いたらしい。

「どう出来そう?」

「あつたりまえじゃん! ご主人、アタイに任せなつて!」

どうやらやつてくれるらしい。なし崩し的に私の部下になつたけれど、今は信頼できる。その小さい身体に思い役割を課すのは少し嫌だが、彼女を信じよう。

「作戦など立てたところで無駄だ。少し焦つたが、その妖精程度では我は倒せん」

「へっ! 弱い犬ほどよく吠えるつてね! アタイを舐めてもらつちや困るよ!」

得意げにそう言つたその背中は今回ばかりは彼女は非常に頼りになる。

しかし弱い犬云々は何かの諺だろうか? そういえば彼女の出自を良く知らない。

今度聞いてみよう。そう、この戦いが終わつたら。

「いっつつつ……ヘカーティア。これで決めよう」

「ええ……大丈夫？大分息が上がってるけど。」

儂の様子がちよつと怪しかった。思つた以上に能力の負荷が大きかつたのかもしれない。

「へつ？ああ、うん。だ、大丈夫、だよ」

そう言つたら儂がやけに慌てた様子を見せる。これまでの付き合いで彼女が割りと出鱈目な存在であることはわかつている。よつぽどのが無い限り大丈夫だろうが、そんな負荷を友人にかけてしまう自分の無力が恨めしかった。

「ご主人！ 私達二人で仕掛けるから。ご主人と他の二人には援護を頼むよ」

「ええ、わかつたわ……！」

儂の能力で力が増しているせいだろうか、クラウンピースの様子がやけに落ち着いて感ぜられる。

これなら安心して送り出せる。

「行つてきなさい！」

「ラジャー！」

二人は飛び立った。



私達二人は奴の周りを飛び回り、炎弾を撃ちまくる。

……友人様の底の知れなさがわかる。当然私も苦しいのだけど、それ以上に扱う力の量が半端じゃない筈なのに、全くその様子を見せない。それになかなかの演技力だと思う。

「妖精風情が私の動きについて来れる訳がない！」

巨人は言う。ああ普段ならそうだろう。妖精である私は種族的に劣るからだ。けれど、今は見える。その姿を追える。友人様の炎弾を避けるその姿が終えるのだ。

「アタイをなめるなよ！」

そう言った『アタイ』は複数炎弾を放つ。それらは巧妙に奴の逃げ場を奪うように向かう。

「つちっ！」

舌打ちをしたクリュティオスは地面を凹ませながら素早く動く。震える地面が空気まで揺らすみたいだ。

「多少はやるようになったが甘いつ！」

炎弾の収まった一瞬を狙って再びクリュティオスが地面を抉る。

「非力な貴様は我に勝てん！」

先程より数倍でかいそれは『アタイ』向かって放たれる。けれど今の『アタイ』にそれは通用しない。

「クリュティオス、チエックメイトだよ。」

そう呟いた『アタイ』はいきなりそこから消えた。

「なんだ……と!？」

正確には消えたのではなく、それぐらい速く動いたのだ。力の増しているアタイにもその姿は見えなかった。巨人に突っ込んだ『アタイ』はそのまま豪速で巨人を地面に叩き潰した。妖精の範疇を遥かに越えたその速度に完全に不意を打たれた巨人はバランスを崩し倒れる。

「お前は……!？」

「もう、終わりにしようか。」

巨人の上に乗った『アタイ』……もとい友人様は薄紫の炎に包まれ、その姿を変える。「ほら、クラウンピース! あんまり押さえてられないから速く!」

友人様は立ち上がりとうとする巨人をその能力を駆使して押さえ込む。何時も涼しそうなその整った顔に余裕がない。かなり無理していることがわかった。

「わかったよ!」

『友人様』の姿からいつもの三色の服と帽子に変わったアタイは手に松明を現す。

「……………つう」

いつもの数十倍はある湧き上がる力に、身体の内側が熱い。爆発しそうだ。でも——
「アタイはやるって決めたんだ……………」

松明に火を宿す。アタイの…自然の力を宿した炎を。

「くそが!」

「逃がさないよっ!」

友人様が巨人を押さえ込む。アタイは最大まで強化されたその松明を持ってまっすぐと進む。

「やめろおお!!」

「いけっ! クラウンピース!」

奴と友人様の真上まで来たアタイは、松明に全力を超えたその力を込めとんでもない大きな火を灯す。その力の大きさに自分の体まで吹き飛ばされそうだ。

「うおおおお!!」

それを耐えるために、気力を振り絞るために声を上げる。これで終わらすんだ。アタイが終わらすんだ……………!

「喰らえっ!」

その松明に灯った巨大な炎を巨人に向かって振り落とした。一瞬の間が空く。その間が酷く長く感じた。

「があああああ!!!」

そして直後醜い叫び声とともに激しく巨人が燃えだした。

「うがあうああ……!」

「逃さないって言ってるんだろ!」

その体を燃やし煤を出し、そして所々溶けている巨人。暴れてどうにか炎から逃れようとする巨人を友人様が押さえ込む。友人様も熱いだろうに。

「はあああっ」

でも躊躇はしない。ここで中途半端にしたら駄目だ。それこそ友人様の努力が無駄になる。それにあの優しいご主人の為に退けはしないのだ。

「いけええええええ!!」

アタイの最後の一撃に辺りが激しい光に包まれた。



「終わった、わね」

もう周りには一体も巨人の姿はない。奴の消滅と共にすべて消え去ったのだ。

「終わったね」

呟くように言ったヘカーティアに私は返答した。彼女が目を少し細めて見る先には焼け焦げた地面が有った。

「まさか入れ替わってたなんて。私も全然気づかなかったわ」

「気づかれないように色々細工したからね。敵を騙すにはまず味方からってことだよ」
自分とクラウンピースに変化の妖術をかけたか、彼女の力を少し分けて貰って、それを能力で増やしつつ行使したり。この能力が無かったらどれもとて無理な事だった。

しかし、まあ、ぶっちゃけ維持するのが大変すぎたので、もうやりたくない。頭が割れそうな位痛いし、足の着いてる感覚が怪しくなるくらいフラフラだ。

「向きと大きさねえ……まさかピースの力があんなに強大になるとは思わなかったわ。
流石ね」

「私も初めてやったから、上手く行って良かったよ、ホント。それに誉めるなら私じゃなく、その子を誉めなよ」

ヘカーティアの膝元ですやすや寝息をたてているクラウンピース。あどけない顔の彼女だが、この戦いで一番の功労者は彼女だろう。

「そうね。本当よく耐えてくれたわ」

「……………しゅじん……………」

ヘカーティアが優しく髪を撫でるとそんな寝言を漏らした。流石地母神というだけ有って母性の格が違う。そんな二人の姿は凄く絵になる。そうだ――

パシヤリ

「……………いつの間に取り出したのよ。カメラといったかしら？」

「そうそう。いやーこの顔は撮っておかないと思つてね」

呆れ顔で見つめるヘカーティアをよそに私は空間を開けカメラを元に戻した。疲れてるのに何やってんだと言われるかもしれないが、可愛い子の写真を撮るのはもはや私にとって使命なのである。

「本当上手くいつてよかつたよ」

私は『大きさと向きを操る程度の能力』によって妖精に撮つて力の根源とも言える、『自然そのものの力』を出来る最大まで『大きく』したのだ。

もし、クラウンピースが耐えられなかつたらいろいろと木っ端微塵だったかもしれない。そんなの考えたくも無いけど。

「そんな事言つて、ちゃんと補助してたじゃない。ギリギリまで貴女が力を制御して。貴女のそんな必死な顔初めて見たわ」

「はて、なんのことやら」

「全く素直じゃないのね」

何はともあれようやっと終わったのだ。

「ヘカーティア様、見回り終わりました」

薄青の髪の少女と白金の髪の青年が降りてくる。

「どうだったかしら？」

「もう何も怪しいものは居ませんでしたよ。」

メディアはそう答えた。巨人達の脅威が去つたのも確認した訳だしこれで本当に終わりだ。

「これでこの戦いは終了。祝いにはあつと宴会でもしましょう。」

そんな事をいうヘカーティア。宴会って私も飲むんですか……。

「当たり前じゃない」

「ええ……私ヘカーティアと飲むたびに途中の記憶が飛んでるんだけど。」

「ふふふ、気にしないの！」

にやにやとするヘカーティア。ちよつとまでその時私は一体何をしたんだ……？

「まあ良いじゃない。帰りましょ」

「ええ……気になるんだけど」

まあそれは今考えても仕方ないか。もうここに用事は無いのだし帰るとしよう。

ふとクリュティオスの居た場所が目に入った。当然あの巨人はもう居ないし、残るのは焼け跡ばかりである。

「……なんだか哀れだったよね」

あの巨人は狂おしいまでにその主である原初神を信じていた。しかし、その実恐らくだがその原初神にとって捨て駒でしか無かったのだろう。

「はあ……儂、貴女は良くも悪くも他に入れ込みすぎるわ。私はそれに助けられたけれど、貴女のその優しさを利用する者もいるのよ」

「ヘカーティアに言われたくは無いなあ」

「なっ！」

クラウンピースの力、と言うより『自然の力』が奴に良く効いたのはやつのその作られ方にある、らしい。詳しいことはヘカーティアとカリユン君に聞かないとわからないけど。

奴は自然の理から外れし者と自分を謳っていたが、その実際は違ったのだ。奴はただ出来損なりなだけだった。自然に生きることのできなく、また自然から離れるほど無機

質でもない。まるで中空に浮くような、境界線上の存在としてクリュティオスら『ギガス』が生み出されたのだ。その中途半端さ故、神の庇護下には入らないが、妖精のようなちゃんとした『自然』には叶わなかった、ということらしい。

……正直原理よくわからないけど。

まあそれは別に良いのだ。ただ単に奴らは妖精の力に弱いということだから。それよりこの後が問題だ。そんな中途半端な存在がその後もこの世界で生きていけるのか、答えは否だという。当然この世界には自然が満ちてる訳で、どうやっても世界と自然は切り離せない。

だから奴らは私たちに勝ったとしても端から未来など無かったという訳だ。

最悪クラウンピースの手が失敗した場合奴の存在が揺らぎだすまで粘るみたいな脳筋なプランも有ったわけで。

原初神。手下を駒としか思っていないその様は、まあなんというかコテコテの悪役っぽいな。

「一体どんなやつなのやら……」

いつそ会ってみたい気すらするね。

「ふふっ、こんな奴よ。」

ぞわりと雰囲気塗りが替えられた。確かなはずの地面が震えるような、流れるはずの

空気がピシリと凍るような、そんな圧倒的な存在力。……ここでラスボス登場っていうのは笑えなさ過ぎる。

「やっぱり中途半端な子達ねえ。次はもう少し考えないと。それにしてもその妖怪。すごく面白いわ。片田舎の女神が入れ込むのも少しだけわかるわねえ。最も入れ込みやすいのは元からねえ」

妖艶さが溢れ出しすぎてはや見えるんじゃないかと思う位惹き付けられるような感覚とともに、コイツとは関わっちゃ駄目だという恐怖を感じる。それが私の妖怪の部分か人間的な部分から来るのかわからないけど。

「……おい、何をしに来た。アンタの狙いはあの男たちでしょう。私達は関係ないわ」
「そうなんだけどねえ。ここが最後だったからちよつと見に来たのよ。自分の子達の活躍を見たいじゃない?」

怪しすぎるその口元が弧を描く。

「それに貴女もそんなちんけなことに力を割いているのに、十分にあの子達と渡り合えるじゃない? 私にとって、それは少し面白くないのよ」

そう言いながらその神は軽く指を振り、地を裂いた。

「あなた達は私の世界に要らない」

そこから漏れ出すのは黒いもやに、白や灰色の煙のようなフワフワしたもの。前者は

瘴気とでも言えば良いだろうか。後者は……幽霊……いやもしかして魂その物なのか……？

「もううんざりしちゃった。あの子達は私の可愛い子どもたちをどんどん始末していくんですもの」

それだけじゃあない。もつとえげつないものが居る。地面から現われる。

「だから私が住みやすい世界にするの」

大きさは先の巨人の比じゃない。文字通り空を覆っていると云っても過言じゃない大きさ。そして方から生えた無数の蛇にグニヤグニヤな頭足類のような足。

ゴオオオオ！

前後不覚になるような、天地が揺れる咆哮が発せられた。

「だからあなた達も協力してね」

それは地獄を体現した怪物だった。

「ぐ、ぐ主人……」

いつの間にか目を覚ましたクラウンピースが、いつもは快活なはずのその顔の色を悪くしている。私でさえ解るアレは駄目な奴だ。

「…夢。他の三人を連れて逃げて。」

まあそうなるよね。でもさでもさ。

「あれから逃げられる気がしないんだけど。」

この世の終わりを体現したようなアレから逃げる術が有るのか。というか奴の言葉通りなら世界は一度終わるのでは無いだろうか。

「私が時間を稼ぐわ」

「……ご主人。アタイも残る」

そうクラウンピースが言った。

「私も同意見だよ。どうせ無理なんだから当たって砕ける精神みたいな。寧ろ砕けて本望みみたいな」

「私もです！」

メディアが同意しリユン君が静かに頷く。

「そういう次元の相手じゃ無いのよ」

「だからこそだよ」

私たちはヘカーティアと数瞬見つめ合った。

「はあ……」

先に折れたのはヘカーティアだった。

「やるからには勝つわよ」

「当たり前だぜ！」

クラウンピースが元気に言う。手足を震えてるのを隠せていない癖に。

「何処までも付いていきます故」

「私もです。貴女の巫女ですから！」

さて最後の決戦と行こうじゃないか。これをさっさと終わらせて早いこと宴会を開くのだ。

「行くわよ。」

ヘカーティアが声を皆に声を掛ける。それに返答しようとしたところで……

私の視界が歪んだ。

そのまま地面に倒れ込む。

……えええええええ、ここですかよ。

流石に限界だったっぽい。能力の使いすぎでもう力すら入らない。リセットするにもするための力がない。皆が何か声を掛けていているけれど何を言っているかわからない。私を抱えたヘカーティアは若干呆れたように、しかし優しく私の体を横たえた。

そのまま怪物との戦闘が始まった。ラスボス戦前に倒れるとか冗談じゃないよ……

辛うじて認識できた光景は特大の魔法陣を現す二人のヘカーティア、そして天から差す光に包まれた男性の影——

そこで私の意識は途切れた。

九話 最後はハッピーエンドってね

目を開けるとそこには知っている天井があった。

ふむ。少し前に、長々とセリフについて思考する切っ掛けになったあの天井だ。つまりここはあの都の宮殿。なんやかんやで戻ってきたのだろう。

……いや、まさかと思うけど、リセットしたとかじゃないよね。

自分の命だけじゃ無く時間まで巻き戻ったらもう色々と絶望だ。もう一度巨人との死闘をやり直さなければならぬとか最悪すぎる。どんだけこの世界は私に嫌がらせをするのかと……少し不安になってきよろりと周りを見渡す。

よし以前目覚めた時ののお世話係の女性は居ない。どうやら死に戻ったわけではな
いらしい。

天井は確かに前見たときそのままだし、古代宮殿風な造りの部屋も変わっては居ない。それだけだとやっぱり死に戻りしたんじゃないかと不安になる。

けれど、確かに変わっている物が有ったので時間が繰り返している訳ではないよう
だ。

だがしかしけれど、but、although。
その事実確認は私の心を安らかにしてくれなかった。むしろ、私は混乱の淵にたたき
落とされた。

何故かって？

「やあ、お目覚めかい？ハニー」

全裸の男が私と共に寝ていたからだ。

◇
◇
◇
◇

九話 最後はハッピーエンドってね

◇
◇
◇
◇

「そんな顔して。どうしたんだい？」

いや、こつちが聞きたいわ!

爽やかに私に語りかけてくる金髪の青年。現在私と向かい合うようにベットに寝ている。

何故だ。

尚上裸。下は……見たくないです。見た目の年齢は成人したてぐらいだろうか。少し胡散臭いのだけど何か惹かれるその整ったその顔。

口元をゆつたりと綻ばせた彼は手を伸ばして私の頬を優しく包んだ。柄にもなく胸が高鳴るのを感じる。余りに鳴りすぎてはち切れそうなくらい。顔も熱い。あ、いい匂い。

「昨夜あんなに愛を育んだじゃないか。」

「ふえ?」

衝撃の事実

はっ?! えっ? いや何ソレ!? 私いつの間に一線を越えちゃったの!

というか妖怪つてそういうこと出来るの!?! いや、この体になつてからそういうことした事無いんだけど。つまり私はこの人に女として大事な物を……!?!

いや、というか私は女なのか!? 最近そういえばナチュラルに女の子として過ごしてるけど!

待て待て前世は……そう俺は男だぜいえい。

「まだ足りないのかい？ 仕方ないな……なら慰めてあげよう」

「えっ！いや、ちよー！」

顎に添えられた手が私の顔の角度を調節する。向いた先、目の前にはイケメンの顔が。互いに合わさった目はもうそのまま動かない。何処までも深いその金の瞳に吸い込まれるようだ。緊張で私の動きは止まる。

「大丈夫、優しくするから」

「ひ、ひゃい！」

微笑んだ彼はそのまま私の方に顔を近づけてくる。その距離はあと20cm……10

cm……5cm……

さよなら私のふぁーすとキス……！！

「なにしてんのよ!!」

怒号と共に私の目の前が爆ぜた。比喻でもなんでも無く爆ぜた。

正確には私のいる部分を残して、ベットと眼の前の彼が空間ごと消え去った。

「へ、へカーティア!!」

「夢、無事!?!まだ手出されてないわよね!?!」

私を心配してなのか、かなり焦った様子で寄ってくるヘカーティア。

無事かどうか……私の純潔についてということなら、混乱の中で聞いた会話的には、もう既に一発やった後のような気がする。ああ、さよなら私のヴァージン……

「大丈夫よ。朝まであなたは一人で寝てたわよん。コイツの出任せよ」

頭に手を添え、ため息をついて言うヘカーティア。どうやら私の純潔は護られたらしい。

「私が貴女から目を離れた隙を目ざとく突いてきたのよ、女の敵は^{コイツ}」

「痛いじゃないか、ヘカテ。まあ、僕はそんな君のことも愛してるけどね」

「黙れ、このクズ」

辛辣な言葉を吐くヘカーティア。その対象である人物、彼女の魔術によつてベツトごと吹き飛んだ筈の青年。彼は何事も無かったようにそこに立っていた。

ちなみにいつの間にもやら服を着ている。

「改めて初めまして。君は僕のことを知ってるみたいだけど、自己紹介はちゃんとしておかないとね」

飄々としているし、顔に貼り付けた笑みは人畜無害そうだ。さつきまで私に害を成そうとしていたというのに。

しかし、まあただ者じゃあないという事は強く感じた。

「さて、今回の事を話そうか」

そう始めた金髪イケメン。場所は王座の間。居るのは私と彼とヘカーティア、クラウンピースだけ。リユン君ら神官達は先ほど退室した。机の上には会談らしくマグカップが置かれお茶みたいなのが入っている。

「ねえ、結局あの後どうなったの？」

私としてはそれが一番気になる話。倒れた後、無事にここに戻ってきていることから、無事あの怪物と女神の後始末は終わったようだ——

「最終的にこいつが全部片づけたわ」

頬杖について、少し口を尖らせながら言うヘカーティア。不満な様子が滲み出る。どうやら彼が一人であるの化け物と女神を片付けたらしい。あんなの倒せる訳が無い……と普通なら思うが、彼の名を聴いた後だと納得だ。

流石だね……って私と言える立場じゃ無いけど。先ほど名前を聞いてそのぶっ飛び加減がわかった訳だし。と言うかヘカーティアってヘカテーだったんだね。余り神話

に詳しくなくてもそのぐらいいは知っている。

果たして私はこの二人と同じ席に座っていて良いのだろうか……

「ああ、そんなかしこまらなくても良いよ。僕は可愛い女の子が好きなんだ」

「……何だかなあ」

全知全能の神と言っても過言でない存在がコレである。もう色々突っ込み所が多過ぎて……ああ、神様は何故変な奴しか居ないのだろう。あんまり気にしても疲れるだけな気がしてきた。

「相変わらず節操がないのね。浮気しまくって挙句この前は人間に手を出したんだったかしら？ それなのに、今度は妖魔？」

「ははっ僕はどんなレディにも誠心誠意接してるからね。そこに差は無いんだよ」
何だか答えにならないような。

「それに英雄を誕生させるために、彼女との交わりは必要だったんだ」

ま、勿論彼女のことも愛してるけどね。と本心なのか建前なのかよくわからないことを付け足す彼。

しかし英雄か……。もしかしたら私も名前を聞いたことのあるような人なのかな。

「それに君こそ相変わらさずだよ。ギガース達はともかく、あの怪物くらいどうにかなっただろう？ いや、本来ならギガース達にあんなに追い込まれる事も無かつただろう

に。核を3つ全てを都に置くなんて馬鹿な真似はやめろってアレほど……」

「黙りなさい」

彼の話を強く遮るヘカーティア。3つの核……？

「……はあ、入れ込みすぎるのは君の美点であり短所だよ」

いつだか聞いたような事を言う彼。そしてそんな彼を射殺しそうなヘカーティアの視線。

それを全く気にせず、彼は苦笑する

「話がそれてしまったね。いや正確にはヘカテのこれからに關係するから逸れてはいないのかな？ アレの話をしよう」

「アレ？」

生憎と寝ていたので何が起きているのか私にはわからないのだ。

もしかしてまだあの怪物が生きてるとか？

あるいは何かあのクソ女神がまた何かしでかそうとしてるとか？

「ははは、クソ女神とはなかなか言うね。アレでも僕の叔母さんなんだ多めに見ておくれよ」

彼の……叔母さん？ 神話の中でもずば抜けて名高い彼のその生みの親の親の子と

か……というかそんなに高位な存在なのに気に入らないから世界を作り替えるとか

……いや、止めよう。余り考えすぎると頭が痛くなる。

「それで叔母さんとタルタロス：そうだねえ、僕ちゃんには『地獄』と言ったほうがわかりやすいかな。その二つが交わってあの化物が生まれたわけなんだ」

地獄？ それって子供を産める系の物だったっけ？

「まあ、人間的に言う则可笑しいけど、そういうものなんだ。なんたつて神様なんだから」

なんでもありだな神よ。もう驚かされないよ。もはや半ば呆れつつある。

「そういう経緯で彼の化物が生まれたわけなんだけど、アレが顕界に出てきちゃったのが問題だね。あ、顕界っていうのはこの人が住み神が見守るこの世界のことだよ」

説明を織り交ぜてくれるのはわかりやすく助かる。何がどう不味いのだろうか？

「うーん、もしかしたらもう気を失っちゃつてたかな？ あれが地面から出てきた時一緒に何か出てきてなかったかい？」

地面から？ あの瘴気とか、後は白いふわふわした奴かな。

「そうそう。あれはいわば魂の残り滓みたいな物なんだ。怨霊とか瘴気とか。本来はあれは地獄内で何やかんや処理される訳なんだけど、あの化け物のせいでそれが上手く行かなくなっちゃつてねえ」

本来認知されないままに完結していた地獄が、此度の件で崩れたらしい。

地獄。罪のある物が死後行く場所。閻魔大王が仕分けるんだったか。いや、それは日本のお話だから此処ではどうかは知らないけど。

ともかく地獄が機能しないという事に問題があるようだ。

「このまま機能しないとどうなるの？」

「そのうち顕界が地獄から溢れた魂達によつて満たされてしまうね。」

あの黒いもや、そして死人の思念の残る怨霊。そんなもので満たされた地上。ろくな未来でないと思われる。

「……満たされるとどうなるの？」

「当然常人が生きていける環境じゃなくなるだろうね」

だろうと思った。つまり地上が地獄と同化するわけだ。

「いや、そんなのダメでしょ。」

地上から人間が居なくなる。流星にそれは大惨事過ぎる。そんなヤバいこと放置してたら駄目であろう。

「ふむ……何で、駄目って思うのかな？」

「えっ？」

何でってそりゃ……歴史的に。あれ……？

でもこの世界は別に違ってても良いのか。いやでももし人間が居なくなったら……で

もまあわたしは妖怪で……いやいや、そもそも……

「僕等は神様だからね。信仰に応えないとその存在を人々に知ってもらえないわけだ。そうしないと顕界に長く居られなかつたりするわけだけど」

それはそうだけど……また随分と利己的な話だ。本心からそう言っているのか、はたまわざとそう言っているのか。

そのニヤついた顔からは読み取れない。

「でも君は違うだろ？ 理から外れた姫君さん」

「いやでも私は——」

私は……何だ。一体どうしたいんだ……？

「君は一度見限ったんじゃないかい？」

「っ！」

私は一度「生」を見限った。自らその生を絶つたのだから。なら私は、そんな私は——

そこで不意にぽんつと優しく肩に手を置かれた。

「あんまり彼女をいじめないでくれるかしら？」

へカーティア……

「酷い顔してるわよ。今は忘れなさい。そもそも生物が住めない地上なんて良いわけが

無いんだから。貴女の常識に間違いは無いわ。遊ばれてるだけよ」

「え、あ、うん」

今は忘れよう。これは駄目だ。

「記憶を勝手に覗くなんて褒められた事じゃないわね」

「いや、夢ちゃんがあんまりにも面白いからさ。それにしても随分その子に入れ込んでるね……さつきも言ったけどそれは君の欠点だよ」

「すぐにほいほい取り替える貴方よりはマシよ。……全く。それで結局私に何をやらせたいのかしら？ 回りにどく話してないで直に言いなさいよ」

私の肩から手を離しひらひら手を振るヘカーティア。嫌そうにはしているが、彼の頼みは受けるつもりみたい。

「うん、そうだね。実はあんまり時間もないし」

彼は話し合いが始まって以来そのままだったテーブルの上のカップを持ち上げる。一口じっくりと飲み込んだ後、彼はこう切り出した。

「ヘカテにはタルタロスに行つて欲しいんだ。」

瞬間、空気が凍った。

「……それは私にここを離れろつて言うのかしら」

ヘカーティアはまだ何もしていない。けれど彼女が話すだけで息が詰まる。それく

らい重い。

「何もいきなり全員でつて言う訳じゃないさ。一人だけで良い」

やはりそれを何ともないように受け流す彼。

微笑みはそのままだに言葉を続ける。

「取り敢えずタルタロスが円滑に機能するように管理して欲しいんだ。清めと贖罪も司る君が適役だ」

「別に私である必要がないわ。冥府の二人に任やらせればいいじゃない」

「二人にも手伝つて貰うけどそれぞれ元々の役割が有るからね」

静かに言い合う二人。空気は張りつめたままだけど。…なんで私ここに居るんだろ。胃が痛くなつてる気がする。

「アナタのお仲間は沢山居るでしょう」

「同じさ。皆それぞれ役目がある。それにきつと君はやらざるを得ない」

彼は手を組みテーブルの上に立て、その上に顎を乗せる。少し細められた目は：ちよつと恐い。

「地獄の暴走で一番最初に被害を被るのはここ、この都さ。君が抑えてるようにはここは地が裂けやすい。だからここをおばさんも此処で召喚したんだ、あの化け物、デューポーンをね」

こんな事言いたくは無けれど、と少し小さい声で前置きをして彼はヘカーティアに語りかける。

「君はもつと自分の事を省みた方が良い。今何をして、何をやめるべきか、ね」

「はあああああああ、もうムカつくわあ!」

「飲み過ぎだつて……酒くさつ!」

へべれ女神。向こうのほうで神官たちが頭を抱えているような気がする。

「あんな奴、奥さんに後ろから刺されればいいのよん」

「一応めでたい席なんだから愚痴らないで欲しいなあ……」

首に腕を回し絡んで来る駄女神。もはや中年上司の酔っ払いのソレである。いや上司というよりは同僚か……会社勤めをしたことが無いので、実際はわからないが。

「つたく。わあつてるつーの! でもあのにやけ顔がムカつくわ!! そう思わない?

思うわよねん!」

「わかったから、わかったから!! 纏わりつくやつ!」

結局彼女は地獄へ赴く事になったらしい。それは彼女にとってそれは不服だった。それだけ彼女が此処を気に入っていると言うこと……まあそれだけじゃ無いのだけど。

「ほらほらへカーティアは凄いいんだからさ。もつとちゃんと節度をもつてだねえ……」

私の前世でも彼女の名は至る所で聞いた。それだけ有名な神様なのだ。ソシヤゲやラノベに彼女を元にしたキャラが沢山いた。それが神様の信仰を元になっているかという微妙さだけだ。

この世界で神は信仰を元に姿を保つ。もし前世に彼女に準ずる者がいたとしても、もう消滅していたのかもしれない。

「凄くなんかないわ」

でもこの世界には神がちゃんという。けれどそのままは良くないとあの全知全能の神は言った。未来は人だけでその歴史を紡ぐことになる。良いか悪いかではなくそういう物だと。

今はまだその時じゃ無いらしいが、へカーティアは余りにも入れ込み過ぎている。彼女は自分の体の3つの核によってこの地に起こる噴火などの災害諸々を抑えている。そのせいでいくらか

弱体化しているのだが……

それはともかく、彼女がここに居続け民を能動的に守るが故にこの都は栄えた。まさに神の加護だ。

けれどそれは余りに時の流れに反しすぎる。まだ神代だから良いもののヘカーティア無しでは続かない、つまりは人だけでは成り立たないのだから。余り流から逸脱するのは良くないらしい。

ふはは話が壮大過ぎるぜ。此処に来て以来スケールがデカすぎて訳が解らなくなってきた。そういう小難しい話は他に任せよう。

とりあえず私が今思うのは落ち込んで酒の入ったカップコロコロ回す彼女はらしくないということ。

「はあ、しょうがないなあ。付き合ってあげるよ」

「夢……」

カップを取ってヘカーティアに向ける。

「宴会は楽しまない」と

「ええ、そうね」

確かに彼女としては色々思う所は有るのだろうけど、今くらい、無事戦いに買った今くらいは心から楽しむべきだ。

「そうと決まったら飲むわよん！ また酔いきった夢の姿を見たいしね！」

「……ちよつと待つて。酔いきつた私つて何さ?」

この前の酒飲みで途中の記憶が無いのと関係がある気がする。

「まあ良いじゃない!」

「え、ちよ。あ! 一気は無理だつ……」

この後めつちや飲んだ。

飲まされまくった私は何とか気を失う前に、ようやくとヘカーティアから解放された。というか逃げた。頭はふらふら、胃の中はぐるぐるだ。

現在酔いを少しでもマシにするため、屋根に上り夜風に当たっている。石造りのため接地するお尻と手の平が少しひんやりする。

「まだ宴会中じゃないの?」

私は前を向いたまま声を掛けた。後ろに感じる気配は見知った気配。思い返せば転生した直後はこんな事解らなかつた。

どうにも色々戦闘をこなす内にそういった力も育っているようだ。さすがは妖怪、化

け物なだけはある……なんてね。

「夢様にお話があります」

「そんな畏まらなくていいって。私は神じゃあ無いんだし」

礼儀の正しく青年リユンは話し出した。

「まずは感謝を。ヘカーティア様を助けて下さり本当に有り難うございます」

「だから別にそんな改まって言わなくても良いのに……」

私が彼女に助力したのは頼まれたからでも有るけど、なによりヘカーティア自身に感謝しているからだ。再び前を……前を向くきっかけをくれたのだから。もしヘカーティアに会わなかったら今でも空を漂っていたに違いない。

「そんな事はない。貴方は偉大なのですよ。神ではないとおっしゃるが、少なくとも民は貴女を神のように崇めている」

人を導く神様。ヘカーティアと同じような立場に私になれるはずもない。そもそもなる資格が無いのだから。

「私は妖怪だよ」

それも出来損なりだ。過去と決別できずどっち付かずで中途半端な。そのせいで幾度も後悔するようになちつぽけな妖怪だ。

「……それともう一つ。貴女様にお願いがありません」

リユン君は何か言いたげだったがそれは飲み込み、そう言った。

「お願い？」

私は体を反らし彼の方を向く。

「ええ、お願いです」

お願い。それはつまり私に強制される筋合いは無いもの。けれど、彼は優しい笑顔で次の言を放つ。

「私はもう長くないのです」

「!? それはどういうこと……?」

彼はもう先が長くないらしい。なんでも目の能力の代償とか。原初神の創造生物を見抜ける力、まさに神にすら届くようなその力は人の身には思い、と。

それは……それは余りにも酷すぎやしないか。

「ヘカーティアには？」

「伝えてません。あの方は優しすぎる。私と出会った時の様にまた救おうとするでしょう。ともすると自然の理を捻じ曲げてでも」

ヘカーティアならやりかねない……いや、やるだろう。現に彼女は主神から警告を受けたわけだし。

けど、それよりも何よりも私の頭の中は一つのこと一杯だった。

（何故、自分の死期を悟ってそんな顔で居られるの？）

きつと彼は聞けば答えてくれるだろう。けど駄目だ。聞いちやだめだ。だって私は
「それでお願いですか」

慕う彼女のことを考え満たされたように最期を迎える彼と、恐らくは嫌気が差して一
度この生を絶つた私。

「ヘカーティア様のことをどうか支えてあげて欲しい」

余りにも正反対だった。

「それは無理だよ。だって私は……」

「よろしくお願ひします。 儂様」

強い意思を持って私を見つめる目。そこに迷いなどなかった。

「……わかったよ。但しヘカーティアが此処を離れるまで」

「ありがとうございます」

安心して微笑む彼。彼にとって何より大切なのはヘカーティアの事なんだ。

「ちよつと何二人だけで話してるのよお。逢い引きの相談かしらあ？」

「友人様、神官様たしゆけてえ……」

「そんなわけ有るはずないでしょ……というか、クラウンピースに潰れるほど飲ませたの

か……」

微妙に呂律の回っていないヘカーティアが此方にやってきた。肩には目を回している三色の妖精。

「丁度良いわ。リユンも付き合いなさい！今夜は飲むわよん！」

「仰せのままに」

恐らくこの世界はいずれ変わってしまうのだろう。人とそれ以外の距離が開いていく、それがこの世界の未来だと彼の神は言った。

「飲ませすぎないようにね」

「じゃありユンの分も僕に飲ませましょう！」

「いや私が潰れるから……飲み潰れてる間って私はどんな感じなのさ？」

でも、まだ時間は在るらしい。大方科学が発達する近代以降にそれは顕著になるんじゃないだろうか？

「それは……フフフツ。ねえ？ リユン？」

「ええ、そうですね。僕様も普段からああであれば良いのに」

「……やな予感しかないんだけど」

まだ時間はある。ならまだ急がなくても良いじゃないか。

「……………んむ、ごしゅじん……………」

「あらあら寝ちやったわね」

でも出来ることなら……

「さあ、飲むわよん！」

彼らのような関係がずっと続けばいいのに、と思わずには居られない。

幕間 アタイのご主人様

アタイはクラウンピース、妖精だ。

「クラウンピースちよつとこつちに來なさい」

「どうしましたご主人？」

このやたらキラキラした布の服を着て、頭の上に変な玉を乗せてる女神。彼女こそ私が最近仕えることになったご主人、ヘカーティア様だ。

「これを持ってなさい」

「何ですかいこれ？」

まあ仕えることになったと言っても半ば無理やりだし……ホントなら彼女に仕えたくなんかない。アタイは天下の妖精様だ。自然に伸び伸びと過ごしたいのが本心である。

……けど逆らえないでしょ！ 怒ると超怖いんだって！ ホント！

「私特製の御守りよ」

「はあ」

ウインクしながら私に渡されたそれは何やら目玉のペンダントのようだった。

「持つてるときつと良いこと有るわよん」

ご主人はそう言うけれど、見た目が何とも微妙だ。凄く…何て言うんだっけこういうの。おこがま…わがまま…そうだ、禍々しいだ。

その禍々しい目玉を首から下げ服の中に入れる。素材の石の冷たさが少しひんやりと肌に伝わる。服の中に入れたのは何度も言うように見た目がアレだから。

うん、とても幸運の御守りとは思えない。

「さあ今日は何をしようかなっ〜！」

街の高い建物の上に登りアタイは街を見渡す。とんでもなく大きい街だ。少なくともここに来るまで、アタイはこんなに沢山人を見たことはなかった。そんなに長く生きてる訳じゃないけど。

夏を超えだんだん寒くなる位の季節。少し肌寒いが、空には澄み切った青が広がり、眼下の方では賑やかな人の営みが聞こえてくる。

堂々とこの街に居られるのはご主人に仕えるようになって良かった事の一つだ。

ご主人はこの都の主であり皆から好かれている、そのご主人の部下であるアタイは結

構自由に過ごせるといいうわけ。

「フハハ！絶好のイタズラ日和だぜ！」

妖精はイタズラが好きだ。むしろイタズラの為に生きてると言っても過言じゃないね。

こんなに人が居るつてことは、イタズラして下さいと言われてるようなもんだぜ！

とは言うものの最近マンネリ気味だ。余り大それたことをやると神殿の魔法使いが出てくるし、細かいことはそもそもやっても楽しくない。

……そういえばご主人にイタズラを止められたかとはないなあ。なんでだろ？

ともかくこれは大変だ。早急に何か新しいことを考えないと。

「およう？あれは友人様。」

食事をする店でテーブルに分厚い本を開き、何だか唸っている。白い服に白髪の真つ白な少女。いつも通り何とも無さそうな表情をしている。

そう言えば友人様が泣いたり怒ったりしているのを見たことがない。笑ったりはするけど。感情的にはならないというか、起伏が薄いというか。

ともかくいつも落ち着いているのだ。最初に出会ったときも何だか全部水に流してくれたし……

よし決めた！

あの温厚な友人様をアタイの恐怖のイタズラでどうにか怒らしてやろう。

「にじしっ」

目的が決まったなら早速行動だ。

楽しくなってきた！

イタズラその1。狂気の松明。

「アタイの力をとくと見せてやるぜえ！」

友人様の近くに素早く現れ、松明を掲げる。アタイの力でこの松明は見たものに狂気を与える！

これで友人様はアタイの思惑通り怒り狂う…！

「……あるえ？」

しかし何も起こらない。

友人様はジトツとした目で此方を見たままだ。前は確かに効いた筈なのに!?

「いやあれはリユン君のせいだし、普段なら無効化できるから」

なんだってー!?! くそっならもつと力を込めてやるっ！

「あ、ちよ。そんないきなり力入れられると力加減が……」
友人様が何か言うと共に私の視界がブレた。

「あ、れ？」

意識が遠のく。パタリと倒れる、前から友人様が私を抱えてくれた。

「ごめん、いきなり強くするもんだからつい反射しちゃった」

くっ！ やられた！ 友人様の意味の分からない能力のせいで……！

強めすぎた狂気のせいでアタイは気を失った。

数分後に起きたときアタイは友人様に膝枕されていた。凄く寝心地が良かった。

その2。狂気の本入れ替え。

コップを口元から離しコトツとテーブルに置く友人様。幻想的な容姿も相まって実に上品だ。

「駄目だ。わからない！ メディアに少し聞いてくるかあ」

そんなことを言って友人様は席を離れた。テーブルの上の筆記具と本はそのままだ。にししつ来たぜアタイの時間が！

友人様が曲がり角を曲がった直後に、アタイは彼女が直前まで座っていた席に行く。懐から本を取り出す。この店の倉庫からこっそり拝借した本だ。これを友人様の方厚いのと取り替える。

うっ重た！

少し本の厚さに驚いたものの無事交換。アタイは再び物陰に戻る。

にししっ戻つて来たたら本が勝手に入れ替わっている。この理不尽な現象に友人様は怒りを隠せないはず……！

数分後に友人様が戻ってきた。

「宿題増やされた……聞きに行くくんじゃなかったよ……」

何やらぶつぶつと愚痴を言っているが実に丁度良い。鬱屈したところにこの理不尽が襲い、遂に友人様は怒り狂う……！

「あれ？……おおこれ料理のレシピ本じゃない。」

んん？ 何か喜んでる?!

「結構色々載ってるなあ。郷土料理集なのかな？ ふむふむ、なるほどなるほど」

そのまま友人様はその本をじっくり読みだした。

数刻して友人様はその本を読み終えた。実に真剣にその本を読み込んでいた。

「あっクラウンピースこれありがどうね。凄く参考になったよ。」

アタイはお礼を言われたのだった。

……何故だっ!?

その3。狂気の虫責め。

ふふっ……あっはっはっはっは!

2つもかわされてしまうとは予想外だったぜ!だがもう容赦はしない!

アタイには取って置きがあるっ!

アタイの手には無数の虫。こいつを友人様が席を立った隙に仕込んでやるぜ!

「ふっふっふ、我ながら最高に狂ってやがる……!」

これできつと友人様も怒るはずっ!さあ来い友人様!

「飲み物おかわりしよ」

カップを持った友人様が立ち上がる。

来た、遂にこの時が来た!

アタイはまるで風のように素早く友人様の席に近づき、まるで流れる川のように虫をセツトした。場所は本の裏である。

そして素早く再び物陰へ戻る。

これでアタイの勝利だ……！

「ふふくん♪」

鼻歌と共に友人様がやってくる。そんなに余裕でいられるのも今のうちだけだぜ！

「よつこらせつと。…あれ？何か本が浮いてる？」

席に座った友人様はすぐに異変に気づいた。さあその本を持ち上げるんだ！

「何か挟まって……」

本を持ち上げた所で動きが止まった。さあ怒り狂え!!

(…あれ?)

友人様が止まったまま動かない。どうしたのだろうか？友人様だったら怒らないまでも呆れそうなものだけど。そんな様子は無くただただ動かない。

変わりにテーブル上の虫は蠢いている。

「き……」

「きゅー」

ようやく言葉を発しそうだ。

「きゃあああああああああ！ む、む虫無理ッ無理ッホント無理無理無理!!」

思わずポカンとする。

友人様は呆れるでも怒るでもなく絶叫したのだった。椅子からひっくり返って、地面を後退りしている。腰が抜けたようで、目は涙目だ。

「うう……グスツ」

いやもう殆ど泣いてる。

あ、炎弾で机ごと虫を燃やした。かなり必死の形相。単に虫嫌いというかもはや恐怖心すら抱いている。

「予想外だけど……ふ。ふ。ふ。ははは！」

堪えられなくなって私は笑い転げだす。予想とは違ったが友人様の意外な一面が見れた。イタズラ的には大成功だ。

いつも落ち着いている友人様とのギャップが最高だね！ 元の目的を果たせなくても十分過ぎる成果だぜ！

「ひひっふーふー……あの顔、傑作過ぎるよ」

これだけで今日は楽しめそうだ。出来ることならあの顔を記録しておきたかったね。友人様の泣き顔なんて今後いつ見れるようになるか。

……いやまたイタズラすればいいじゃない！ アタイって頭良いっ！

「それにしても『私って何だと思う?』とか変なことを真面目に考えてる友人様があんな顔をするとほね!」

「変なこと考えてて悪かったね。」

「へっ?」

いつの間にか友人様は私の側に立っていた。さっきまでとは打って変わって笑顔だ。

何処までも笑顔だ。

「私の嫌いなものトップ3って知ってる?」

「い、いえ知らない、です」

笑ってるのに表情がわからないという謎の状態。

「一番目は置いておくとして……」

ただこれはわかる。

「二番目は『虫』なんだ。それはもう見たら前後不覚になるくらい」

友人様は——

「ねえ、クラウンピース。さっきの虫みたいに燃やしてもいい?」

——本当に怒ってらっしやる。

地獄を見た。

あれは……駄目だ。友人様は怒らせちゃ駄目だ。ご主人も結構ヤバかったけど、友人様はもつとヤバイ。とにかくヤバイ。

『一回休みで復活しない向きに変えたら妖精ってどうなるのかなあ？ねえ？フフツ』
とか私が逃げ回る間に言っていた。恐ろくかなり本気で。あの変な能力ならやりかねない。

とにかく放つオーラが生命、というか存在自体の危機を感じたのだ。

「友人様に虫は駄目だ。今度は気をつけよう」

しかし一体何が有ったらあんなに虫嫌いになるのだろうか。謎は深い。

「んー、ここどこだろう？」

無我夢中で逃げ出したアタイは街のはずれまで来ていた。ふわふわと地面に近い所を飛びながら周りにはなんだか木々が鬱蒼としてて見晴らしが悪い。

「……迷っちゃった」

黒くなっていく空。どんどん方向感覚が無くなってくる。

ポツリと頬に何か落ちた。

「うわあ、雨まで降ってきたよ」

ううむついてないなあ。友人様にイタズラした罰なのか?? いやでもいつもイタズラはやってるし今更な気がする。

「どうしよう……」

初めはパラパラ降っているだけだったのに、いつの間にか本降りになってきた。服が水を吸い肌にまとわりつく。

「うう寒い」

どんどん体温が奪われて行く。暗くて不自由な視界も相まって少し……心細い。

「いやいやアタイは天下のクラウンピース様だ！心細くなんか無いもん！」

……強がったら余計に寂しくなった。

とりあえずどうにかこの森から抜けよう。

そう行動することを決め、足を踏み出した矢先に

「かはっ」

アタイは強く横に投げ出された。

「つつー！」

そのままぬかるんだ地面を転がり、木の幹に当たってようやく止まる。

何が起こったの……？

痛みをこらえ目をあけようとすると、何か片目が染みて開かない。

何とかもう片目を開けるとそこには三頭の犬が居た。アイツに体当たりされたのか。

「妖魔……!?!」

恐らくは妖魔の類だろう。それもアタイにとつては強力な。

普段友人様としか関わらないので余り気にしてなかったけど、本来妖魔は人間よりも強く、当然ながら妖精よりずっと強いのだ。

「オマエ、ヨウセイ」

片言で話すその口からよだれが垂れる。濡れた地面に着くと白煙が発生した。きつとあれに触れたら溶ける。溶かされる。

逃げないと……!!

アタイ視界を広げるため染みる片目を拭う。

「うわっ」

拭った手にはべっとり赤い血が着いていた。さっきの衝撃でどこか切ったのだろう。血を認識すると急に体が怠くなった。動けない。さっきの一撃が大分効いている。

「ヨウセイ。デモ、ウマソウ」

三頭の怪物はこちらを目掛けて駆けだしてきた。

「くそっ!」

足が動かないので松明を出し、炎弾を放つ。狙いを定める余裕はない。

「ガルウ！」

頭の一つに当たったけれど他の二つは健在。止まる気配なしだ。

「こつち来るな！」

止む終えず能力を使う。松明の火力が上がり妖怪の目を照らす。

（やった！）

今度は上手くいったみたいで妖怪の足が止まる。二つの頭同士で喧嘩し合ってるみたいだ。

アタイは動かない足を引きずってこの場から離れようとする。何とか今のうちに：
！

そう思った時奴の頭の頭のひとつと目が合った。

最悪だ。

あれはさつき炎弾を当てた頭だ。炎弾で怯んでいたから能力が聞かなかったんだ。

他の二つの頭をよそにその妖怪は私に近づいてきた。その鋭い爪の付いた足が振り下ろされる。その後の衝撃と痛みを想像して、こらえる様に胸元を握った。

チエツクメイトだ。

「はあい、可愛い部下に何してくれてんのよ」

痛みの代わりに聞こえたのは優しい声。

そう、ご主人の声だった。振り下ろされた足をその手で握っている、いやそのまま握りつぶしそうだ。

「ご主人……」

「すぐ終わるわ」

そのまま無造作に妖怪を投げ飛ばし木の幹にぶつける。そして手に魔法陣を浮かべ、次の瞬間すでに妖怪は消えていた。

あつという間だ。圧倒的過ぎる。

「まさか丁度渡した後に、こんなことになるとは」

どうやらあのお守りを通じてアタイの所まで来たらしい。

「大丈夫、じゃないわね」

どこからか取り出したタオルで私の血を拭ってくれる。微笑むその目は見るだけで安心する。

「おぶっていくわ。乗りなさい」

「……うん」

そう言ってこちらに向けられた背中にアタイは体を預けた。冷え切った身体に温もりが染みる。

そのまま森の中を進んでゆく、どういう仕組みか雨はアタイたちに当たらない。ご主人様がなにか魔法を使っているのだろう。しとしと葉を揺らす雨の音だけが響く。そのまま言葉は無く森を進んでいく。

「ご主人……」

「ん？」

少し経ってアタイは口を開いた。急に不安になったから。

「何でアタイを助けてくれたの……？」

アタイは元々ご主人達にちよつかいを出して、仕方なく彼女の管理下に置かれたはず。それならわざわざご主人がアタイの事を助けてくれる理由なんて、有りはしない。

「はあ……全く」

ため息を付いてご主人は片手をアタイの目の前まで上げ、

「あでっ」

そのままデコピンされた。地味に痛いっ。

「妖精が一丁前にそんな事悩んだって仕方ないでしょ」

「むう」

なんだか小馬鹿にされてる気分だ。

「助ける理由なんて一つじゃない。貴女は私の部下なのよ？」

「でもそれは仕方なく……」

「でももへちまもないわ」

「ご主人は迷いなんて欠片もなく言う。

「貴女はクラウンピース。私の部下よ。貴女が無為に傷つくのは私が許さないわ」

ああ、彼女はだからあんなにも皆に慕われるのだろう。何処までも真つ直ぐで優しい。

「だからそんな事言わせないわ」

なんだかご主人の事が……いや、ご主人様のことごとくわかったような気がする。

「そっか」

「ええ、そうよ」

実際のサイズじゃないけど、この背中をすごく大きく感じた。体をもう少しだけ預ける。あつたかい。

「……もう、無理やり部下にしといて何言ってるんです」

「あら、言うようになったわね」

最初は納得行かなかったけど、もう少しだけご主人様の部下でいようと思う。

「ご主人……」

「何かしら？ ピース」

「……ありがとう」

その一言だけ伝えてアタイは眠りに落ちた。怪我して疲れていたのも有るけど、ご主人様の背中が心地よかったのもある。

「あらあら、なんだかんだ言っただけで見た目通り子供っぽんだから。」
うう。子供っぽくなんかないもん。

三章 旅とか魔界とか

一話 そうだ旅をしよう

数年の時が経った。

数え切れないくらいいの年を重ね、リユン君もメディアも居なくなり残ったのは結局私達二人だけだ。

その点に関しては何も後悔は無い。彼ら彼女らは皆それぞれの生をいろいろな形こそ有れども

「それじゃそろそろ私は行くよ」

「……まだ魔法は完成してないじゃない」

私達は街を見下ろす高台にいる。活気づいた声が市場の方から聴こえてくる。変わらない風景だけど、その裏で変わってしまう事もある。

あの神々の戦いから優に数百年は経った今、隣に立つ彼女は段々と人間達から距離を取ってきた。

「うん。でも、もうここの本は大体目を通したし、ちょっと他の場所を探しに行こうかと

思って」

神が人から離れていくのは少し見ていて何とも辛い物があった。ヘカーティアだからなおのこと。移りゆく世をみて彼女は一体何を思っているだろうか。

そんな彼女の事を今は亡きリユン君との約束のため、この目で見続けてきた。でもそれも今日まで。

ようやく人だけで成り立つようになったこの都。それを見届けた彼女はここを発ち地獄へと向かう。

「ねえ貴女も一緒に……」

「クラウンピースは地獄に居るんだっけ？」

言葉を遮るように重ねる。皆まで聴かなくてもわかるから。私の進む『向き』はもう決まっているから。

「……ええ、そうよ。頑張ってくれてるわ」

「そっか。それにしてもクラウンピースが地獄生まれだっていうのは驚いたなあ」

「……はあ」

ん？彼女が急にため息を突き出した。頭も抱えている。

「どうかしたの？」

「どうしたもこうしたもないわよん！」

ムキとまるで痲癩を起こした子供のように、まあ要するに我慢ができなくなつて声を荒げる。何もそんな息を荒げなくても。

「遠回しは止めだ！ 貴女も一緒に地獄に来なさい！」

「いや私にはやることが」

「やることつて言つても盛大な自殺じゃない!? 勝手に死なれたらこつちの寝心地が悪くなるの！」

「ヘカーティアには関係ないでしょ」

「オーケーオーケー。それは私への宣戦布告ね」

頬をひくつかせたヘカーティア。魔法陣を手に浮かべてそのまま私に向けてくる。陣を見る限りなかなかガチな魔法である。

「お、落ちて着こうよ」

「落ち着くのは貴女よ！ そんなに死にこだわつて何になるの？」

彼女だと私の四肢を折つてでも止めてやるとか言いかねない。数分掛けて何とか彼女をなだめる。

「魔法が完成したら一度顔を見せるから。ね？ その時まで取つておこうよ」

「取つておくつて何をよ。私は……！」

「ありがとう。ヘカーティア」

私は彼女の目を見てお礼を言った。彼女のその優しさへの尊敬、そしてこんな私へと気にかけるお節介への感謝。

そして拒絶。

もうとつくに彼女は解ってるだろうけれど。

……ああ、私ってずるいなあ。

「……絶対顔見せなさいよ」

「うん、もちろん」

「その時はぶん殴ってでも止めるわ」

それでも私の話を聞き入れてくれる辺り、やつぱりヘカーティアだ。その優しさは女神だからと言うより、その優しさ故に彼女は絶大な信仰を得る女神になったのだろう。

彼女は凄い。

「それにしても、貴女がいなくてつまらなくなるわね。……魔法の試し打ち出来ないし」
「……おい、私を引き留めるのはそんな理由なのかっ」

さつきまでモノローグを返せ！ この戦闘狂ツ！！

ボソリと恐ろしいことを言わないで欲しい。

思い出される魔法の鍛錬の日々。メディアが何処かへ出掛けてからはヘカーティアと決闘形式で演習をしたことが多々あった。

無論幾度も死にかけた。

死ねないけど。

「はあ、私も何処か旅でもしようかしら。三人居るし、地獄に一人置いてもあと二人居るわね」

「私についてこないでよね」

「あらもう、いけずねえ。うーん、そういえば月にも人間って居るのよね。行ってみようかしら。ほら最近月の女神としても崇められてる訳だし」

「い、いやあ、それは止めといた方が良いんじゃないかなあ？」

彼女と月夜見は絶対に思想が合わない気がする。喧嘩して月が無くなりましたとか笑えない。

「まあ、何にしてもそろそろ私は行くよ。へカーティアも元気だね」

「……貴女もね。魔法の完成の知らせ、せいぜい楽しみにしてるわ」

それを別れの言葉に、私たちは別々の向きへと飛び立った。

ごめんへカーティア。

心の中で謝る。恐らくもう彼女に伝わることは無いけど。

「実はもう出来てるんだ」

私はいつも通り能力で謎の収納空間を切り開き、そこからいつだかの『魔法使いの杖』を取り出す。

そして間髪入れずに変身。

いつだかみたいに、実況チツクに語る心持ちでもない。

「最期がこの格好てのはちよつと納得行かないけどね」

この杖はただ単に魔法少女に変身するだけじゃなかった。後に調べてわかったことだ。

ヘカーティアが作ったからかどうかは知らないが、これは膨大な量の魔力のタンクとなっているのだ。

その一部を使用して魔法少女に変身するのだけれど、今回用事が有るのはその変身ギミックの方じゃない。

用があるのは貯蔵庫としての昨日の方、私は数百年をかけて少しづつこの杖に魔力を貯め続けてきた。この最期の魔法を起動するために。

魔法の名前は『収束する世界』
コンパージワールド

……何か厨二っぽいネーミングセンスは突っ込みじゃあいけない。

というよりも私の命名ではない。大昔にどっかの誰かが付けたのだ。どんな魔法かというと実に単純。

手順は少なく、魔力を放出して自らを中心に圧縮するだけ。属性も何もない、もはや魔法と言うのもおこがましい。

神殿などにあつた文献に、過剰な魔力の収束は消滅をもたらず、という事が書いてあつた。

つまりこれを利用すれば文字通りこの世界から消えられるはず。そう当たりを付けた。

魔法でマーキングを付けた石で実験してみた所ビンゴだった。その石はこの世界から文字通り消え去つた。

当初はどうにか呪いを解いて後は死ねばいいと思つていたけれど、死ぬと再び転生する可能性があつた。だから消滅する。

やるなら徹底的に、だ。

「この辺で良いかな」

私はヘカーティアと別れてからひたすらに空を飛んだ。あんまり近い所でやると彼女に感づかれてしまうかもしれない。陸が続くのは北西方向だったのでそちらの方に。

前世で言う東欧と呼ばれる場所かな？そこまでやってきた。眼下に広がるのは森

林。誰も人はいない。

そこで私は魔力を解放する。ここ数百年で扱える魔力も随分増えた。杖からも出力した可視化するほどの魔力は、私を中心に球状に展開される。

「今度こそ、さよならだね」

その膨大な魔力全てを一度に集約。集まった魔力は空間を歪める。この世界から体が、私という存在が剥離していくのを感じる。

「じゃあね。クソツタレなこの世界。」

最後に付いた言葉は悪態だった。

その一言を残して私はこの世界から消え去ったのだ。



私はこの世界中を旅している。

目的は無いと言えれば無いし、有るといえばある。そもそも旅をする事自体が目的だからだ。

この世界には文字通り果てがない。何処まで進んでいっても新しい物に出会える。それらを見て回ることが私の人生の楽しみだ。

子供の頃にその楽しみを知った私は、その為に魔法を学び、捨虫の魔法を覚えた。そうして悠久の時を得たのだ。

一般人にも魔法が浸透してからかなり久しい。

だから不老になる人は少しずつ増えている。けどまだ珍しいし、差別もの完全に無い訳じゃない。ただそれでも理解をはじめとする示してくれた家族や親戚達。

人に恵まれたことに感謝しつつ、先に逝ってしまふ彼らとの別れは辛かった。

そうして私は時間を手に入れ、長い間旅をしてきた。

色々な事があつた。魔族に殺されかけた事もあつた。

それに色々と珍しい物も見てきたつもりだ。珍しい食べ物然り、変な現地民や生物然り。

ドラゴンに悪魔や魔族など様々な種族が入り乱れるこの世界、面白い出来事に欠くこととは無い。果ては創造神すら気さくに話してくる。初めて話した時は流石に驚いた。

そんな何でも有りな世界で、色々な経験をしてきた私。

でもやっぱりまだまだ世界には面白いことが有るらしい。

「空から人が……降ってきた？」

空は宵闇。その黒の背景に目立つ真つ白な髪の少女。左手には杖のようなもの。先端には紺珠、その周りには羽が生えている。そして、服装は何故か派手で際どい。スカート長さとかどうなってるかしら？

そんな一風変わった彼女はふわりと空高くから降りてきたのだった。

(あら、珍しいことも有るのねえ)

天使……と言うものだろうか。この世界に居ると聞いたことがある。悪魔と対を為す高潔な種族、会ったことは無いけれど。

「あつ……」

そんな事をぼんやりと考えていたら彼女がいきなり光りに包まれた。

その光が晴れると、いつの間にか彼女の服は白いワンピースになったではないか。これで全身真つ白だ。

何処までも白い少女。その姿は何処と無く不安定で……

「つて言ってる場合じゃないわ」

服装が変わった後彼女は落ちるスピードが上がったのだ。恐らく支えていた魔力が切れたのだろう。

いくらこの辺の地面は砂場とはいえ、このままあの高さから落ちたなら無事じゃ済まない。

「はっー！」

私は魔法を使ってその場から飛び出した、ただ足から魔力を放つだけの魔法だけでなく、十分に速度が出る。落下する彼女の下に入り込むのに成功、そして無事彼女キャッチした。衝撃に備え体を魔法で強化したけれど、思いの外彼女は軽かった。

「すげく……綺麗な子だわ」

見た目は私より幾らか年下、普通の人でいうと十歳位だろうか。

けれど触れてわかった。彼女は普通の子じゃなかった。ほんの少しだけ魔力を感じる。その魔力の質は人のものじゃない。

「魔族……」

彼女から感じられたのは自分たち人間とは違う種族のものであった。

「どうしようかしらっ？」

魔族が皆そうだ、という訳ではないけれど。やはり幾らかは攻撃的な者はいらる。本来なら余り関わらないのがセオリーだ。

けれど現在彼女は気を失っている。魔力は枯渇して最早生きてるのが不思議なくらい弱つてもいる。恐らく気がついたとしても私にとって害にはならないだろう。

とは言え魔族は私達人よりも圧倒的な力を持つ。不慮の事態に陥らないとも限らない。私が取るべき選択は彼女を捨て置いて逃げることだろう。

けれど私はそうはしなかった。彼女が余りにもすぐに消えてしまいそうで不安にさせられたから……というのも理由の一つではある。

けれど何より私の旅人としての勤が告げる。

彼女と一緒に居たらきつとお面白いことになる、と。

「ふふっ、旅は道連れ世は情けってことかしらねえ」

私の勤は良く当たる……かどうかはわからないけど。

そんなこんなで私、旅人ルイズは彼女を介抱することに決めたのだった。

二話 目が覚めたらお姉さんに優しく介抱されていた！
これ何てギヤルゲ

視界がぼんやりとしている。

そこに誰かが居るようだが、やっぱり居ないのかもしれない。靄がかかって今ひとつ確認できない。

俺は……どうしたんだっけ。

薬を持って酒を飲んで、それで山奥まで来てそれで……

……ああ、死んだんだった。

とすると今は死後の世界にでもいるのだろうか？

目を凝らして確認しようにも靄は一向に晴れない。

『……か……だっ……だね』

誰かの声が聞こえる。目の前にいる誰かの物だろうか。その顔となりも判然としな
い。

『……んね』

何を言っているのかも解らない。言葉には壊れたラジオのようにノイズが入る。

一体何を言っている？

『でも……は……んだ』

その声は何故か凄く力強く感じた。何かを決心したような、そんな感じ。

そこで俺は相手に向かって何かを言い返す。どうやら俺は酷く苛ついているらしい。

『死ぬな。諦めるな。君にその権利は無いよ』

今度ははつきり聞こえた。そしてその誰かは俺に向かって手を伸ばす。

『私のために生きてね』

そこで夢は途切れた。



何か夢を見た。聞き覚えのある声を聞いた気もする。一体誰の声だろうか？

けれど所詮夢は夢。思い出そうとしても中々思い出せる物ではないので、私は諦めて起きることにした。

目を覚ますとそこには知らない天井——いや、天井すらなかった。

視界を埋めるのは星を散りばめられた夜空にきらり輝く月が、月が……2つ。
「そうか、(ここ)が死後の世界なのか」

月が2つ有るなんてなかなか粋な演出じゃないか。非日常感って奴。
つまりここで私は裁かれて長くなってしまうたこの生をようやく終わらせることが
出来て……

いやいや待て。私はこの世から消滅したはずだ。なら何で死んでいる？ 意識がある？ しやべっている？

「あら？ あらあら？」

声が聞こえた。死神の声かな？

そんな薄っぺらな願望を胸に、体を起こし声のした方に目を向ける。そこには女性が居た。

鏢の広い紫のリボンの付いた白帽子。柔和そうな人柄を感じさせる糸目。金色の艶やかな髪は首もとでおさげに結つてある。服は白のツーピースに紫のリボン襟。

浜辺を歩いていたらすぐく様になりそうな、そんな格好。

うん、どう見てもこの人は死神じゃあないね。

「よかつたわ、起きたのね。一日中寝たままだったのよ。気分はどうかしら？」

柔らかく綻ばせた顔。……絶対この人お人好しだなあ。

私は上半身だけ起こす。うわっ、いつもよりかなり重く感じる。

「少し怠いけど大丈夫」

体は怠い。というのもも体力がすっからかんであるからだ。妖力も魔力も捻り出せない。緑に能力使えない。そうすると私に残るのはただの少女としての体のみ。

「随分と魔力が枯渇していたみたいだから少し不安だったけれど、思ったより元気そう
で良かったわ」

魔力が感知出来るということは彼女は魔法使いだろうか。

二つの月。魔法に見識のある人の良さそうな女性。

いろいろと解らないことがあるけれど、どう見てもここは死後の世界では無いよう
で。

「はああ……駄目だったかあ」

どうにも私は再び自殺に失敗したらしい。

「私はルイズっていうの。旅をしているわ」

ルイズ、それが彼女の名前らしい。名前を聞いて真っ先に思い浮かぶのは某使い魔ラ

ノベであるけれど、残念ながら彼女の容姿や性格に全く関係はなかった。

寧ろ落ち着いた雰囲気、余裕のある服からでも推察される体の豊満さからアレとは真逆であるとも言える。

「夢。妖怪だよ」

簡潔に自己紹介する。それを聞いた彼女は頬に指を当て不思議そうな顔をする。

「妖怪って何かしら？ 何かの種族？ 魔族じゃなくて？」

「？ 魔族って？」

んん？ 何やら知らない単語がでてきた。語感から人外であるみたい。

「魔族っていうのは魔力を持った獣とか悪魔とかのことだね。珍しいわ。魔族のことを知らないなんて。この辺は情報網も大分整備されたはずなのだけど……」

珍しい？ つまりここでは一般的に知られている種族なのか？

そんな呼び方は聞いたことも見たことも無い。

「うーん、ルイズ。あれって何？」

私は空に浮かぶ二重の月を指差す。

「あれは月よ。もしかしてそれも知らないの？」

月なのは解る。…だけど月は本来一つしか無いはず。

「何で二つ有るの？」

「? 何か変かしら?」

……何か話が噛み合わないね。

「此処って何処?」

「リオベナコの近くのシレオの森よ」

つまり…何処よ?

どうにも此処は前まで私が居た世界じゃないらしい。

再び転生したのかも思ったが、能力で収納空間が開けること、中身がそのままな事、首にかけているヘカーティアの御守りが変わらず有ること等から考えるに違うようだ。

私は死んでない。

「あらそれってカメラかしら?」

「あ、こっちにもカメラって有るんだ。」

あの魔法…自殺魔法によって世界を移動したと考えるのが妥当なのかもしれない。

転生の次は異世界入りとは…一体何てWeb小説?

「それにしてもまさか別世界の人だったなんて!私の勘は冴えているわ」

何でそんなに嬉しそうなのか。優しそうだけど意外といい性格してるのかもしれない。

「というか簡単に信じてしまっり図太いというか、鈍感というか……」

「しかし、どうしようか……」

私の目的は変わらない。けれど魔法も失敗した今、何か他に方法は有るのだろうか？
少し疑問に思う。

果たして私を生き返らせた神は私に生を全うさせる気があるのか無いのか。

「ねえルイズ」

「なに？」

「何か強力な力とか強い人とか知らないかな？」

けれど止めはしない。違う世界に来たなら寧ろ好都合。今までとは違う方法が見つかるとは思えない。

「あらあら、なんだか物騒ねえ。長生きしてる魔法使いならやつぱり強いんじゃないかしら？ あとはやつぱり魔族ねえ、悪魔とか龍とか」

魔法使いに悪魔と龍。前者は前の世界にも居たけれどもしかするとこの世界特有の魔法が有るかもしれない。後者は如何にもな感じだ。

「あつ、でもこの世界で一番強い、というか、この世界そのものと言っても良いような人

がいるわ。あの方には誰も勝てないはずだわ」

あの方?

「神綺様よ」

創造神、神綺。

この無限に広がる世界を作った張本人。

ルイズの先祖様も元をたどるとその神綺によって生み出されたようだ。世界や人々を0から作るとか随分とまたぶつ飛んでいけるけれど、ヘカーティアとか金髪青年や傍迷惑女神に会ってるのもう驚いたりはしない。

神綺に会ったことのあるルイズによると、銀の麗しい髪に類を見ない美貌、そして少し間抜けな所のある女神様、らしい。

最後が気になるんだけど。

「この世界ってその神綺さん以外に神様は居ないの?」

「ええ、そうね。神様と言ったらあの方だもの」

今この世界は神は独りしか居ないらしい。なんちやって神様の私の事はノーカンで良いだろう。

すると何かを思い出したか、ルイズはその細い目と眉をひそめ始めた。

「あら? そういえば大昔に何か別の神が居たと聞いたことがあるような、ないような

……ごめんなさいね。長く生きてると記憶を思い出すのに時間が掛かっちゃって」

なんだかハッキリしない様子のルイズ。まあ他の神が居ても居なくても別にいい。取り敢えず創造神が他の神様より弱いって事は無いだろうし。そして有り難いことにその神様は気さくに姿を表してくれるらしい。

「それで貴女はこれからどうするの？」

「その神綺って神様に会ってみようかな。」

「そうね、元の世界に戻るならきつと一番それがいいわ。」

むぐつ。元の世界に戻るのが目的では無い。けれど余り彼女に伝える必要も無い。

その神綺様に会ってどうなるかなんてわからないけど。取り敢えず現時点で一番呪いを解く手掛かりになりそうだ。

「その神綺って神様は何処に居るの？」

「うーん、基本色々な所に神出鬼没だから……」

神だけに？

「でもどこかに住まいがあると聞いたことがあるわ」

「なんていう所？」

なるほど、それなら取り敢えず目的地は決まった。その神様の住まいに向かおう。

「魔界都市パンデモニウムと言ったはずだわ。」

パンデモニウム、名前だけ聴くと顔面幼虫を思い浮かべ思わず苦い顔をした私は悪くないはず。

「もし急ぎじゃないのなら私と一緒に旅しないかしら?」

急にルイズがそんなことを言い出した。彼女の申し出は個人的には有り難いものだ。何せ異世界。前の世界とはかなり勝手が違いそうだ。絶対に現地の人の案内があった方がよい。

それにパンデモニウムの場所のはつきりと解らないらしい。神様のいる場所だから秘境……と言うわけではない。ただ単にこの世界が広すぎて（今も広がっているとかないとか）全体の地図がないので解らないのだ。

その点ルイズは旅人で旅し慣れていて、というか話を聴く限りほぼ冒険している。だからついていった方が私的には得になる。

「でも私なんか連れてつても特に利点は無いと思うんだけど」

そもそも介抱して貰ってる身。これ以上彼女に世話をかけるのも忍びない。

「いいのよ私がやりたくてやってるのだから。貴女が気にすることはないわ。パンデモニウムに行ってみたかったし」

彼女は微笑んでその細い目を片方だけうつすら開く。そして得意気に指を立てながらこう言うのだ。

「旅は道連れ世は情けですわ」

旅の出発は明日の朝になった。

私が疲れているのもあるけど、夜中は魔族共の動きが活発になるから出来るだけ動かないらしい。

その辺は妖怪と変わらないみたいだね。

そんな訳で今夜はこの森で野宿である。私達は夕飯を食べるべく準備を進める。

……進めるのだが。

「ル、ル、ルルルイズさくん。そ、それは何ですか……う？」

「？ 夕飯よ」

「違う違う違う、その今焼いてる奴」

ルイズの発火魔法により炊いた焚き火を使い簡単な調理を行っている。

食材は森で取れたキノコ、野菜類、果実、そして……

「これ？森に生息してるアリですわ。凄くタンパク質が……」

「はい、ストオオオップっ!!」

無理虫マジ無理。

食べる位なら死ぬ、死ねなくても死ぬ。

「主菜は私が用意するからっ! それだけは本当ヤメテ」

「あら美味しいのに。プチプチしてね。凄く」

「ぎゃああ! 聞きたくない!!」

旅人で時には食材が無くなる彼女の的には普通の事なのだろう。サバイバル時の主食料は虫だと聞いたことがある。

が、無理! This is 無理!

「あら! 美味しいわ!」

「そりゃどーも」

「これがそっちの世界の鶏肉なのね」

私は収納空間から鶏肉を引きずり出しささっと調理した。そんなわけで私は無事夕飯にありつけている。

どうやら私は勿論、若干普通の人間と異なるルイズも食べる必要は余りないのだけれど、ルイズ曰わく「やっぱり食べないと物足りないわ」とのこと。そのことはわからなくもない。

「凄く手際がよかったけど、もしかして料理料理得意なのかしら?」

「まあ、そこそこね」

料理は得意とはいえ今回は野外。本当なら味付けとか盛り付けとかもつと懲りたかつたけれど仕方ないね。

「それにその収納空間すごく便利そうだわ。旅するとき私に私の荷物も入れて貰おうかしら？」

「良いよそれくらいなら全然」

私の能力を見ても全く驚きも警戒もしない。やはり彼女は随分とおおらかな性格のよう。

「それで明日は何処へ行くの？」

私は肉に食らいつきながら彼女へ尋ねる。口の中に肉汁と塩コショウの風味が広がる。

使用したのはムネの部位なのでパサパサになりがちだ。けれどそこは腕の見せ所。下拵えをキチンとすることで水分が。

「あのね、それなんだけど。一旦私の家に向かうわ」

「ふーん……ん？」

脳内3分クッキングのせいで危うく聞き逃しそうになったけれど、ルイズの言葉に疑問を持つ。

「ルイズの家? 何か有るの?」

「ええつとね。さつきまで貴女と出会った衝撃で忘れていたのだけど、実は一度家に帰るためにここまで来たのよ」

ルイズの家はこの森の近くの湖畔の街らしい。そもそもこの森に寄ったのが家に帰るためだったようだ。

そして何のために帰るのかというと原稿を書くためらしい。

「原稿? ルイズって旅人じゃないっけ?」

「旅で起きた事を偶に纏めて旅行記として出版しているのよ」

そんなわけで何十年、何百年かに一度家に帰って原稿を仕上げるらしい。

……スパン長いな。

「それで一週間位家に留まらないといけないのだけど」

そこで言葉を止め彼女は少し申し訳無さそうにこちらを見る。

「私から誘って何なのだけれど、もし嫌だったらついてこなくても大丈夫ですわ」

どうやら彼女は私に足留めを食らわせてしまうことを、躊躇しているらしい。

「いやいやついてくよ。そんなに急ぎじゃないし、どうせならルイズの故郷も見ておきたいしね」

「!。そう。よかったわ。ありがとうね」

途端に喜ぶルイズさん。そんなに気にしなくて良いのに。

そもそも私の介抱に時間を取られなければ彼女は既に帰宅していたはずだ。

「寧ろお礼を言うのは私の方だよ」

「そんなことないわ」

彼女がお人好し過ぎて不安になる。よく旅人なんか出来るもんだ。

意外とこの世界は平和な世界なのかもしれない。

そんなこと無かった。

「死ねえいいいい!!」

私は妖力弾を何やら六本足の妖怪にぶつける。キシヤアアつと声とも言えない悲鳴を上げながらその妖怪……いや、魔族は燃え尽きた。

「貴女凄く強いよね。頼もしいわ」

「ルイズはのんきだなあ。私も本調子じゃないからね？強いのを来たら多分やばいんだけど」

一晩寝て多少回復したとはいえまだ全快には程遠い。

一度リセットすれば幾らか戻るのだろうけど、ルイズの前で血まみれに成るわけにも
いかない。

「こんな片田舎に上級の魔族なんか来ないし、そういう人たちは無闇に襲ってはこない
わ〜」

なる程。確かに。

そうでなくともこんなのはほんとした彼女が何故今まで無事なのか不思議な位だけ
ども。

「あらこれでも私だって魔法使いの端くれ。下級魔族ぐらいには遅れはとらないわよ」
とのこと。まあ、ルイズの力量を見たこともないので何とも言えないけどね。

それに助けて貰ったお礼だ。露払いくらいならやるつもりではある。

それから数刻、私達は知性のない木っ端魔族共を叩きのめしつつ歩き進めた。

コンスタントに出てくるので結構物騒だ。

「こんな森の近くに住んでて危なくない?」

「そうそう街までは出てこないわよ」

元の世界の妖怪は力を得る為に人里を襲うことが多々あったけれど。魔族のその辺

の勝手は妖怪とは違うようだ。

「ほらそろそろ見えるわ。あそこが私の故郷リオベナコよ」

「お？どれどれ……おお」

森を抜けるとそこには清々しい青が広がっていた。

湖畔の街リオベナコ。

今立っている場所は少し高台なので街が一望できる。

透き通る湖面に反射した日の光が眩しい。丘に並ぶ街並みは恐らくはレンガや石で出来ていて洋風だ。その白い壁面がこれまたキラキラ光っている。凄く絵になる。

思わず私はカメラを取り出して一枚写真を撮った。

……うん凄く綺麗だ。

「素敵な街だね」

「ふふつでしょ？」

故郷を褒められるのはやはり嬉しいのだろう。ルイズは頬をほころばせた。

でもお世辞抜きに素敵過ぎる街だ。湖の綺麗さは永琳たちと写真を取った湖を思い出させる。ぶつちやけアレよりも綺麗かもしれない。

「やあ、いきましょ」

思わず街に見惚れていた私の手優しくをルイズが取る。私も手を握り返す。

この街で生まれ育ったことがルイズの人柄に影響してるのかな、なんて少し思った。

「少し待っててね。大分散らかつてるのよ」

「わかったよ」

私たちは無事にルイズ宅までやって来た。

ルイズの家は一軒家。遠くから見た白い壁面に青い扉や窓が付いている。うーん綺麗だ。

彼女にとって、数十年ぶりの帰宅になるらしく私を入れる前に整理をしたいらしい。個人的にはあんまり気にしないんだけどね。前世で私の部屋は汚部屋だったし。

でもせっかくの好意だからわざわざ無碍にすることもないので、大人しく家の前で待つつもりだ。

「あんたルイズさんの家の前で何してるのよっ!？」

大人しく待つつもりだったんだけどなあ。

私はそう怒鳴った彼女の方に嫌々ながら目を向ける。こういう感じで登場する人物は大体好戦的っていうセオリーがだね……

そこに居たのはピンク色の少女。服は赤いワンピース。首元には白いリボン襟。ピンク色の髪は横で結われ、ポンポンと揺れている。

「えつと……ルイズを待ってるんだけど」

「何言ってるのよ！ ルイズさんはいま旅に出ているのよ!? それなのに家の前に居座って……凄く怪しいわっ!!」

「いや、丁度さつき帰って……」

「それにこの辺で見ない格好ね。……もしかして魔族!?!」

おお、予想通りすぎるZ.E。話を聞いてくれない。そして完璧に警戒されてしまった。言いがかりだけど。

「さてはルイズさんの家に盗みを働きに來たのね！ 許さないわ!! 私が成敗してやるっ!!」

そんな訳で彼女と戦うことになりそうです。どうしてこうなった。

三話 つり目は好戦的というテンプレが有るとか無いとか

〈前回までのあらすじ〉

ピンクに喧嘩売られた。

「さあ、やりましょうか」

キリツとした目に良く通る声。

威勢の良いピンク髪の彼女は、短く詠唱をし魔法を発動。その手に赤い炎の玉を浮かべた。

そしてその炎弾を私に向かって投げつけてきた。

「わっちよつとちよつと。ストップ、ストップ！」

私がよけた炎弾は玄関前の石床に当たり弾ける。

「何よ？ まだ言い訳するの？」

「そもそも泥棒じゃないから言い訳も何もないんだけどなあ……」

私の話を全く信じてくれないので非常に困る。

ルイズを呼べればこの場は解決するはずなのだけど、どうにも彼女の家には特殊な結界が張つてあるようでドアが開かない。結界のせいで外の物音も伝わっていないだろう。そんなわけで、恐らくドアはルイズ以外には開けられないはず。

何十年単位で家を空けるのだから、その位の備えは当然だろう。つまり、そもそもルイズ宅に盗みに入るなんて不可能なわけである。

「問答無用！魔族なんかにはルイズさんの家は荒らさせないわ!!」

でも、人が中にいるときくらい解除されても良いんじゃないですかね！ そうすればこんな事にはならなかった。ないものねだりだけでも。

そんな事はつゆ知らないであろう目の前のピンクな少女は再び炎弾を構える。

さっきの数倍の威力を感じるそれを手に、口の端を少し歪める。自分の魔法に自信が有るのだろうか。いやに不敵な笑みを浮かべている。

彼女の得意気な顔は何処かヘカティアに通ずる物がある気がする。闘争心が全面に出ている時の笑みだ。その迫力というか本物感には彼女にほど遠く及ばないけれど。

うん、ルイズが整頓し終わるまで彼女は待つてくれなさそうだね。

このまま戦闘になると辺りが火の海になりかねない。家が燃えないとはいえ、周りの草木が炭と化していたら流石のルイズもびっくりだろうし。

「ああもうっ、やるしかないか。」

私はそこから飛び立つ。場所が悪すぎる。

「あつー！待ちなさいよー！」

予想通り彼女は私に付いて来た。おまけに彼女の炎弾も付いて来た。いらぬ子ですね。

幕を張るかの如し複数の炎弾を辛うじて避ける。

そんな炎弾達に眼下の家屋に落ちる前に消えてくれよ、と祈りながら、湖畔の街の上を飛んでいくのだった。

「ふふつ、やっと逃げるのを止めたわね！」

私たち二人は湖畔に有る少し開けた砂浜まで来た。近くに來てみるとその綺麗さがよく解る。落ち着いて写真を撮りたいなあ……

「さあ魔族！私と勝負よ!!」

私の事を指差すと共に、声高らかに宣戦したピンク少女。その自信満々さがもはや羨

ましくすら感じる。

「ていうかさ、私がルイズの家から離れた時点でもう良くない？ わざわざ戦わなくてもさあ」

「駄目よ！ またいつ盗みを企むか知れたもんじやないんだから！」

企んでないから。頼むから聞く耳を持って欲しい……

「はあ……それにあなたさ、あんな街中で火属性の魔法使ってたけど燃え移ってたらどうしたのさ？ 貴女だって住んでるんでしょ。折角あんなに綺麗な街並みなのに」

「あつ」

一瞬彼女の顔が青ざめる。やっぱり何も考えてなかったんだなあ。何ともドジである。

しかし、それを気にする位には常識が有るようだ。良かった良かった。

……ならんでそんな好戦的なんですかね？

「……そ、そんなの今はどうでも良いわ！ とにかくあんたはこのサラ様がここで成敗してやるんだから！」

サラと名乗った少女は再び私に向かって指をピシリとさす。全く気乗りしない戦いが今火蓋を切って落とされる。

……ルイズ、早くかもーん。

「はあっ!」

彼女が腕を振るうと、その軌道上から円形に炎弾が発射される。中々の威力だけどころか荒い。収束しきれていないし動きは単純、避けるのは簡単だ。

「ちよつとなんで避けるのよ!」

「いや避けなきゃ痛いでしょ」

その言葉に呆れた私は何も悪くないはず。ひたすらに彼女の攻撃を避けまくる。それが酷く気に食わないようだ。

いや避けないと本当痛いから。恐らく普通の人間だったら死ぬレベルだから。

「ちまちま逃げんなっ!」

苛立った彼女は今度はさつきよりも隙間のない攻撃を仕掛けてくる。炎弾で幕を張るかの如し質量だ。見た感じ凄く効率の悪そうな魔法なのにあれだけ展開出来るのは少し驚いた。

これはメディア直伝、魔法の盾を使って防御するか、いや……魔力の消費が多いか。

……仕方ないや、能力を使おう。

「な!?! な、何で弾の方が逸れるのよ!?!」

私は弾幕を能力を使い避ける。いや避けるというより退けるの方が正確だろうか。用は私の近くまで来た弾の向きを変えたただけだ。

……少しフラリと目眩がくる。

「サラって言ったっけ？」

私はじつとりと額に浮いた汗を手の甲で拭う。……思ったより余裕無いね。

「もう止めない？ 私が泥棒って事でも良いからさ」

先程まで避けてばかりだったのは、面倒くさかったのだけが理由ではない。私の体力の方に難が有った。

ぶっちゃけ全く回復していないのだ。この世界に来るときに気力も体力も根こそぎ持っていていかれた。それから二日間寝ただけ。

一応この世界は魔力の回復が速い。漂う空気の魔力が濃いからだろうか。だから回復は早いのだ。

だけど、それすら追っ付かない程に私はすつかからかんだった訳で。元の世界なら一、二週間は気絶したままだったかも知れない。

そんな訳で動けるようになったとは言え本格的な戦闘はきつい。いや木っ端魔族なら何ら問題はないのだけど彼女は魔法使いだ。

術の練度や威力を見るに恐らく魔法使いになってからそう長くは経っていないようだが、今の私に彼女を無傷で止めるのは難しい。

「嫌よ！ 魔族は私が退治するっ!!」

なぜなら彼女は純粋に私を倒しに来ている。それも本気で。魔族に何か恨みでも有るんだろうか。

けれど恐らく覚悟は……無いんだろうなあ

さっきのガバガバなところという何処か温い。

誰かを徹底して殺す覚悟……そして殺される覚悟。もしそれが有ったら今の私は既に一回殺されてるかもしれない。

だから彼女にそれは無い。

私がそんな彼女を万一殺すわけにもいかないし、殺されるわけにもいかない。

彼女が激昂と共に放ったレーザーのようなものを私は再び能力で消し去る。

「っ!？」

「なんでそんなに必死なのさ?」

彼女は何故か必死だ。必死に何かのために足掻いている。それは私に似ているように……いや、やっぱり似ていないや。あんなに私は必死じゃない。

「あ、あなたには関係ない! さっきと退治されなさい!」

いやあ私としては退治されたいんだけど、呪いが有る限りそれは叶わないわけで。

うーん少し手荒だけどルイズが来るまで眠っててもらおうか。多分同時に私も眠っちゃおうけど。

「私じゃない魔族に会ったとき無闇に喧嘩を売らない方が良いよ」

「つるさいわね!! アンタのそのすかした態度、気に入らないのよ!!」

どうにも私は酷く敵対視されているらしい。

必死な彼女は、サラは何処か非常に危うく感ぜられた。

「魔族なんか片っ端から」

「若いんだから無茶しちゃ駄目だよ。」

そんなこと言うほど私は年をとってないけどね。実年齢じゃなく精神的な話。

短い詠唱と共に魔法を発動する。私だつてこの数百年へカーティアやメディアに教えを受けてたわけで、これでも立派な一魔法使いなのだ。

「なっいつの間に!?! こんな奴が転移魔法を!?!」

私は彼女の後ろに移動した。魔力の枯渇で私自身そろそろ気を失いそう。けれどその前にやることがある。さあ私はその首に手刀を落とす——

「二人共何をしているの!?!」

——必要も無くなつたみたいだ。

「あとは頼んだよルイズ」

そこで私の視界は真つ暗になった。元々少ない魔力、体力諸々が底をついたのだ。

病み上がりにも無理するもんじゃないね。



私の恩人であり、憧れでもあるルイズさん。そんな彼女の留守中の家に怪しい少女が近づいていた。

全身真っ白な少女。色々な髪色はあれどあんな白銀の髪は見たことがない。確か神様がその様な色と記憶している。そんな風に神様と同じ色をしているなんてますます怪しい。

彼女からは全くと言って良いほど魔力は感じないが、同時に人間としての気配も感じない。

つまり魔族……！

よりもよって魔族がルイズさんの家に来るなんて！

魔力を感じられないほどアイツは弱い。そんなちっぽけな奴が留守中の家に近づくと理由と言ったら盗み以外に有り得ない。そんなのを当然私が許すはずがない。

そもそも魔族のことを私が許せる訳なんてないんだから。

私はコイツを退治することに決めた。魔族の退治なんて近くの森のしよぼい奴らしかやったことないけど、コイツはそれよりも魔力が弱い…気がする。

コレくらいならきつと私でも退治できる。そう考えた。

…それは間違いだったんだけど。

炎弾とレーザーを容易く無効化された時点でようやく私は悟った。目の前の魔族は私の数枚上手で有ること、少しバテているようだけど、その気になれば私をいつでも殺せること。

そして、私を殺す気が欠片もないこと。

ふざけるな。

怒りかまたは悔しさか。私は奥歯を噛み締める。

先程から向こうから攻撃する事は無い。それどころか私を怪我させないことに気を割いているようにさえ感じられる。

完全に舐められてる。それが酷く勘に触った。

自分でも少しちぐはぐなことを言っている自覚はある。でも止められなかった。

きつと彼女は悪い魔族じゃないのかもしれない。ルイズさんに仇を成すつもりは無いのかもしれない。

でも止まれない。止まっちゃいけない。魔族と言うだけで私は許せない。私は魔族を許しちゃ駄目なんだから。



目を開けるとそこは知らない天井が……

いや、もうこのくんだり良いよね。うん。

どうやらここはルイズの家の中のようにだ。窓から白い街並みと湖が見える。外壁は真つ白だったが内装は木を感じられる温かみの有る造りだ。

私はそのりと起き上がりふわあと一つあくびをする。この一つ一つの動作を取つても随分と女らしく……いや、女の子らしく成つたものだなあと、まるで他人事のような考えが頭に浮かぶ。

別段しみじみとしてる訳じゃなくただ単にそうぼんやりと思つただけだ。もう前世の体がどんな風だったか余り覚えてな……無くもないか。一体何千年経つたか解らな

いが割と記憶は確かだ。妖怪の記憶力なのだろうか。

しかしそんな記憶力をもってしても、転生直前のことは何故かイマイチ朧気なのが

……

自殺の理由に心当たりは有るから大体の予想は付くけれど。

そういえば私が女に転生したことに何か理由が有るのだろうか？　こればかりは転生させた神にしか分からない話だが。

考えても仕方ないので眠気を取るため私は伸びをする。少し心地の良い痛みとともに少しずつ眠気が晴れてゆく。

「ふあああ……げえ、やっぱり怠い」

回復はやはり普段より早い。寝ているベッド近くの窓から差す光は、少しオレンジ色を帯びている。照らされたタンスの伸びる影は長い。ピンクの少女サラと闘ってたときは日は高かったはずだから、時間にすると五時間くらい？

それだけの時間で目が覚めるのはやはりこの世界特有の何かのせいか。それでも怠いのはそれだけ世界の移動が負荷のかかる事だったのであろう。

「あら起きたのね」

柔らかな声と共に現れた金色の髪のお姉さん。室内故に白い帽子は外している。

「ごめんなさい、無理させてしまつて。やっぱり頼らずに私がやればよかったわ」

「いやいや、ルイズが謝ること無いよ」

道中の木っ端魔族くらい取るに足らないものだ。そのことで彼女が気に病む必要はない。そもそも無理だったら引き受けてない。

それよりやっぱり、あの喧嘩っ早い少女サラが話を聞いてくれれば良かったわけで。

「ごめんなさいね。彼女、サラはちよつと魔族に色々あつて……きつと貴女のことを悪い魔族だと思つたんだわ」

まあ、そうだろうね。あの少しちぐはぐな態度と攻撃を見てれば何となくわかる。激しい恨みの籠もつた攻撃だったよ、あれは。

「根は良い子なの。悪く思わないであげて……つと言つても難しいかもしれないけど」

「いや良いよ。何となくわかるし。彼女が悩んでること」

いきなり攻撃された訳けどどうにも彼女を憎む気にもならなかった。

彼女の激しい葛藤がそうさせるのかもしれない。もつとも私がそういった激情に疎いというのものもあるかもしれないが。

「……貴女優しいのね。」

「いやそんなんじゃない」

ただ無頓着なだけだ。

「ふふつ、貴女との旅が楽しみになってきたわ」

少しだけ悪戯っぽく頬を綻ばせるルイズ。なんだかなあ……

「ああ、そうそう思ったより元気そうだから少し手伝ってほしいんだけど……」

「何を？」

体力は空だし殆ど役に立つことは無いと思うのだけど……

「夕飯の準備よ。私より貴女の方が美味しく仕上げてくださいるでしょう？」

なるほど、それなら手伝わなきゃね。

私が寝ている間にルイズは食材を街のお店から調達していたようで、特につつがなく支度は終わった。

もし食材が無かったらヤバかったので良かった。今の私に貯蔵空間を開く余力はないのだ。

そのことをルイズに伝えたら「ならまた蟻を」とか言い出したので一悶着あったりなかったり。

まあそれは今はいい。

今はいいのだ。

無事夕飯は用意できたし、ちゃんと器具も有ったのできちんと調理できたから満足だ。器具は電気でなく魔力を使う物だったのは興味深い。

しかしそんな事より今は問題がある。

じいいいい……

という擬音が漫画でもないのに私には見える。敵意丸出しの目線をひたすらに受けているので凄く居心地が悪いのだ。

その目線の発生源は前の席に座るピンクの少女サラ。

そんなにしかめっ面で見つめないでほしい。せつかく綺麗な顔なのに皺がついちやうよ！

なんて事は言わない。なんか触れたら爆発しそうな感じがする。触らぬ神になんとかやらない奴である。

「サラどうかしら？ キッチンとした料理作るの久しぶりでちよつと不安なのだけれど」

そんな事を知ってか知らずか、ルイズは暢気にサラに話しかける。

「はい！ 凄く美味しいです!! 流石ルイズさんです!!」

そしてこの変わり様である。おい、なんだその澄み切った笑顔は。可愛いじゃないか。

「このスープ野菜によく味が染み込んでいて最高です!!」

「あらあら嬉しいわ」

超居心地が悪くてせつかくの夕飯をよく味わえない。ルイズへのその愛嬌の良さを私にも幾らか割いて欲しいものだ。

「それにこの魚のフライとか凄くサクサクで……」

「あら、それは夢が作ってくれたのよ」

「やっぱり不味いです。なんでもないです」

割いてほしいです切実に、はい。でも私のアジっぽい魚フライは気に入ってもらえたらしい。うんうん良かった良かった。

「それにしても大きくなったらわねサラ。あんなに小さかったのに」

「もう！止めてくださいよルイズさん！ 私はもう子供じゃないんです」

いやあ十分子供だと思っただけだね。見た目通りの年齢なら大きく見ても15、6歳位だろうか。まだまだ子供の年齢だろう。

「随分と魔法も使えるようになったのね。誰かに教えてもらったの？」

「いえ、殆ど独学です。この街に魔法をちゃんと使える人はルイズさん以外に居ませんから」

ほう、独学とな。なるほど道理で荒い魔法な訳だ。それでも独学であれだけの魔法を使えるなら才能は有るんじゃないだろうか。

「それでルイズさんお願いがあるんです」

「何かしら？ 私にできることかしら？」

そこでサラは一息つき、何か決心したように一度口を閉じる。唾を飲み込む音が聞こえ、そしてゆっくりと口を開く。

「私、捨虫の魔法を使いたいです。それでルイズさんみたいに旅をしたいんです!!」

捨虫の魔法。

それは不老の魔法。使ったものの姿はそれ以上老いることがなくなる。それは即ち人間を止めるということ。

魔導を極めるには人の生の時間程度では足りない、故に探求のために時間を得る手段として使うのだという。

不老に成るのは良いことばかりではない……らしい。

ヘカーティアの国は割とその辺がルーズだったし、それに私は妖怪になってしまったのでその辺の感覚が狂っている気もするからいまいち分かっていない。

けれど想像は出来る。前世の漫画作品に出てくる人を逸脱し生を得たキャラは大体悲惨な結末に終わる。苦しんだり別れに気が狂ったり——

「本気なのサラ？ どういうことか解って言っているの？」

だからルイズが真剣にサラに問いかけるのも当然のことだろう。ルイズはその魔法

によつて何が起きるか知つてゐるはずだから。

この世界も割と魔法が浸透してゐるようだけど、捨虫の魔法を使う者はそんなに居ないはず。

だから人間を止めるといふことにはそれなりの覚悟が必要だ。

「本気です。どうか私に教えて下さい!!」

サラがそう言つて頭を下げる。結構真剣なんだろうなあ。

数瞬食卓に沈黙が訪れる。私が静かにスプーンを啜る音だけがやけに響くので止めて欲しい。

顎に手を当て考え込んでたルイズが顔を上げる。

「無理ね」

と一言言い放つた。

「そ、そんな……」

ズーンという擬音と上から落ちる縦線が背後によく見えるような気がする。

サラは落胆を隠せない。

「貴女の覚悟……つていうのは置いておくとしても、そもそも捨虫を使えるほど貴女は魔法を使いこなせてないのよ」

「へ？ それはどういう……」

「夢、そうよね?」

「ここで私に話を振るんかいっ。サラがきつつい目で私を睨んでくる。やめてーやめてー。」

「まあ、そうだね。今のサラじゃ使えない。独学だつて聞いて納得したよ」

「どういうことよ?」

「敵対心を持たれていても話に興味が有るからか、大人しく聞いてくれるようだ。」

「多分だけど、サラつて多分あの炎弾とレーザーの魔法以外の魔法使えないでしょ?」

「なっ、そ、そんな事ないわよ」

「あからさまにどもるサラさん。」

「じゃあ何が使える?」

「……発火魔法とか。」

「むすつと頬を赤らめるサラ。」

「それ炎弾とレーザーの元に成るやつじゃん。火属性魔法の基礎中の基礎だ。」

「私が昔教えた魔法ねえ」

「と追い打ち掛けるルイズさん。恐らくサラがそれを自分なりに調べたりアレンジした結果がああ炎弾とレーザーなのだろう。」

「まあ独学だから仕方ないよ。で何でサラが捨虫の魔法を使えないのかつて話に戻るん

「ただ」

「何よ、早く教えなさいよ……」

なんて言うのか……いや、包み隠さず言ってしまうおう。

「サラは魔力の扱いが下手なんだよね」

「へ、下手？」

「うん、下手。魔力弾もレーザーもそうだけど収束しきれていない、凄くロスが多いよ。多分だけど魔力の流れを正確に把握できてないんじゃないかな」

こんなふうに軽い講釈を垂れられる位には魔法に精通している。ここ数百年の賜物である。向こうの世界の何処かに居るメディアに感謝を。

「捨虫の魔法は結構精密な魔力の操作が必要らしいんだ。私は使ったこと無いから詳しくはわからないけどね」

「そうなんだ……」

それを聴いたサラは落胆しうーんと唸る。

「ルイズ、ちゃんと魔法教えてあげれば？ 時間掛かるだろうけどこの子ならその内出来るように成るよ」

「それはダメ！ ルイズさんの時間をそんなに取らせるわけにはいかないわ！」

ええ……さつき捨虫の魔法を聞いたじゃん。

ああ、でも詳細は知らなかったからすぐ終わるものと思っていたのかな。

「そうねえ……今は紀行文を書きたいし確かに時間が無いのよね」

元々そのためにここに来たわけであるしそれが終わった後も彼女は旅に出るだろう。

再びルイズは何かを考え込む。そして数瞬の時を経て彼女の頭の上にピコーンと電球が現れた。

……あれれ？ 嫌な予感しかしらないぞ？

「一週間、夢に魔法を教えてもらったらどうかしら？」

どうやらルイズの思いつきで私はこの後苦勞するみたいだ。

四話 ドキドキ!?二人っきりの特別授業!!

「はい、ええじゃあ修行を始めていききたいと……」

「……」

「あのお、サラサーん。そんな険しい顔してるとせつかくの可愛い顔に皺がついちやうよ〜?」

「……ツチ」

「舌打ちしたよこの子……」

四話 ドキドキ!?二人っきりの特別授業!!

「なんかよく解らないけど、取りあえず何か言いたいなら言いなよ。居心地悪いって」
何をそんなに気に入らないのか未だよく解らないけど、そんな態度を取られても当然
良い心地はしない訳で。

「別に何も無い」

「いや何も無い訳……」

「あんたに関係ないでしょ」

「によーん……」

「ずつとこの調子である。とりつく島もない。」

「いや参った参った。何なんだろうね。」

「気難しい年頃なんだろう。きつとそうに違くない。前世の後輩もそう言えばこんな
時期が有ったような気がする。確か同じくらいの年頃だったし。そういうことにして
おこう。乙女は気難しいのだ。」

「はあ、まあ良いや。取りあえず修行、というか魔力の操作の練習を始めようか」

「……」

「ツンケンな態度は元々だけど、戦闘以来サラの口数が大分減ってしまった。」

当然しおらしくなったわけではなく、むっすーっと不機嫌なままだ。突っかかってこないだけ幾分かマシ……なのか？

どうにもやりにくいけど取りあえず修行を進めよう。

「修行なんだけど、魔力操作の初歩についてはよくわからないんだよね」

「……はああ？」

「だってそんなに苦労しなかったし」

私の能力は『向きと大きさ』を操る。故にそれがある魔力の操作など簡単だったのだ。本来なら魔力に触れ続けて流れを感じられるように成るところから始める……らしい。すっ飛ばしたからその過程をよく知らない。

「で、ルイズにも聞いてみたけど『こう、ぱあとやってさつと集める……かしら？』って言うてたからね」

頼みの綱のルイズも天才肌のように、その辺り苦労は無かったようだ。

「……じゃあどうするのよ？ 誰も教えられる人が居ないじゃない」

確かにそうだ。

しかし私には普通にはない知識がある。その源はフィクションの話だが、それがまかり通ってしまうのが現在のこの世界。

「サラには木登りをしてもらおうよ」

忍者じゃないけどこれでいけるはず。

「ここは湖畔の街リオバナコの近くにある森。普段は静けさに包まれている。

「たあああっ!!」

そんな閑静な森に響く掛け声、それと共にサラが木に向かって助走する。

木の根本まで辿り着いた彼女はそのまま木の幹を走っていく。

そして数歩進んだところで……

「あでっ!?!」

背中から落ちた。

「……うーん、思ったよりも出来てない。というか全く出来てない。引っ付く様子すらない。」

「足にちゃんと魔力を纏わせないと」

これは魔力の操作の修行だ。体内にある力の操作の鍛錬で真っ先に思いついたのが

これだ。

足にチャクラ……じゃなくて魔力を纏わせて木に足を張り付け、垂直歩くのがこの修行。当然漫画じゃないから出来るか怪しかったが魔力でも出来た。

ルイズの話ではそういう壁に張り付く魔法は身体系の魔法として有るらしい。

「出来ないっての！ わざわざ木に登らなくても空を飛べるから良いじゃない！」

「いや空を飛ぶのはあんまり調節必要ないからねえ」

取りあえず魔力なり妖力なりを放出すれば空を飛べるわけで。そんなの小難しい操作など必要がないから練習にはならない。

「あんだだけ威力だけに酷く偏った魔法を使えるんだから才能あるって」

「……なんか言葉の端に煽りが入ってる気がするんだけど」

いやあ、気のせいじゃないかな？

「酷いと魔力を感じられない人もいるんだし。独学でそれだけ出来るんだから大丈夫だって」

「……むう」

あれだけ魔法を使ってるんだから出来ないことは無いはず。基礎がすっぽ抜けてるだけだ。元の世界のヘカーティアの所でも魔法を使える人の数は限られていた。

それを踏まえればサラも才能がちゃんと有る。

「まあ頑張りなよ。見守っててあげるから」

「別にあんたの見守りなんていらぬわ」

そう悪態をつきつつも再び彼女は木に向かう。

登っては落ち、登っては落ち。服を泥で汚しながらも、その目に宿った光は衰える様子はない。

思っていた通り、なんだかんだ彼女は真面目でまっすぐなんだなあ。

それからもサラは修行を続けた。三食と寝るとき以外、いや偶に寝る間すら惜しんで励んでいた。

その集中力は目を見張る物がある。私も彼女の手助けになろうとずっと見守って

……

「何時まで寝てんのよ!」

「あべしっ!」

見守っていた私をサラは容赦なく蹴り飛ばした。何故だ！あんまりじゃあないか！「すやすや寝息立ててる奴がどうやって見守るつてのよ！ここ数日食つちや寝て食つちや寝てばかりじゃない！」

誰だよそんなニートみたいな生活してる奴。あ、私だったね。

いや、でも弁明させてほしい。私はサラをずっと見守っていただけなんだ。でも、どうしようもなく強力な睡魔という実態の無い超高等魔族に襲われ仕方なく眠りに……

あ、痛いっ。サラさん痛いれふ。頬を抓らないで。

「私が疲れ切ってるのに横でスヤスヤ寝続けているアンタが悪いわ」

暴力反対！安眠妨害反対！そんなのただの八つ当たりじゃないか。もつと他人に寛容な心をだねえ……

「じゃあ、あんたは自分が私の立場だったら同じこと言えるの？」

同じ立場？ 例えば自分が一生懸命頑張つて、体中筋肉痛に泥まみれ。そんな中近くで惰眠を貪る奴が居たら……

「なんだそいつ、むかつくな」

「だからそう言つてんでしようが！」

痛い、いはいれふ。

いやあ悪かったって。

「あらあら、すっかり仲良くなっちゃって。私妬いちやうわく」

「ルイズさんの目は節穴ですか!」

ルイズがやってきた。その手には薄茶のバスケットを携えている。ルイズに似合う。超似合う。お淑やかさが増し増しである。CMに出ていそうな感じ。

「ほれ、はに?」

「これかしら? サンドイッチを作ってきたのよ。そろそろお昼ご飯の時間だと思つて」

「ほっか。ほれひやはへようは」

「うくん、流石に何て言ってるかわからないわねえ」

開いた口が塞がらない、物理的に。

サラ、そろそろ離してほしいれふ……

柔らかいパン、シャキシャキのレタス。そしてみずみずしいトマトに舌鼓を打つ。

果たしてこれらがその名前で呼ばれていて、かつ元の世界のそれと全く同じなのか解らないけど。

「レタスにトマトよ？ 何か変だったかしら？」

……まあ、美味しいから細かいことは気にしない。

「いやあ、こつちにもサンドイッチって有るんだなあと思つて」

「何変なこと言つてんのよ。あたりまえじゃない。魔族のそこには無いの？」

「いや、まあうん。あつたようななかつたような」

魔族の所に……有るのかな？ わからないや。しかしちゃんとサンドイッチで通じるようだ。

そもそも元の世界に居たときも何ら不自由なく会話も読書出来たのも少々不思議ではある。私の認識できる言語は日本語と多少の英語位だったはずだ。

妖怪的記憶力の賜物なのか、それとも無意識に翻訳の術を使っているのか。

それとも、元々知っていたのか。

うーむ、私が転成している時点で何でも有りな訳だから、どれが正しくそれとも誤りなのか判断はつかない。

「ルイズさん凄く美味しいです!!」

「あらあら、嬉しいわ〜」

私の悩みなんか知る由もない二人はサンドイツチに舌鼓をうっている。

まあ何度も言うように考えても仕方ないんだけどね。気になる物は気になるわけで。

私はサラダサンドを咀嚼し終え、次のサンドイツチを手取る。今度はハムかな？

「ルイズの方は進捗どう？」

私も口に広がる味を堪能しながら問を投げる。進捗というのは彼女が出版しているという旅行記の事だ。一週間で終わると言っていたが、かなりの量に成るはずだ。何十年単位で書いているようだから。

サラから聞くに結構有名らしい。今度私も読んでみようかな？

「順調よ。今ちようど折り返し位だから書き上がるのは予定通り四日後くらいかしら？」

当初の予定通りというのはルイズがそれだけしっかりしている、ということなんだろうなあ。前世で一度も課題の期限を守らなかつた私とは大違いだ。むしろ出さないまでもある。

「そちらはどう？ サラはちゃんとやれてるかしら？」

「ああ、うん……ヤレテルヨ」

サラはちゃんとやっている。グチグチ言いながらもなんだかんだ真面目に修行しているのだ。

こつちの進捗は……うん。芳しくないけど。

「何で片言なのよ！ はつきり言つて貰つた方がまだ良いわ！」

だつて思いの外ねえ……いやサラは悪くない、寧ろ良い方だけど捨虫は難易度が違うのだ。

「まあまあ、焦ること無いじゃないの。ゆっくり進めれば良いわ。それに無理して捨虫を使わなくたって——」

ルイズがサラを窘める。捨虫の魔法について身を持って知っている彼女は何か思うところがあるんだろう。それだけサラを大切に思つてもいる。

「それは……駄目です」

けれどサラから放たれたその言葉は静かな、けれどはつきりした拒否だった。

「何でサラつてばそんなに捨虫の魔法を会得したいの？」

旅をしたいと言つてたけれど、それだけが本当の理由じゃないな。半分くらい勘だけど。ただ長生きするだけなら延命系の魔法とか、もう少し簡単な方法も有るはずだ。ルイズは天才だったのだすつ飛ばしたようだが、本来時間をそうやって時間を掛けて習得するらしい。でもそうじゃなくて捨虫だけを求めるのは……

「……旅をしたいのよ。ルイズさんに憧れてるの」

「……そっか」

多分嘘だろう。返答までの間が語っている。

つまり彼女は語りたく無いようだ。どうやらルイズは何か思うところが有るのだからうけど。

一体何なのか詳細が非常に気になるところだけれど……無理して聞くほどじゃない。

誰にだって過去は有る。

知られたくない過去、無くしてしまいたい過去。私だってそうだ。

昼食を食べた後私は街を練り歩いていた。

ルイズが『ちよつと休憩のついでにサラの様子を見たいわ。もし良かったら街を見てきたらどうかしら?』とのこと。

ならばとお言葉に甘えてこうして散策しているのだ。

「やっぱり発展してるよなあ……」

白壁の美しい街をぶらりぶらり歩いてわかる文明の発展度合い。

ルイズ達はここは田舎だとか何とか言っていた気がするけど元の世界に比べたら雲

泥の差だ。……月へ旅立ったあの人里だけは例外だが。

少なくともヘカーティアの国周辺でこうも近代的な建物は見たことがない。

彼女らの言う通り確かに田舎といえは田舎だが元の世界とは基準が違う。随分と街が……そう、前世と近い。多分ヨーロッパ辺りの郊外はこんな感じの街並みだったんじゃないだろうか。

例えば先程ふらりと入ったカフェ。出されたコーヒーとケーキはもちろんとっても美味だったのでまた行きたい……というのは置いておくとして。

まず照明が有った。電気をつくアレである。最も動力源は電気ではなく魔力のようだが、しかしそれを店主や店のスタッフが付けているわけじゃなかった。そもそも彼らは魔法使いですら無かった。

どうにも前世の電気やガスと同じ様に魔力がインフラ設備として供給されているみたいなのだ。街中に電線みたいなものが張り巡らされている。恐らくは魔力を伝える物だろう。

他にもレジが有ったり、レコードプレーヤーみたいな物からオサレな音楽が流れていたり、普通に水道蛇口が有ったり、開けた道の上を車的な何かが走っていたり……

前世と非常に似通った箇所が多い。もし現代に魔法があつたらこんな感じになるのではないだろうか。そう思える程に生活に魔法が浸透している。

この世界は魔法が一般的なパラレルワールドなのかもしれない。

ルイズに貰った小遣いでちよこちよこ遊びつつ街の中を回ったのだが、その違いを比べるのが結構面白かった。

「お、本屋だ」

目に入る看板。現地の言葉で一文字『本』と書かれているわかりやすい店だ。本好きな私的に惹かれるものが有る。木製で四角い硝子窓がはめ込まれた味のあるドアを開いて中へと入る。

「おお……」

自然と漏れる感嘆の声。中に入ると天上まで伸びる棚にびっしり本が並べられていた。それがいくつも有るんだからちよつとした図書館みたいだ。レトロな内装も相まって非常に良い感じ。

「……いらっしやい」

店の奥にあるカウンターに居る眼鏡を掛けたおじさん……いやおじいさんか？そんな初老の男性が私に声を掛ける。

「……お嬢さんあんまり見ない顔だね」

眼鏡越しにイマイチ感情の読み取れない目をこちらに向ける。

彼の手にはパイプと新聞、ふかしながら読んでいたようだ。

「どうも、ちよつと観光にね」

「こんな片田舎に珍しい。何もないだろうに」

「やっぱり田舎らしい。色々店は有るし、広場では市場も開かれてるみたいだし、何も無いってことないと思うけど。」

「パイプって本に色つかないの？ 本屋なのに感心しないね」

「……何？ 魔力煙で何故色が付く？」

「ありや？ 元の世界の煙草類とはどうやら違うみたいだ。言われてみればうつつすら煙に魔力を感じる。つまり魔力を吸っているだけということになる。なるほど、つまり健康的な煙草なのか……？」

「いやあ失敬失敬。私の故郷にそんなの無かったからさ」

間違ったことは言っていない。

「……今どきパイプの存在を知らない奴なんかそうそう居ないと思うがね。変な嬢さんだ」

ふははは、変で悪かったね。

「そうだ歴史書とかって無いかな？」

「……多少はあるが、その条件だけだと数が多すぎる」

「神綺様について出来るだけ詳しく書かれているのが良いな」

「……少し待っている。幾つか選定しよう」

せつかく本屋に来たのだし何か本を買って行こうと思う。情報収集も兼ねてだ。

五分ぐらいの間に彼は二十冊前後の本をカウンターに広げた。膨大にある本達の中から迷わず選び出すその様子は流石本屋といったところか。

「結構有るね」

五冊位かと思っていた。前世の本屋で、そう例えば、前の世界の金髪イケメン神の本を探してもそんなに無さそうだから。いや実際にやったことは無いけどね。

「当然だ。この店中だけで全て合わせたら三桁は下らん」

「すげえや、流石創造神。文字通り桁が違うぜ。」

「誰しもが知っている本、それと有名な逸話や伝説について書かれている本を中心に繕った。どうにもアンタは神様様についてまろくに知らなそうだからな。……まったく、どんな生活をしていったんだか」

あはは……この世界の住人じゃないんだから大目に見てほしいな。

「どれどれ……」

彼が選んでくれた本を吟味していく。

まず一冊目。

『神綺様写真集』

目眩がした。

「……これ本当に皆見てるの?」

「当たり前だ」

即答である。創造神様何してまんねん。少しお茶目だとかぬけているとか誰か言つてたけど予想の斜め上だった。いや、斜め下なのか。よくわからないしわかれぬい。

「毎年出版されている」

アイドルの間違いなんじゃないか。この世界自体に対して非常に不安になってきた。

気を取り直して……いや、直せないけど取りあえず覗いてみよう。

表紙はシンプルに表題だけ書かれている。

「おお……」

綺麗だ。

まず最初の写真をみての感想。銀髪の麗しい神に整った顔立ちはまさに女神と言っ

て良い。

見た目の年齢は結構若い。女子高生と言われても違和感が無い。当然そんなのあてにならないくらい歳をとってるだろうけど。

赤い珠が二つ着いたゴムか何かで片側の髪はまとめられサイドテールになっている。少し位置が高いので、なんだかより幼く感じられるから可愛い。是非とも私も写真を撮りたいところ。

「ん?」

海辺を裸足で歩いている写真、森で静かに佇む写真、紙袋を持って歩く写真……表情豊かで微笑ましいのだが大半の写真は何故か目線がこちらを向いていない。

そう、まるで盗撮したような……

「そういうえば神綺って神出鬼没なんじゃないの? 誰がどうやってこんなに撮ってるの?」

「様をつける様を、罰当たりめ。その写真集は神綺様の側近のメイドが作っているらしい」

側近のメイドねえ。それならこれだけの写真を……

「いやいやいや、何で側近が盗撮しまくってるのさ。この写真集は本人は知ってるの?」
「……神綺様には内密にというお達しがあつてだな。詳しいことは知らん。」

ギルティ。というかこんな写真集だして内密もくそも無いと思うんだけど。

「……因みに夏限定で水着写真集も発刊されている」

側近が変態的に暴走しているんだがそれでいいのか創造神。それらを本人以外の殆どが認知してるってどういう状況だよ。この世界大丈夫かよ。

というか水着写真集の話するとき妙に嬉しそうにするなよ。ムツツリスケベジイめ。

「買うか？」

「……買う」

情報収集だからね、しょうがない。

断じて表紙の可愛い笑顔に悩殺されたとかじゃないから。あくまで情報収集だから。

さて、次に行こう。

「これは……伝説を集めた本かな」

次に手に取ったのは神崎様の伝説集。彼女に纏わる様々な伝説が書かれている。歴史書というよりも子供向けっぽいかな。絵が多い。内容は『世界創世』『人類創造』『魔法の創造』等々……

流石に創造神だけ有ってゼロから何か創り出す伝説が多いみたいだ。

「ん？」

そんな中に一つ毛色の違うお話が有った

『災厄の魔女との戦い』

災厄の魔女？ 創造神に喧嘩を売る奴なんかいるのか……？

五話 情報屋のおじさんはイケメンである

『災厄の魔女』

遙か昔、今みたいに建物や道具のない時代のこと。

それはどこから突然現れました。

金色の髪に漆黒の翼をもつそれは当然ながら人ではありませんでした。

それが指を振るだけで死よりも辛い毒の霧を出し、また星の杖を振るえば殺戮の雨が降りました。

そして時に人を惑わせ殺し合わせたりもしました。

破滅的な魔法を使うそれは、姿を見て生き残っていた人々に『魔女』と呼ばれました。現れたそれは悪逆の限りを尽くし、異形のしもべ達を使い人々を襲い、またそのしも

べ同士でも殺し合いをさせました。

その異形の物達は後に魔族となつて世界に蔓延ることになるのです。

当然ながら神綺様はこの非道な行いを許しませんでした。

けれど神綺様が追い詰める度、魔女は奇怪な魔法で逃げ回ります。そして逃げた先で再び人々を襲い、そして争わせました。

どうにかして魔女を止めようとする神綺様、ですが魔女は賢く、けつして捕まりませぬ。

どうしたものかと酷く悩む神綺様。

そんなときにどこからか天使が現れたのです。純白の髪に翼を持った天使です。

その天使は魔女に追われていました。

その天使は特別な目の力を持っていて、魔女はそれを狙っていたのです。

魔女をどうにかしたいと思つていた天使は神綺様に協力を申し出たのです。

それから二人で協力し徐々に魔女を追い詰めていきました。

そうして神綺様と天使は長い時間をかけながらも、魔女を封印することが出来たのです。



以上がこの伝説、というかおとぎ話の全容らしい。

魔女も天使も随分不意に現れるなーとか、神綺以外名前が無いのなーとか。いろいろ突っ込みどころは有るのだが。まあそういうのは、どんな昔話でもある事だ。気にしない気にしない。

私はそんなに加減な『おはなし』のことよりも、世界の創造神を相手に立ち回る『災厄の魔女』に興味をそそられた。

「この魔女についての本って他にないの？」

そんな強力な存在があるのなら調べる価値がある。話を見る限り随分残酷的な性格みたいであるし、あわよくば私を相手にしてくれるかもしれない。死よりも辛い毒つていうのにも気になる。

まあ封印を解くと周りにもかなり迷惑が掛かりそうなのであくまで一つの可能性程度だが。

「……………ここにはない。ここは本屋だ。歴史書は図書館で探した方が良い」

「この街って図書館有る？」

「ない。少し離れた発展したところまで行かねばな」

ううむ、残念ながらここにはこれ以上の資料は無いようだ。まあおとぎ話だしねえ。桃太郎の資料を探せと言われても現代の本屋に絵本以外あんまり無いだろう。

しかし前世のおとぎ話と違うのは、恐らくその『災厄の魔女』の話は本当だということ。

現におとぎ話の中の神綺が存在するのだから。もし話の内容が間違っていたら訂正なり何なりするだろう。

「おじさんは何か知らない？」

「……知らないね。私は嬢ちゃんと違ってただの人だからな」

残念ながらおじさんも知らないようだ。なんか雰囲気的に裏話とか知っていそうな感じだから少し期待してた。

漫画だったら裏社会の情報屋的な？ちよつとステレオタイプか？

けれどまあ、フィクションみたいにそうそう上手くはいかない……

「つて。いま『嬢ちゃんと違って』つて言った？」

「……ああ言ったな」

いつバレた？怪しい力は流れないようにしているし、私が人外だという素振りも見せてないはず。

サラがやたらに過敏だったから私が魔族の類で有ることは伏せておこうと思つていたのに。

「……アンタからは人の魔力を感じない。普通の人なら大なり小なり魔力を持っているからな。これでもそういうのには鋭い方だね」

まるで興味が無いようにパイプをふかすおじさん。ゆっくりと白い魔力煙が背の高い本棚に沿って立ち上つてゆく。彼のそんな様子を見てると何となくはわかるけど一応聞いておく。

「それでどうするの?」

「何がだ」

「いや、私は人外だから退治なり何なりするのかなと」

この世界においても人と人外の溝は有る。前の世界ほどじゃないようだけど。

捨虫の魔法を使ったルイズだって人外と言えば人外だ、

彼は再びパイプを吸い、そしてゆっくり煙を吐く。

「……別段何もしない。魔族だからって皆が皆害悪なわけじゃあない。そう判断する輩も居るがな。これでも長く生きている。それくらい分別は付くつもりだ」

イケメンだ。これがアニメだったら良い脇役になるだろうな、なんてどうでも良いことが思い浮かぶ。

落ち着いた大人の雰囲気が良いね。やつぱり情報屋向きだ、このおじさん。

「はあ……サラにも見習って欲しいね」

彼女にこの大人の余裕があったらもつと楽に修行が進むだろうに。どうにもあの子は余裕が足りない。

いや私もあれ位の年だとあんなもんだったか？ 自殺するくらいだし。人のこと言えないじゃん。

「……サラつてのは赤髪の子のことか？」

赤というかピンクだね、ピンク。

「もしかしてサラと知り合い？ いやーやたらと邪険にされちゃってさ」

邪険というか、初めはまるで親の仇のような素振りだったけどね。

彼は再びパイプに口に付ける素振りをし、それを途中で止めた。

「そうだろうな」

「ん？ もしかしてサラの過去に付いて何か知ってるの？」

あからさまに話しながらない本人達に聞く気は起きなかったが、気になるものは気になる。

「……詳しくは知らないがな」

「良かったら教えてよ」

「……私が話すべきではないのだが」

いやまあそんなだけどき。

ま、無理して聞くほどじゃないから潔く諦めるけどさ。

「——いや、アンタには話しておこう。どうせあの子は自分から話さないだろう。それを知ったからって何かするわけじゃあないだろう？」

「良いの？ 確かにそうだけど」

単に興味があるだけでサラに危害を加えるつもりはさらさらない。あつ、今のダジャレじゃないよ。

「でも本当に良いの？ 本人は話す気無さそうつて」

「……だからこそ、きつとあの子のためにもなる」

そう言った彼は一体どういう思いだったのだろうか。

パイプを再び吸い込み一度煙を吐いてから彼は語りだした。

「彼女は十数年前にルイズという旅人がこの街に連れてきた。ルイズというのはそのこの棚の旅行記を書いている」

「ルイズのことは知ってるよ。だって今家にお邪魔してるわけだし」

おじさんが示した棚に目をやると一角が同じ背表紙で埋まっていた。著者名はルイズ。

他の本は割と名字を含めたフルネームなのに、何故かそれは名前だけだった。やけに目立つ。

「そうか彼女は今戻ってきているのか」

彼はルイズのことを知っているようだ。

「……彼女は本の著者でありこの店の客だ。もつとも、私の代ではその十数年前に一度来たつきりだがね」

パイプのボウルを手で包む。確か温度を確認するため……だったか。前世でパイプなんか吸ったことは愚か、触ったことも無いからわからないけど。

どうやらオーバーヒートらしく彼はパイプをことりとカウンターに置いた。

「ルイズさんはサラを旅先のある村で見つけたらしい」

見つけた、という言い方引っかけりを感じる。おじさんの余り動かない表情にも微かに陰を見えた。

「なんでルイズはサラだけを連れてきたの？」

嫌な予感……というよりほぼ確信に近いものを悟る。

おじさんは右手を使い、緩慢な動作で眼鏡の位置を直す。そしてゆつくりと口を開いた。

「……ルイズさんが着いた時、村にはサラしか居なかった。いや、サラ以外は

死んでいた」

そう彼は言った――

――ああ、あまり面白くない話であつた。

話を聞き終えた私はいくつか本を選び購入する。お金はルイズから借りた物なので彼女には何かお返しをしないとね。

「……そうだ、一つ思い出した。『災厄の魔女』についてのことだ」

せっせと収納空間に本をしまう私におじさんはやっぱり何のことは無いように話しかける。

「何？」

「……神綺様と『災厄の魔女』との鬪いだが……勝った訳では無いらしい」

勝つていない？ どういうこと？

「……詳しいことは知らん」

「またそう言う。それ本当なの？」

神綺が負けていたら今頃この世界は混沌の渦の中にあるだろう。

あの話をみる限りだけど『災厄の魔女』はそういう奴だ。人を人とは思ってなさそうな所業ばかりしている。

「…神綺様本人から聞いたから恐らく本当だろう。」

余計意味分からなくなった。

「……私はこの本屋を継ぐ前は研究者だった。その頃にふらりと学舎に現れた神綺様がポロリと漏らした話だ」

ふらりにポロリって、何だか神綺の話を聴く度彼女自身に興味が沸いてくる。本当に創造神なのか？ もっと厳かじゃなくて大丈夫？

「まあ頭に入れておくよ。色々ありがとうね。それじゃあまた」

「……ああ、精々私が生きている間に来るのを楽しみにしているよ」

その薄い表情は微かに笑っていた気がした。あまり気の利かないジョークで見送られた私は本屋を後にした。

森の中を進む。シレオの森、だったっけ。

その名の由来は静かな森。そんな訳だから非常に落ち着いた雰囲気が漂う。森林浴にうってつけだろう。

まあ、奥に進むほどそこから中木つ端魔族だらけになるので普通はそんな余裕など無いけれど。

目指す目的地は森に入つてすぐの開けたところ。魔族達はそんなに居らず、日もよく入る。

そんな運動するのに丁度よい所でサラは修行を――

「ルイズさん、それは私が決めることですっ!」

――している筈なのだけれど、聴こえてきたのは息切れ音でも落下音でもなく怒鳴り声だった。

「おーい、どうしたのさ一体?」

私がある場所に着くと、二人は修行の木の下の向かい合つて立っていた。

「つ!! あんたには関係ないっ!!」

私を見て憎しみの籠もった目で睨みつけたサラ。彼女は駆け出し、そして私を突き飛ばし街の方へ走っていった。

その大きくはない背中がみるみる小さくなってゆく。そんな様子を見送り、そして私

は横で固まっている彼女に声を掛ける。

「で、どうしたの？ サラがルイズに文句言うなんて珍しいね」

「……ちよつと失敗しちゃってね」

眉を顰め、困ったように笑うルイズ。

「やつぱり捨虫の魔法のこと？」

「ええ……使うべきじゃないって言ったら怒っちゃって。当然よね。使っている私に言われても説得力なんて無いわ」

残念そうに、けれど少し悲しそうに彼女はそう言った。

「ルイズは何でサラが捨虫の魔法を……いや、力を求めるんだと思う？」

「それは……」

「復讐のためだと思う？」

「!? どうしてそれを……」

「おじさんにぎつくり聞いちやった」

まあ、聞かなくても何もとなくわかってたけれど。

あからさまな私への敵意は、過去に魔族に受けた仕打ちに由来するのだろう。

「そう……でも私はサラにそんな事をして欲しくないし、何よりそんな理由で捨虫の魔法を使わせたくない。いや使ってはいけないのよ」

ここまでルイズが捨虫を拒むのはやっぱり何か有ったのだろうか。

「元々私が魔法を彼女に教えたんだから……せめて私が止めないと。彼女には平穩に過ごしてほしいの。もう辛い思いなんてさせたくない」

そう彼女は言うが、発火魔法からあれだけ独学で発展させるサラだ。ルイズが教えた、教えないに関わらず捨虫の魔法に行き着いた気もする。手っ取り早く人間の枠を超えられるのだから。

しかし彼女は辛い思いをさせたくないと言ったが、果たしてサラにとってはどうなのだろうか。

「もしや」

多分ルイズは焦っていて気づかない……いや明確に殺意を向けられた私にしかわからないことなのかもしれない。

「サラに別の理由があれば捨虫の止めない？」

「別の理由……？」

「そう、例えば『旅をしたい』みたいな。なにか前向きなことの為だったらどう？」

「それは……私には止められないわ。それが本心なら」

だって私はそうだったから、とルイズは言う。

私はやっぱりなと笑う。

「ならもうちよつと様子見てあげようよ。確かに復讐心も有るのかもしれないけど……」

きつとサラにもそれ以外にやりたい事が何か有るはずだから。

じやなきやあんなに真つ直ぐ頑張れないと思うよ。

「一体何を言ったのよ」

「何が？」

「ルイズさんによ！いきなり謝られてびっくりしたんだから。それにもう少し様子を見るってどういう……」

「サラもちゃんとルイズに謝った？」

「当たり前でしょ！あの後どんだけ家で私が後悔してベット上で悶えたか…つてそんなことはどうでもいいでしょ！」

薄々思ってたけどサラちゃんルイズ好き過ぎね？ まあ二人の百合展開は私的にキ

マシンタワーではあるんだけど。

「まあほら、良いから修業頑張りなよ。もうそろそろ時間も無いし。」

「むう……そうね。絶対に魔力を操れるようになってやるわ!」

おうおうその意気だ。若者は活力に溢れていて良いねえ。

「……ねえ、は……いや、アンタ。」

「ん?どうかした?」

『は』って一体何を言いかけたんだらうか。

サラは何か改まって此方へ向いた。少し顔を赤くして。両手を後ろに回し、何故か私と目を合わさないようにしている。

「……あ、ありがとね」

「へ?」

それだけ言つて彼女は顔を真っ赤にして俯いてしまった。かわいい。

「……ふふつ、ははっ!」

「ちよつ! 何で笑うのよ! 人がせつかくお礼を言つたのに!」

「いやあ、安心したからだよ。しかしまあ、そんなに顔真っ赤にしなくても良いんじゃない?」

私の目も案外捨てたもんじゃないね。

彼女はどこか「彼女」に似てる気がする。

「なっ！ 私あんたのそういうところが嫌いだわっ！」

過去に何があれどサラはサラって事だろうね。うん、私なんかより大分立派だよ。

きつと彼女は何が有っても大丈夫だろうから。

「クソツ、さつさとこんな修行終わらしてアンタをけちよんけちよんしてやるんだから
!!」

木に向かって力強くダツシユするサラ。足に込められた魔力はしつかり地面を掴んで離さない。

そして木の幹に足を掛け、体の向きが水平になった所で――

「あでっ！」

背中から落ちた。何が有っても大丈夫……だと思ふ、多分。

六話 大事な人に対してほど肝心なことを忘れてたりしな
かつたり

彼女は勢い良く駆け出した。

その鮮やかなピンクの髪が風になびく。

「はああああ!!」

掛け声、いや最早それは殆ど叫びと言って良いだろう。女の子が出して良いのか少し微妙な声を出しながらも彼女は走る。

その太い木の根元までたどり着いた彼女は幹に足をかけた。その足はしつかりと幹に吸い付き離れない。もうその動作に辿々しさは感じられない。

そのまま幹を勢いよく登っていく彼女。

上へ行く内に増えてくる邪魔な枝を危うげなく避け、段々狭くなる足場を進む。横への動きに加えて足場も悪くなるけれどその動きは安定している。

そしてついに彼女は手を伸ばす。

触れたのはこの木の一番高い枝先。

「どうだっ!」

彼女はこの木、この辺りで一番高い木を登りきった。遂に彼女はこの一週間の修業をやり遂げたのだった。

「やったあ……れ?」

それで集中力が切れたのか彼女の足が枝から離れる。

……まったく。詰めが甘いんだから。

「きゃああ! ……つてあれ?」

落下を始める彼女を宙で私は受け止める。

「もう、危ないんだから。気をつけなよ?」

「へへっ、なに言ってるのよ。勝者の余裕って奴よ」

余裕が無かったから落ちたんでしょうが。第一勝者って何か勝負していた訳でもないだろうに。

——いや、強いて言うならば自分と戦っていたのか。

ひたすらに魔力を操り、木を上る。時には落ちて体中泥だらけ。彼女はそんな自分の戦いに勝ったのだから。

それを勝ち誇っておかしいことなんて無い。

酷く疲れきったサラの体を抱え、ゆらりゆらり、木の葉が落ちるようにゆっくりと降りていく。

「ねえ、聞いてもいいかな」

「何よ？」

「サラは何の為にそんなに頑張るの？何の為に捨虫の魔法を使いたいなの？」

「……」

一応は聴いておかなければならないこと。

……もちろんそうであるのだけど、それだけじゃない。単純に私が知りたかった。

寧ろそれよりも、ただ純粹に、彼女がどうしてそんなに必死になるのか興味がある。

「元々は……そう、あまり言えたもんじゃない目的の為だったわ」

ゆっくり言葉を整理しながら話します。

「もちろんルイズさんに憧れてるのも本当だし、旅を試してみたいのも本当……でも一番は……私は知らなきゃいけないの。色々なものを肌で感じて見なくちゃ。そのためにまずは本物の魔法使いになりたい。今はそう思ってる、と思う」

いまいち抽象的で要領を得ない答えだとは思っけれど。

「そっか」

それなら私から言うことは特にないのだ。

少しあったはずの心配もやはり杞憂で、サラはやっぱりサラだったのだから。

「……何も聞かないのね。」

「そりや野暮だからね。聞いてほしいなら聞くけど。」

「……アンタそういう所よ。でもそうだと思ってたわ。だから——」

「だから？」

徐々にフェードアウトしてゆくサラの声。どうしたのかと様子を伺えば彼女は寝息を立てていた。

「むにゃ」

あれま、流石に疲れたのかな。まさか私の手の中で寝ちやうなんて。

……それだけ警戒が解かれているって事だけどね。少しむず痒いけれど、ちよつと嬉しい。

「どう、なのかしら？」

「ん？ 美味しいよ」

ミネストローネを啜る。口内にトマトの風味が広がる。良くトマトが嫌いだという人が居るけれど私にはその感覚はわからない。だって美味しいじゃん。

「お粗末様。でも、そっちじゃないわ」

夕食は本当に美味しい。けれど当然彼女が聞き出たいのは隣の部屋でぐーすか眠っている彼女のことだ。

「わかっているって。多少危ういところも有るけど、捨虫の魔法ならギリギリ大丈夫なんじゃないかな？」

いや凄いな、ぶっちゃけ最初は一週間じゃどうこう出来るはず無いと思ってたもの。サラの気力と執念には目を見張る物があった。

「そう……」

「大体それはルイズの方が詳しいんじゃない？。使ったこと有るんだし」

「ええ、そうね……」

煮え切らない返答のルイズ。私に聞くまでもなくそんなことは百も承知であろう。

もちろん彼女が悩んでいるのはそこじゃない。それくらいは流石にわかる。

少し息をついてから私は彼女に問いかけた。

「ルイズはどうしたいの？」

本当にサラに捨虫の魔法を習得させて良いのか、それが彼女にとって酷く悩み所なの

だ。

「第一、私に修行を付けるように要つたのはルイズじゃない」

「それは……あの子の魔法が余りにも危なっかしくて……でも、捨虫の魔法はやつぱりもう少し考えてから……」

本当に悩んでいるのだろう。けれど私にそう言われても困ったりする。

「正直さ、私はそういうのわからないからさ」

既に人の身でない私はどうの昔に寿命に対する認識などすり減りきっている。

もつとも自殺を考えるような奴なんだから、元から磨り減るもくそもないんだけど。

「ルイズが本当に止めさせたいなら、私も従うよ」

ルイズにとってサラは娘、はちよつと違うか。そう例えるなら妹みたいな。とにかく大切にしているのだ。

そもそもサラが魔法を知る切っ掛けも、もつと言うならサラが今まで生活してきたのもルイズに依るものだと言つても余り過言じゃない……と恐らくサラは思つてるはず。

だからルイズが本当にサラの身を案じて止めるのなら従うはずだ。

「私は、どうしたら良いのかしら？」

だからこそ迷っている。ルイズはどうするのが一番良いのか。

まあ、心の何処かであつちやけどつちでも良いんじゃないかね？ とかものぐさで無頓着な

私は思うのだけれど。結局決めるのはサラな訳で。

ルイズはそうじゃ無いのだ。きっと捨虫の魔法を使った当人にしかわからない何かがあるのだろう。

「だから私に聞いたって仕方ないよ。だって妖怪、魔族だもの。人間の価値観なんてわからないね」

「なら、私の意見なんて気にしなくて良いじゃないの。それに貴女自身はサラの望み通りにしたいと思ってるのでしよう」

む、それは……そうかもしれない。

私はサラの望みを遮ることが出来ない。あんなに不器用だけど真っ直ぐ行きようとしている。どうしたって応援したくなる部分もある。

「でも私が決めちゃいけないでしょ」

「どうして？」

「ルイズ、忘れたの？」

どうしてもこうしてもない。これは二人の問題である。

「『私はルイズさんみたいに旅をしたい』って、言ってたじゃない」

「……」

サラがそう思ったきっかけは当然ルイズな訳だから私がどうこう言うものじゃない

のだ。

……と言いつつ結構ちよこちよこ口出しでしまってるけどね。

まあ肝心な結論は私は極力何も言わないし言いたくないのだ。二人で決めようよ。

「そう、ね……そうよね」

その言葉を飲み込むように彼女は繰り返した。

「私が迷ってちやいけないわよね。サラと話してくるわ」

そう言ったルイズは、少しだけわざとらしく笑ったのだった。

「それにしても貴女って面倒見が良いのね。これでもサラの親代わりを努めようって思ってたけれど私より僕の方が向いてそうよ？」

「そんな事ないよ。……そうだね、強いて言うなら独りよがりのただの出歯亀だよ」

って答えたらルイズには生暖かい目で笑われた。だからそんなんじゃないって。本当に。

その夜二人は長い間話し合ったようだった。

どういう事を話したのかは知らない。そこは私が首を突っ込むことじゃないだろう。

ただルイズは翌朝私にこう言った。

「サラを信じることにするわ」

その顔はどこか困ったようで、清々しい顔だった。



「よしやってやるわよー」

サラの威勢良い声が響く。

湖面を撫でるそよ風がひんやりと気持ちいい。私達は現在この街の中心、湖の畔に来ている。

私達がこの街に来て一週間が経つ。ルイズは無事に紀行記を書き終えた。

原稿を見せて貰ったけど恐ろしい量だった。

『今回はこれでも短いのよ』とのこと。ルイズさんマジパネエっす。

彼女の紀行記は前の本屋でいくらか購入したので道すがら読んでいこうと思う。

まあ、そんな訳で無事ルイズは用事を済ませた訳で、私達はそろそろこの街を出発するつもりだ。

この街には魔法使いと呼ばれるような人物は居ない。つまり当然ながらサラに捨虫の魔法を教えられるような人物は居ないということ。

次にルイズが帰ってくるのは数十年後。つまりこの機会に魔法を会得しなければ当分、ひいては一生チャンスはないのだ。

……とは言うものの、個人的には……いや恐らくルイズも何だかんだそう思っているんだらうけれど。

別に私は残つて教えても構わないと思つている。

しかしサラ的にそれは納得行かないらしい。

『ルイズさんに来るだけ迷惑はかけたくない』とのこと。

あるえ、私が入つてない。

とまあ、言いたいことはあるけれどサラ的にルイズに負い目が有るのだらう。これ以上迷惑をかけたくないと。

そんなことはルイズは気にしないだらうけど。何だか微妙にすれ違つて二人である。

「サラ調子はどうかな？」

「万全に決まつてるじゃない」

気合い充分、得意げに話すサラ。

「あんな疲れてたのに、一晩ぐっすり寝たら回復とは、若い人は良いねえ」
「アンタはおばさんか」

うーむ、年齢的にいえばそうかもしれない。というか遥かにおばさんを越えている気もする。色々成長しないけどね！

「そうそう、寝顔が可愛くて沢山写真撮っちゃつらあ、あ、いたいれふ」

「今すぐ消せえい！」

昨日ぐっすり寝たから元気が有り余ってるまでであるようだ。いつもより痛い気がする。

というか私の頬つねりやすいの？いつもつねられる気がするんだけど。そのうち伸びちやいそう。サラにはもつと優しさをだねえ。

「あんたが悪いんでしょうが！くだらないこと言っていないでさっさと始めるわよ」

「いてて……わかったよ。それじゃルイズも良い？」

「……ええ」

ワンテンポ遅れてルイズは応える。

あれからもなんだかんだ言いつつルイズは悩んでいたが、一応は腹を括ったみたいだった。

「じゃあ始めようか」

サラは静かに目をつむる、魔法に集中するためだ。

彼女の周りの魔力の流れが変わった。能力のせいとか、結構敏感に感じる。

その流れにはほとんど乱れは無かった。それだけ自在に魔力を操れている証拠だ。最初に会った頃の荒削りだった頃と比べたら雲泥の差。やっぱり成長の速さは若さ故かねえ。

「我は求む。悠久の時を」

サラ練り上げた魔力をそのまま練り上げ体に纏う。

「故に命ずる。我が志を拒むその虫よ。我が身から消え失せよ！」
纏った魔力はその勢いを増す。

『捨虫の魔法』

この魔法は寿命を延ばすというより、寿命を減らす原因を体から取り除くというのが主な目的になる。

誰が考えたのかは知らないが、体に巣くう命を蝕む虫を追い出す、ないし消滅させることで老化をその体から取り除く。それがこの魔法の詳細。

無論そんな虫が実在を伴っているわけではない。

さて、色々な現象を起こす魔法であるけれど、成功させるためには重要な要素がある。それはいくつか有るのだけれど、その一つに『思い』というのがある。

どれだけその魔法の結果を思うかが重要なのだ。

火魔法なら火がついた状態、転移魔法だったらそこへ移動した状態。それらを如何に迷いなく思い描けるかで、その魔法の効用の程や、それこそ成功の可否が決まったりする。

つまりこの場合、捨虫の魔法を成功させるためには、その後の自分をいかにイメージするのが大切になる。そこに迷いや怯えが有つてはいけない。

「はあ、はあ。どうよ……！」

そう言つて手を伸ばしたその先には、凄まじい密度の魔力の塊が有つた。

あれが具現化した彼女の「虫」だ。

「いや、まだ具現化しきれてないよ。止めちゃだめ。もつとしつかり魔力を込めてイメージして」

先も言つたとおり魔法はどれだけイメージが出来るかが肝心。

だつて本来有り得ない奇跡に形を与えるのだから。

……偉そうに語つても全部彼の女神や神殿の巫女からの受け売りなんだけど。私もそんなに上手く出来る訳じゃないのだ。寧ろ苦手なまである。

「やつてる……わよー！」

「もつとちゃんとキツチリはつきりと。ちゃんと出来てないと寿命以外の部分もちよん

切れちゃうよ?」

「え、ちよつ、なにそれ!? 聞いてないんだけど!」

「まあ半分冗談。そんなことにはならないって、多分」

「ああもうくそつたれ! でも、成功すれば問題ないわよね!」

ちよつと発破をかけつつも私は内心呑気に思っていた。

私もルイズも居るのだから、よっぽどの事がない限り無事終わるだろう。

「でも、成功すれば問題ないわよね!」

頼もしくも再び気合いを入れ直したサラは捨虫の構成に力を込めた。

だが、思いの外サラの魔法は困難していた。

「どうなのかしら……?」

少し離れたところで様子を見ている私達。ルイズは私に不安そうに問いかけた。

「まだ……駄目だと思う。というかやつぱりルイズの方わかるんじゃないの?」

い。そもそも私には捨虫を使った事が無いのだ。そもそも人間でないし。捨てる虫もない。

その点ルイズは実際に使用した事が有るのだから、私よりもこの魔法に詳しい筈なのである。

「もう、随分昔だし……忘れちゃったわ」

そう困ったように笑うルイズ。そんなおばあちゃんみたいな話をする。

「でもこんな時間に時間は掛からなかったとおもうわ」

「まあそうだろうね」

もう数時間粘っているし、前の世界でそんな掛かるなんて話を聞いたことはない。

様子を見る限りではもう少しのはずなんだけど……

「サラ、流石に一旦止めた方が……」

「まだよ、もう少しなのよ……!」

既に疲労困憊なはずのサラ。しかし、さらに彼女は魔力を込めた。唯でさえ高密度な魔力がより濃くなった。

その様相はどこか必死すぎる。これは良くない。何故なら何かに取り憑かれたような顔をしていたからだ。今朝見た決意の顔ではない。

「ねえサラやつぱり——」

もう一度声を掛けサラを止めようとしたところで変化が訪れる。

「私……は……私……!」

そこでサラの魔力が酷く揺らいだ。

「ッ! ルイズ伏せてっ!」

「夢？」

能力が異常な流れを感知した。

急激に何かがサラの魔力に混じり出す。黒い瘴気のようなそれは構成中の『虫』へと伸びてゆく。

「ああっあああー！」

明らかにサラの様子が可笑しい。私は即座に地面を蹴った。

そして判断した。あれは恐らく不味い物だと。

禍々しさをやたらに感じるあの瘴気。近づいた私は即座に『虫』構成している方のサラの手を掴む。

それを切っ掛けに私の能力は更に詳細に魔力の流れを感じる。

「ツツ〜くそつたれ！」

その流れに私が悪態をついた直後、魔力の爆発が起きた。

七話 右手が疼くツ、疼くぞツ！

爆風の発散する『向き』を変え周りへの威力を抑える。このまま暴発したらサラ自身が爆散してしまう。しかし、そちらは二の次だ。もつと拙い事がある。

そこにある多量の魔力と急に現れた黒い何かを一気に自分の体内を通し、そこから必要なものだけを取り分けて掴んだ手を通してサラへと戻す。

捨虫の魔法は自分の体内の重要な構成要素を操る魔法。そんなデリケートな魔法の最中だ。もし何もせず、そのままこの魔力を霧散させてしまったら、彼女の身に何が起こるかわかったもんじゃない。

早くそして正確に……よし、これで大丈夫なはず。咄嗟の判断だけどこれで事なきを得られるはず。

威力がかなり減った爆風が私の髪を揺らし、その内に止む。

「わ……私」

「うん、よくやったよ。ちよつと休もう」

私の言葉を最後まで聴いていたか否か。そのままサラは氣を失った。

「おっと」

そのまま倒れ込みそうになるのを、彼女の腕を掴んでいるのと逆の手で抱えた。無理もない。一度に結構な魔力を消費したのだし。

それにあの黒い瘴気。あれは、何だか……そう邪悪だった。月並みでは有るがそう表現するのが正しいだろう。

「儂！一体これはどういうことなの!？」

駆け寄るルイズが私へ問い掛ける。そう言われても突然すぎて私にもわからない。「なんでいきなり、って。貴女その腕！」

今度は血相を変えて私の腕を見た。サラを掴んでいる方の腕だ。一体どうしたって……ああ、うん。たいしたことないじゃない。

「ん?……いやあ、これくらい大丈夫だって」

「そんな訳ないでしょう!?! 血だらけじゃないの!!」

私の腕は彼女が言うように血にまみれていた。皮膚が裂けてしまったようだった。サラに負荷の掛からないように早くしなければならなかった。とだけ考えた結果だろう。かなり雑に魔力を流してしまったので腕が耐えられなかったのだろう。黒い瘴気の気配もいくらか感じるような気がする。禍々しい。

「サラの魔力やら黒い奴やらを通したから。これくらいなら問題無いって」

「どうして落ち着いてるのそんなに落ち着いてるのよ。そういうことを聞いてるんじゃないの！ 早く治療しないと！」

確かに見た目はアレだけれど別段問題ないって。これくらいなら全身の血管を破裂させるより随分軽傷だ。

残念なことには死ぬことは有り得ないのだし。

「私なんてどうでも良いからサラを。早く連れてこよう」

「でも……！」

「いいって言うてるでしょ。それよりサラを早く寝かせてあげよう。ルイズも手伝って。」

ほら、私が抱えたら。サラが血だらけになっちゃうよ？」

彼女の服を汚すのも忍びない。そう思いルイズにサラを任せる。

「貴女、なんでそんな……」

ルイズにびつくりさせて申し訳ないが、本当にさして問題は無いのだ。なにせ人じゃないのだし。

「……わかったわ。でも戻ったら貴女も治療するのよ。」

どこか悲痛そうに、ルイズはそう言う。そんな顔を見て私は酷く申し訳なくなるのだった。

「サラになにが起きたの?」

場所はルイズ宅の食卓。当然ながら料理に舌鼓を打っている、訳では無い。空気は重く、特にルイズは普段穏やかなその表情が翳るくらいに心持ちが芳しくない。

「わからない。でも多分あの黒い瘴気のせいだね」

どうでも良いけど首に回した包帯が地味に動き辛い。こんなことする必要ない何度も言ったのだけれども聞いてくれなかった。ルイズはそのまま家まで私を連れ込み、そのまま手早く処置してしまったのである。別に骨は折れてないし過剰だと思うんだけど

も。

やけに手際が良かった辺り、やはり旅人なのだろう。そのようなスキルも磨かれるのだろうか。

「ルイズはアレに心当たりは?」

「無いわ。あんなもの初めて見たわ。……いえ、似たものなら見たことはあるけれど」

「似たもの?」

サラが『捨虫の魔法』を成そうとした最中、突如起きた謎の魔力の暴走。謎とはいっても原因はあからさまにあの禍々しい黒い瘴気だろう。

問題はその元が一体何かということ。突然現れたように思えるアレは一体どこから来たのか。

「昔、見た上位の魔族、悪魔があんな感じの物を出していたわ。あの時はもう少し紅かったけれど」

悪魔ねえ……

「というかそれでよく無事だったねルイズ。私のイメージだと悪魔とか相当ヤバそうな感じだけど」

私のイメージは当然前世のフィクションのそれではある。この世界のけれど木っ端魔族や、魔法の様子を見るに余り違わないのではないだろうか。

「その通りだわ。悪魔は魔族の中でも強力な存在なの。上位の悪魔は個体にもよるけれど危険よ。でも、私が出会ったのは何故か手負いだったから……すぐ姿を消したのよ」

存外ルイズの旅路はワイルドなのかもしれない。

「一体手負いじゃなかったらどうしたのさ……しかし、悪魔ねえ。」

手負いの悪魔。そんな強力な悪魔を下したのは誰なのだろうか……いや、まあ今はそ

れは良いのだ。それよりもサラのことである。

「じゃあ、あのサラに纏わりついた奴は悪魔のものってこと？ 呪いみたいなの？」

「そう、かもしれないわ。でも、一体なんで……」

それが問題ではあるけれど、肝心なそこがわからない。サラと悪魔に一体何の関係があるのか。

それはサラに聞いてみないとわからない。いや、聞いてもわからないかもしれないけれど。

「貴女は本当に大丈夫なの？ 腕に移ったとか言っただけかしら？」

「ああ大丈夫大丈夫。何か黒いだけだし。」

「黒いだけって、そんな軽く。サラみたいにとりつかれないの？」

いや本当に黒いだけで何も無いし。

……多少ちくちくしたり、熱かったりするけれどさした問題じゃ無い。なのでルイズには言わない。

「まあ、私は能力があるからどうにかなっても簡単に押さえられるし、何よりとっておきの手段も有るから大丈夫」

「そう……わかったわ」

最悪一度さくつと自殺してしまえば体の状態がもとにもどるはず。あらゆる便利。

それよりも今話すべきは……

「どうしよつか」

「……」

サラのことだ。

このまま放っておくわけにいかない。何せ原因がわからない。捨虫が駄目なのか、それとも魔法自体を使うのが駄目かはたまた……

また何か有ったらと考えるとそれは賢明ではないだろう。

「私残るわ。旅なんてしている気分じゃないもの。サラの無事が確認できるまで。いえ、なんならサラがその生を終えるまで——」

やはりサラが心配なのだろう。ルイズは真剣な顔でそう言った。

「でも、それじゃ根本の解決にならないじゃない？」

「それは、そうだけど。でも……」

リスクを背負ったまま生きるというのもどうかと思う。やはりベストは原因の究明と根本の解消だろう。

そしてルイズよ、何よりも——

「サラが大人しくそれを聞くとどう思う？」

私は思わない。



誰も居なかった。

誰も動かなかった。

何故かなんて私にはわからない。

だけど、少しだけわかったことは有って

そう、それは目の前に広がるのはきつと取り返しがもうつかないことだったことくらい。

だけれども網膜に届いているはずのその光景は私に欠片の現実感も持たせてくれなかった。

誰かが動いた。

『それ』は私の方に手を伸ばす

その艶めかしい手は私の頭に触れる

ゆっくりとそれは口を開き、そして……

……ラ、サ……サラっ！
誰かが私を呼ぶ声がある。

「うん……？」

私は寝ていたみたいだ。捨虫の魔法の途中で……どうしたんだっけ。
いまいち重たいまぶたを私はゆつくりと開く。

そこには二人の顔があつた。

心配そうなルイズさんと……白いアイツのふてぶてしい顔。

「大丈夫？ 何かうなされてたけど。悪魔でも見た？」

「サラ……」

うなされてた？ そんな酷い夢だっただろうか？

懐かしくて、けれど……あれ、良く思い出せない。

私は何を見ていた？ いや、たかが夢だ。覚えてなくても当然か。

まずは、心配をかけたルイズさんに謝り倒さないと。

◇

「だから! もう大丈夫です!!」

余り広くはないルイズ宅の居間にサラの叫びが響く。

「でも、もし何か有つたら……」

「ルイズさんは気にしないで下さい。これは私の問題です!」

「そうは言つても……」

「良いんです! だから気にしないで下さい!」

ほら、こうなつたあ。

いくらルイズに従順とはいえ、そもそも頑固なサラが忠告を聞き入れるはずなど無いのだ。じつとして居ろ? 何ともサラに合わない言葉だ。

そもそも大人しく過ごしていたならこんな事にならないわけで……まあ、私はそういうところは嫌いではない、と思う。

「私は貴女を心配しているのよ? もしまたこんなことが有つたら……」

対するルイズもサラが心配で気が気でないのだ。けれど、少し過保護な気がしてしまふのは、やはり私がいくらかサラに入れ込んでる証拠なのだろうか。

それとも親代わりとしては普通なのだろうか? それは私には——色んな意味でわからない話だ。

「うっ、それは……でも、私を見守るってルイズさんはその間旅に行けないじゃないですか！」

ガタツと音を立て机から前のめりに立ちあがるサラ。

「それはそうだけれど。だからといって貴女を放つて置いてもし……」

「駄目です！ 貴女の旅行記を楽しみにしている人だつて居るんですし、それに私は『捨虫の魔法』を使って魔法使いになるんです！ いつまでもルイズさんの世話になるわけにはいかないんです！」

「それこそ駄目よ！ 今回は夢が居たから良いけれど、もしそうじゃなかったら貴女どうなつてたかわからないのよ！」

ついにルイズまで立ち上がり更に白熱していく言い争い。そろそろ止めなければならぬ。

「はいはい、ストップストップ。二人とも一旦落ち着いて」

二人を宥める。水をさされた二人は、少し落ち着きを取り戻し席に座る。

「まず、問題はサラのあの黒い瘴気のことね」

「……私は良くわからないんだけど」

まあサラ本人はそうだろう。多分あの時点で彼女に意識が有ったかわからない。寧ろ何かに乗っ取られていたのかもしれない。憶測に過ぎないけど。

「で、あの黒い瘴気については特に何もわからないわけで」

謎にまみれているのが現状。

「だから、とりあえず安静に……」

「でも、ルイズ。じつとしていても解決はしないじゃない?」

「……ええ、そうね」

ルイズの心配は理解できるけれど、動かないのが良いとは限らない。

「で、サラはルイズの旅路を妨げたくは無い、と」

「…そうよ」

ルイズにこれ以上迷惑をかけたくない。それがサラの思いだ。

なら、簡単じゃあないか。私は得意げに人差し指を立てこう言い放つ。

「旅へ行こうよ。三人で。」

これで万事OK。

「……はあ?」

「どういふこと?」

なに言っただコイツ風の目線はサラの物、詳しい真意を気にする目線はルイズの物。

まあまあ二人ともそんなに慌てないで。

「まず私じやき、サラの問題は解決できない。何か有るのはわかるけどそれを引き剥がすのは今の所は出来ない訳」

「それじゃあ夢。貴女も……」

「ああ私は大丈夫だって。とっておきの手段が有るって言ったじやないの」

瘴気が私に感染したことを思い出したサラは少しだけ申し訳無きそうな顔をした。本当に気にすること無いのになあ、なんだかんだいい子である。

サラの体を弄るもとい調べてみて、体内……というか某作品風に言うなら魔力回路だろうか。そこに何か流れを妨げるような、禍々しい何かがあるのは感ぜられる。けれど、それを引き剥がすのは出来ない。出来たとしても何か色々大事なものが引っ付いてきそうなのだ。無理に剥がしたら魂とかちよん切れそうである。

とどのつまり何か別の方法を探す必要があるのだ。

「そこで私は思うんだよ。誰がそれを解決できるのかってね」

「一体誰なの？」

「この世界には何でも出来そうな人……というかお方が居るじやない。

「それってまさか……」

「そうそう」

当然世界丸ごと一つ創ってしまうのだ、悪魔の呪的な物くらいどうとでもなるは

ず。私も彼女に用事が有るしサラの旅の練習にもなるし一石三鳥くらい有るね。
「神綺様に会いに行こう」

八話　　そうだ旅をしよう

抜き足差し足、こそーり台所を抜けそのまま玄関へ。二人ともぐっすり寝ているので大丈夫なはず。

極力音をたてないようにして玄関のドア開閉する。外に出てしまえばルイズの張った結界のお陰で、屋内に外の音はそんなに聞こえない。

私はタンツと軽やかな音を奏で、月の2つある明るい夜空に飛び立った。

「うーむ、わからん」

今居るのは湖畔。広大な湖の前に私は呟く。

包帯を解いた右手、その平の上にむわむわと漂っているのは例の黒い瘴気。

湖畔に来た私はこの瘴気について色々試していたのだ。無いと思うがもし暴走とか爆発とかしたらまずいよね、ということまで来たのだ。

まあ、余り収穫はなかったけど。

能力で不自由なくその力の流れを操ることは出来る。だけでも肝心なその詳細を調べることが出来なかった。

解析系の魔法はいくらかヘカーティアの所で習ったけれど、どれも触媒探しのための物質の解析が主。

なので、こんな実体のないようなものの解析は出来ない。こういうのは多分リユンクんの目の様な、なんかそういう特殊な能力が無いとわからない気がする。いやメディアとか神殿の魔法使いなら出来るかもしれないが、私はそこまで高度な魔法は使えない。(解ったら手っ取り早かったのになあ)

そんな風にぼやいていたら、ガサツと背後に起きた微かな音を耳が捕らえる。

ありや、ついて来ちゃったの？

「隠れてないで出てきなよ」

「……なんでわかるのよ」

私に促され、呆れたようにそう言った彼女は、木陰から姿を現した。

パジヤマ姿じゃないですか。女の子なんだからもっと身嗜みをだねえ……

「うっさいわね。いつも白ワンピのあんたに言われたくないわ」

そう私に悪態をついたのはサラだった。

月明かりが青く辺りを照らす。

黒い空に月が二つ煌々と輝いているからだ。月が二つ有るから明るいのだろうか。

いや、単に雲が少ないだけかもしれないけれど。真相はおそらくはこの世界を作った彼の神しか解らないのかもしれない。

「ひつどいなあ。これだつてオシヤレしてるんだよう。」

そんな月明かりの元、こちらに歩いてくる彼女に対して私は軽口を叩いた。

「一体どこがよ」

手をひらひらさせそのまま受け流すように、彼女はいつもと変わらない様子で返答した。一週間でこなれてきたいつも通りの二人の会話。

ふむ、色々有つたにも関わらず思ったよりも動揺は少ないみたいだ。まあ、彼女ならそんなもんだらうとも思っていたけれど。

しかし、全く失礼な。私だつてオシヤレの一つや二つくらいするよ。ほら……

……ほら、普段着ないだけで他にも沢山服が……、そうそうあの杖とか杖とか。あの

魔法少女コス女子力高いでしょ、うん。いや、着たくないけど。

それに胸元にあるヘカーティアから貰った目ん玉のペンダントとか。映えるアクセだと思う。

いやあもうこれはナウでヤング過ぎて女子力に溢れているね。

え？ 元々女子じゃ無いだろって？ いや、まあそうなんだけど。

「一着しか無いじゃないのよ。それに随分趣味悪いペンダントね。目玉って……もつとマシなデザインは無かったのかしら」

「むむっ、酷いなあ」

ジトツとした目でこちらを見てそう言ってくるサラ。まるで私のセンスに疑いを持っているかのような反応である。失敬な。勘違いされては困るこのデザインは私のせいでもヘカーティアのせいでもないのだ。強いて言うなら屋台のおっちゃんのせいだろう。

「まあ、デザインについては少し同意だけでも、これ結構凄い物なんだよ」

そんなデザインはまあどうでも良くて、そんなことよりも中身の話。

何たって前の世界の神様本人に魔法をかけて貰ってるからね。

あの女神様はめっちゃ凄いんだから、きつと効果が有るんだって。それはもう凄まじい位の。

「へえ、神様のつて神綺様？……つて何でそんなのと関わりがあるのよ」

「あー神綺じや、神様つてのは比喩とかそんな感じ、多分。まあ色々有ったんだよ、うん」
神綺以外に神様居ない世界だったねそういえば。説明がややこしくなるので誤魔化す。

殺されかけたり、殺しかけたり。うーん、実に色々あった。今や懐かしい……つてほど昔でも無いのだけどね。

「一体どんな効果が有るのよ、それ」

「え？ああ、うーんつと……なんか持つてるだけで凄いいろがたみが、有るような無いような」

「アンタ何もわかってないのね……」

いやあ、これを渡されたときにヘカーティアは邪視が云々言つてたけど私には良くわからない話だったなあ。

邪視つて一体なんだ？中二病御用達の封印されし右目の事だろうか。金色なの？もしかしたら暗黒竜でも倒せるのかも。

……あながち間違つてないかもしれない。ヘカーティアならやりかねない、つてか出来そう。

もしそんな力が籠もっていたら目玉ペンダント（笑）とかバカにしてられないね。

でもまあ、彼女が何らかの力を込めてたのは本当だよ？ってことで。

「どんな御利益か知らなきやありがたみが半減するじゃない。適当過ぎるアンタにそれをあげてしまった仮称神様に同情するわ」

「むむむ……」

軽口を叩き合いつつサラは私の隣まで歩いて来た。そんな彼女の方を見上げると、そこには少しだけ普段と違う姿があった。降ろしている髪が夜風に流れる。少しだけ大人びて見えた。

「どうして来たの？」

「……眠れなかったのよ」

少し、ほんの少しだけ間を開け彼女はそう答える。

「そっか。ま、座りなつて。風が気持ちいいよ」

「……ええ」

私は左手で自分の隣の地面をポンポンと叩き、彼女を促した。彼女は座ろうと……

「あ、待って」

「何よ……」

私は能力を使って収納空間を開く。そこに左手を突っ込んで一つクッションを取り出した。

「お尻汚れちゃうでしょ？」

「本当アンタ変なところで細かいわよね……というか、その中一体何が入ってるのよ」

まあまあ良いじゃない、乙女の秘密ってことで。

そんな私に更に呆れながらも、彼女はクッションをひきそこへ腰をおろした。

湖畔に吹く穏やかな夜風が髪を揺らす。二人の間に会話は無く、ただ草木のそよぐ音だけが響く。

「そういえば今はどの季節なのだろうか？ 寒くもなく暑くもなく……いや、少し肌寒いかな。」

でも個人的にはこれぐらいが好ましい。前世でいうと秋になるかの時期だろう。もつともこの世界、この地域に四季が有るのか知らないけれども。

ただ、そう。少しだけ昔を思い出して感傷的になりそうだった。あの頃も何度か地元湖の畔でこんな風に肩を並べて――

「ねえ……アンタその右手本当に大丈夫なの？」

……いけない、いけない。どうにも感傷的になってしまった。景観の力つてのは凄いや。

座ってから少しの間口を開かなかつたサラは、ようやっと一言目にそう言った。その目線は包帯が解かれたままの私の手に向いている。そこには未だ治りきつていない赤い生傷に、微かに漂う黒い瘴気があつた。

やはり気になってしまうのだろう。

「サラもルイズも心配しすぎだつて。現に今大丈夫じゃない。それが何よりの証拠だよ」

私はなんてことはないように右手を振つた。能力を使って黒い瘴気を霧散させ、さらに手から溢れるそれを抑え込む。そうしてしまえば何も普段とは変わらない。まあ、傷は残っているけれど。

うーん、余り見せるのも具合が悪いか。そう思い私は腕を引つ込める。

「……ごめん」

その最中で再び黙り込んでしまったサラは、不意にぽつりと私にそう言った。

それを聞いて私は何と答えたものか少し迷う。細い自分の腕にぐるぐると包帯を巻きつつちらりとサラの方に視線をやる。

彼女は膝を抱え、顔を半分埋めていた。

思った以上に長いその髪で表情は隠れている。纏う雰囲気はいつものそれとは違い、そんな様子を見たらすぐに自然に言葉が出てきた。

「らしくないね」

「そう、かもしれないわ」

実にらしくない。

普段のサラだったらどうしているだろうか。勝ち気な彼女が、ましてや私に謝るなんてやっぱりらしくない。

さっきはああ言っただけれど、思いの外サラも堪えてるのかもしれない。

「サラが謝る必要無いでしょ？」

「そう、かもしれない。でも……」

口元を隠した彼女の表情はわからないけれど。辛うじてこちらから見えるその目は湖の向こうを見つめたままだ。

「私、魔法使いにならない方が良いのかな」

そんなどこを見てるのかわからない視線はそのままに、こぼすように彼女は呟いた。それを機にぼろりぼろり言葉がこぼれだす。

「そんな事考えなきや捨虫の魔法を失敗する事も、アンタが怪我する事もなかった。ルイズさんだって本当はそれを望んでいるもの。所詮は私のわがままだから」

その言葉は私の方を向いてなくて、けれど恐らくは誰かに言い聞かせるようにゆつくりと。

何だか飲み込みやすいようにはつきりとした言葉だった。

「元々過去に捕らわれてたから思いついたことだもの。いつそ諦めた方が——」
「サラ」

そんな彼女に対して私はつい耐えられなくて声を掛ける。

彼女は言葉を止めるがこちらではなく向こうを向いたままだ。

「何よ」

「こっち向いて」

「だから一体……むきゅっ」

こちらを向いた彼女の頬を両手で挟む。それは柔らかく、そして少し熱くなっていた。

そして私はそんなほっぺに指を掛け……

「グジグジすんなあ！ 気持ち悪い！」

「いたいたいいたいっ！」

思いつきり引つ張った。柔い彼女の頬は思ったより伸びる伸びる。今までのお返しも兼ねていたり。それを掴んだまま私は彼女に叫ぶ。

「そんなキャラじゃないだろお!」

「いきなり何なのよ! あんたもそんなキャラじゃないでしょ!」

私の手を払いのけ、赤くなつたほっぺをさするサラ。私を非難するような目線。うんうん、そつちのがいつものサラに近い。

「いやあ、ほら。本心じゃないのが丸わかりで素直にうっさいんだよね」

「い、言ってくれるじゃないの」

彼女はひくりくと頬をひきつらせるがそんなの知つたこつちやない。

知つたこつちやないのだ。

「そんな建て前とかすべきとかじゃなくてさ、サラはどうしたい?」

そんなのいい加減聞かなくてもわかつているけれど。私は彼女の深いその目を見つめて問いかけるのだ

「……どうしろつて、言うのよ」

けれど再び彼女は目を背けてしまう。

色々なことが起こり過ぎて参っているのだろう。何が正しいのか、駄目なのか。

けれどそんな中で彼女の望みは変わっていないのだ。変わらないのだ。

色々な物を見る、その為に旅をする、その為に魔法使いになる……

「なら私が何とかするよ」

「……は？」

だったらその迷いを取り除いてやりたいと思うのだ。

……というのはやつぱり、私はかなりサラに入れ込んでいるのかもね。

でも、何だか放っておけない。

私らしくないといえはそうかもしれない。サラの事を一方的に言つてられないね。

「だから私が何とかする。神綺様探し出して、その変な黒いの取り除いた後、貴女がちやんと魔法使いになるまで面倒見る。よし、決めた」

「いやいや、何でよ」

私が決めたんだから良いじゃない？妖怪は元来、精神的で自由な気質なのだよ。

その理の前にサラの意見など関係ない！

「何で……何でアンタそんなに私に入れ込むの……？」

何で、か。

理由なんて今のサラがむかつく意外に余り思いつかないけれど。強いて言うなれば

それは、それは……

「昔ね、サラみたい我真つ直ぐで不器用な奴が知り合いに居てね」

ちやうど先程思い出した事と関連付ける。

らしくないと先ほと言つたけれど、そういえばそんならしくないことをしたことが昔

も有った。いつだかもつい世話を焼きたくなった奴がいたのだ。

私は前世の後半、そう学生時代の死ぬ間際まで、最も関わっていたであろう『彼女』の事を思い浮かべる。

まあ『彼女』はサラとは似てもにつかない。まず、雰囲気から全く全然違うのだけだ。どね。

まっすぐに強情で、それなのに周りにはかり気をつける女の子。そんな所が『彼女』に似ているのだ。

「そいつ泣き虫でさ。ちよつと、放っておけなかつたんだよね」

「……別に私は泣いてないわよ」

実際に泣いていようがいまが関係ないのだ。私がそう思うからそうなのだよサラくん。

さつき目尻が熱くなっていたのは見逃してやろう。

「アンタは……やっぱりお人好しね」

「そんなんじゃないよ」

実際そんなんじゃない。人の好きな人は自分で死なないよ。

「あーあ、本当あんたみたいなのが居ると私の悩みなんてどうでも良くなるわ」

そういつてサラは疲れたように息を吐く。まあ、何だか元氣が出たみたいで良かった

た。

ともかく私は前もそういうことが有ったから今回もそうするだけ……

「それにしても、私に似てる人？ アンタ随分その人のこと好きなのね」

「えっ？」

突然そんなことを言ったサラは、今度は私の事を何だか優しく微笑みつつ見つめてくる。

……何だか解せないんだけど。

「だってあんた、凄く嬉しそうにその人の事はなしてるんだから。ひしひし伝わってくるわ」

私が？嬉しそうに？『アイツ』のことを??

ふむ……

「……さっきまで泣いてたくせに。」

「なっ！ 泣いてないっての！」

なんだか少しムカつときたのでからかっておく。

「目尻赤かったなあ。何でだろうなあ？」

「このっ！ やっぱりアンタの助けなんか要らないわ！ 自力で全部解決してやるんだ

から！」

ま、今の所結局解決するのは神綺様頼みだけだね。やる気が出たようでも何より。まあ何にせよ締まらないけれど、サラの鬱屈は多少なり晴れたようだ。

明日からは旅が始まるのだからそんな暗いものを引きずっても仕方ないからね。

「はいはい、さて結構話し込んだじゃったし。そろそろ戻って寝ようか。そうだ、一緒に寝る？　泣き虫サラちゃん？」

「決めた。魔法使いになったら真つ先にアンタをぶちのめす」

空と湖面に浮かぶ月達を背に私達は湖畔を去ったのだった。

「準備は良いかしら？」

「はい、ルイズ隊長！　万全であります！」

「ふふ、了解。でも軍隊じゃないのよ？」

ふむ、この世界にも軍隊という概念は有るらしい。敵対するのは何なのだろうか？
人間？ それとも魔族？ まあどうでも良いか。

「いつの話してんのよ。それよりアンタ荷物は？ 手ぶらだけど」

私はそもそも二人と違って特に荷物は必要ないのだ。着替え要らないしもつと言えば食料も要らない……と言いつつ持ち運んでるんだけどね。

「全部しまつてあるよ」

ほらここにと、私はグーにした親指で、虚空を指す。

「ホントずるいわねその能力」

うん、私もそう思うよ。解釈次第では本当に何でも出来る力のような気がする。

あ、自殺以外ね。

「二人共準備は良いみたいね。もし忘れ物してもまだ大丈夫よ。まずは都市に行くから」

「都市？」

なんでもここからそう遠くないところに文明的に発展している場所が有るらしい。そこは高層ビルが立ち並ぶ人の交流の中心とかなんとか。

やっぱり凄いなこの世界。やっぱり前の世界より数段文明が発展している。千年くらい進んでる、いや一万年？

……駄目だ。そういえば前の世界の時代は何年ころなだったのだろうか。西暦は始まっていないようだけれど。ギリシャ神話っていつ？というか神話って本当にあつた？いや、あつたんだけど。

まあ、いいか。この世界はこの世界。前の世界とは関係ないのだ。当分は純粹に觀光でも楽しもう。

「それじゃ行きましょうか」

そんなわけで私達の旅が始まったのだった。

九話 ファンタジーな世界であれど人間ってのはそう変わらないもので

「おお……おおお!!」

開けた窓から体を乗り出す。私の白銀の髪は暖かい日差しに照らされながら、田舎道の景色と共に風に流されてゆく。我ながらなかなか絵になるんじゃない？

後方へ目をやるとそこには先ほどまで居た湖畔の白い街があった。

日の光を反射して浮き上がって見えるそれはとても幻想的だった。本当に綺麗なんだね、あの街は。

しかし今、私にとってそんな絵画顔負けの景色達よりもっと感動すべき事が有ったのだ。

「バス……私は今バスに乗っている!!」

バス。それは大量の旅客輸送を目的として作られた乗り物。主に内熱機関を動力源とし走行する。

公共交通機関として使用され前世でもそれはもう日常的に使っていた奴である。

やべえ！動いてる！こいつ動くぞつ！

「子供かつての。落ち着きなさいよ。」

「なにおう！感動して何が悪い！」

サラは呆れたように私にそんな小言を言ってくるが、しようがないじゃないの。

何せ云千年、いや云万年？正確な時間など覚えていないけれど、それ位ぶりに自動車というものに乗ったのである。

乗り物は男のロマン。もう男じゃないけど。

少し興奮するくらい許して欲しいね。

「そつちの世界には無いのかしら？」

とルイズからの問い。

うーん、まあ無いと言えば無いのだけど…

「まだ無い、みたいな？」

まあ、これが妥当な答えだろう。事実あの世界は私の前世と同じ道を辿りそうだから、そう遠くない未来に…いや、結構遠い未来にそう言う物が生まれてくるかもしれない。

「まるで未来を見てきたかのような言い草ね。」

鋭いところをついてくるサラ。

「ただの予想だよ、予想。それよりこれって何で動いてるの？やっぱり魔力？」

「そうよ。確か魔力で回る動力装置が使われていたはずよ。」

「はえー、やはりこの世界は隅々まで魔法によって成り立っているらしい。石油や石炭とかの化石燃料より随分クリーンみたいだし良いね。走行音もかなり静かだ。もしかするとエネルギーの変換とか無いのかもしれない。魔法なら直接タイヤを回す事も出来るし。」

「その魔力って誰が？運転手さん？」

「違うわ。確か魔力を詰めたカートリッジがある…んだったかしら？」

「そうだよ。嬢ちゃん詳しいね〜」

「バスの運転手さんが話しかけてきた。気さくなおっちゃんな感じだ。」

「バスを自分の魔力で動かせる人なんかそうそう居ないさ。本物の魔法使いなら別だが、わざわざバスなんか動かす物好きはこれまたそうそう居ないんだね。」

「思いの外大量に魔力を消費するのだろうか。」

「…それよりも『魔法使い』のところを何だか気持ち卑下するように言っているのが少し気になった。」

「嬢ちゃん達は何処まで乗ってくんない？」

「終点の『都市』までですわ。」

「ほう、『都市』とな。あそこは色々田舎だと珍しい物があるからな。白い嬢ちゃん、こんな旧型のバスなんかで驚いてたんじや耐えられないぜ？」

ほう、頼もしいことを言ってくれるじやないの。バスを『なんか』呼ばわりである。とか旧型のなのかこれ。新型は一体どうなっているのだろうか。宙に浮く？いや、寧ろど〇でもドア？ハードル上がっちゃうね。

あ、でもどこでも〇アって、もうそれ転移魔法か能力使えば良いんじゃない？いや、わざわざバスに乗っているのだって旅の趣という奴である。

「都市には何しに行くんだい？買い物？それとも学び舎？図書館もあつたな。」

何かぐいぐいくるなこのおっちゃん。

いや、気さくだから悪い気はしないんだけれどもね。

「ああ、いやね。始点のリオベナコから都市まで乗っていくお客さん何てあんまり居ないものだから。ついつい気になっちゃってね。」

あまりこのバスはリオベナコからは使われならしい。何故だろうね？あの湖畔の街は結構な人数人が居たように思うけれど。人口的に公共交通機関がもつと活発に活用されそう。

「だからこそさ。あの街は他の村や街に比べるとかなり大きいからね。街の中で大体完結してしまうんだろうさ。都市までは結構時間かかるからね。わざわざ行かない。」

なるほど。その辺は前世の現代と変わらないかもしれない。

私だつて都心に住んでいたわけではないし。学校が地元だったから殆どそこから出なかつたように思う。

単に私が出不精であつた可能性も否定できないけどね。

「で、何しに行くんだい？嬢ちゃん達随分と若いじゃないか。そんな可愛らしい嬢ちゃん達が揃つて何をするのか、おじさん気になつちやつてね。」

「それは…」

そこでルイズが何故か言い淀んだ。

…何故に？

「ああ、言いづらかつたら別に大丈夫だよ。うんうん、誰にでもそう言うことは有るよね。おじさん話し好きでいつい聞いちやうんだよ。」

おじさんは気を使っている（多分）ようだが、それよりも何故ルイズが言いづらそうにしているのか気になつた。

「どうしたのルイズ？」

「…ん？る、ルイズ？」

ありや？

そこでなんだかルイズの名前にやけに反応するおじさん。

「も、もしかして、旅人の？」

そう酷く声を震わせる彼は単に驚いているだけでなく、どこか脅えているようにも感じられた。

そうこれは…この感じは何か異物な物を見るかのような様子だ。あんまり良いものじゃない。

前世で酷く記憶に残るあの嫌な視線だ。自分に向けられる分にはどうでも良かったが、そういう視線に晒される謂われなんて奴がそういう目で見られると流石に少しだけ腹が立つ。

「ええ、そうだけれど…」

「そ、そいつあ失礼しました！きつちりかつちりちゃんも輸送しますんで！何卒どうか！！」

ええ…なんでそんなに怯えているのさ…

当然ルイズが何した訳では無い。ルイズが『紀行者ルイズ』であると悟ってからその態度が豹変したのだ。

「無礼な態度をとってすいませんでしたあ！」

「えっと、別に大丈夫よ？」

眉をハの字にして頭を下げるおじさんを宥めるルイズ。ルイズの見た目は10代後

半か其処らなので随分と特異な光景ではある。

いや何故に…？

過去に何かおじさんと有った：訳じやなさそうだしなあ。ううむ。

そうだサラはコレをどう見ているのか：と気になった私は彼女の方を見た。

(…ふむ。なるほどねえ。)

予想に反して彼女は余り動揺した様子は無かった。

…無かったが、その閉じられた口の端が心なしか、少しだけ力がこもっているように見えて…

そんなちよつと特異なことはあれども、特に何事もなくバスは道を行く。小さいエンジン音と共にゴトンゴトンと。

すっかり会話の無くなつてしまったまま景色だけがガラスのない窓を流れてゆく。

見渡す限り突き抜けるような草原。それはしかし、私達の間^に有った何ともいえない空気を払拭するには至らない。

「いめんなさいね…」

幾らか経った後、ポツリ、小さな声で彼女はそういった。

「一体どうしたの？」

まあ、多少は気になるわけで。

無理に聞くつもりは無いけれど、彼女が話してくれるのならその訳を知りたくはあるのだ。

「魔法使いを恐れてしまう人も居るのよ。言ってしまうえば…人では無いでしょう？」

「ああ、そういう…」

端的に言えば差別意識の一種だろう。

人間どうしても自分と違う物に忌避感を抱いてしまう。

それが種族が違うなら尚のこと。

…なるほどどうりで見たことの有るわけだ。

「どの世界も変わらないね。」

「そうなの？」

「うん、そうだよ。」

前世の世界も今世の世界も、そしてこの異世界もやっぱり人は何処まで行っても人なのかもしれない。

(その点へカーティアの所は上手くやってたんだなあ。)

魔法使いもたくさんいたし、普通の人間もいた。

腹心の部下は地面の底出身の妖精だしそもそも彼女自身が神なのである。

だけれど皆笑っていた。

けれどもそれは残念なことに彼女が神であったが故、人との距離を置かねばならない故に長くは続かなかつたのだが。

でも…それでもあれが、彼女のあの国が一つの形なのかなあなんて思ってみるのだ。

そんな少し感傷にも似た淡い思いを浮かべる。

勿論過去を文字通り自らぶつた切つて、それに失敗し続けてきた私がそれを思うのはちよつとどうかとも思うが…そう思うのだ。

前世のガソリンのエンジンとは打つて変わり、窓は前回なのにガソリンの匂いも音も殆どしない。

そんなバスはそのままなかなか変わらぬ景色と、私のそんなぼんやりとしたモノローグを載せて走ってゆくのだった。

数時間後、私達は無事に『都市』へと着いた。

「おお……おお!!」

私は感動している。いや、何度目だよと言われるかもしれないが何度でも言おう。

この世界は私にとって非常に魅力的な世界のようにだ。

元の世界も神様や魔法等、それはそれで色々面白くは有った。

が、ヘカーティアの件や魔法の普及度合いから考えると基本は前世と同じ歴史を辿るように感ぜられた。

しかし、ここは完全に異世界だ。

中に浮かぶ電車やモノレールみたいな何か乗り物のようなもの、地面を走る魔力で動く車に、それに並んで走る何かでつかい蜥蜴みたいな生き物：etc

その他にも色々突っ込みどころの有りそうなものが所狭しと見渡す限りにある。

リオベナコの街を回ったときも感心したがやはりここは違う。流石『都市』と言うだけはあある。

これぞ、これこそ！

「魔法都市……!」

ラノベでもアニメでも無く目の前に広がるその光景は前世で軽いオタクだった私の心を酷く興奮させるのに十分だった。

「気に入ったみたいね。」

「うんうん、そりやもう。あ、あれ何？何で浮いてるの？」

「あらあら、はしゃいじゃって。」

少し柄にもなくはしゃいでる気もするが、しようがないでしょう？いやこれはホントにしようがな、うんうん。

「…あんだ、そんな顔もするのね。」

「ん、どしたの？」

サラが何か興味深そうに此方を見てくる。

…一体何だろうか？

「いいえ、別に何でも無いわ。」

そう言って彼女はそっぽを向いてしまった。

若干腑に落ちない反応だけどサラの性格的に追求しても素直に教えてくれないだろう。

「出版社へ行っちゃいましょう。観光はその後ゆっくりでも良いかしら？」

「うんうん、これだけ色々あると直ぐには周り切れないからね。そうしようか。」

ルイズに連れられて私達は目的地へと向かうのだった。

十話 有名人つてばないの

いちいち街並みに感動しながら、数十分ほど歩いた。

アスファルト…とは違うのだが近い道。

そんな足元の綺麗に整備されている感覚が懐かしくもあり、遠い記憶のせいか一周回って新鮮であつた。

土属性の魔法を駆使すればこの位の事がやってのけるのだろうか。それとも動力が魔力の重機が有るのだろうか？

そういう細かい所に興味は尽きないが、まあ知つてどうすると言う話でもない。純粹に楽しむのに努めるのである。

「ここが私の本を出してる出版社ですわ。」

そうこうしているうちにどうやら目的地についたようだ。

全然なんということも無いようにそう言ったルイズ。

彼女が足を止めたので釣られて私達も止まる。

そして見上げた。

「ここが……？」

「ええ、そうよ。」

「これ全部？」

「ええ。」

哑然とする私にやはりどうと言うこともなく、至つて普通に返答するルイズさん。

「でかくない……？」

凄く……大きいです。なんて少々クソみたいなことを思わず呟いてしまう位だ。

首が痛い。そんなレベルで見上げるそのビルはとにかくデカかった。

前世の首都圏の高層ビルを彷彿させるそれは、リオベナコに比べると只でさえ大きくなつた建物達の中でも、一際目立ってデカかった。

「ええ、まあ少しだけね」

「少しって……いや、うん。まあ良いや」

「フツフツフツ、ルイズさんは凄いのよ」

少し照れくさそうにそう言ったルイズ。そして何故だか得意気にしているサラ。

しかしまあ、思わず呆れてしまったのと仕方ないだろう。溜め息の一つや二つも漏れ

るというもの。

それはとんでもなく馬鹿でかいビルだった。これじゃあルイズがまるで……というより実際この世界ではV, I, Pなのか。

つい彼女のおおらかな態度と、自分の世界に対する無知さ故に忘れてしまうけれども、彼女の書いた紀行記は凄まじく有名なものであるようなのだから。

前世の売れっ子漫画家辺りをイメージすると納得がいくかもしれない。

……一体いくら稼いでるのか非常に気になる所ではある。

「ルイズ大先生って呼んだ方が良い？」

「もう、からかわないで頂戴」

少し頬を膨らませたルイズ先生。

その可愛らしい様子からは、やっぱり貫禄は感じられない。

(あんなに恐れ敬う必要なんて有るのかなあ)

その様子を微笑ましく眺めながら脳裏を先のバスのおじさんの様子がよぎった。

まああれはルイズが魔法使いだからということが主な理由で有るけれどもね。

どちらにしるあんな反応をされるのはルイズにとつて良い気持ちじゃないだろう。

前世から今に至るまで、何処にでも種族や人種によるその溝は大なり小なり有る。

なかなか色々のままならないものだなあ、とも思う。

さて、一通りそのデカさに感動したところで私達はそのビルの中に入った。

一足踏み入れたところでまた一つ驚く。

「こりゃ……すごいね」

入ってすぐにわかるこの建物の異常さ。

味のある木を柱として、独特のアンティークな感じを漂わせるその雰囲気もそうだが、何よりも文字通り至る所に本が有るといふ点が生立って異常である。

天井も高く凄まじく広いロビーであるのだが、壁一面には本棚が据え付けられている。

そこには端から端までぎっしりと、何やら古めかしそうな本が詰まっていたのだ。

ルイズ達は迷わずに受付のカウンターへと向かったので、そんな光景に見とれていた私は遅れないように少し駆け足でついていく。

向かった先のそのカウンターの中にも本棚が有り、受付嬢の肩越しに本の背表紙がぎつしりと有るのが見えた。何だか随分とせわしなく本が置いてあるなあ。

「なんか、めっちゃくちゃ本多くない?」

「ええ、この出版社はかなり歴史があつてね。設立から……そうね私の年齢の三倍以上はだったかしら? 細かいところはもう忘れてしまったけれど」

彼女は顎に指を添えながらそう言った。

「その年月分の蔵書が有るのよ。ここには図書館が併設されているのだけれど、なんでも入り切らないのだとか。だから言ってみれば編集社自体が図書館になっているのよ」
しかし、少して量でもないような気がするけど。

このロビーだけでこんなに量があるというのに、まだ別に図書館が有るといふのだから驚きである。少々気になるね。

「というかルイズの三倍? いやいや、そもそも何歳なのよさっ?」

「ええと、そうね……百……あら? 何歳だったかしら?」

このお姉さん意外にもお年を召しているようであった。自分の年をそんなに簡単に忘れてて良いのか。いや人のこと言えないけれど。

まありオベナコの本屋で見た彼女の紀行記の巻数からすると、確かにそれくらい長生きしてないと合わないのか？

その間の旅の記録を全て記しているというのなら、ルイズはなかなかマメなのかもしれない。

「それじゃあ私は手続きをしてくるからあなた達は……」

「も、ももももしかしてルイズさんですか!!?!?」

ルイズの言葉を遮り、一つの声がロビーに響き渡った。その声の主である女性は酷く興奮している様子だった。

その手には一つの本、いや雑誌か？そんな書誌を持っている。

その表紙に使われている写真は…あれ？これルイズの写真じゃん。

すこし色あせているからそう新しいものでは無いのだろう。けれど少し淡いその写真は、確かに今と変わらないルイズの姿を映していた。

「私、子供の頃からルイズさんの大ファンで、えと、あの……よろしければサインください!!」

それはもうすごい勢いのお辞儀だった。

見た目もう成人してそうな大人の女性が、それに比べると少女の類から抜けない容姿のルイズに対して、直角にお辞儀をし、雑誌を差し出している。

うーむ、中々に異様な光景では有る。というかこの世界でも日本と同じようにお辞儀が礼儀として通用するんだなあなんてどうでもいい感心をしてみる。

「えっと、この雑誌にで良いのかしら?」

「はい!ぜひお願いします!この雑誌は私の宝物なんです!!」

「そう言われるとすごく書きにくいんだけど……」

その女性の圧にかなり気圧されつつも、彼女は結構手慣れた様子でその本にサインをした。

おお、なんかルイズが有名人ばいぞ!

「あ、ありがとうございます!! 一生大事にします!!家宝にします!!」

「いえそんなに大げさにしなくても……」

なんとも凄まじい反応である。はえー本当にルイズが凄い人なんだと改めて実感してきたぞ。

「あ、握手してもらっても良いですか……？」

「ええ、どうぞ。」

その女性に対してルイズは快く差し出した。

女性は一度ゴクリと息を飲んだ後ゆっくりとルイズの手を取った。

「ああもう死んでもいいです……一生手洗いません！」

「ち、ちゃんと洗っていいのよ？」

女性は感極まった様子で泣きそう……てか泣き出した。

すげえよ。

「ルイズって凄いなだね」

「え、ええ。本当ね」

小声で隣のサラにそう語りかける。サラの様子をみるとどうにも彼女も現状に驚いているようだった。

サラもここまでとは思ってなかったのだろうか？

というか……

(なんでこんなに静まり返っているのさ……)

サラとの会話が小声にならざるを得なかったのはそのせいだった。

女性が「ルイズ」という単語を発していこう、適度にざわついていたはずの周りの喧

騒がピタリと止んだのだ。

それはまるで嵐の前の静けさのようだななんて形容しようと、思ったのだけれど――

「ルイズさん!?!」

「どうして!?!」

「本物だ……本物だ!!」

「ああ、お姿を拝める日が来るなんて!!」

「私にもサインください!!」

「俺にも!!」

「あ、握手してくれ!!!」

一転して嵐が吹き荒れたわけである。

はじめはざわざわするだけだったのがあれよあれよの合間に凄まじい騒ぎに。

ルイズを中心にとんでもない数の人が全て集まってくる。これはヤバイ。人の波に流される。

「サラ、退散! ルイズまた後で!」

「あ、ちよつ。引つ張んな!」

人に飲まれていくルイズを尻目に、私達は逃げることにした。

じゃないと圧死してしまう。そう思う程に迫力のある人の量だった。

誇張でも何でもなく、このバカでかい建物の中にいる人々が全員あの場に集っているんじゃないかと思う。

ルイズばないの。

とうかきさっきのバスのおじさんも、魔法使い云々というよりもこのルイズの有名人度にビビってたんじゃないだろうか？ ルイズさん少しズレちゃいないかい。

「この辺までくれば流石にもう誰も居ないね」

ひたすら駆けてようやく人の流れが無いところまで来た。にしてもやはりこの建物は広い。

「ちよつと！ 急に引つ張らないでよね。転びそうになったじゃない」

「ああ、ごめんごめん」

「まったく……でもまあ良いわ。確かにあの場に居たら人に飲まれてどうしようも無くなってたわ」

凄まじい人数が集まっていたからね。都市に来て以来ルイズの凄さを度々感じる。

「当たり前じゃない。ルイズさんは凄いのよ！」

誇らしげに余り無い胸を張るサラ。

さも自分のことのように自慢するのは、やっぱりそれだけルイズのことが好きなんだろう。

ともあれ、あのルイズショックとでも言うべき騒ぎが収まるまでどうしていきましょうか

……

「あら、向こうが図書館みたいよ」

そう言ったサラの視線の先を見ると、壁に標識が取り付けられていた。

建物の案内のようである。そこにはこの世界の言葉で「図書館はあちら」と矢印と共に表記されていた。

「どうせなら行ってみようか。なんか凄いでしょ？ここの図書館」

ルイズがそう言っていたのだから、多少なりとも気になっていたのだ。

どうせ戻ってもまだ人は引いていないし、当然ルイズの仕事も終わっていないだろう。

そんな訳で二人で併設された図書館へと向かうのだった。

十一話　れつつ図書館

図書館へと私達は向かった。

しかしまあ、中々に広い建物である。

歩けど歩けど沢山部屋が有るばかりで中々図書館へたどり着かない。

一体この会社の財力はどうなってるんだろうか。何をしたらこんな建物を建てられるんだろうか。非常に気になるところではある。

そんな思いの外長い道のりなのだが、個人的に幸いなのは建物の意匠が飽きない所。

外見が余りにデカいので前世のビル群の如く無機質な内装かと思っていたが、中々どうして芸術性が高い。

一定間隔で凝った彫刻が施された額に入った絵画や、何だか凄く輝き方をしている謎の生け花的な物などインテリア一つ一つが確かに置いてあった。

あの光ってる花はやはり魔力が源なのだろうか、というか光る意味は有るのか、んなら普通の花で良いんじゃないか……等々。

デザインした人に聞かれたらどちやクソに怒られそうな事を考え流しながら、ひたすらに歩いていく。

「ねえ、魔族の住んでる所にも図書館って有るのかしら？」

同じ様にキョロキョロ見回しながら一緒に歩いていたサラが不意にそんな事を問いかけてきた。

私とは違い調度品を眺めるのに飽きてきたような感じだ。

まあ、気持ちは解らなくもない。わたしだつて前世ではそんな美術品に興味があったわけじゃない。

あくまで世界観の違いを楽しんでいるだけなのだから。彼女と同じ年頃……つまりちようど自殺した頃の自分だったらくくに興味を持たなかっただろう。

しかし、魔族の住んでいる所か……

サラには結局自分が異世界の「妖怪」であることを伝えてないんだっけ。

「まあ、あるんじゃない？ 多分」

「なんで多分なのよ」

まあ、あんまり隠すことでもないし。彼女に教えてしまおうか。

「実はね、私は——」

「ぎやああああ!!」

せつかく私が語ろうとしたのを遮るように豪華な廊下に似合わない悲鳴が響いた。それはさながら断末魔みただった。

「あつちからだね」

「あつちつて……図書館の方よね？」

その叫び声はどうやら図書館の方から聞こえてきたようだった。

「まあ、とりあえず行ってみよっか」

もし何か事件が起きているのならそれは問題だ。助けがいるかもしれないし。

「……あんたは本当」

「ん？ 何か言った？」

「……いえ、何でも無いわ」

私の聴力でも聞き取れないくらい小さい声だった。サラが何を言ったのかは解らない。
い。

だが彼女の表情は何処か呆れているのと共に、何か不安そうだった。

「どうかした？」

「だから何でもないわ。早くいきましょ」

その事を訪ねても彼女は応えてくれず、そのままスタスタ歩き出してしまった。

仕方なく私もその後を付いて行く。まあ、腑に落ちないけれど、やっぱり無理に聞くのは良くない気がした。

とりあえず今は進もう。向かう先は図書館だ。

「わあお……」

「凄いわね……」

美麗な彫刻で飾られた重厚感のある木製の扉を押し開けて、遂に私たちは図書館へに入った。ルイズシヨツクのせいかわどりは人が一人も見当たらない。閑散としていた。

しかし、そんなことは全く気にもとまらない些細なことだ。

私達はおつと別のことに圧倒されたのだ。

「え……広っ！ 多っ！」

「……ちよつとつ、図書館なんだから静かにしなさいよつ」

ワntenポ遅れてサラが小声で私を嗜める。

余りの感動でつい声を漏らしてしまった。しかし、それも仕方ないというもの。

今いる図書館のエントランスは少し高いところに有り、その内部の様子を展望台のよ
うに見渡せる。

ロビーから既に異様な本の量だったが、この図書館はそれすらも凌駕する。

ともすれば壁のように下から上までぎっしりと本の詰まった棚が、ドミノみたいにず
らりと並んでいる。

そもそもこの空間自体が広い。何本もの太い柱を超えた後、部屋の向こう側の壁はか
なり小さく見える。

あまりの広大さと本の量感に、なんならこの世界の本全てを集めたと言われても驚か
ないだろう。

それをただひたすらに感嘆してしまうほどに凄まじい。

「こりゃ、ただ眺めるだけでも苦勞しそうだね。」

「ええ……こんなに凄かったなんて知らなかった」

小声で感動を共有する。サラも私と同じくこの異様な図書館に感嘆を漏らす。

「あ、そういうえばさっきの悲鳴は何だったのかな？」

辺りを見回してみても特に変わった様子は……

「だ、誰か居るんですか？」

何処からか声が聞こえてきた。女性の声だ。先の悲鳴の声にも近い気がする。張り上げられたはずのその声は、しかし少しくぐもっている。

「えっと、居るよ。今この図書館に来た所だけ……貴女どこにいるの？」
辺りを見回すが誰も居ない。

「二十三列目の右から四番目の本棚の辺りに居ます！その……出来れば助けて欲しいな、つて……あつ、また崩れ、ぐへっ！」

助けてという割に何処か余裕すら感じられるその声。危機感が感じられないがどうしたものか。

「どうする？ 行く？」

「二応行ってみましょ。なんか、大丈夫そうだけれど」

だね。助けてと言っているのだしわざわざ無視することもないだろう。

そんな訳で声の指示した場所へと私達は向かった。

入り口から階段を降り、見上げて首が痛くなるような巨大な本棚が幾つも並ぶ通路をそれなりに歩いた。

そしてようやくと二十三列目の右から四番目までたどり着いたのだが…

「山、だね」

「ええ、山ね」

そこには山が有った。

本の山である。

「本棚から崩れたのかな？」

「それだけじゃこんな風にはなんないでしょ」

確かに近くの本棚は幾つか空いている部分があるが、明らかにそれ以上に本が有る。

「おーい、来たけど……この中で合ってる？」

「はい！はいっ!!この中に埋まってるんです！お願いします!!早く助けてっ！」

元気な声がそこから聞こえてきた。どうやらその声の主はこの山の中に埋まってるらしい。

……普通の間人だったならこんな潰れて圧死してそんなものだけれど、その声にはやはり幾らかの余裕が感ぜられた。

「しかし、どうやってこの山を退かそうか」

「二つ一つやるのは根気がいるわね……」

文字通り山を築いているこの本を一つ一つどかすのは中々に骨が折れる。一冊一冊が厚いものが大半のようだし、一体どれだけの労力が掛かるかわからない。

「あと本にはなるべく傷を付けないようにお願いします！ でないと私が怒られます……」

山の中から注文が来た。まあ確かに本を傷つけないようにするというのは図書館では当たり前とも言えるのだが。

「こんな風に本を崩した時点でアウトだと思っただけどそのへんどうなの？」

「……何卒この事は内緒でお願いします!!」

それで良いのか、おい。

本の管理で怒られるということは、この中に埋まっているのは司書さんなのだろうか。

この広大な図書館を管理するのには、なんとも間抜けな司書な気もするけれど……まあとりあえずこの山をどうにかしようか。

「んー仕方ない。能力を使ってみようか」

「能力？何よそれ」

「まあ、見てなつて」

私はその山に手を触れる。

その本一つ一つに能力を適用してその位置を把握し、動かす。

「本が勝手に……？」

サラがそう呟くが、残念ながら私に解説する余裕はない。

何せ本一つ一つを能力かに置いてるので頭がこんがらがってパンクしそうだった。

一つ、また一つ。丁寧に『向き』変え地面へとゆっくり下ろしていく。

段々とその山の高さは減つていき、遂に最後の一冊を取り除き終わる。

「ふう……」

息をつく。結構疲れた。細かい作業は神経を使う。

そうしてようやくつと片付け終わった本の中からは一人の女性が出てきたのだった。

「……魔族」

そんな言葉をサラが呟く。

彼女はそれでも抑えているのだろう。私の時のように飛びかかったりはしない。ま

あ、此処は図書館だし、あの時はルイズの事が心配なものも有ったのだろう。

しかしどうしても憎しみが滲み出る。そんな眼差しを、その本の山から現れた女性に向けていた。

「わあ！ 凄い!! こんな魔法が有るんですね!!」

それを全く気にした様子もない女性は、その背から生やした立派な羽を元気にパタパタさせて喜んでいる。感情が実直に現れているのが面白い。

「それで、貴女は?」

サラは余裕がなさそうだし、なんで埋まっていたのか理由も聞きたいのでその女性へ話しかけた。

女性の容姿はともすれば少女とも形容できそうな年齢で、その特徴的な羽は、まるで

「助けて頂いてありがとうございます!私はこの図書館で司書をしている『悪魔』です」

そう彼女は言った。

そう。その羽根は昔RPGゲームやアニメで見たような少々禍々しさを感じるような羽根、『悪魔』の羽根だった。

十二話 悪魔のような司書

「いやあ、本当助かりましたよ〜」

「そりやどうも」

その黒い羽根を。パタパタとはためかせる。

頭から映える小さめの黒い羽根も連動しているのかぴよこぴよこ動く。

可愛い。正直彼女の容姿も可愛いので可愛い。語彙が無いのは許して欲しい。

「それであなたは？」

「ああ！ これは失礼しました！」

私の問いに対して、彼女は律儀に姿勢を正し自己紹介を始める。

「私、ここぞで司書をしている『悪魔』です。お二方よろこそ大図書館へ！」

積み上がった本を背に、満面の笑みで再び彼女は自分の事を『悪魔』だと言った。

そのさっぱりとした、いや、し過ぎた笑み。

到底、悪魔の物とは思えないくらい明るい。

「凄いですねえ。私もそんな魔法が使えるようになりたいものです」

「ああ、これは……まあ、魔法みたいな物だよ。うん」

「およろ？ 気になる言い方ですね」

魔法じゃないよ、と訂正するのも少し面倒臭そうだ。

こういった特殊能力の持つ者に今の所この世界で出逢った事がない。

魔法があるから見つからないのかそもそも存在しないのか……

詳しいことは解らないが、わざわざ話すことでもないだろう。面倒くさそうだし。

「でも、本当に助かりました！ えっと、お名前をお伺いしても？」

「私は^{はかな}儂。こっちはサラ」

「……」

未だ無言のままの彼女は、じつと悪魔ちゃんの方へ視線を向けている。

最初に比べれば幾分攻撃的な雰囲気は落ち着いた、ような気がした。

あくまで私は思えたというだけの話だけれど。

「^{はかな}儂さんにサラさん。うーんふたりともいい名前です!! 改めて本当にありがとうございます!!」

「いました!!」

しかしその視線に気づいているのか居ないのか、嬉しそうに話しかける彼女は、ともすれば天使のような笑顔を浮かべていた。

……本当にこんな娘が悪魔なのか?!

「ああ、うん。まあ流石に本に生き埋めになってるバ：奇特な人を無視する気にはなれなかったからね。」

「あのお、夢さん。なんか私の事を貶してませんか?いまバカつて言いかけませんでした??」

気のせい。気のせい。

まだ初対面の彼女をバカと断ずるのは早計に過ぎる。

確かに、出会いはバカっぽいし、いま話していてもバカっぽいけれど。

しかしバカと言ったら悪魔なら怒るかと思っただけど、そんな様子はないらしい。非常に温厚な女の子だ。

「いやあ、やつぱり横着しちゃ駄目ですねえ。一度では無理でした」

「……これを一度で? 運ぼうと?」

「はい!」

「……無謀じゃない?」

「でしたねえ」

やつぱりこの娘バカなのかもしれない。

「で、これ片付けるの?」

そういつて私は先ほど積み上げた本の束を指し示す。

私が能力を使つて積み上げたそれらはそのまま地面に聳え立っていた。

彼女は本来これらの整理のため作業をしていたんじゃないのだろうか。

「そうですけど……」

「大変そうですねえ」

「ああ、まあ良いんですよ。ほら、有名人が来たとかで皆そつち行つちやつて、誰も居ないですから。つまり、文句を言う人も居ないですよ。だからサボつても……」

文句を言う人、それは彼女の同僚や上司の類の人々だろうか。

つまり、誰も居ないからサボつちまおうぜという話。

おお、少し悪魔っぽい……ぼいのか？

「でもその後で怒られるだけなんじゃ」

「……ですよねー」

何も解決にはなっていないかった。ふむ。まあこうして会ったのもなにかの縁だろ

う。

「手伝おうか？」

「い、良いんですか!!? そんな悪いですよ!!」

まあ、どうせ私達は暇なのだ。

その件の有名人騒ぎが終わらないと私達は動くに動けないわけだし。

「サラも良い？」

「……仕方ないわね。いいわよ」

「あ、ありがとうございますっ！」

そんなわけで私達は彼女の整理を手伝うことになったのだ。

悪魔ちゃんの指示に従い、積み上げられた本を本棚へと並べていく。

この図書館、余りにもでかすぎて普通の人に管理なんて出来ないんじゃないだろうか。

まず棚の一番上に行くのに電気屋さんもびっくりなレベルで高い梯子を登らねばならない。私は妖怪だし、悪魔ちゃんもサラも飛べるから大した問題にはならないが、普通の人にはなかなか無理な話だろう。

とはいえ、時間こそかかれども無事に作業を終えることが出来た。

「お礼にお茶でも出しますよ！ いえ、出させて下さい!!」

そんな最中、唐突に悪魔ちゃんはそう言い出した。

お礼をちゃんと形にしたいという彼女の志はとても良い物であり、自分の悪魔のイメージとはほど遠い。

「さあ、どうぞごちらへ!!」

そういつて私達を招き入れるように手を指し示す悪魔ちゃん。

個人的にはそのままお茶会に赴くのも良いと思っているが、問題は先程から私の隣で無言のピンク毛の彼女。

「どうする?」

「……せつかくの好意なんだから受け取っておきましょう」

彼女は何のことも無いようにそう言った。

まあ、サラがそう言うのなら。

そんな訳で私達は文字通りの悪魔の誘いに乗ったのであった。

通された司書室も本が所狭しと置かれていた。

といつてもそれらは壁一面の本棚に収められているのでそう散らかっている訳では

ない。凄まじい量なのに変わりは無いのだが。

「狭くてすみません。いまお茶を入れてきますから此処に座っててください」

そう指し示されたのは部屋の真ん中に位置する、おしやれな装飾の施された円形のテーブルだった。

椅子が2つ備えられている。

私達は悪魔ちゃんの指示通りその机に座った。

それを見届けた彼女はトテトトと入り口とは別の扉を開き、部屋から出ていった。おそらくはその先が給湯室なのだろう。

さて、ちょうど2人つきりになったし私は彼女に確認しなければならない。

「サラ。良かったの？ 大丈夫？」

それは彼女の心に対する心配である。

もし無理をしているのなら、悪魔ちゃんには悪いがここから出た方が良いんじゃないかとも思う。

「別に無理なんてしてないわ」

「本当に？ 急に彼女を襲ったりしない？」

「しないわよ。」

「見境なく炎弾放って本燃やしたりしない？」

「しないわよ！ アンタ私を何だと思ってるのよ！」

うーん、今の事の通りに私はやられた訳で、心配で仕方がない。

「うっ、あれはルイズさんに何か危害を加えるものだと思ったから。ちよつと、ちよつとだけ頭に血が上つてたのよ！」

彼女はちよつと血が上ると魔族を殺しにかかるらしい。

それだけルイズの事が好き……ということにしておこう。

「まあ、それなら安心したよ。無理してる訳でも無さそうだし」

最初の方こそ危うい雰囲気醸し出していたが、今は至って普通そうだった。

「善意を無碍にする程常識知らずじゃないわ。それに……」

「それに？」

「……何でもないわ」

言葉を途切った彼女に続きを促すが、しかしやはりその先言葉は教えてくれはしなかった。

気になるけれど……でもまあ、やっぱり無理に聞くほどじゃあない。

とりあえずサラが平気ならば良い。私は話題を転換する。

「しかし、何で『悪魔』が居るんだろうね？ 魔族と人間って別々に住んでるんじゃないの？」

「さあ、私も知らないわ。……でも、稀に人と住む魔族も居るらしいわ。私は見たこと無いけど。多分何か理由が有る、のかしら」

ルイズさんの話だけ。とサラは言う。

稀に、か。だとしたらどうしてそんな事をするのだろうか。その理由がちよつと気になつた。

「んん美味しいっ!」

「ふふっ、ありがとうございます。入れた甲斐がありました!」

私達は悪魔ちゃんの入れた紅茶に舌鼓を打つ。

ほんのり甘い柑橘の香が漂う、口に含むと優しくそれが広がって……とても、美味しい。というか紅茶もこの世界に有るんだね。

「本当なかなか飲んだこと無いよこんな美味しいの。このクッキーも美味しいし。」
「作り置きですけど、そう言ってくれると嬉しいです!!」

本当に美味しい。サクサクした食感も、紅茶に合う程よい甘さ。

これをどちらとも彼女が作ったというのだから、彼女の女子力の高さは素晴らしい。

この子可愛いし、私の中の悪魔の概念が崩れ去っていく。

「昔お手伝いのな事をやってみて、これでも家事全般は得意なんですよ」

えっへん。と腰に手を当て、それなりに豊満な胸を反らせる彼女。

炊事洗濯料理に掃除。なんでもござれ、とのこと。ああ、なんて家庭的な悪魔だろうか。なんならお嫁に来て欲しいくらい。

「しかし、本当に聞けば聞くほど不思議だよ。悪魔って初めて会ったんだけど。皆貴女みたいなのかな」

悪魔。イメージとしてはもつとこう狡猾で攻撃的で、「悪」という字が入っているくらいだからもつこう、好戦的でと悪い奴ら何じやないかと思っていたけれども。

「あはは……。皆が皆そうと言うわけでは有りませんが。確かにそういう人は居ますね」

そういう人も居るらしい。

という言い方からは暗に彼女自身は違うのだということが表されているのだろうか。

「悪魔ちゃんは？」

「あ、悪魔ちゃん？私の事ですか？」

「そうそう」

悪魔ちゃん？ 安直……いえ、寧ろこれはこれで可愛……
などと呟く彼女。

そんな彼女を後目に、もう一つクツキーを摘まむ。うん、美味しい。

さつきから話には加わらないサラだが、彼女ももぐもぐとクツキーを食らっている。

しかし、悪魔ちゃん。そういうえままだ彼女の本名を知らない。

「ああ、私名前は無いんですよ」

「ありやそうなの？」

「はい、ご存知有りませんか？ 魔族は高位の者しか名前を持たないんです」

その点人間は良いですよねえ。という軽いぼやきを漏らす。

名前が無いというのはなんとも。

私ですら……そう、私ですら名前が有るといふのに。

「ああ気にしなくていいんですよ！ 魔族では普通のことですし。それに人間社会でと生活する悪魔なんてそうそう居ませんからね。呼ぶのに困る事も有りません」

まあ、確かに一人しか居ないのなら、困らないだろう。『悪魔』と呼んで貰えばいい。

しかし、まあ魔族については知らないことばかりだ。私もこの世界では魔族に分類されてしまうのだろうかけれども、前の世界で名前が無いなんて事はそう無かったように思う。

そんな世界の違いを感じながらも、私はクツキーを噛み締める。ちなみにクツキーはやっぱりこの世界でも美味しい。

そんな事よりも、やはり私は気になってしまつて。恐らくサラも気になっているのだろう、この問いを彼女へと投げ掛けることにした。

「これって聞いても良いかわからないけどさ、どうして都市なんかに住んでいるの?」
「あー、やっぱり気になりますか?」

そりや気になるのだよ、やっぱり。何せ私はこの世界に来てすぐに魔族キラーに殺されそうになつた訳だし。

ちらりとサラの方へ目をやる。なによ。いやいや、なんでもないよ?」

アイコンタクトはそこそこに。悪魔ちゃんとの話を続ける。

「私は魔族は人間に忌避されてるって聞いてたからさ。それでも敢えてそうするには理由が有るのかなあと」

彼女自身が珍しいと言ふのだから事実そうなのだろう。だとしたらどうしてそうするのか興味がある。勿論個人の興味でしかないけれど、多分サラも気になつては
ず。

「もし言いたくないなら別に無理しなくても良いよ?」

「いえいえ、そんな気にしなくても大丈夫ですよ」

私に興味を持ってくださって嬉しいです、と彼女は優しく笑ってくれた。

「私、本が好きなんです」

と、彼女は自分の話を始めてくれたのだった。

彼女が本来自分が居た場所を離れ、人間と暮らす理由。それは彼女にとってとても大切なもので。

私にとって余りに眩しすぎる話だった。

十三話 二つの世界

「私、本が好きなんです」

そう彼女は言った。その笑顔はとつても柔らかくて。ああ、本当に彼女は本を愛しているのだと感じた。

それは私には無いもので、胸に少しばかりの鈍い痛み感じながらもそう思った。

紅茶の香りが漂う司書室。私達は一つの丸テーブルを囲むようにして私達は静かに彼女の話を耳を傾ける。

サラもやはり興味が有るらしく、真剣に聞いているようだった。

「大昔にです、ねたまたま人間が書いた本を読む機会が有つて。そこで初めて、本って良くなつて。今はどうかは知りませんが、その頃は魔族の社会にそういった本はあまり流通してなかつたですから。あつても強くなる為の魔導書とかで」

恐らくはその頃に思いを馳せる彼女は、部屋一面の本棚に詰まっている本に目を向けながら話を続ける。

「私はその時読んだのは冒険物の本なんですけど。すごく感動して。もちろん話の内容

にも感動したんですけれど、その話の世界に連れて行ってくれる、本にも凄く感動しまして……」

一通りそれらの本を眺めた後、目をつむり胸に手を当てる。よつぽどその思いを大事に噛み締めているようだった。

「その頃は色々有って、色々諦めて居た時期だったんですけど……でも、それ以来本が好きで好きで堪らなくって、自分の悩みなんかどうでも良くなっちゃいました」

彼女に何が有ったのかは余り聞かないほうが良さそうだった。それを少し話すだけでもかなり辛そうに表情をしかめていたからだ。

でも、そんな辛い思いすらちっぽけだと言えるほどに、彼女は好きなんだ。

「で、その勢いのまま人間の街にやってきました。最初はまあ……色々大変だったんですけど」

色々と、というのやはり魔族故に有った苦勞の事だろう。言ってみれば魔族とは人間にとつて”異物”なわけだから、それに対する反応は想像に難くはなかった。

あのヘカーティアの所に居たときも小さいそういった差別は無くならなかったし、遠い記憶の中出会った頃の『彼女』もそういう目に有っていたから。

「でも、運良くいい人に出会えて」

「いい人？」

「はい。悪魔の私にも普通に接してくれて……まあ、少し変な人だったんですけど」

その『少し変な人』と彼女は称したが、その人は本当に良い人なのだろう。だって彼女の顔はわかりやすい。

『お前が魔族だから云々はどうでも良い、それより研究だ。手伝ってくれ』とか本心から言ってしまうような人でしたから。それからその人の手伝いをずっとやってまして、それでその人が引退してから、まあ紆余曲折有つて今はこの図書館の司書をやっているです」

自分が好きだから、という理由。

それだけで耐え難かったであろうを物ともせず突き進む彼女は余りに眩しかった。

「貴女は幸せ？」

だからつい彼女にそう聞いてしまった。

唐突な私の問いに彼女はキョトンとする。しまったと思った。

それは彼女の話をちゃんと聞いていたら、聞くまでも無いことであつた。実際私はそんな事はわかつていた。

でも、聞きたかつた。彼女の口から聞きたかつた。

——いや、本当は。彼女は満たされている人だ。

「幸せ、ですね。こうして、本に囲まれた生活が出来るんですから。まあ、さつきみたいに魔族だからこそ大変なこともありませうけどね」

安月給ですし。と笑いながら文句を言うその顔はやっぱり晴れ晴れとしていて。

それは余りにも眩しくて、だから——

「儂さん？ どうかしました？」

きよとんとする悪魔ちゃん。うん、眩しいね。

「いや、なんでもないよ。悪魔ちゃんが本が好きなのはよくわかったよ」

とにかく彼女が人間と生活を共にする理由は、大体解ったのだった。

その事に付いて少しばかり思う所のあつた私、そして自分の事を沢山喋つたせい或少し恥ずかしそうにしている悪魔ちゃん。ほんの少しだけ会話は途切れ私達の間には静かな沈黙が訪れた。

しかし、それは思いの外早く終わった。

今まで殆ど黙っていたサラが口を開いたのだ。

「ねえ、その貴女が出会った人って、どんな人だったの？」

サラは悪魔ちゃんが出会ったという“人”に興味を持ったらしい。

彼女が毛嫌う魔族に対して、手を差し伸べた人物。サラはどちらかといえばその人の

ことも疎みそうなものだけだ。

……サラも何か前に進もうとしているのかもしれない。

よくよく考えれば彼女は単なる十代の女の子の訳だからそれもそうか。

それを嬉しく思う半面、少しだけ汚らしい感情が私の中に生まれる。

その感情はわかつている。だけどぶちまけるほどのものじゃない。

「私も聞きたいな。悪魔ちゃんさえもって『変な人』って言わせるその人のこと」

だから押し殺して悪魔ちゃんの話促すことにした。もちろん単純にそれが気になっっているのもある。

「私をもつて……何か悪意を感じるんですけど?」

「ははは、気のせい気のせい」

ジト目でこちらを睨んでくる悪魔ちゃんを受け流す。可愛いね。

しかし件の人物。人間と魔族のあれこれよりも研究だと言い切るその人物は、少なくとも多少世間とズレた変人であると言える。

「その人は魔法の研究者でした」

悪魔ちゃんはその人の事を訥々と話し出してくれた。一言一言を大事そうに。

「出会った頃は本当に自分の知的好奇心を満たすことしか求めてないような人で、それは変人でした」

魔法の研究にしか興味を持たない人だったらしい。悪魔ちゃんがその人の元に言ったのも魔法の研究の一環で悪魔が射て欲しかっただけだかららしい。

「でも、良い人なんですよ。研究所は彼一人だけではありませんから。他の人は私のことを色眼鏡で見ないようにしてたんですが。」

そんな研究員の方達に対して『無駄なことに思考を割く余裕があるのか?』って煽って叱っていましたから」

それは彼女に気を遣ってそう言ったのか、それとも本心で言ったのか。

彼女曰くそれすら解らないようなくらい研究狂いな人だったようだ。

それでもそのブレない態度に彼女は随分と助かったらしい。

「研究に都合が良かったと言うのは解ってるんですけど、彼は私のことをただの『私』として扱ってくれたんです」

ともすれば恋でもしてそうなくらい、その人の事を話すのが楽しそうだった。

「まるで恋話ね」

「あはは、そう聞こえますか?」

「そりやもう」

サラと二人で少し呆れつつ頷く。

しかし、彼女にとっては違うらしく苦笑しながら否定する。

「既に奥さんもお子さんもいらっしやいましたし……」

「もし、居なかつたら？」

「……私は魔族ですし」

「もし魔族じゃなかつたら？」

「もうっ。僕さんからかつてます？」

「はは、反応が面白いからっいいい」

野暮だけど彼女の反応が面白いでっいいい。

ま、悪魔ちゃんにとってそれは名前を付けないまま終わらせたい感情だっつたと言うこととで。うーん、エモーショナル。

「今はその人はどうしてるの？」

「お孫さんと二人で住んでるらしいです。元々の実家だった本屋さんをしてるんだとか」

「孫と二人？」

先の話しに出たお子さんとその番の人はどうしたのだろうか。

「えっと、その……不幸が有りまして」

「ああ、なるほど。ごめんね、不躰なこと聞いちゃって」

「いえいえ」

心苦しそうにそう言う悪魔ちゃん。

んー、この話しは続けても仕方ない。話しを戻そう。

「ま、ともかく悪魔ちゃんはその人と出会って助けられて恋をして何やかんや有ってこの人間の都市の図書館で司書をしてると」

「こ、恋はしてませんか？」

頬を赤らめて翼をプルプル振って否定する悪魔ちゃん。可愛い。

まあ、何はともあれ彼女は良い出会いを経て魔族でありながらこの街に居ると言うことだろう。

……前世のあの時、今世のあの時。私にもそんな助けしてくれる人がいれば何か変わったのかな。

なんて、身も蓋もない話を一瞬だけして打ち切る。出会いに救済は求めてはいけないことは、それこそ前世で結論付いたことだった。

そんな無駄な思考を流すように紅茶に口を付ける。ほんのり甘くて美味しい。

「ねえ、少し聞いても良いかしら？」

「はい、サラさん。なんでしよう？」

「本に出会って魔族の社会を抜けてきたって言うていたけれど、後悔とか未練は無いのかしら？」

「ありませんよ」

やけに即答した悪魔ちゃん。

そこまで即答できる物なのだろうか。もつと家族との別れとか、友人とか仲間とか……つて自殺してる私に言える事じゃあないか。

「魔族の社会は弱肉強食です。それに誰もが親の腹から生まれる訳では有りません。人間と違って魔族はその根本を魔力的な物に依存してますから。私も親がいなくちです」

魔族の生態的な話は新しい知見だ。

根本が魔力に依存、というと魔族はその存在が肉体的物理的な物じゃない。人間とは似て非なる物という感じ……なのか？

その辺は何となくわかるような、わからないような。自分も妖怪だから根本が肉体じゃないのは何となく解る。

傷がやたらすぐ直るとかもそのせいだろう。とはいえ、私は肉体を持っているし手で物を触れる。実際に見て解る類の話ではない。

「私は親も無く、つてもなく、加えて強くもなく……危うく死にそうになつて命辛々魔族の領域から抜け出してきたんです」

なるほど、そういうあんまり良くない経緯があるからこそその先の即答だったわけだ。

「ですから、後悔なんて有りませんよ。逃げてしまったのは情け無いと思えますけど、良し出会いが有って今はこうして本に囲まれて幸せです」

「だろうね見るからに幸せそうだもん」

顔からよく解る。彼女はわかりやすい。

きつと昔はきつとこんな表情豊かじゃなかったのだろう。環境が人を変えるのはどこでもいつでも同じだ。

「あはは、なんか恥ずかしいですね。サラさん、こんな感じで良いですか？ 質問の答え」

「……ええ、ありがとう。魔族の社会の事なんて全然知らなかったわ」

「いえいえ、面白い話じゃなくてすいません。それにこんな事言ったらアレですけど、人間の社会の方が文化的で遥かに良い物ですよ。魔族の社会なんて知らなくても、いえむしろ知らない方が良いでしょう」

基本優しい感じの悪魔ちゃん滅茶苦茶魔族社会の事をデイスっておる。

よつぽどだったのだなあなんて苦笑する。

しかしまあ、どうしてこうも魔族と人間で社会が分断してるのか。ふと疑問に思う。

この都市やりオベナコを見る限り人間社会は普通だ。前世で言う近現代とそう変わりは無いだらう。

しかし魔族社会は話を聞く限りもう少し殺伐としていそうである。

「なんで魔族と人間ってこんなに分断してるの？」

「アンタそんな事も知らないの？」

「あー、うん。ほらずつと田舎に住んでたからー」

今話すとややこしくなるので適当に誤魔化す。

「田舎って、この世界のどこの田舎よ」

「あー、湖の近く？」

「はあ、教える気は無いのね」

「すいません。この世界じゃ無いし……」

なんならこの時代でも無いかもしれない。あ、でも湖の近くなのは本当です。

「まあ、それはそれとして。どうしてなの？」

「私は遙か昔に戦争があつてその結果そうなつたつて学び舎で習つたわ」

「そうですね。大体はサラさんの認識で合つてると思いますよ。……せっかくですし、

本を探しに行きませんか？　ここは世界有数の大図書館ですし、詳しい資料があります

よ」

淹れて貰つた紅茶もお菓子底をつく。

先程は本の整理を手伝つただけだし、せっかくの大図書館だ。場所に相応しく調べ物

をするのも良いだろう。

……そういえばルイズはどうなったのかな？

有名な彼女はまだ人に囲われているのか、有名税というのも大変だな、とか思いつつ。

私達は司書室から図書館へと戻る。

「えっと神話のその類の話が中心の本は、これとこれとこれと、あとこれと、あつ、これも……」

「いやいや、悪魔ちゃんそんなに読めないから。せめて二、三冊で」

私達は黒い翼をはためかせこの大図書館を飛ぶ悪魔ちゃんの後ろをついて行く。

「ええ、そうですか？ 貸し出しも出来ませうよ？」

「貸し出されても当分返しに来れないからねえ」

今は一応ルイズと旅をしてる事になっている。サラもそれについて行くのだし数年単位、下手したら数十年単位でこの街には戻ってこないかもしれないのだ。

それにそうでなくても私はいつ死ぬか解らない。だから本なんて借りられない。

「そうですから、……ってルイズ？ あの旅人のですか？」

ルイズの名前に驚く悪魔ちゃん。

ああ、そう言えば特に話してなかったっけ？

「そ。旅人のルイズだよ。ここに来て大騒ぎになつてる有名人ても彼女だね」

「ひえー凄い。なるほどお、それで合点が行きました。通りでお二方とも魔法が上手なんですね」

ルイズの事は当然悪魔ちゃんも知つてるようで。

って、んん？ ルイズと魔法がどうしてそうすぐ繋がるのだろうか。

「いやいや、ルイズさんって相当若い時に捨虫を習得してる凄腕魔法使いじゃないですか。だから旅仲間もそういう物なのかなあと」

なるほどなるほど。それはそうかもしれない。

「捨虫ってやつぱりこの世界……あー、この辺りでもそこそこ難しい魔法なの？」

「それはそうですよ。私がお世話になつていた彼も修得したのは四十終わり頃でしたよ。それでもかなり早い方です」

件の悪魔ちゃんの恩人、魔法の研究者でさえその位らしい。

そう考えるとルイズは相当天才なのではないだろうか。

「それじゃあその人も不老長寿？」

「いいて、彼は普通に生きる事を選びました。あくまで研究の一貫だつて言つて。使えるのに使わないんです」

そういう悪魔ちゃんはどこか寂しそうだった。それもそうか、魔族と人間はそのままだと生きる時間が違う。彼女にとってはあまり嬉しい事じゃ無い。

「まあ、それは良いんです。それにしても本当に魔法が上手ですよ。人間で自力で飛べる人つて今時なかなか珍しいですよ」

「へえ、そうなの？」

「そうなのつて、ええ……？ そんな知らなかつたみたいな顔されても」

「ああ、うん。少し私人間知らずなんだ」

「自分で言うことですか？ それ」

この世界には魔法が浸透しているものだと思つてたが魔法使いの絶対数は向こうの世界とそう変わらないのかもしれない。

「まあ、私はともかく。確かにサラは才能あるかもね」

「な、何よ急に褒めても何も出ないわよ」

別段ただそう思っただけだよ。

「でも、そつか。あんなに街中で魔法な物が飛び交つてるのに魔法使いは多くないのか

」

「あれら魔法具は彼含め研究者たちの努力の賜物って事ですな」

そう自分の事のように誇らしげな顔をする悪魔ちゃん。可愛い。

しかし、つまるところこの世界の魔法も実は前世の科学と変わらないのかもしれない。例えば電車に乗つてるときそれがどういう仕組みか解らなくても利用する上では何ら問題は無い。つまり科学が使えなくても科学によつて作られた恩恵を受ける事は出来る訳で。

「これと……これで良いかな。本を選び終わったので戻りましょうか。すいません付き合わせて」

「いや良いよ良いよ。私が読む本だし。それに図書館を回つてみたかつたんだ」

これだけ壮大な図書館の棚の間を飛び回るだなんて、そう出来る経験じゃない。

それだけでもかなり有意義と言える。

こんな圧倒的な本の量前世の世界でもそうそうないだろう。

「そう言つてくれると助かります。では行きましようか」

さてさて、読書をしよう。

この世界で人間と魔族が分断された過去について。……そして創造神神綺について。

場所を司書室に移し本を広げる。

「といつても、先程サラさんが言つた事が概要なのは変わらないですね。強いて他に述

べるなら、これとかですかね」

そう言つて古そうな紙の上を指差す。

なんて書いてあるか解らないがそこには三人の人の絵が有つた。いや、人というよりは神か。

「神綺様は当然ご存知ですよ。あとは横の二人は左から『サリエル』と『エリス』つて言うんです。彼らが引き起こした戦争が一番の原因だと言われていますね」

ん？ エリスっていうは聞いたこと有るぞ？

災厄の魔女だとか何とか。あの本屋のお爺さんからそう聞いたはずだ。

魔族を引き連れて神綺と戦争したとか何とか。

「何だ知つてるじゃないですか。それが根本の原因で魔族と人間の中は険悪なんです」
「よ」

「ああ、なるほどなるほど。繋がつたよ」

童話みたいなのを読んだだけでいまいちピンと来てなかつたが、その遙か昔の出来事が今に至るまで尾を引いてるようだ。

「その話には異界から魔族を引き連れてくつて書いてあつた様な気がするんだけど。そうすると魔族は皆異世界人つてこと？」

「いやいや、そんなわけ無いと思いますけど。多分それは盛ってるんじゃないですかね」

? 所詮童話ですし」

異世界なんて眉唾ものだと言わんばかりな悪魔ちゃん。

私みたいな転移者って実は珍しく無い? とか思ったけどそんなことはなかった。

「二人はさ『異世界』って有ると思う?」

「有るわけないわ。それこそ童話の話よ」

との事。サラ的には有り得ない話らしい。

まあ、目の前に居るんですけれども。

「悪魔ちゃんは?」

「そうですねえ。小規模な物なら魔法で作った事例を聞いたことがありますけど、アレは異世界というより結界ですからねえ。うーん……でも、魔法にも解らない原理が沢山あるって聞きますし、同じ様にまだ知らないだけで無いことも無いと思う……って感じですかね」

サラよりは幾らか肯定的だが、やはり現実的ではないようだ。

なるほどねえ。まあ、私自身事故でこの世界に来たわけだし。その事故も恐らく私くらいいしか起こせないだろう。

……神を除いては。

ヘカーティア達は元々神界とかに住んでいたと聞くと、地獄という世界もあった。神

ならばもしかして世界を跨ぐことは容易いのかも解らない。

「神綺様に聞いてみたいね」

この世界だと神綺ならその辺が解るのだろうと思う。

……聞いてどうする？ 元の世界に戻る？ 戻ってどうする？

んー、いつそ神綺に殺してもらえないだらうか。

など取り留めなく身も蓋もない考えを思考の端でしつつ、私達は歴史書を読みふけた。

コンコン。

書物達を眺め読みふける私達の居る司書室の戸を叩く音がした。

「はーい？ どうされましたか〜？」

「あのー図書館に知人が居ると聞いたのですが、どうに見当たらなくて……」

聞き覚えの有る声だ。

がちやりと悪魔ちゃんが扉を開くとそこには金髪の女性が居た。

「あらあら？ ーここに居たのね二人とも」

超有名人こと旅人ルイズさんである。

「ああルイズ、ごめん。もしかして結構探してた？」

「いえ、原稿のやり取りを終えてから二人がこっちに行つたつて聞いて。今来たところよ」

「ここに来る事自体はそんなに苦労してないと、彼女は言うが。その表情はどこか疲れている。」

「あの大量に強請られてたサインやらファンやらは？」

「途中までは対応してたのだけど、この会社の外からも人が集まるようになって。途中で警備の人に止めて貰つたわ」

「うお、凄いね。流石有名人」

「もう、からかわないで頂戴」

まるでハリウッドスター。というか実際それに準じてる気もする。

「二人とも遅くなつてごめんなさいね」

「大丈夫ですよ。ルイズさん」

ルイズと話すサラ。ほんの数刻ぶりの再会だが嬉しそうだ。しつぽが有れば多分振っている。

さて、ルイズも用事を済ませた事だしそろそろこの図書館からお暇しようか。

「悪魔ちゃんありがとう。ルイズも来たし私達はそろそろー」

「ルイズさん！ サインください!!」

私の言葉をぶった切つていつの間にか本を携えた悪魔ちゃんがルイズに本を差し出す。

「あら、貴女も読んでくれているの？」

「はい！ 私ルイズさんの本大好きなんです！ 知らない世界をきめ細かく鮮やかにかかれていて、呼んでるだけで本当にそこに行つたような気分になって……。最近の巻だとルナファリカ島に行つた時のー」

「おやおや、ここにも“ファン”が居たようだ。」

ルイズはその悪魔ちゃんの熱量に嬉しそうにしながらもどこか困つたような顔をしている。

「ま、ここを離れるにはもう少し時間が掛かりそうだね。」

十四話 ばじやまばーてい

「世話になったね」

「いえいえ、またお越し下さい」

悪魔ちゃんに見送られ出版社兼大図書館の外に出た。

また来てと言われても、私は多分来れないなあと思いつつ。手を振って悪魔ちゃんと別れた。

笑顔でフリフリと手を振り続ける彼女はやっぱり悪魔には見えなかった。

「暗くなってしまったし、宿を取りましようか」

もう日は陰ってきている。この世界特有の二連の月が薄藍色の空に白く浮かんでいった。

宿を取るのが妥当だろうと思っていたらサラが不満げにこう言った。

「私、まだ進めます」

気持ちは解らないでもないけど、ちよつと勘違いしてる気もする。

確かにルイズと私は多少寝なくとも困ることは無い。それを思い今宿を取るの自分
分のせいなのではとサラは思いこんでいるのだ。

しかしそうではない。確かにそういう一面もあるかもしれないが、ルイズのする「旅」
というのはそんな余裕のないものでは無いはず。

案の定ルイズは微笑んで窘めるようにサラに言葉をかける。

「旅は焦っても仕方がないのよ？ 私が一人の時だつてきつと宿をとるわ。一晚泊ま
ればその街の事がもつとよくわかるものよ」

旅は行く先々を満喫しないと。と嗜めるように言うルイズ。

その気持ちは解らないでも無い。前世含め私は旅と言えるような経験をしてない
だけだね。

まあこの都市にはルイズも以前から来た事が有るようだし、その話に当てはまるかは
微妙なところだが……それは置いておこう。

ルイズの優しさを邪魔することも無いし、私は初めての場所なのだし話に習つてこの
街を知ろう。

「それでどこ泊まるの？」

「この辺に良いホテルが有るのよ。原稿料も入ったし、折角だし行つてみましょうか」
と言われてイメージしたのはテレビでしか見たことのないようなVIPが泊まるス

ウイートルーム。

いやいや、流石にルイズが凄いとはいえそんな……

「うわお……街が一望できる」

「綺麗ねえ。なかなかこの都市で泊まる事つてないから一度泊まってみたかったのよ」
「へえ、まあ確かに位置的にリオベナコとの通過点なのかな。」

……あつ、あれが図書館かな。あつちの道路が多分リオベナコに繋がってる道？
周りのビルを見越して地平線が見える」

「アンタよく見えるわね？　こんなに暗いのに」
「いやあ、人より目は良いんだよね」

文字通り、視力は「人」より良いのである。

しかしまあ、ホテルや旅館に泊まるのは実は前、今世通して多分初めてだ。
それでも解る。この部屋は所謂「スイートルーム」に分類される事が。

言わばセレブしか入れない高嶺の花の部屋であるが、非常に居心地が良い。ここに住

みたいくらいだ。

「この部屋ヤバイね。布団がふかふか過ぎる」

後ろからバーンとベットに倒れ込んでみても、その衝撃は優しく包むように受け止められた。ああ、寝る。

こんな上質な布団は初めてである。ヘカーティアの所も大概豪華だったけど、あそこは古代文明。現代と近いレベルの文化レベルであるここは本当に凄まじい。疎い私でもわかる凄まじさだった。何だかんだ言つて価値観は前世から変わつてないのかもしれない。

「せっかくだしそれなりに良い部屋を取ろうとは思つては居ただけけど……。まさか問答無用でスイートルームへ通されるとは思つていなかったわ」

その細目と眉を困つたように曲げるルイズ。彼女自身、その有名税に戸惑っている感じだった。

ルイズがこの街に来たことは瞬く間に知らされていたらしく、フロントで名前を行った瞬間に受付の人の目つきが変わつた。

「前この都市に来たときははここまでの扱いじゃなかったのだけど」

「反応を見る感じルイズは生ける伝説みたいな物なんだからね。なんならこれからも、旅を続ける限りもつと凄くなると思うよ」

本を出しているのも大きいが、百年単位で旅を続け、かつ人のよい彼女が有名にならないわけがない。こればかりは仕方ないだろう。

「もし新しい旅先でこういう反応をされると少し困っちゃうわね」

彼女としてみたらその現地の人々も含め有りの儘で迎えて欲しいそうだ。

しかし前世と同じ様にこの世界でも徐々に情報網は広がり世界自体が近くなっているらしい。ルイズの名声や文字通り世界中に広まってしまいうのも時間の問題だった。

それでも旅を止めるといふ選択肢は欠片もない辺りルイズも大概だね。

「まあ有名税って奴だね。それだけルイズは良い旅をして来たって事だよ。誇った方が良いつて」

「そうですねよルイズさん！」

「あら、嬉しいこと言ってくれるわね。ありがとうね」

実際彼女は良い旅をしてきたのだろう。そしてこれからも。

旅をするために寿命を延ばす、生きる理由を強く持つ彼女はあまりにも私と正反対で眩しく思う。

「あら、そろそろディナーに行かないかしら？」

ふと時計を見てそう提案するルイズ。確かに良い時間だ。チェックインの時にフロントで案内された時間を過ぎていた。恐らくビュッフェ形式のレストランが開かれて

いるはず。

「デイナー……ビュッフェ……」

「私全然テールブルマナーとか怪しいんだけどサラは……同じか。ルイズ解る？」

「何で私を飛ばすのよ。そうだけでも」

前世で余りにも縁がない事ばかりで不安である。自分一人ならまあ恥ずかしい位で終わるが迷惑を掛けるわけにも行かない、と思い聞いてみる。

「そんなに気にしなくても大丈夫よ。別に普通の人だつて泊まれるホテルなんだもの」
「どうやら杞憂だったらしい。」

「……普通の人だつて泊まれる、か。前世の私は一回も旅行なんてしたこと無かったなあ、と思い返した。」

ロクでもない人生のロクでもない思い出である。

そんなわけで食事へ向かった。

「とりすぎじゃない?」

「アンタに言われたくないわ」

「いやあ、私はほらなんとでも消化できるから」

「はあ、魔物って無茶苦茶ね」

魔物が皆そう言うわけでは無いとも思うけど。私は能力があるから食ってもその「大きさ」を圧縮できるだけだし。そもそも出自が人の幻想に寄っている実体のない妖魔なんかは

食という概念自体も怪しいんじゃないか。ぬりかべとか何食うんだ。

寧ろこの世界の魔物は人に似た悪魔やら生物的なモチーフらしいから、食ったら普通に満腹になりそうである。

少し間抜けな所のある悪魔ちゃんなんかそうだろう。絶対「食べ過ぎました……うぷっ」ってやってそうだ。

とすると妖怪とはまた違う分類と言えるのかもしれない。

「取り終わったなら戻りましょう。ルイズさんを待たせたら悪いわ」

流石に三人揃って席を立つのは悪いと考え、またルイズに促されたので二人して先に食事を取りに来た。

まあ私も沢山取ったし席に戻ろうか。

やたらに広い店内で私とサラは席に戻る道に迷いつつ、よくよく考えれば私の能力でルイズの居る『向き』が解るじやんと自分の、間抜けに気づきつつ。

とにかく席に戻ったのだが、そこにはルイズだけでなくもう一人の存在が居た。

「ただいま……と、えつと」

「ああ、すいません。ルイズさんのお連れ様ですか?」

そう答えたのは金髪の美女。黒の魅力的な体型を惜しみもなく押し出したドレスを着た大人びた印象の女性だった。THE VIP といった風格だった。ハリウッドとかのセレブ俳優に居そうな感じ。

「どうも。貴女は?」

「私はただのルイズさんのファンです。つい見かけてしまってお声を掛けたの」

またファンかあ。流石に有名人。声を掛ける人はこんな所にも居たようで。

「邪魔しちゃうわいですね。サインありがとうございました、ルイズさん」

ルイズにサインを書いてもらった色紙を見せながら微笑んで礼を言う。

「それじゃあ……」

といて私達二人の脇を通る。それにそれとなく会釈してすれ違おうとした時私は何か変な感触を感じた。

(なんだ……?)

とはいえ露骨にそちらへ意識は向けない。というのもも逆にあからさまに観察するよ
うな意識がこちらへと向けられていたからだ。

その非物理的な視線の「向き」というものを私の能力はしっかりと感知したのだった。
私は少し訝しげに思ったが、件の女性は一瞬こちらへ意識を向けただけだ。特に何を
するでもなく普通にその場から去っていった。

「ねえ、ルイズ。さっきの人は？」

「私のファンって言ってくれたわ。こんな所にも居るなんてやっぱり照れちゃうわね」

そういうルイズ。しかしよく今のルイズをルイズと解つたものだ。

「変装の効果なかったのかな？」

「いえ、そんな事はないと思うけれど……」

メガネを掛けたり髪型をガラツと替えてみたり。手軽に出来るものでは有るがルイ
ズは現在適当に変装をしている。

パット見ただの金髪のお姉さんである。巷に出回っているルイズの姿とは、まあ似て
は居るがすぐに解るほどではない。

そんな中でピンポイントにルイズであるというの解るあの女性は相当にルイズの
ファンであったのかもしれない。

「まあ確かにバレバレだったら、こんなにゆっくり食事できてないか」

「有名人ですからね」

図書館での様子を考えるともし大々的にルイズが居ることがバレるとこのビュツフェの行われているホールが大変なことになる。

「あ、おいしい」

「何よそれ？」

「いや、解らないよ」

「あら？それはね〜」

のんびり話しつつ私達はディナーに舌鼓を打つ。

料理はどれも繊細で美味しくて、前世でも、前の世界でも味わう事の出来なかつた味だ。非常に現代的な味と言えばいいか。別段ヘカーティアの国の食事が不味かつた訳ではないが種類が違う。

なるほどコレが高級ホテルの味なのか、だなんて少し感心してみた。

「ふいー、いい風呂だったね」

「そうね、凄い広かったわ……」

私とサラは露天風呂から上がって来た。

そう、このホテル露天風呂が屋上に備えられていた。もはや疑いようもなくVIPなホテルである。

その豪華な風呂を余すこと無く二人で堪能した。

「あらあら、二人共長かったわね」

そう言つて私達を出迎えたルイズの手には何やら新聞らしきものが有つた。私達を待つている間に何処かから買つてきたのだろうか。

「そうそう、儂。見て頂戴これ」

「私に？」

「ええ、私達に必要な情報でしょう？」

そう言つてルイズは新聞を広げて私に見せてきた。その内容を斜め読みしてみると、なるほど。それは確かに私にとって有益な情報が記されていた。

何処かの街に神綺が現れた、と。

十五話 出会いは突然に、第一印象つていうのはどうしようもないわけで

さて、私達が今旅をしている理由を再確認しよう。

一番メインの目的、それは神綺を探すことである。サラの肉体と私の右腕に感染った黒い瘴気について見てもらう為だ。勿論神綺以外のそういう類に詳しい人を探しても良いのだが、どちらにしる神綺の住む魔都パンデモニウムまで行くのが良い、というのはルイズの話である。現在最も魔法の研究がされているのもそこだという。

それに加え、私自身は神綺自に殺殺すすという裏の目的も有る。ヘカーティアの口振りでは、私を殺すことは相当頑張れば出来なくも無いし良かったので、恐らく創世神たる神綺ならサクツと出来るのではないかと、淡い期待を抱いている。

そういうわけで私達はパンデモニウムに向けて旅をしていた訳だ。

しかし新聞には都市の近くの村に神綺様が現れたという話が記されていた。この世界、連絡網がそこまで早くは無いため、今もそこに居るのか、それとももう去ってしまったのかはわからない。

でも少しだけ回り道になるが距離的に許容範囲内（とルイズが判断した）。ならば一先ずそちらへ向かつてみようという事になった。

という訳で電車、もとい魔車（魔力で動くので）とでも言うべき客車に乗り、その村の近くの駅まで向かう事になった。

「夢！ そろそろ出発するわよ〜！」

ルイズの声がホームに響く。私は声を張り上げ応える。

「すぐ行く〜！」

売店のおばちゃん魔族に貨幣を渡し、品を受け取りダツシユ、というか文字通りすつ飛んで客車に飛び乗った。

乗った直後にジリリというベルの音と共に列車は動き出した。

「いやあ、ごめんごめん」

「全く。落ち着きないんだから。それで何買ってきたの？」

サラは私に小言も言いつつ、気になるようで手元を見ってくる。

「いやあ電車旅って言ったら、駅弁でしょー、って事で買ってきた」

「何よそれ？ 弁当関係あるの？」

サラは怪訝そうにそういう。ルイズも私の言葉にイマイチピンときていないようだった。前世の某日本では駅弁は一種ブランドというか、文化の一つだった気がするの

だがここはそんな事は無いらしい。

「まあ、一度楽しんでみたかったわけよ。ほらみんなの分も買ってきたよ」

「うふふ、ありがとう。そうね、せっかくだもの列車でお弁当食べるのも良いわね」

旅してないといけないことだわ、と言うルイズさん。流石分かっていらつしやる。サラは「むむむ、なるほど」と難しい顔をしている。そんな難しく考えなくて良いんじゃない？

乗り心地は前世の電車と差違無いが、動力はやはり魔力らしい。この世界の魔力、万能が過ぎる。

そんな感じで私たちは一時の電車旅を満喫するのだった。

「なんだ？ アンタたちあの集落へ行くのかい？」

目的地の集落の最寄り駅（といってもかなり遠い）の駅員さんは改札を通る時そんな事を言った。

「何かあるのかしら？」

「ちよつと前に魔族の群れに襲われてね、今まだ落ち着いて無いかもしれんがな」

「あら、そうなの……」

魔族の群れ、というのはいわゆる知能のない木っ端魔族の群れのことだろう。ちよつと危険な害獣のようなものである。

私は勿論、ルイズにとっては特に気にすることも無い存在だが、普通の人間にとつてはそれなりに驚異になりうる。

「でも大丈夫よ、私達一応魔法使いだから」

「ありや、そうでしたか。そいつは失敬」

「いえ、ご心配感謝しますわ」

というやり取りをして私達は改札を抜けたのだった。

さて、そんなこんなで電車に乗り最寄り駅に降りて私達は件の集落へと向かっている、のだが。

「何だか随分奥まったところに有るね」

「ゼーツ、ハー、ハー」

「大丈夫？」

「ゼーツ、大丈夫に、決まってるでしょ！」

隣でサラは息を上げている。

サラの体力が無いという話ではない。道がおかしいのだ。私が人間だった時も恐らく同じようにグロッキーになっていただろう。

私達は茂った森の中を歩いてきた。かれこれ数時間。足元に一応ギリギリ道と呼べるほどの轍が有るので多分ルートは間違つてないのだろう。

「この辺は田舎だからしかたないわ」

とおっしゃるルイズさん。田舎。田舎……？

富士の樹海の中のようなこの場所も彼女にしてみれば人の住んでいる「田舎」らしい。自分の中の田舎の概念を更新しようと思う。

この世界。近代もびつくりな街や都市が有ると思えば、なにやらアマゾンの奥地の先住民族もびつくりするくらい原始的な田舎も有る。いや、地球も変わらないか。

しかしそんな田舎だろうと都市だろうと、大体言語は通じるといふのだからビックリな世界だ。なんでも神綺様は言語を一つしかお作りにならなかつたらしい。その点は前世の創世神より有能なのかも。

「ちよつと前にこの辺で魔族に襲われたらしいって話も有るし気をつけていきましよう？」

とルイズはサラに向けて言う。当のサラはそんな余裕はサラサラ無い。

あ、ちよ。睨まないで。

「話だどこの辺だけれど」

そう言つてルイズは辺りを見回す。

GPSの様な高度な通信技術はこの世界には存在しない。そしてこんな樹海の中の村までの精巧な地図も有るわけが無く、先の都市で仕入れたぎっくりとした地図に、距離と方角の情報だけで進んできたのだ。

それでも迷い無く先導するルイズは、やはり流石の旅人だ、と思う。

ルイズに倣って私も周りをキョロキョロと見る。なお、サラは膝に手をつけて息をしている。

「お、多分そろそろだと思うよ。なんか家っぽい見ええし」

辛うじて判別の着く轍の遙か向こうー多分私にしか視認できない距離に人工物が有るのを確認した。

「ゼーハーツ、アンタ本当よく見えるわねえ」

「きつとそこが目的地ね。その視力羨ましいわ〜」

能力の面目躍如である。私に距離なんて有ってないようなものなのだ。

と、ドヤって居たら私だが。唐突にその視界に何か違和感を感じた。

「………ん？」

「どうしたのよ」

サラに聞かれるがすぐに答えることが出来なかった。しかし、私は何か視界に違和感を感じたのだ。

……そう、私の視線の「向き」がおかしい。
数瞬間んだ後、その正体に気づく。

何だ？

視線をねじ曲げる……魔法？ 結界？

だとしたら何でこんな所に？

そう悩んだ私は瞬きをした。

そして視界は燃え上がった。いや、燃え上あがあつあてあいた。

「伏せて！ 耳塞いで！ 口開けて！」

「えっ、ちょいきなりどう、んぎっ！」

文句を言う前に私は近くのサラを地面に倒す。ルイズはすぐに体勢を整えていた。
流石だ。

そして直後に辺りを熱線が過ぎ去る。

続いて地を震わす轟音と爆風が一面を根こそぎ風いでいく。

爆発は嫌いだ。

だというのにどうしてこうも縁があるのかな……。

(さっきの違和感はこの爆発を隠してた結界の類)

殺人的なその衝撃をを能力でいなしつつ、私は一瞬前の事を思い返す。

視界を誤魔化す結界で爆発自体を隠していた可能性が高い。つまりこの爆発は何らかの思惑によって起こされた可能性がある。

そこまで想像した所でようやく爆風が収まり始めた。

「ルイズ！ 無事!？」

何とか立ち上がれるほどに爆風が収まった所でルイズに声を掛ける。サラは今の衝撃で目を回しているが、私に抱えられていたため無事だ。しかしルイズとは距離があったため安否がわからない。

爆発はあまりにも良い思い出がない。嫌な汗が頬を伝う。

「けほっ。何とか、ね」

ルイズの声が聞こえた。そして魔法が使われた気配がする。恐らく治癒魔法だろう。無事であるらしい。しかし逆に言えば治癒魔法の必要が有るくらいにはまずかったようだ。

「あなた達は大丈夫?」

そういつてルイズはこちらに近づいてきた。その細目の顔や肢体に傷は無さそうだが、彼女の着るワンピースには煤や風圧による切れ目が出来、かなりの血痕が見えた。

「私達は大丈夫だけど……、いやルイズ。貴女こそ本当に大丈夫?」

「ルイズさん！ 血が!」

治癒し終わって今は大丈夫なんだろうけど。見た目がね。良くない。サラが気が気じゃない感じになるくらいにはアレな見た目だ。

「大丈夫よ。これくらいの怪我ならよく有るもの」

そうフォローとも言えないフォローをするルイズ。「よく……有る……」とその言葉を反復し少しだけ衝撃を受けるサラ。

旅の思い出話から薄つすら感じてたけど、なかなかこの嬬やかな美人旅人は修羅場を潜っているのだと再確認した。というよりこの世界がそこそこ物騒なのかもしれない。

まあ、とりあえずみんな無事だったので良しとしよう。今は。

問題はこれからである。今の爆発は確実に私達の目的地で起きたものだろう。

再度起きるかもわからないし、ともすればこれを起こした奴がまだいるかもしれない。これだけ離れていてこの威力だ。近くで受けた時のことは考えたくない。

「……夢、今の爆発を至近距離で受けたとして。何とかなる？」
と思っていたらルイズがそう言い出した。

そう言うルイズは暗に「何とかなるなら行く」と示唆しているわけで……

いや、確実に危険な気がするんだけど。

勿論私だけだったら喜んで向かっていくかもしれないが、二人もいると話は別である。

「それは微妙かな。でも何でそこまでして行くの？」

「もしかすると救助が必要かもしれないわ」

あの規模の爆発では正直望み薄だが、その可能性は確かにある。

「この先の集落は『集落が有る』と周知されてるくらいには外部と交流が有るわ。もし……壊滅してるならその状態を近隣の都市に知らせる必要もあるわ」

だから確認しないと、というのはルイズの談。それも旅人の役割よ、と。

ふんわりとしか理解してないが、この世界は国と呼べる体制が存在しない。創造神の神綺が居るからなのかわからないが、各集落の緩い繋がりで社会が成り立っている。

目的地だった集落は樹海の中にあるようにそうメジャーな土地ではない。

だからもしこのまま私達を通り過ぎてしまったら救助が来ることはない。

一番近くの街も距離がある。最悪この爆発の事が闇に葬られたままの可能性が出てくるわけだ。

とはいえ別の街に行つて報告してからでも良いはず。むしろそこで応援やらなんやらを引き連れてきたほうが安全牌というもの。

しかしやはりルイズは要救助者が気になるのだろう。

普段は糸のような優しいその目が今回はばかりは真剣だった。

「はあ、わかったよ。私の手を絶対離さないでね」

まあルイズにそう言われては仕方がない。私は折れることにする。救助も旅の一部だと言うのなら、旅の邪魔はしたくないのである。

他人に私の能力を掛けるには触れてる必要が有る。複数人に能力を使い続けるのは中々負荷の有る事だが、致し方ない。

「ありがとうね、夢」

とお礼を言うルイズ。別にお礼を言われるほどじゃない。

私一人だったら無視するか、あるいは別の理由自殺目的で集落に向かっているだけだ。

すぐにまだ見ぬ他人のことを思いやれるのはルイズの人柄故。私に礼を言うより自分を誇ってほしい。

私の手を離さない。次何か起きたら引き返す。などの取り決めをし、私達は手を繋ぎ慎重に集落へ歩を進めることにした。

私達は慎重に歩を進め集落、もとい集落だった場所にたどり着いた。その様子は凄惨たる物だった。

表面がデロンデロンに焼け爛れたレンガに手を突っ込んで雑にひっくり返す。もうこの下には生きてた人は存在しない。

代わりに出てきたのはもう性別すらわからない数十、数百人分の死体だった。何なら死体とも言えないレベルだ。

生存者を探しつつ、というより実際は遺骨の採集を行っていた。その遺骨ですら原型を留めているものはほぼない。

「はあ、……駄目。恐らくこの様子だと殆どが即死ね」

「そうだねー。こう全部吹き飛んでちや原因もわからないし、どうする?」

「……もう一周、もう一周だけ見て行きましょうか」

ルイズは悔しそうにそう言う。私は肩をすくめて返答した。

私の隣に伴われたサラは気持ち悪いのか口を手で押さえている。それもそうだろう。こんな死屍累々という言葉が相応しい光景、そう目にするもんじゃない。

結局もう一周しても有益な情報は見当たらず、私達は搜索切り上げて近くの町屋都市に報告に行くことに決めた。

「じゃあ行こっか」

「ええ……そうね」

三人の間に重苦しい空気が漂う。

サラに至っては疲労と現場を見た不快感で大分ヤバい感じである。……なんか無理そうだし私がおぶっていいのかな。

そうして私達はその村の跡から引き上げようとした。

「待ちなさい」

凜とした声が響いた。

声量は大きいものではない。しかしあまりにもその声には存在感が有った。私の能力を使わなくてもわかる。大きい、大きい、大きすぎる。

正しく世界そのものの大ききと言っても過言ではない。今まで短くない時間を神と共に過ごしてきたから解る。

ああ、彼女は本物だ。

ヘカーティアと同じ、いやそれ以上かもしれない。私はそのヒリつくような存在感に歓喜した。

そしてゆつくりとその神へと振り向く。

「神綺」

この世界の創造神、神綺。その人がそこに居た。綺麗な白銀の髪にあどけない顔。そ

れただけだと創造神とはとてもじゃないが思えないが、その背後には禍々しい色の翼が広げられていた。

そして何よりこの凍てつくような威圧感。可愛らしい容姿が台無しじゃないか。と思う。

そんな彼女は私の呼びかけに眉を顰めた。

「お前は一体、何者だ？」

「ただの魔族だよ」

その答えには納得がいかなかったのか彼女はルイズの方へと向き直った。私から注意を逸らさないまま。

「確か、旅人のルイズだったかしら？ 以前会いましたね」

「お久しぶりです。神綺様」

突然現れた神綺に戸惑いつつも、ルイズはそう返答した。その様子はどうにもおかしい。

心当たりはある。というのも神綺の様子がルイズの話と違うからだ。気さくで優しい神であるとして以前話していた。リオベナコの本屋のおじさんもそう言っていた。

しかしそれは今、頭上で凍てつくような殺気を纏わせている彼女とは全く噛み合わない。

「二つ質問しますね。ルイズ」

神綺は一息つき、静かな抑揚の無い声でルイズへと言う。空気を支配する殺気が増した。

「どうしてこんな物と共にいるの？」

「そ、それはどういう……？」

その庄に及び腰になるルイズ。

ははーんなんとなく話が読めたぞ。ごめん、多分私のせいだ。

私はニヤリと口の端を持ち上げた。それを隣りに居るルイズはギョツとした気がする。

ああ、彼女には悪いが。私にとっては都合が良い。

どうしてだかわからないが、どうやら神綺は私を目の敵にしているらしかった。